

二〇一七年度 博士論文

中近世における災害の実態と社会的影響
―文禄五年の地震災害を中心として―

東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻

松岡祐也

目次

序章	1
一 問題関心と研究方法	1
二 構成と概要	3
第一章 中世の地震による歴史津波発生を検証	8
―元暦二年京都地震・天正地震を例として―	
はじめに	8
一 歴史津波研究の検討方法	9
二 検討方法の提示	10
三 歴史津波発生の有無の検証	11
(一) 元暦二年京都地震	11
1. 論点の把握と整理	11
2. 津波発生の有無の検討	13
(二) 天正地震	17
1. 論点の把握と整理	18
2. 津波発生の有無の検討	20
① 若狭湾	24
② 伊勢湾	25
おわりに	29
第二章 文禄五年の地震による瀬戸内海周辺の状況	37
はじめに	37
一 讃岐の被害状況	38
二 瀬戸内海西部地域の被害状況	40
(一) 安芸の地震状況	41
(二) 伊予の被害状況	44
1. 南予地方	45
2. 東予・中予地方	49

三 文禄五年伊予地震説の検証	53
おわりに	54
付 章 明和日向灘地震による豊後国内の被害状況と気象災害の被害規模	62
はじめに	62
一 豊後国沿岸部の被害状況	63
（一）臼杵の被害	63
（二）府内の被害	66
（三）佐伯の被害	68
二 内陸部の被害状況と気象災害の評価	70
（一）岡の被害	71
（二）明和六年の気象災害の規模評価	74
おわりに	76
第三章 『大日本地震史料』採録史料の収集過程	80
――文禄五年伏見地震関連史料を例として――	
はじめに	80
一 『慶長甲寅之記』に関する疑問点	81
二 『慶長申子之記』『慶長申寅之記』と『慶長甲寅之記』	82
（一）『慶長申子之記』について	82
（二）『慶長申子之記』の伏見地震記述	83
（三）『慶長申子之記』と『慶長申寅之記』の関係性	85
三 『慶長甲寅之記』採録の過程	86
（一）『大日本地震史料』編纂と史料収集	86
（二）『慶長甲寅之記』採録の経緯	87
（三）『慶長甲寅之記』人物表記の変化	88
おわりに	89

第四章 文禄五年豊後地震による今津留村の被害と船着移転伝承……………94

―中川家船奉行・柴山氏と今津留村について―

はじめに……………94

一 今津留村の被害……………95

二 沖の浜と今津留村―中川家の船着……………99

三 柴山氏と今津留村……………102

（一）『柴山勘兵衛記』と柴山氏の事績……………102

（二）『柴山勘兵衛記』中の豊後地震の記述……………103

四 柴山氏にとつての今津留村……………105

おわりに―その後の今津留村……………108

第五章 『言経卿記』にみる文禄五年伏見地震での震災対応……………112

―特に「和歌を押す」行為について―

はじめに……………112

一 山科言経と『言経卿記』について……………114

二 山科言経周辺における被害……………114

三 震災対応の検討……………117

（一）避難……………118

（二）盗人用心……………120

（三）地震再来の噂……………120

四 「和歌を押す」行為の検討……………122

（一）「和歌を押す」ことの意味……………124

（二）松竹の葉を挿すことの意味……………125

五 和歌に込められた祈り……………126

（一）ム子は八ツ門ハ九ツ戸ハ一ツ身ハイザナミノ門ニコソスメ……………127

（二）チハヤフル神ノイカキモ三日月ノユリヤナヲサン我身成ケリ……………128

おわりに……………130

第六章 醍醐寺座主・義演による災異解釈の背景……………136

―文禄五年の降物現象を例として―

はじめに	136
一 中世における降物現象認識	137
二 文禄五年の降物現象	138
三 義演の降物現象解釈	141
（一）『義演准后日記』にみる明使節の動向	141
（二）義演と豊臣政権	143
（三）秀吉と明使節の対面	146
四 義演の神国意識と災異解釈	148
おわりに	150
第七章 紀行文『玄与日記』における地震記述の考察	158
はじめに	158
一 記主・黒斎玄与と『玄与日記』	159
（一）黒斎玄与の出自	159
（二）文化人としての黒斎玄与	160
（三）『玄与日記』の概要	162
二 『玄与日記』中の地震記述	163
（一）被災地「かみの関」の位置	165
（二）地震の日付	166
（三）佐賀関の被害の実態	170
三 豊後地震が記述された理由	173
おわりに	175
終章	186
一 史料にみる文禄五年の地震像	186
二 災害情報の伝達と収集	187
三 災害伝承の形成	188
四 災害イメージの形成と固定化	188
五 災害情報の蓄積とデータ化	189

初出
一覽

.....

序章

一 問題関心と研究方法

本博士論文は、中近世における災害についての史料記述を解釈することで被害の実態と災害への対処方法を考察し、災害に対する認識と災害伝承の形成と継承過程を明らかにするものである。

二〇一一年（平成二三）三月一日に発生した「東北地方太平洋沖地震」いわゆる「東日本大震災」をきっかけとして、過去に発生した災害に対する社会的な関心が高まった。この地震は、多くの歴史学研究者が歴史地震災害へ関心を向けるきっかけともなり、結果様々な研究成果を生み出すことになった。また研究成果の発表とともに、歴史学としてどのように災害研究を進めていく必要があるのかについての提言や指摘もなされている^①。地震災害を対象とする災害史研究について指摘したものでは、多くが文系・理系の枠を超えた学際性を強調する傾向がある。しかしその結果、理工学系の研究手法を十分に理解しないまま利用したものや理工学系の研究の真似事で終わっているもの、歴史学で重視されるべき史料批判や史料解釈が不十分なものといった問題のある研究もいくつか出てきている。学際的な視点が必要という指摘は当然であるが、前提には歴史学としての研究課題を把握し、研究方法・分析方法を基礎としたうえに、他分野の視点を加えるということが踏まえられている必要がある。

二〇一一年以降注目されるようになった災害史研究だが、歴史学としての研究課題を考えるためには、二〇一一年以前の研究動向を知る必要がある。かつて歴史学で災害研究をおこなうことに対しては「環境決定論」「自然決定論」という言葉が用いられ、自然が人間社会におよぼした影響についての認識は軽視されていた^②。そのため歴史災害についての研究は少数の歴史学者によるものを除くと、理工学系研究者によるもので占められていた。しかし理工学系研究者は歴史学の知識や史料解釈といった面で問題を抱えており、このことは一部の研究者が自覚するところでもあった。そのような状況を背景として、文系・理系の研究者が一緒になって進める学際的な研究分野としての災害史研究が登場した。歴史地震研究についていえば、一九八四年（昭和五九）に東京大学地震研究所を会場としておこなわれた「歴史地震討論会」の報告者一二名のなかに歴史学者の北原糸子氏・川村優氏と民俗学者の宮田登氏の名があり、この会をきっかけに相互の研究課題を知る場が作られ

ている。⁽³⁾ 学際的な研究分野としての災害史研究とは、文系・理系の研究者がそれぞれの専門を活かしておこなう共同研究として認識されており、この認識が現在にまでつながっている。

学際的な共同研究という災害史研究の視点とは別に、歴史学の研究領域としての災害史研究はどのような視点や課題が示されていたのか。二〇一一年以降に指摘されている課題と共通する点を認識することで、歴史学としての災害史研究の視点と課題を構築しなければならぬ。たとえば、小山靖憲氏は『政基公旅引付』中の災害記述について述べた際に、近衛政基の災害観についてまとめる前置きとして次のように述べている。⁽⁴⁾

『旅引付』にみえる災害について、ながながとお話してきましたが、最後に政基の災害観とか、気象・天文現象に対する意識にふれて、まとめとさせていただきます。災害史研究では、いつ、どのような災害が起ったのかという事実の推定がまず優先されますが、災害が当時の社会にあたえた影響とか、当時の人びとの災害に対する意識などを究明することも重要な課題であると思うからです。(※傍線は引用者による)

小山氏による災害史研究への視点は、理工学系の課題である事実の確定とは別で、災害の社会的影響や災害認識を明らかにすることであるとまとめることができる。小山氏の言及は短いながらも災害史研究の課題として現在でも通用する視点であり、重要なものである。

また笹本正治氏は、災害史研究が事件史としての災害研究あるいは防災のための災害研究として認識されてきたことに対して、社会全体を解明する手段の一つとしての災害史研究のあり方を特有の視点として提示し、そのうえで従来の学問分野の枠を超えた形での、災害に対する理工学系の知識と歴史学の知識の双方を必要とする新たな「災害史」という学問分野の確立がもとめられるとする。⁽⁵⁾ 笹本氏のいう「災害史」は、現在のような理工学・歴史学の共同研究を指すものではなく、双方の知識・研究手法を使いこなせる研究者個人によるものを指している。小山氏も別の場で独立した研究分野としての災害史研究の必要性を主張しており、⁽⁶⁾ 小山・笹本両氏によって主張された災害史研究の視座は、共同研究が主流となっている現在の研究動向を考えると、研究者個人の研究課題として大変重要な指摘であるといえる。

さらに、矢田俊文氏や榎原雅治氏によって災害史研究のための文献史料研究の必要性についての指摘が近年なされている。⁽⁷⁾ これは歴史学としての災害史研究について、新たに提示された研究課題として重要である。小山・笹本両氏の指摘と矢田・榎原両氏の指摘は無

関係にみえるが、実際には密接な関係性を有している。災害に関する文献史料の研究は、日本人が災害をいかに記録し、記憶してきたのかという問題であると言い換えることができる。また災害をどのように認識してきたのかを明らかにすることは、記録と記憶の背景にあるものを読み解くことにつながる。ここに両指摘の接点を見出すことができるのである。

そこで本博士論文では両指摘を踏まえ、文献史料の記述を通して社会のなかで災害がどのように捉えられていたのかという災害認識について分析する。従来の災害史研究では、文書や日記のように「質が良い」とされる史料を用いて分析し、文学作品や地誌のような「質が劣る」とされる史料は十分な検討をせずに利用するか、あるいは利用してこなかった。しかし災害認識を考察するためにはこのような史料も扱う必要があると考える。必ずしも地誌などが事実を記述しているとは限らないが、災害をどのように捉え、後世に伝えるようとしたのかを考える際、このような史料はむしろ有用な材料となる。そのため本博士論文では、利用方法に注意を払いつつ地誌なども積極的に利用した。また今回は中近世移行期、特に一六世紀末を中心とした時期の災害を分析対象とした。それは、この時期の災害が大きな被害をおよぼすものだったこと、そして移行期という時代の災害認識が前代からどのような影響を受け継ぎ、後代につながっているのかを分析することに適していると考ええるからだ。こうして分析した結果を基にして、中近世の人々が災害とどのように向き合ったのか、そしてこの時期の災害がどのように伝えられていったのかを明らかにしていきたいと思う。^⑧

二 構成と概要

本博士論文は、付章を含む全八本の個別論文と終章で構成されている。第一章は中世初期と中近世移行期、付章は近世の事例を、そのほかの章は文禄五年（一五九六）の事例をあつかったものである。

第一章・第二章は地震災害の実態を明らかにすることを目的としている。「第一章 中世の地震による歴史津波発生を検証―元暦二年京都地震・天正地震を例として―」は中世初期と末期（中近世移行期）の内陸の断層を起源とする二つの地震を事例として、「津波」という文言がほとんど使用されない近世以前の歴史津波研究の手法と課題を示したものである。理工学系研究者による従来の研究では十分になされていない史料批判をおこなうこと

の意義をあらためて指摘し、史料に記された災害情報のどこが論点となるのか、そして津波発生の有無の問題がどこに起因するかを明らかにした。また災害情報の伝播についても若干の言及を試みている。「第二章 文禄五年の地震による瀬戸内海周辺の状況」は文禄五年に発生した地震の実像を明らかにすること、そして地誌のような同時代史料と比較して信頼性が劣るとされる史料の利用と解釈の方法を提示したものである。文禄五年閏七月には、数日の間に畿内と九州で大規模な地震が発生しているが、両地域の間にある瀬戸内海周辺地域の被害状況については曖昧なままにされていた。文禄五年の地震に関する瀬戸内海周辺地域の同時代史料が極めて少ないため、従来の研究では地誌のような二次史料が用いられていたものの、十分な検討がなされないまま利用されていたことがその原因であった。本章ではこれまでの研究で用いられていた史料をあらためて検討し直し、瀬戸内海周辺地域での地震の状況を明らかにしている。

「付章 明和日向灘地震による豊後国内の被害状況と気象災害の被害規模」は第一章・第二章でおこなった地震災害の実態についての分析を、近世の事例を対象におこなったものである。特に第一章で示した歴史津波研究の課題の具体的な事例を提示している。規模は大きいと推定されているものの従来ほとんど研究がなされていなかった明和六年（一七六九）の地震について、特に推定震度の大きい豊後国沿岸部の被害状況を史料から明らかにし、さらに津波の発生状況をどのように判断できるのかを示した。また地震と同時期に発生した気象災害の被害にも注目し、豊後国内陸部を例に被害規模の評価を試みている。

「第三章 『大日本地震史料』採録史料の収集過程―文禄五年伏見地震関連連史料を例として―」は明治期に編纂された史料集『大日本地震史料』を対象として、そこに採録されている文禄五年伏見地震に関する史料の素性を明らかにしたものである。史料について調査するなかで、『大日本地震史料』の編纂過程で生じたと考えられる誤りがみつかったことから、その編纂過程を追い、誤りが生じた原因を明らかにした。また、この検討を通じて理工学系の研究者が参照する地震史料集の問題点も指摘している。災害史研究における文献史料研究としての位置付けが、この第三章である。

「第四章 文禄五年豊後地震による今津留村の被害と船着移転伝承―中川家船奉行・柴山氏と今津留村について―」は災害伝承の形成と継承について論じることを目的とした章で、文禄五年に発生した豊後地震による被災地・豊後国今津留村に関する災害伝承について考察している。地震当時の今津留村は豊後岡藩・中川家の船着としての位置付けがなされており、船奉行・柴山氏と密接な関係を有していた。柴山氏の家譜と今津留村に関する

地誌の記述をもとに、柴山氏と村の関係性を明らかにし、豊後地震の記憶がこの関係性によって伝えられていったことを指摘している。

「第五章 『言経卿記』にみる文禄五年伏見地震での震災対応―特に「和歌を押す」行為について―」は文禄五年に発生した伏見地震の後におこなわれた震災対応を山科言経の日記『言経卿記』から考察したものである。『言経卿記』には伏見地震後に四つの震災対応がおこなわれていたことが記されており、そこからは当時の人々が災害とどのように向き合い、そして認識していたのかを読み解くことができた。また対応の一つである「和歌を押す」という行為にも災害と向き合う人々の意識が込められていたこと、伏見地震の記憶がこの行為とともに伝えられていたことが明らかとなった。この章は、災害対応から災害認識を分析したものであることができる。

「第六章 醍醐寺座主・義演による災異解釈の背景―文禄五年の降物現象を例として―」は文禄五年に発生した災異現象について、醍醐寺座主であった義演の日記『義演准后日記』に記載された解釈がどのような背景から生じたものであるかを考察したものである。文禄五年の災異現象でも特筆すべきものは、空から砂や毛が降ってきたという現象である。理工学系の研究ではこの現象の発現原因を地学的な面から明らかにすることを課題とするが、本章では義演による災異現象発生理由の解釈の背景を明らかにすることを課題とした。災異は災害とは異なるが、当時の人々の自然に対する視点という意味での共通性に注目し、一章として加えたものである。

「第七章 紀行文『玄与日記』における地震記述の考察」は紀行文にみえる災害の記述を分析対象として、作品中での災害の位置付けや記述理由について考察したものである。本章で分析の対象とした『玄与日記』には、同時期に発生した二つの地震のうち一つのみが記述されている。この地震記述の有無の理由について、実際の行動を他史料と照合し、さらに作品の主題を検討した結果から、地震記述の有無がこの作品の主題に合うものを取捨選択した結果であることを明らかにした。そして主題に合わせて実際の行動を書き換えていたことも指摘している。この章は、当時の被災地に住まない人々のもつ災害イメージについて論じたという面ももっている。

なお本博士論文では、各章で引用する史料中の旧漢字は適宜常用漢字に改めており、読点・返り点も適宜筆者（引用者）が加えている。また、史料中の傍線および波線は特に断りがない場合はすべて筆者（引用者）によるものである。以上のことをあらかじめ付記しておく。

註

(1) 二〇一一年以降に発表された、歴史学による地震災害研究のあり方に対する指摘としては、次のようなものがある。平川新「地震・津波に関する歴史研究と災害科学研究のあり方」(公益財団法人日本学術協力財団・日本学術会議事務局編『地殻災害の軽減と学術・教育』公益財団法人日本学術協力財団、二〇一六年)。榎原雅治「歴史学における地殻災害の研究の今後について」(同前書)。矢田俊文「災害・環境と歴史学」(歴史学研究会編『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』續文堂出版、二〇一七年)。このほか、各学術雑誌で災害史に関する特集が組まれており、峰岸純夫「自然災害史研究の射程」(『歴史学研究』第九〇三号、二〇一三年)のように災害史研究のあり方について言及するものも見受けられる。

(2) 峰岸純夫「自然環境と生産力からみた中世史の時期区分」(『中世 災害・戦乱の社会史』吉川弘文館、二〇〇一年。初出は一九九五年。同書はその後、二〇一一年に新章を加えて復刊)。磯貝富士男『武家政権成立史 気候変動と歴史学』(吉川弘文館、二〇一三年)。

(3) 「はじめに」(『歴史地震』第一号、一九八五年)。同雑誌に掲載されたプログラムによると、北原氏の報告タイトルは「歴史地震と社会史研究の接点の可能性について」、川村氏は「安政地震を地方法文書にみる――二、三の事例を通じて――」、宮田氏は「地震のフオークロア」であった。歴史地震討論会は翌一九八五年(昭和六〇)から歴史地震研究会と名を改め、学会組織として現在も続いている。

(4) 小山靖憲「災害史からみた日根荘」(小山靖憲・平雅行編『荘園に生きる人々 』『政基公旅引付』の世界』和泉書院、一九九五年)。なおここで紹介した小山氏の災害史研究への言及は、一九九一年(平成三)におこなわれた講演によるものである。

(5) 笹本正治「災害史研究の視点」(『災害文化史の研究』高志書院、二〇〇三年。初出は一九九五年)。

(6) 註5前掲論文。笹本氏によれば、小山氏による主張は一九九二年(平成四)九月二五日に京都大学防災研究所でおこなわれた講演会のなかでなされたものという。なお講演題目は「源平内乱期の災害」であった(村本嘉雄・河田恵昭・小泉尚嗣「防災問題における資料解析研究」(19)『『京都大学防災研究所年報』第三六号A、一九九三年)。

(7) 矢田俊文「既刊地震史料集の校訂の諸問題」(『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年。初出は二〇〇五年)および註1前掲榎原論文。

(8) 本博士論文の各章で直接引用はしていないが、全体を構想するうえで参照・参考としたものには、前掲註の各論文のほかに以下のものがある。入間田宣夫「自然災害と歴史学」(『季刊東北学』第二八号、二〇一一年)。北原糸子『近世災害情報論』(塙書房、二〇〇三年)。北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館、二〇〇六年)。小山真人「日本の史料地震学研究の問題点と展望―次世代の地震史研究に向けて―」(『地学雑誌』第一〇八巻第四号、一九九九年)。橋本政良「環境歴史学の可能性―三湊をめぐる伝承の研究―」(『興国元年の海嘯』伝承の成立と白髭水伝承の系譜―)(『近世国家と東北大名』吉川弘文館、一九九八年。初出は一九八八年・一九九五年)。水野章二『中世の人と自然の關係史』(吉川弘文館、二〇〇九年)。山本節「『石像の血』の伝承―静岡県浜名郡新居町今切の事例をめぐって―」(『異怪と境界 下巻 口承資料篇』岩田書院、二〇一一年。初出は二〇〇五年)。これらのほとんどは東北地方太平洋沖地震以前に発表されたものであり、二〇一一年に発表された入間田宣夫氏の論考も、地震以前の入間田氏の研究活動を前提としたものである。歴史学における災害史研究の研究視点を考えるうえで、このような二〇一一年の地震を前提としない論考や、歴史学としての災害史研究のあり方に言及したものは大変参考になった。

第一章 中世の地震による歴史津波発生の検証

―元暦二年京都地震・天正地震を例として―

はじめに

歴史地震研究における研究手法は大きく分けて二つ存在する。一つは歴史資料（史料）に残された記述を読み解く手法であり、もう一つは地質調査による方法である。これは歴史津波を研究する場合でも同様であり、史料を用いた方法と、地層に残された津波の痕跡（津波堆積物）を分析する二つの手法が用いられる。このような手法を用いた研究成果として、津波発生の時期や被害規模といった歴史津波の実態が分かってきている。

後者については、近年後藤和久氏らによって分析手法がまとめられ、今後この方面からの研究の進展が期待される^①。一方前者では、石橋克彦氏により示された史料地震学の手法を採用しているが、これまでおこなわれた研究のなかには津波とは異なる現象（たとえば高潮）を津波と読み違えていたり、あるいは津波による被害地を読み違えていたりするものも存在しており、研究成果の見直しが必要になっている^{②③}。

これに加えて、史料を用いた研究の場合には、記載内容の解釈の違いから津波発生の有無が議論の対象となる事例も存在している。特に古代・中世が対象となる場合には、災害に関する史料の数が近世以降と比較して少ないとされることから、そのような事例が顕著にみられるように思われる。

史料の数が少ないことは、古代・中世の歴史津波研究を困難にしている原因の一つになっていると考えられる。同時に、古代・中世の場合には「津波」文言がほとんどみられないことも困難さに拍車をかけているといえる。行谷佑一・矢田俊文両氏は大永四年（一五二四）までに「津波（津浪）」という文言が史料中に現れるとするが、頻繁に使用されるようになるのは近世以降のことと考えられている。もちろん「津波」文言が現代とは異なる意味（高潮を指す場合など）をもつ可能性もあるが、それ以上に「津波」文言がない場合は、史料記述を津波と判断することの是非が争点となるのだ。

このように、史料を用いた歴史津波研究にはいくつかの検討課題が存在しており、これらの課題を踏まえて研究成果を見直さなければならない。歴史津波研究の検討課題は、そのまま歴史地震研究にも通じるものがあり、重要な問題といえるだろう。本章では、これまでの歴史津波研究の問題点を挙げていき、それらを踏まえた形での検討方法を提示する。

そして、特に津波発生の有無が問題となる中世の歴史地震を対象として、提示した検討方法にしたがって津波が発生したのか否かを考察する。

なお本章では、津波発生の有無がはっきりしない現象を示す史料記述について「疑津波現象記述」と表現している。

一 歴史津波研究の検討方法

史料を用いた歴史津波の研究は、近世以降を対象としたものがその多くを占めている。これは、それ以前の時代と比較して史料の数が多いこと、そして史料中に「津波」文言が使用されていることで、判断をしやすいことと関係があるように思われる。特に史料数の多さは、史料記述をデータとして利用する理工学系研究者にとってみれば、活用できるデータ数が多いということであり、その意味でも研究がしやすいのだろう。また、このことは多くの研究者が参入しやすい状況を形成しているとみることでもある。

一方で古代・中世の歴史津波研究は、近世以降と比較するとあまり進んでいないとはいえないようにみえる。これは、史料数が近世以降よりも少ないことに加え、史料に記載された情報も少ないため、活用できるデータが少ないと考えられているからではないかと思われる。また古代・中世の史料では、ほとんどの場合「津波」文言が使用されないという点も、理工学系研究者には判断しにくいと考えられ、敬遠される理由となっているのではないだろうか。

さらに研究で利用される史料の成立時期が必ずしも津波発生と同時代ではないという点も、史料の信頼性を判断する必要性が加わるという点で、古代・中世の歴史津波研究を困難にしている。同時代に書かれた史料の数および史料記載の少なさを補うために、近世に書かれた史料を用いる場合がある。ただし、その場合でもその史料の素性を明らかにし、記載内容をどこまで信用することができるのかという綿密な検討を踏まえた上で使用されなければならない。これまでの歴史津波研究では、石橋氏などによって信頼性についての指摘がおこなわれているが、⁵⁾先行研究のなかには、この点についての検討が不十分なものも見受けられる。

このように古代・中世の歴史津波研究には、検討を困難にする課題がいくつも存在する。これらの課題は同時に、津波発生の有無について議論を生む原因ともなっている。対象となる史料が共通することから、記載内容・文言についての解釈が議論されることになる。

どの史料を用いるのか、そしてどの部分が議論の対象となるのかが、歴史津波の発生の有無を検討するためには重要であり、これらの点に注意し、進めていく必要が出てくると思われる。

二 検討方法の提示

歴史津波発生の有無を検討するためには、どのような点を考慮しなければならないだろうか。

まず考えなければならないことは、検討対象となる史料の問題である。これまでの歴史津波研究では、多くの場合『新収日本地震史料』のような地震史料集に採録されている史料のみが用いられてきた。これは、史料を扱い慣れていない理工学系研究者にとって大変便利なものであったが、その一方で西山昭仁氏が指摘するように、既刊の地震史料集には史料のみならず学術論文なども含み込まれていることから、先行研究ではその区別がつかないまま利用される場合もあった。⁽⁶⁾

では、一連の地震史料集はどのように使用されるのが望ましいのか。一つの方法として、該当する史料を収集・整理するために地震史料集を使用するという方法が考えられる。いふならばインデックスとしての使用で、史料のみを抽出することは当然として、地震史料集に採録された史料はすべてピックアップするのである。そのようにして史料を収集・整理した後、史料の素性を明らかにする。これは対象となる疑津波現象記述をもつ史料自体の検証、つまりそのような史料についての信頼性付与をおこなうという意味をもつ。史料の信頼性付与については筆者らも言及しているが、本章での信頼性は筆者らがかつて述べた信頼性とは少し意味合いが異なる。すなわち(1)史料の種別は何か(2)いつ書かれたものか(3)誰が書いたものか(4)どこで書かれたものか、の四点を明らかにして、史料の信頼性(素性)を判断することで、検討対象となりうる史料のみを抽出する。これが本章での信頼性付与の過程である。⁽⁸⁾

次に考えるべきことは、疑津波現象記述に対する論点の整理である。論点整理の対象は二つある。一つは検討対象となりうる史料であり、もう一つは先行研究である。前者は史料中の疑津波現象記述を拾い出すことで津波発生の有無を判断すべき対象が何かを明らかにすること、後者は先行研究で津波発生の有無の判断材料とされている史料記述が何なのかの把握である。特に後者については、網羅的に先行研究を収集し、使用されてい

る史料やその解釈などを整理する必要がある。ただし、先行研究が判断材料としている史料そのものや史料の記述箇所が必ずしも妥当であるというわけではない点には注意が必要である。これは史料解釈の誤りがある可能性や、そもそも信頼性が低い史料を使用して判断している可能性が考えられるためである。先行研究での論点の整理では、そのような点も考慮する必要があるだろうと考える。

このような二つの点を考慮して、疑津波現象記述が津波を示すか否かを判断していくことになる。検討の際には、各段階で津波発生の有無の論点となるのはどの点か、そして津波が発生した（あるいは津波ではない）と判断する理由は何であるかを明確に示さなければならぬ。それは、争点を明確にし、判断根拠を明らかにすることで、疑津波現象記述に対する議論を深めていくことにつながり、さらに歴史津波に関する研究の深化にも影響するだろうと考えるためである。

三 歴史津波発生の有無の検証

ここまで津波発生の有無についての検討方法を整理してきた。それでは、実際に疑津波現象記述の検証をおこなってみよう。

本章では、元暦二年京都地震と天正地震を対象として検討を進める。元暦二年京都地震・天正地震ともに内陸の断層運動を原因とする地震とされているが、ともに津波が発生したとの説が出されており、内陸地震での津波発生の問題としての共通性がある。そのような理由から、本章ではこの二つの地震を取り上げた。

（一）元暦二年京都地震

元暦二年（文治元年、一一八五）七月九日に発生した、いわゆる元暦二年京都地震は、マグニチュード七・四と推定される内陸地震である（図1）⁹。京都での被害の大きさが注目されるこの地震では、規模の小さな津波が発生したとする説が存在している。そのため、地質調査ではその痕跡はみつからないだろうと考えられ、史料解釈のみが問題となる。

1. 論点の把握と整理

元暦二年京都地震での津波発生の有無について、これまでどのような検討が加えられ、論点とされてきたのか。まずは、この地震についての研究のなかでも津波が発生したとす

る主張と、それに対する反応をまとめてみる。

まずこの地震で津波が発生したと主張したのは、都司嘉宣氏である¹⁰。都司氏は高野本『平家物語』中の「山くづれて川をうづみ、海ただよひて浜をひたす。汀こぐ船は波にゆられ、陸ゆく駒は足のたてどをうしなへり」という記述を「一貫して津波の描写と見ることができる」とし、「洪水漲来」もまた津波の描写であるとする。加えて『方丈記』中の「山はくづれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり」という一節が『平家物語』と類似している点に注目し、『方丈記』が『平家物語』に基づいて文章を作っていることは明らかである」とした。さらに都司氏は、地震の（推定）被害範囲と津波の発生から、この地震が南海地震であると主張している。その後都司氏は、ここで示した『方丈記』と『平家物語』の関係性には触れず、『平家物語』中の記述のみを解釈し、改めて「元暦二年京都地震Ⅱ南海地震」説を主張している¹¹。

この都司氏の解釈に対して、西山昭仁氏は『平家物語』の「成立過程における脚色や多数の説話の摂取といった条件を加味しておらず」採用しがたい考察であるとし、『平家物語』は考察の際の参考程度にとどめるべきとした¹²。この都司氏の説に対する西山氏の指摘は他の論文でも引用され、広く賛同を得ている。また石橋氏も「元暦二年京都地震Ⅱ南海地震」説が「史料の無理な解釈による」ものとし否定している¹³。その理由として、①都司氏は奈良の被害を根拠の一つとするが、史料を読む限り激しい被害とはいえない、②『平家物語』中の「遠国」などの文言から地震による広域被害と津波を推定するが、これは『平家物語』の修辭を無視した誤読である、③日記史料にみられる京都での余震活動の激しさは、内陸地震であることを示している、④四天王寺（大阪府大阪市）が無被害である、の四点を挙げている。

都司氏の解釈をめぐる議論では、『方丈記』と『平家物語』の成立過程と、『平家物語』の疑津波現象記述の解釈が論点となっていることが分かる。

都司氏の後、津波の発生を主張したのは保立道久氏である¹⁴。保立氏は、都司氏の史料批判の甘さを指摘する西山氏を妥当とする一方で、『方丈記』の疑津波現象記述を「半ば啓発的な記述」としていることには反対している。そして、この文章表現を「それなりに事実に興味のあった長明がまったくの虚偽を書いたと断定するのはさけない」とし、語義通り津波は発生したのだとする。そして保立氏は史料中の地震有感記事から、震源を琵琶湖西岸断層から黄檗断層帯、さらに比良断層帯から饗庭野断層帯とする内陸地震であるとし、日本海側で震度三を越える場所もあった可能性を指摘する。ここから津波の発生地を、天

正一三年（一五八六）に発生した天正地震と同様に若狭湾沿岸（越前・若狭・丹後あたり）と推定した。ただし保立氏は、この地震による津波は小規模なものであったと考えており、津波痕跡の発見は難しいだろうとしている。

保立氏の説に対する反応は現在のところみられないが、⁽¹⁵⁾ここで論点とされているのは『方丈記』の文章表現と解釈であることが分かった。

都司氏や保立氏のように津波発生を断定するものとは別に、可能性の一つとして津波発生を挙げる研究者もいる。高橋昌明氏が注目するのは『山槐記』の疑津波現象記述で、この記述が「琵琶湖南岸の津波、または地震にともなう地盤変動」を示しているとする⁽¹⁶⁾。この『山槐記』の記述は他の研究者も触れている。しかし、都司氏は琵琶湖の水位変動に触れるもののそれ以上の言及はみられず、西山氏は湖底の断層運動による地盤変動としており、津波とは考えていない。また保立氏も西山氏同様の言及をしていることから、暗に西山氏に賛意を示していると考えられる。

このように、『山槐記』の疑津波現象記述を津波と断定する研究はないが、これもまた検討上の論点となるものと考えられる。

以上先行研究の整理から、論点となるのは『方丈記』・『平家物語』そして『山槐記』の疑津波現象記述であることが分かった。また先行研究では、『平家物語』の成立過程と『方丈記』の文章表現も論点となっており、この点についても検討する必要があるだろう。

2. 津波発生の有無の検討

元暦二年京都地震に関する史料は、先行研究で論点とされているもののほかにもいくつか挙げることができる⁽¹⁷⁾。たとえば九条兼実の日記『玉葉』にも地震に関する記述がみえるが、『玉葉』からは疑津波現象記述を確認することができず、本章のように津波発生の有無を検討する際には対象から除かれることとなる。ほかにも元暦二年京都地震についての記述をもつ史料は存在するが、いずれも疑津波現象記述をもち、本章での検討対象からは省かれることになる。

結果、元暦二年京都地震による津波発生の有無を検討するためには、先行研究で論点とされている『方丈記』『平家物語』『山槐記』を対象としていくことになる。それでは、各史料中の疑津波現象記述がどのようなものかを具体的に確認してみよう。

まず似通った記述がされている『方丈記』と『平家物語』についてみてみる。両者の元暦二年京都地震に関する記述は以下の通りである。なお、『平家物語』は読み下しにしてい

る。

【史料1】方丈記⁽¹⁸⁾

(前略)

又同じころかとよ、おびたしく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖いわほわれて谷にまろびいる。渚漕ぐ船は波にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙の如し。(中略)世の常驚くほどの地震、二三十度振らぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やう／＼間遠になりて、或は四五度、二三度、若しは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種よちよちのなかに水火風は常に害をなせど、大地にいたりてはことなる変をなさず。(以下略)

【史料2】平家物語⁽¹⁹⁾

(前略)九日午時ばかりに大地震おびただしくして良久し。畏しなんども斜めならず。赤懸せきけんの内、白川の辺、六勝寺、九重塔より始て、或は傾き倒れ或は破崩る。在々所々の神社仏閣、皇居人家、一字も全きは無し。(中略)近国遠国も又かくのごとし。山崩れて河を埋づみ、海漂いて礫を浸す。洪水漲り来たらば、岡に登りても助かりなん。猛火燃え近付かば、河を隔てても去りぬべし。只悲かなしかりけるは大地震なりけり。(以下略)

このように、【史料1】と【史料2】の傍線を引いた部分は大変似通った表現がなされている。都司氏は『方丈記』の文章が『平家物語』に基づいていると推定したわけだが、ここで『方丈記』と『平家物語』の関係性について確認しておこう。国文学の研究によれば、『平家物語』は種々の文献に基づいて成立していることが明らかとなっており、そのなかの一つに『方丈記』が含まれるという⁽²⁰⁾。つまり、この元暦二年京都地震に関する記述は『方丈記』が基となって成立しているわけである。そうであれば、検討対象は『方丈記』に絞られることになるが、都司氏は【史料2】波線部中の「洪水」も津波を指す文言であるとしている。この部分は『方丈記』にはみられないことから、『平家物語』独自の情報と判断することができる。よって、この記述についても改めて検討する必要がある。

まず『方丈記』の疑津波現象記述について考えてみる。津波と読み取れそうなのは「海

は傾きて陸地をひたせり」という箇所である。先行研究では、いずれも実際に発生した現象であると考えており、高橋氏は修辞である可能性に言及するものの、やはり実際に起きた現象であると考えている。しかし西山氏のいう脚色や高橋氏が言及する修辞の可能性は重要な指摘であり、もう少し検討を加えるべきではないだろうか。

そこで、もう一度『方丈記』中の元暦二年京都地震に関する記述を確認してみると、次のような対句表現が用いられていることに気がつく。

- ・「山は崩れて」↑↑↓「海は傾きて」
- ・「土さけて」↑↑↓「巖われて」
- ・「渚漕ぐ船」↑↑↓「道ゆく馬」

この表現は何を意味するのか。芝波田好弘氏は『方丈記』が四大種の異変に対応する災害を記しており、元暦二年京都地震の記述は「地大種の異変という執筆意図」に基づくという【史料一】の波線部からも分かる⁽²¹⁾。四大種とは、仏教において世界を構成するとされる四つの元素（地・水・火・風）を指す。さらに芝波田氏は疑津波現象記述を「広域災害の視点で陸と海とを対比させた」表現であると指摘する。また、大隅和雄氏は『方丈記』での地震を含む災厄の執筆意図について、後段の世捨て人となつてからのことを書くために、鴨長明が本当に書かねばならなかったこと（自身が隠遁生活を送ることとなった理由）を秘密にした上で、そうなった理由を別の形で表現したのだとする⁽²²⁾。大事件・災害であるから書いたというわけではないとする大隅氏の指摘は、大変重要である。

鴨長明の執筆意図が芝波田氏・大隅氏の指摘通りであるとすれば、これらの記述は実際に起きたことを見聞して記したというよりも、やはり修辞としての表現であると考えるべきだろう。そう考えると、『方丈記』中の疑津波現象記述は実際に発生した津波を指すわけではないと判断するのが妥当ではないだろうか。『日本書紀』天武天皇一三年（六八四）一〇月壬辰条にはこの時に発生した、いわゆる白鳳地震について「山崩河涌」とあり、⁽²³⁾『方丈記』に通じる文言が使用されている。あるいは、こういった言葉は地震についての慣用語として古くより用いられていたのかもしれない。

その上で『方丈記』を基に地震のことを記述した『平家物語』をみると、同様に対句表現が使われていることが分かる。

- ・「山崩れて」↑↑↓「海漂いて」
- ・「洪水漲り来たらば」↑↑↓「猛火燃え近付かば」

これらもやはり実際の出来事を記したわけではなく、修辞表現であると考えられる。ま

た、ここでの「洪水」は火に対する水を指すものであり、わざわざ津波を示すと解釈する必要はない。以上より、『方丈記』『平家物語』それぞれの疑津波現象記述は、実際には発生していない架空の津波（あるいは洪水）を作者である鴨長明が意図的に生み出し、作品として成立させたのだと考えられる。つまり、津波を示す記述だが実際には発生していない、偽の津波であると結論づけられるわけだ。

次に『山槐記』の疑津波現象記述について検討してみよう。『山槐記』の記事を以下に示す。

【史料3】『山槐記』元暦二年七月九日条²⁴⁾

九日庚寅 陰晴不定、午剋地震、五十年已来未^二覚悟^一、家中上下男女皆衆居^二竹原下^一、自^二去比^一居^二住中山蝸舍^一也、法勝寺九重塔頽落重々、垂木以上皆落^レ地、每層柱扉連子被^二相殘^一、露盤八殘其上折落、阿弥陀堂并金堂之東西廻廊、鐘樓、常行堂之廻廊、南大門西門三字、北門一字、皆顛例、無^二一字全^一、門築垣皆壞、南北面少々相殘云云、遣^レ人令^レ見之處、申旨如^レ此、（中略）後聞、宇治橋皆以顛倒、于時渡之人十餘人乗^レ橋入水、其中一人溺死云々、又聞、近江湖水流^レ北、水減自^レ岸或四五段、或三四段、于後日如^レ元満^レ岸云々、同国田三丁地裂為^レ淵云々、又自^二美濃伯耆等国^一来之輩曰、非^二殊之大動^一、又後日聞、京中築垣東西殊壞、南北面頗殘云々、（以下略）

傍線部が疑津波現象記述に当たるが、これは「云々」とあることから分かるように、琵琶湖での現象についての噂・伝聞情報を記したものである。琵琶湖の水が北方に流れ、岸から「四五段」ないし「三四段」減少し、後日もどのように満ちたと書かれている。この「段」を土地の面積（反に同じ。一段＝三六〇歩＝一一八八平方メートル）と解釈すると、減少したのは三五六四～五九四〇平方メートルということになる。また距離（一段＝約一米ートル）と解釈すれば、後退したのはおよそ三三～五五メートルである。西山氏は直後の文章で田の面積を「丁」で表現していることから、「段」を距離と解釈したようであるが、一時的な湖水の後退にしては大きすぎるとし、「未確認情報や幾らかの誇張表現が含まれていた可能性」を指摘している。面積と距離、どちらの解釈が妥当かをここだけで判断するのは少し難しいが、琵琶湖沿岸の一部でみられた実際の出来事と考えるならば、西山氏の指摘するように後退距離では大きすぎると考えられるため、減少面積と解釈したほうがよいかもしれない。

では、このような地震による湖水の減少・復元は、どのような現象と考えることができるだろうか。この点について西山氏は琵琶湖西岸の湖底での断層運動にともなう地盤沈降とそこへの湖水流入を想定している。この想定については保立氏も同様の見解を述べている。これに対して高橋氏は、地盤変動とともに琵琶湖南岸での津波の可能性に言及している。理由は述べられていないが、恐らく湖水の北への移動から想像されたものと考えられる。考え得る現象は、以上の二つであろう。

では、どちらの現象と解釈するのが妥当であろうか。注目すべきは「後日」という文言である。通例、「後日」は数日後と解釈される文言であり、ここから湖水の減少から復元までにかかった時間は数日であることが分かる。もしこの現象を津波と解釈するならば、減少から復元までの時間があまりにもかかりすぎではないだろうか。もちろん、『山槐記』の疑津波現象記述は時間差のある伝聞情報であるから、正確な経過時間を示していない可能性もある。しかし『山槐記』中のこの記述は単なる噂を記したのではなく、現代でいえばニュースとしての情報を記したものである。そうであれば『山槐記』の伝聞情報は、記主・中山忠親自身が未確認だったとしても、信頼性のある現地からの情報だと考えることができる。

この琵琶湖での水位変動について、小松原琢氏は『山槐記』に記述された情報が、地理的に京都に近く届きやすかった琵琶湖南部（とくに南端部）に関するものと推察する⁽²⁶⁾。そしてこの水位変動を、琵琶湖南部あるいは南端部の水が北流し、その後一日以上の時間をかけて琵琶湖に流入する河川からの水によって元の水位まで回復したのだとしている。この見解は西山氏および保立氏の想定を補強するもので、十分首肯できる。『山槐記』に記された情報は、おそらくこのような出来事が京都に伝えられたものであり、『山槐記』の疑津波現象記述は地盤変動による湖水の動きを示したもので、津波とは異なる現象であると考えられる。

以上の検討結果から、元暦二年京都地震では津波の発生はなかったと結論づけられる。

(二) 天正地震

天正一三年（一五八六）十一月二十九日に発生した、いわゆる天正地震は推定マグニチュード七・七から七・九とされており、前近代に発生した内陸地震としては最大規模のものと考えられている⁽²⁶⁾（図2）。この天正地震でも津波が発生し、しかも元暦二年京都地震とは異なり、被害を生じさせたとする説が存在する。史料解釈の違いによって発生場所が異

なっていることもまた、この地震による津波発生の有無の問題となっている。

1. 論点の把握と整理

天正地震において津波が発生したとする説は古くから存在するが、論点は津波がどこで発生したのかという点から始まり、その後津波発生の有無へと移っていった。これまで二つの論点に対してどのような主張がなされてきたのかを、まずはまとめてみよう。

天正地震での津波について言及した初期の事例は、大森房吉氏によるものである⁽²⁷⁾。大森氏は「瀬海ノ地ハ海嘯暴溢シ人畜ノ死傷夥シカリキ」「伊勢海ノ沿岸ニ津浪有タルナルベシ」と伊勢湾沿岸で津波が発生したとする。大森氏は史料から津波の発生を主張したが、当時彼が確認したと考えられる史料にはその被害地を確定させることができる記述はなかったことから、大森氏が津波被害地を伊勢湾沿岸とした根拠は分らない⁽²⁸⁾。

大森氏以降、天正地震に関する記述をもつ史料が『増訂大日本地震史料』などの地震史料集に数多く掲載され、被害地を示す史料記述も出てきた結果、検討の対象は伊勢湾から若狭湾に移動した。現在に至る天正地震での津波に関する議論は、飯田汲事氏による研究成果を基礎としておこなわれているといえる⁽²⁹⁾。飯田氏はまず、『兼見卿記』の疑津波現象記述が若狭湾での津波を指すものとして理解し、さらに琵琶湖・伊勢湾での津波も示唆している可能性を指摘する。さらに『当代記』の記述は津波・液状化・河川水の溢流のいずれであるかはっきりとしないが、一八九一年（明治二四）の濃尾地震の事例と比較し、津波による伊勢湾内広域での海水溢流と解釈している⁽³⁰⁾。伊勢湾の津波に関連して、三河の『常光寺年代記』や伊勢神宮の『外宮召立文案』には津波記述がない理由を、飯田氏は被害のあるような津波がなかったために記述されなかったのではないかとする。そしてルイス・フロイスの『日本史』などの海外史料についても検討を加え、共通して現れる地名 *Vacasa* (*Facata* & *Fukasa* と同) を琵琶湖畔（滋賀県坂田郡）ではないかと結論づけている。以上の結果から、飯田氏は津波発生地を伊勢湾・若狭湾・琵琶湖とし、さらに伊勢湾内での津波高を二メートルから三メートルくらいだったとの見解を示している。

飯田氏が天正地震について研究する一方で、八木伸二郎氏・伊藤英文氏・上田さち子氏の三名が地震史料集所収の天正地震関係史料について検討しており、そのなかで津波に関する見解を述べている⁽³¹⁾。八木氏らは『日本史』の記述をどう解釈するかを問題とし、もし若狭湾で津波が発生していれば丹後や越前にまで被害は及んでいたはずだが、それに対応する史料記述がないことを指摘した。その結果、フロイスが「Nagafama」と記してい

る地名は長島（三重県桑名市）の誤りであり、長島輪中が地震により浸水したのだと解釈、フロイスの記述は津波を示すものではないだろうとしている。この八木氏らによる見解が示された後、飯田氏はあらためて天正地震についての自説を展開し、先の結果を示した。八木氏らの見解は歴史学・理学の研究者による共同研究であることから、その成果には傾聴すべき点が多いものの、検討対象となつたものがこの時点で刊行されていた地震史料集のみであり、独自に調査した史料はなかった。その結果『兼見卿記』のように、後に検討対象となる重要な史料についての見逃しが出てしまっている。

飯田氏・八木氏らの研究以降、天正地震については飛騨での山崩れのような土砂災害に注目が集まつたものの、津波の発生についてはあまり注目されてこなかった。しかし二〇一一年以降、特に若狭湾での津波発生に関する言及が増えることとなる。松浦律子氏は天正地震の震源域について検討するなかで津波について言及している³²。松浦氏はまず国内史料を重点的に検討し、そもそも天正地震は津波をともなつたのかという疑問を提示した。震源域を特定する作業を通して、松浦氏は伊勢湾近くに震源となる断層を設定すれば津波に似た海面変動や湧水害が起こり、その被害は津波被害にみえるだろうと説明する³³。その後松浦氏は『日本史』やフロイスの報告書などの海外史料を検討している。それらの史料にみえる疑津波現象記述は他の地震被害を示す記述に比べて曖昧である点を指摘し、フロイスは土地勘のない場所の記述は曖昧になる傾向があるのではないかと推定した。その結果、もし疑津波現象記述が天正地震によるものであれば規模を誇張したか風説のたぐいということになり、あるいは天正地震とは異なる時期の津波被害を指しているのではないかと考え、結論として後者の可能性が高いだろうとする。また、その過程で『兼見卿記』の記述にも触れており、もし記述どおり若狭湾の広域にわたる津波被害があつたならば、地震の半年後に同地を通つた上杉景勝一行が何事もなく城主の供応を受けるのかとの疑問を投げかけている。このように、松浦氏は一貫して天正地震での津波発生には疑問を提示している。

天正地震の津波に関する研究は、文系・理系の共同研究だった八木氏らのほかはすべて理工学系の研究者によるものだった。そのような状況で、文献史学を専門とする外岡慎一郎氏による天正地震についての研究は重要な位置付けにあるといえる³⁴。外岡氏は『兼見卿記』とフロイスの報告書を検討の対象として、天正地震による若狭湾沿岸での津波発生について言及している。そこで外岡氏は『兼見卿記』の記述は「津波と理解できる」とし、その情報源は吉田兼見と交流のあつた細川幽斎（丹後田辺を領有）と、妻の兄に当たる佐

竹定実（越前に領地を持っていた）であるとする。またフロイスの報告書については、やはり疑津波現象記述は津波を指すと解釈し、「Nagafama」は高浜である可能性を指摘する⁽³⁵⁾。このように外岡氏は史料記述がいずれも津波を指すとしているが、地質調査ではそれに対応する津波痕跡がみつかっていないことを問題としてあげている。

このほかには、林博通氏らによる琵琶湖湖底遺跡に関する調査が知られている⁽³⁶⁾。林氏は『長浜市史』に掲載されたフロイスの報告書を引用し、そこに記述された地名を近江国長浜として考え、下坂浜千軒遺跡（滋賀県長浜市）が液状化に伴って起きた地滑りによって湖底に沈んだのだと判断、津波の発生を否定している。ただし林氏らの調査には文献史学が専門の研究者は参加しておらず、史料解釈の妥当性にやや不安な面がみられるように思われる。

このほかにも天正地震の津波に関して言及するものは存在しているが、重要な論点を提示する代表的な研究は以上のとおりである⁽³⁷⁾。当初は天正地震に関する史料の記述がどこで発生した津波を指すのかを問題とし、その後そもそも津波が発生したのかという疑問が提示され、史料をどう解釈するのかが論点となったということができるだろう。現在のところ、議論は若狭湾の疑津波現象記述に集中しているが、飯田氏が主張した伊勢湾津波説についても異論が出されており、こちらもさらに議論を進める必要があるように思われる。特に文献史学の立場では未検討の部分があることから、若狭湾以上に注目すべき地域といえる。

よって、ここでは伊勢湾での津波発生の有無を中心に検討することにする。ただし、先行研究では若狭湾での疑津波現象記述と伊勢湾津波の関係に言及したものもあることから、まずは若狭湾沿岸に関する史料記述について考察し、その後伊勢湾沿岸に関する史料の検討をすることとする。

2. 津波発生の有無の検討

天正地震はこの時期に発生した地震のなかでも多くの史料が残されているものの一つといえる。それは地震被害および揺れが大きく、広域にわたっていたこと、そして様々な情報ネットワークによって地方の情報が京都周辺に集まっていたことによると考えられる⁽³⁸⁾。

ただしそれらのなかには、地震発生後数十年以上が経過して書かれたものや、同じ記述内容で名前の異なる史料が多く存在している。そういった史料の素性を明らかにし、記述内容の情報源の問題（原本と写本の関係もその一つ）を検討することで、利用するものを選

別していくことになる⁽³⁹⁾。まず検討対象となる史料のうち、主要なものの記述を確認してみよう。

【史料4】兼見卿記 天正一三年一月二九日条・三〇日条⁽⁴⁰⁾

廿九日、乙丑、子刻大地震、屋宅既ユリ壊体也、暫時不止、地妖凶事如何、
卅日、丙寅、昨夜地動、神壇石懸多分崩、文庫二階之軒、丑寅一間計カケテ落、次之
塗屋・土居ヲユリ下テ、板敷已下悉引ハナシ、無正体破損了、石懸端々直之、普請申
付了、地動至今日不止、切々地動了、
入夜大地震、昨夜之少輕、

廿九日地震ニ壬生之堂壊之、所々在家ユリ壊、数多死云々、丹後・若州・越州浦辺波
ヲ打上、在家悉押流、人死事不知数云々、江州・勢州以外人死云々、

自坂本俄関白御上洛、大津通也、風寒以外也、御迎之事、俄之間、諸家不罷出、然間
予聞合、不罷出也、

先行研究でもっとも多く利用されている史料は、京都に住む公家・吉田兼見の日記『兼見卿記』である。『兼見卿記』の疑津波現象記述は地震の翌日に当たる一月三〇日条にみえる。兼見は、丹後・若狭・越前の浦辺に「波」が上がり被害をもたらした旨を記述しているが、当然ながらこの記述は伝聞によるものである。また、近江・伊勢でも多くの死者が出ているとの伝聞情報を記している。この『兼見卿記』と類似した記述をもつのが『舜旧記』である。『舜旧記』は兼見の弟である神龍院梵舜の日記で、一月二九日条に「近国⁽⁴¹⁾之浦浜^(之カ)々屋、皆波ニ溢レテ数多人死也」と記している。梵舜は国名ではなく「近国」と記しているが、彼と兼見の関係から考えると同じ情報源に基づく記述であると推測され、おそらく「近国」と「丹後・若州・越州」は同じことを指していると思われる。よって、本章の検討では『舜旧記』を外すこととする。

【史料5】当代記⁽⁴²⁾

同十一月廿九日、子刻大地震、此時諸国山崩地裂、中にも北国如^レ斯人馬多倒死す、尾州長島^{當時織田信雄居城}百八里多以成^レ川、城中家倒令^二焼失^一、関東は此地震無^レ之、

伊勢湾での津波の有無に利用される『当代記』は、松平忠明が近世初期に種々の史料を

もとに編纂したとされている。天正地震に関しては簡潔に書かれているが、被害地として特に大きな被害を受けた地として「北国」と「長島」の二地域が挙げられている点は注目される。また津波発生の有無を考察するうえで「百八里多以成^レ川」という記述の解釈は大変重要となる。

【史料6】一五八六年一〇月一七日付、下関発、パードレ・ルイス・フロイスよりインド管区長パードレ・アレッシヤンドレ・ヴァリニャーノ宛の書翰の一節⁽⁴³⁾

(上略) 本年「一五」八六年一月の初めに、堺及び都から以遠にかけて人々が未だ見聞した記憶がなく、さらに「古い」歴史書においても読んだことのないほどの甚だ異常で恐るべき地震があつた。何故なら、日本においては諸国で度々こうした地震があるけれども、今度の地震は桁外れに大きく、人々に異常な恐怖を与え、彼等を驚かせたからである。「私達の暦の」一月の何日かに当たる「日本の」第十一月の第一日に大地が震動し始めた。いつも経験するような揺れ方ではなく、「流れを」横断して行く船のように左右に振れて四日四晩止むことなく続いた。人々は動転して我を忘れ、敢えて家の中にいようとはしなかった。何故なら、堺(Sacay)の市内のみで「倉」六十が倒壊し、その中で多数の人々が死んだからである。それより四十日間にわたって地震は時々起こったが、震動のない日は殆んどなく、地下に生じた身の毛のよだつ甚だ恐い轟音を伴った。地震が破壊した土地の被害は甚大であつたので、それは信じ難いほどである。ここにはそれを目撃した人たちがのちに私達のパードレ達に語った主なことだけを書き留めることにする。

近江国(reino de Vomi)の(信長の時代に関白殿が居住した最初の地である)長浜

(Nagafama)と称する城地には、千戸からなる町があつたが、地面が震動して裂け、家屋の半数が人々と共に呑み込まれ、「それが天空からの火であつたのか、人間によって引き起こされたものであるのか知る由もないが」残りの半数はまったく同じ時に発火して焼けてしまい、灰燼に帰した。「都では、家屋数軒と壬生の堂(Mibunodo)と称する大きな神社が倒れた。若狭国(reino de Vacasa)には」海の近くに「長浜(Nagafama)

と称する」たいへん大きな別の町があつて多数の人と商品が行き交っていたが、数日間震動したのち、町全体が恐いことに山と思われるほど大きな波浪に覆われてしまった。そして、その引き際に家屋も男女もさらっていつてしまい、塩水の泡に覆われた土地以外には何も残らず、全員が海中で溺死した。

美濃国 (reino de Minno) には大垣という名のたいへん有名な城があった。「そこにはかつてパードレ・グレゴリオ・デ・セスペデスがいたが」それは山の上にあったので、震動し始めると、城と山が崩れ落ちて下方に沈んで見えなくなってしまった。このため、その場所には沼だけしか残らなかった。伊勢国 (reino de Ixe) では他にも大きな地震があつて、驚くべき破壊があつた。それらの中で、亀山 (Camejama) と称する別の城は大混乱を来たして倒壊した。これらの諸国では、小銃の射程ほどの長さの大きな亀裂をもったいくつかの裂目が地面できた。そして、これらの裂目からはたいへん鋭く嫌悪すべき悪臭を放つ、ある種の泥乃至黒土が噴き出し、道行く者たちはこれに耐えることができないほどであつた。

これらの地震の始めには、関白殿は近江の湖に近い坂本 (Sacamoto) 「明智がかつて所有していた城に」いたが、その時に行なっていたことすべてを放り出して「馬を乗り継いで」急いで大坂に避難した。それは、そこが彼には最も安全な場所と思われたからである。

「彼の建物は揺れはしたが倒壊はしなかった。しかし、甚だ宏大で美しかった彼の弟の美濃殿の屋敷は倒壊した。堺の町の異教徒達は、四階建ての私達の家屋が高層であるために倒壊する最初の建物になると考えていたが、私達の主はそれが起きないように計られた。」

(以下略)

天正地震については多くの海外史料も存在している。そのなかでもっともよく使用されるのが、地震当時来日中だった宣教師ルイス・フロイスの『日本史』である。非常に細かな情報が記述されている点が注目される史料である。同じように、日本での出来事を本国に伝えるためフロイスによって書かれた報告書もある。こちらも地震に関する情報が豊富であり、記述内容も共通している。そのため本章では、一次史料である報告書を検討対象とする。⁽⁴⁴⁾

このほかに天正地震についての記述をもつ史料としては、奈良・興福寺多門院の僧侶による『多門院日記』や徳川家康の家臣である松平家忠の『家忠日記』などがある。⁽⁴⁵⁾ しかし『多門院日記』には疑津波現象記述がないため、本章の検討では対象から除外した。この点では『家忠日記』も疑津波現象記述をもたないが、三河での地震について確認することと伊勢湾沿岸の津波発生の有無を考察する必要があり、本章では内容の確認をおこなう

こととする。

①若狭湾

近年話題となっている、若狭湾での天正地震による津波発生の有無については『兼見卿記』の記述が問題とされる。しかし外岡氏のいうように津波以外の解釈は難しいだろう。伝聞情報であることを理由に誤情報と疑うこともできるが、情報源が外岡氏の指摘するとおりであるならば、その可能性は否定される。よって『兼見卿記』の記述から若狭湾での津波発生を疑うことはほとんどできないといえる。

議論の対象となるのは、『兼見卿記』よりもフロイスの報告書である。問題点となっているのは「Vacasa」の「Nagafama」と書かれた地名をどう解釈するのか、の一点に絞られている。これを近江の長浜と解釈する説もあるが、⁽⁴⁶⁾報告書では長浜に関して記述した後壬生（京都府京都市）の被害に続き「Nagafama」の話が書かれており、他所の被害記述と比較すると長浜に関する記述がわざわざ分けて書かれているとは考えられず、この説は退けられる。また飯田氏は長島と解釈する説を提示するが、フロイスは伊勢について「Nagafama」とは分けて記述しており、⁽⁴⁷⁾むしろ伊勢の地震を「Nagafama」や近江での地震とは別のものとして捉えていたことが読み取れることから、この説も長浜と同じように当てはまらないとの結論に達する。このように整理してみると、フロイスが記した津波の記述は近江でも伊勢湾でもなく、若狭湾沿岸での出来事であったと結論づけられる。ただし松浦氏が指摘するように、⁽⁴⁸⁾記述内容とフロイスの情報の正確性とは別のものであり、いくつかの疑問点もある。⁽⁴⁹⁾

たとえば松浦氏が指摘する、被害地と考えられる地域を地震の半年後に上杉景勝が通過したという点はどうだろうか。⁽⁴⁸⁾松浦氏は往路の金沢・復路の敦賀で景勝が供応を受けたことを、広域にわたる津波被害を記述する『兼見卿記』と矛盾するとしている。景勝の上洛については『天正十四年上洛日帳』⁽⁴⁹⁾という史料が残されている。この史料からは、復路はともかく往路では秀吉の使者として石田三成が金沢まで出てきており、秀吉側が景勝上洛に対して気をつかっていることが読み取れる。またこの日帳は道中所々の様子・光景を記述していないが、それはこの日帳が所々の光景を記すことを目的としていないからである。以上のことから、仮に津波被害があったとしてもこの日帳ではその情報を得ることはできないと考えられ、松浦氏の指摘は当たらないということになる。

史料解釈では若狭湾での津波の発生は疑いないとの結論になるが、今後問題となるのは

外岡氏も指摘する地質調査の成果である。これから先、津波痕跡がみつからなかった場合、再び史料解釈および情報源が問題とされるだろう。⁽⁵⁰⁾

②伊勢湾

伊勢湾での津波発生の有無については、飯田氏の研究成果が基礎となつて議論が進められている。そこで、まずは飯田氏の成果をあらためて検証することから始めることにする。

まず飯田氏は『兼見卿記』に記述された「江州・勢州以外人死云々」を、近江・伊勢でも津波が発生したことを示唆しているのではないかとしている。この考察は、若狭湾で発生した津波についての記述と近江・伊勢についての記述が一連のものであるという解釈に基づいている。しかし『兼見卿記』の記述の仕方をよくみると、京都（壬生）での被害・若狭湾沿岸の津波被害・近江および伊勢の人的被害が「云々」で区切られており、記述された地域の違いから別個の情報源によるものとして扱っているのだと考えられる。津波被害の記述は若狭湾沿岸に限定されるものであり、『兼見卿記』からは近江・伊勢で津波が発生したのかを検討することはできないだろう。

ではフロイスの報告書や『当代記』を用いて伊勢湾沿岸の津波を検討することはできないだろうか。報告書では、伊勢での地震被害について亀山城（三重県亀山市）のことを記しているが、沿岸部の被災状況については一切記述がない。飯田氏は「Nagafama」を長島のことであろうと解釈したが、先に指摘したとおり、この地名は長島のことではない。そのため、報告書では伊勢湾での津波について検討することはできない。一方で『当代記』には「尾州長島」と伊勢湾沿岸の地名であることがはっきりと示されており、『当代記』は検討対象となり得ることが分かる⁽⁵¹⁾。ただし『当代記』は編纂史料であるため、他の史料と合わせて考察する必要があるだろう。いずれにせよ、伊勢湾での津波発生の有無についての検討では、『当代記』に記されている長島での疑津波現象記述に注目する必要があるといえる。

現在の長島は「輪中」と呼ばれる木曾三川河口部の低地帯を堤防で囲った集落であるが、天正地震当時の長島は木曾川河口部にあったいくつかの島の総称であり、尾張と北伊勢の一部を支配していた織田信雄の居城・長島城が存在していた。彼は当時の政治状況における重要人物の一人であり、『当代記』以外にも長島の被害に関する史料が多く残っているのは、そのような事情もあるのだろう。

長島の被害でもっとも多く確認できるのは長島城の被害である。たとえば『黄薇古簡集』

に収められている「羽柴秀吉朱印状」には、次のように記されている。

【史料7】羽柴秀吉朱印状写⁽⁵²⁾

今度之大地震ニ天主以下焼散候処、其方長島ニ有合茶湯道具取出候事奇特に候、すきの段不^レ及二聞召一候へとも、茶湯道具心をかけ候事心中之程床しく成候、委細津田小平次相含候也、

(天正十三年)
十二月四日

(羽柴)
秀吉御朱印

飯田半兵衛尉殿

この朱印状は信雄の家臣である飯田半兵衛尉に宛てられたものであるが、日付が「十二月四日」とあることから、地震の五日後に発給されたものであることが分かる。これによれば、長島城は「今回の大地震（＝天正地震）で天守以下の建物が焼け落ちた」とあり、地震によると思われる失火で城の建物が焼失したことが分かる。『当代記』にも「城中家倒令ニ焼失」と城中の建物が焼失した旨が記されていることから、長島城では火災による被害がもつとも大きな被害だったといえる。また近世の地誌の一つである『長島細布』（史料8、後述）には「当城の殿門矢倉塀等悉破壊」「本丸多門動潰」と記されており、『当代記』にあるように建物の倒壊後火災が発生したようだ。以上の史料記述からは、長島城が地震動とその後発生した火災によって被災したことが分かる。

では、長島城が所在した島の被害はどのようなものだったのか。同時代史料でこの点について記述されたものは見あたらず、天正地震から近い時期に作成された『当代記』には「百八里多以成^レ川」と記されている。飯田はこの記述をもって津波の存在を主張しているが、「成^レ川」という文言は地盤沈下や液化化を指す可能性もあり、この記述だけで津波の存在を肯定することは難しい。長島の被害については、近世に編纂された地誌にも記述をもつものが確認される。そのうち、もつとも情報量の多いものが『長島細布』である。やや長くなるが、関連する記述の一部を挙げてみよう。

【史料8】長島細布 上⁽⁵³⁾

（前略）

一、大嶋城跡と云ハ何れの所成也、不審、伊勢軍記・同神風記其外何れの軍記等二も不

レ見、予おもふに長嶋五ヶ所の出張地、大鳥居村・中江村・大嶋村・加路戸・篠橋と軍記にあり、是皆長嶋城を根城として出張の屋敷也、大鳥居・中江は当時桑名領也、今大鳥居村孫九郎屋敷福嶋村、加路戸・篠橋は天酉の地震に没す、大嶋の出張も大嶋新左衛門屋浦と云中江清十郎屋敷

所、今の村東堤並に纔ニ有共後世城跡と誤云伝る也、(中略)

一、松ヶ嶋村城跡と云ハ(中略)

其後天正十一年、末年北勢五郡並長嶋城領共織田信雄卿に賜、是豊臣秀吉公の命なり此時信雄卿ハ居城濃州岐阜而長寫、然ルニ天正十三年西冬 十一月廿九日勢尾大地震ニて当者令守護テ関弥平次也是家長ナリ

城の殿門・矢倉・堀等悉破壊せし也、(中略)

一、又元龜・天正・文祿之頃も今の城郭の如くと思ひしか故にあらず、抑当城にかきらす昔は多ハ壘かけ上の城郭のミなりされハ、当城も昔ハ天守有、矢倉・殿門多くありと云うは今の治天より推高云ならハしたる偽説也、昔戦国ニて悠々たる事更々なし、況や殿守といふハ楠正成時節より多ハ是を造立ス、増て当城におゐてをや、夫当城は慶長以来の城主連々に修補造立し給ふ、先本丸多門、天正の地震に動潰し、漸石垣少し残りしを、菅沼定芳君達ニ 上聞一、則許諾有て終に多門取建て再營し給ふ也(中略)

又松平佐渡守良尚君、明暦年中に本丸黒門を修補せしめ給ふ、是迄多門ハ高ク門ハ低シ依之門、外ニ出雁木而門ヲ令等多門也

(正保三年) 同年 黒門前の辰巳矢倉、良尚

君再營せしめ給ふ、此矢倉も天正の地震に動崩したりし後は堀を掛まハし台ばかり残る也、良尚君達東武奉行所得、差図甚大ニ成再營ナリ、(中略)

一、又 当村 汰り込・四ツ屋畑・大工町と云伝ふ所有、北動込と云ハ北嶋新道の方を云也、中動込と云ハ稻荷社地方一町余り西の方田圃を云也、助右動込といふハ南の堤落込之内の方をいふ也、助右衛門といふ百姓の家汰込し故云ナリ、是三ヶ所共に天正 三 酉年之冬大地震ニ動込し所也、(中略)

一、又 当村 (下坂手村)に砂宮神と云あり、則当社は水戸の神ミつはの免なり、日本旧事記・古事記等に見えたり、紀伊国海岸に多く是を祭る水神なり故海表に祭るなり、桑名領内川の神と云は同神なり、当所の木曾の流水うつまく川筋故、天正大地震の春此ニ祀る也、然ば遠在の古社也、神代ノ卷ノ上ニ曰一書伊弉册尊生火産靈時為子所唯、吹而神退マス矣其且神退之時則生水神罔象女云々

一、(下坂手村) 当村 地藏堂有、則此地蔵菩薩と云ハ本尊座像にて定朝の作なり、寛命述作ノ長島記有定朝大師ノ権作是大誤ナリ定朝無大師号予曰本朝官位門考之定朝者後一、諺云伝ふ、永祿・元龜の頃までハ善美を尽して嚴條院治天仏師達人因之治安二年得法橋位、(天正地震) 諺云伝ふ、永祿・元龜の頃までハ善美を尽して嚴

堂崢嶸として繁榮せしに、天酉の地震に殿堂こと／＼く破壊せしむ、此におひて農家漸く草宇を営み霜雪を覆ふ、其後寛文年中に地藏を再興し、堂も又新に作レ之、此時

正観音を安置す、(中略)

一、又 (下坂手村) 当村に真言宗の寺跡と云有、則下坂手村坂手山大通院と云真言宗の寺ありとかや、誠に近在の大寺也、是建保年中の開基にして永禄年中に及び、三百五十年来の春秋を経て、後本願寺宗に帰依改派す、是に於て最勝寺と号す、天正地震の後下坂手を去つて尾州海西郡立田村に住す、又後に尾州を去り勢陽桑名の市中萱町に住居して年を経月を越て繁栄す当時桑名萱町最勝寺元祖大通院、屋敷ハ今坂手金兵衛屋敷是ナリ

(中略)

一、(上坂手村) 当村 観音堂、則当観音堂は昔は杉江村長禪寺の境内に有りて其開基は憶ニ知らず、今観音境内は上坂手村高辻の内与左衛門屋敷と云うは是なり、(中略) 抑当観音は其開基不_レ詳、然れども天正の始め秀吉の命によつて徳永左馬濃州高須の城主此所を検地すること有り、此節徳永氏一字を再當し又田畑を少々除之、其証文今に長禪寺住持の手に有り、且天正十三乙酉年大地震す、此に於て幾程なく当寺退転し俗僧共に破壊の地と成る、纔かの一字杉江村に残る事年久し、(以下略)

この『長島細布』という地誌は、伊藤定昭という人物によってまとめられたものであり、享保一五年(一七三〇)の序をもっている。地震から一五〇年ほど経過して書かれたものであるため、記述内容をそのまま信用することは難しいが、下巻を含めるとさらに多くの天正地震に関する記述を見出すことができる。

天正地震に関わる記載では、最勝寺(下坂手村)のように「地震の後に移転した」とあって被害状況が不明というものが多く、地震被害による移転なのか、あるいは別の理由(たとえば、被害はないが地盤沈下など地形の変化が起きている、など)なのか分からない内容になっている。また下坂手村の砂宮神については、木曾川の急流のために天正地震の年(天正一三年)に祀られたとあるように、もともと水害の多い地であったこともうかがえる。近世に成立した年代記『百輪中旧記』(著者不明)には天正一四年(一五八六)に木曾川で洪水が発生したとの記述がある⁵⁴。実際同時期にこのような洪水が発生したのか分からないが、こういった洪水伝承と天正地震が結びつけられた結果、津波と解釈することのできる記述となつたのではないだろうか。

このように史料からは、長島で地震による甚大な被害が生じていたことまでは分かるものの、水害(津波を含む)についてははっきりとしたことが分からない。

飯田氏が挙げる史料のうち、伊勢国内で津波被害があったと書かれているものは一つも

ないのだが、唯一『度会郡穂原村役場調書』という資料に「大津波あり。」という記述が確認される。⁽⁵⁾⁽⁶⁾穂原は現在の三重県度会郡南伊勢町伊勢路の地名であるため伊勢湾沿岸とはいえず、仮にこの史料記述が正しかつたとしても、伊勢湾内での津波の証明にはならない。また役場調書の記事が本当に天正地震を指すのかも不明であり、他の地震津波と誤解している可能性も考えられる。さらにいえば、この調書の記述が史資料から採録したのか、伝承の聞き取りによるものかも分からないため、情報の質の面からも怪しいとみることができ⁽⁵⁾⁽⁶⁾る。

伊勢以外の伊勢湾沿岸の国では、たとえば尾張の真清田神社や津島神社で地震による被害があったことを示す史料はあるが、津波と解釈できる記述は存在しない。さらに三河では『家忠日記』のように地震の揺れについての記述しか確認できない史料ばかりである。このように、伊勢湾沿岸およびその周辺での津波の存在を示す史料はなく、あっても近代以降に書かれた、根拠不明のものしかないのである。よって、この史料から天正地震による伊勢湾での津波の発生を肯定することはできないといわざるを得ない。

天正地震における伊勢湾沿岸に関する史料の検討をおこなってきたが、伊勢湾沿岸を津波が襲来したという事実はみられなかった。松浦氏は津波被害にみえる海面変動や湧水害の可能性を指摘するが、この推定は的を射ているのではないだろうか。以上より、天正地震による伊勢湾内の津波は存在しないということが出来る。

飯田氏は、地震史料集に収載されている天正地震での和歌山県内について書かれた史料を、一六〇五年慶長地震津波によるものを指すのだろうとしている。その根拠はよく分からないが、その可能性は十分にありうるといえ、『度会郡穂原村役場調書』のような近代以降に書かれた文献中の天正地震による津波の記述も、和歌山県の事例同様に一六〇五年慶長地震によるものの可能性を考えることができる。この点については『度会郡穂原村役場調書』がどのような史料を根拠としているのか、よく検討する必要があるだろう。

おわりに

本章では、主として中世および近世初頭における津波発生の有無を検討してきた。検討対象とした元暦二年京都地震および天正地震（主に伊勢湾沿岸）の疑津波現象記述は、結果として津波とは異なる現象を示しているという結論に至ったわけだが、その過程を見れば分かるとおり、解釈如何によって津波と考えることも可能であるというのが、歴史津波

研究の難しいところである。いずれにせよ、歴史津波研究では一語ごとの解釈を厳密にこなう必要があることが分かってもらえるとと思う。

現代のように津波の定義がはっきりしていない時代には、様々な文言を駆使して津波を表現していた。史料を用いた歴史津波研究では、そのような表現を見落したり読み違えたりせぬように、より厳密で慎重な検証が求められる。

本章は中世以降の史料中にみえる疑津波現象記述を対象として検討してきたが、その前提には古代・中世を対象とした歴史津波研究における史料の利用方法および信頼性の判断基準をどのように示すのかという点があった。本章での検討過程によって、その一端を示すことができたと思うが、まだ不備な点があると考ええる。本章では天正地震での伊勢湾沿岸の津波発生の有無を検証する際に近世の地誌を用いたが、このように時間を隔てて成立した史料の災害記述がどのような情報源によっているのかといった、史料自体の研究も今後さらに進められなければならない。

歴史津波研究は、古代・中世だけではなく近世の場合でも問題となっている。ただし近世の場合には津波被害地域がどこまで広がっていたのか、また史料記述から津波高をどのように判断するのかといった、古代・中世とは異なる課題をもっている。そのため、近世の津波研究では異なる検討方法が必要となる。それぞれの時代で課題となることを判断し、それに対応する検討方法を整理することが、これからの歴史津波研究には必要であると考ええる。

註

- (1) 後藤和久・菅原大助・西村裕一・藤野滋弘・小松原純子・澤井祐紀・高清水康博「津波堆積物の認定手順」(『津波工学研究報告』第三三号、二〇一七年)。
- (2) 石橋克彦「古地震研究の問題点」(太田陽子・島崎邦彦編『古地震を探る』古今書院、一九九五年)。
- (3) 松岡祐也・都司嘉宣・今村文彦「歴史津波研究における誤解されやすい地名について」(『津波工学研究報告』第二九号、二〇一二年)。
- (4) 行谷佑一・矢田俊文「史料に記録された中世における東日本太平洋沿岸の津波」(『地震 第二輯』第六六巻第四号、二〇一四年)。
- (5) 石橋克彦「日本の古代・中世の地震史料の校訂とデータベース化」(『月刊地球』第二七巻第一一号、二〇〇五年)。

(6) 西山昭仁「近世史料に記された地震と地震災害」『新しい歴史学のために』第二八四号、二〇一四年。

(7) 松岡祐也・都司嘉宣・今村文彦「歴史津波の痕跡記録に対する文献信頼度の判断基準について」『津波工学研究報告』第三二号、二〇一五年)。この論文での信頼性は、史料そのものに対するものと史料内個々の記述に対するものを挙げていた。しかし、この論文は史料に加えて資料も対象として扱っていること、実際に使用する際には基準の作成者でなければ判別ができないことなどの不備も多かった。そのため、論文の最後には改良すべき点を指摘している。

(8) 史料の信頼性付与については、註7前掲論文のほかに、西山昭仁氏も言及している(①註6前掲論文。②西山昭仁「文政京都地震(1830年)における京都盆地での被害要因の検討―棧瓦葺屋根の普及による被害の拡大」『東京大学地震研究所集報』第八五巻、二〇一〇年)。西山氏は論文②で世代交代による記憶・経験の減少を考慮し、その期間を一世代三十年と想定、信憑性を三段階とする基準を提示している。ただし西山氏の基準は地震に関する史料が豊富な近世を主な対象として作成したものであり、史料の少ない古代や中世には西山氏が信頼性の低いと評価する史料を対象とする基準が必要であろうと考えられる。

(9) 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』(東京大学出版会、二〇一三年)。

(10) 都司嘉宣『『平家物語』および『方丈記』に現れた地震津波の記載』『建築雑誌』第一四四巻第一四四六号、一九九九年)。

(11) 都司嘉宣『歴史地震の話―語り継がれた南海地震―』(高知新聞社、二〇一二年)。

(12) 西山昭仁「元暦二年(一一八五)京都地震における京都周辺地域の被害実態」『歴史地震』第一六号、二〇〇〇年)。

(13) 石橋克彦『南海トラフ巨大地震―歴史・科学・社会』(岩波書店、二〇一四年)。
(14) 保立道久「平安時代末期の地震と龍神信仰―『方丈記』の地震記事を切り口に―」(『歴史評論』第七五〇号、二〇一二年)。

(15) 保立氏の同論文に対しては、石橋氏が註13前掲書で保立氏の主張した治承三年(一一七九)南海トラフ地震説を批判している。保立氏はそれを受けて「南海トラフ大地震と『平家物語』」(公益財団法人史学会編『災害・環境から戦争を読む』山川出版社、二〇一五年)で自説を撤回、石橋氏が主張する寛元三年(一二五四)南海ト

ラフ地震説を支持している。

- (16) 高橋昌明「養和の飢饉、元暦の地震と鴨長明」(『文学』第一三卷第二号、二〇一二年)。

- (17) 既刊地震史料集には、元暦二年京都地震について書かれた史料を三十点ほど確認することができる。しかしそのなかには、信頼性の低いものや南北朝・室町期の日記の記述も挙げられており、検討対象とはなりえないものが含まれている点に注意が必要となる。これは、地震史料集の抱えている大きな問題点といえるだろう。地震史料集にはほかにも問題点があり、それについては第三章で述べている。

- (18) 市古貞次校注『新訂 方丈記』(岩波文庫、一九八九年)。

- (19) 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇下』(勉誠社、一九九〇年)。

- (20) 例えば、佐伯真一氏は『平家物語』と『方丈記』の依拠関係について、『平家物語』諸本の「依拠の在り方、引用の態度」を明らかにしている(佐伯真一『平家物語』の『方丈記』依拠『帝塚山学院大学研究論集』第二一集、一九八六年。のち『平家物語遡源』(若草書房、一九九六年)に所収)。

- (21) 芝波田好弘『方丈記』の天災記事についての一考察」(『生活と文化の歴史学8 自然災害と疾病』(竹林舎、二〇一七年)。

- (22) 大隅和雄『方丈記に人と栖の無常を読む』(吉川弘文館、二〇〇四年)。

- (23) 黒板勝美編『新訂増補国史大系 第一巻下 日本書紀』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

- (24) 増補史料大成刊行会編『増補史料大成 第二八巻 山槐記三』(臨川書店、一九六五年)。史料中の「露盤八」について、高橋氏は原本でカタカナの「ハ」だったものが、写本の作成・転写過程や翻刻時に誤読、または活字化の際に誤植があったのだろうとしている(高橋昌明「日本史学者の見た元暦二年七月京都地震について」『月刊地球』第二七巻第一号、二〇〇五年)。高橋氏が指摘する他にも、同様の誤りと考えられる文字が散見される。

- (25) 小松原琢「元暦二年(1185)近江山城地震の起震断層の再検討」(『歴史地震』第二七号、二〇一二年)。

- (26) 註9前掲書。

- (27) 大森房吉「本邦大地震概説」(『震災予防調査会報告』第六八号乙、一九一三年)。

- (28) 大森氏が津波の発生を主張した根拠を、「本邦大地震概説」発表以前に『震災予

防調査会報告』で掲載された『大日本地震史料』天正地震の項から考えてみると、『梵舜日記』（『舜旧記』のこと）の「近国之浦浜之屋、皆波ニ溢レテ、数多人死也」から連想されたものと推測される。

- (29) 飯田氏による天正地震の研究は一九七七年（昭和五二）に始まる（①飯田没事「明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布」愛知県防災会議地震部会、一九七七年）。以降自身の論に修正を加えていき、一九八七年（昭和六二）に発表された成果が天正地震に関する飯田氏の説として認識されている（②飯田没事『天正大地震誌』名古屋大学出版会、一九八七年）。

- (30) 飯田氏はこの解釈から、大森氏による天正地震津波の考察を『当代記』によるものではないかと推定している。しかし註28で示したように、飯田氏の推定は誤っているといえる。

- (31) 八木伸二郎・伊藤英文・上田さち子「天正地震―特に濃尾・近江・越中の被害について」（『大阪府立大学 歴史研究』第二三号、一九八四年）。

- (32) ①松浦律子「天正地震の震源域特定…史料情報の詳細検討による最新成果」（『活断層研究』第三五号、二〇一一年）。②松浦律子「天正地震に関する欧州史料の素性と確実な内容」（『地震 第二輯』第六五巻第一号、二〇一二年）。

- (33) 註29前掲論文①。飯田氏は伊勢湾内にまで伸びる震源の位置モデルを示していたが（註29前掲書②）、松浦氏は伊勢湾内に震源を置く必要はないとした。

- (34) ①外岡慎一郎「天正地震」と越前・若狭」（『敦賀論叢（敦賀短期大学紀要）』第二六号、二〇一二年）。②外岡慎一郎「天正地震」の史料を読む」（『歴史学研究』第九〇三号、二〇一三年）。

- (35) 外岡氏は、当時の商業港湾として規模の大きかった小浜の可能性も示しつつ、母音が共通することから高浜を指すのではないかと指摘している。

- (36) 林博通・釜井俊孝・原口強『地震で沈んだ湖底の村 琵琶湖湖底遺跡を科学する』（サンライズ出版、二〇一二年）。

- (37) たとえば、民俗学が専門の金田久璋氏は「津波伝承論ノート 若狭湾沿岸の歴史津波について」（『季刊東北学』第二九号、二〇一一年）で若狭湾での津波伝承を紹介している。ここでは天正地震に関する言及はほとんどないのだが、民俗学の立場から災害伝承研究の意義・重要性を述べている点で評価できる。外岡氏も金田氏が提示した常神半島の東側にあったとされる「くるみ浦」の津波消滅伝承に注目して

いるが、外岡氏はこの伝承が天正地震によるものとは別であろうと考えている。また近年の成果として、理工学系研究者である羽鳥徳太郎氏による研究もあるのだが、羽鳥氏による津波の言及はこれまで挙げてきた飯田氏や松浦氏の成果を整理したものであり、独自の見解を述べているわけではなかった（1586年天正地震の震源域と津波『歴史地震』第三〇号、二〇一五年）。これは、羽鳥氏がこの論文で天正地震の震源域を明らかにすることを主眼としており、津波についての検討が目的ではなかったためだと考えられる。

- (38) たとえば、飛騨で発生した地震被害の情報が本願寺門主・顕如の右筆であった宇野主水の『宇野主水日記』に記述されている（上松寅三編『石山本願寺日記 下巻』大阪府立図書館長今井貫一君在職二十五年記念会、一九三〇年）。ここでの情報は、寺社のネットワークが活用されたものと考えられる。

- (39) 天正地震に関するこれまでの研究では、近現代に書かれた概説や自治体史の論説文を利用しているものも若干ながら見受けられる。そういった資料は本来検討対象となり得ないのだが、『度会郡穂原村役場調書』のように根拠不明な「大津波あり」という文言をもつ資料も存在する。この調書については未検討だが、似たものとして明治二五年（一八九二）に帝国大学理科大学（現在の東京大学）が全国の町村を対象に調査した地震・地理（地質のこと）の調書があり、おそらく穂原村の調書はこの調書ではないかと推測される。このように、歴史地震史料そのものを対象とする研究も重要となる（この点については第三章を参照）。

- (40) 橋本政宣・金子拓・渡邊江美子・遠藤珠紀校訂『史料纂集 兼見卿記 第三』（八木書店、二〇一四年）。

- (41) 鎌田純一校訂『史料纂集 舜旧記 第一』（続群書類従完成会、一九七〇年）。

- (42) 『史料雑纂 当代記・駿府記』（続群書類従完成会、一九九五年）。

- (43) 東京大学史料編纂所編『大日本史料 第十一編之二十三』（東京大学出版会、二〇〇二年）。『大日本史料』ではエヴオラ版が底本となっており、「」内の記述はローマ版により補ったものである。

- (44) 『日本史』やルイス・フロイスの書翰（エヴオラ版・ローマ版）については註32前掲論文②を参照。

- (45) 竹内理三編『続史料大成 第40巻 多聞院日記三』（臨川書店、一九七八年）。竹内理三編『続史料大成 第19巻 家忠日記 第一』（臨川書店、一九六七年）。

(46) 註36前掲書。

(47) 松浦氏が提示する疑問点のほかに、秀吉の動向についての誇張された記述も挙げられる。フロイスは坂本（滋賀県大津市）にいた秀吉が地震に驚き大坂城へ急ぎ移動したと記しているが、『兼見卿記』によれば秀吉は坂本から京都に入り、一二月二日未明に大坂へ移動したと記されている。フロイスの記述から、秀吉は地震に驚いてあわてて逃げたとする論もあるが、実際には別の理由があつたのではないかと思われる。

(48) 松浦氏がその根拠とした史料は『覺上公御書集 東京大学文学部蔵下』（臨川書店、一九九九年）である。

(49) 上越市史編さん委員会編『上越市史 別編2 上杉氏文書集二』（上越市、二〇〇四年）三一〇六号。

(50) 近年、福井大学を中心とするグループが若狭湾沿岸での津波痕跡の調査をおこなっている（山本博文・本多翔・佐々木直広・卜部厚志「若狭湾沿岸で見出された津波堆積物」『日本地質学会学術大会講演要旨』二〇一六年）。まだはつきりとした痕跡はみつかっていないが、これからの調査に期待がもたれる。

(51) 『当代記』では長島を「尾州」すなわち尾張国内であるとしている。これは「勢州」伊勢国の誤りであると思われるが、たとえば『信長公記』では「尾張国河内長島」と記しているように（榊山潤訳『信長公記』富士出版、一九九一年）、当時の認識として長島は尾張の一部とされていた可能性もあり、それに合わせた記述だったのかもしれない。

(52) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編12 織豊2』（愛知県、二〇〇七年）。

(53) 註29前掲書②。なお本章では、新潟大学の矢田俊文氏から頂いた史料のコピーで内容を照合している。

(54) 安藤萬寿男「百輪中旧記と古高須輪中の成立期」『岐阜史学』第七二号、一九八〇年）。

(55) 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第一巻』（東京大学地震研究所、一九八二年）。

(56) 註29前掲書。この調書については註39を参照。

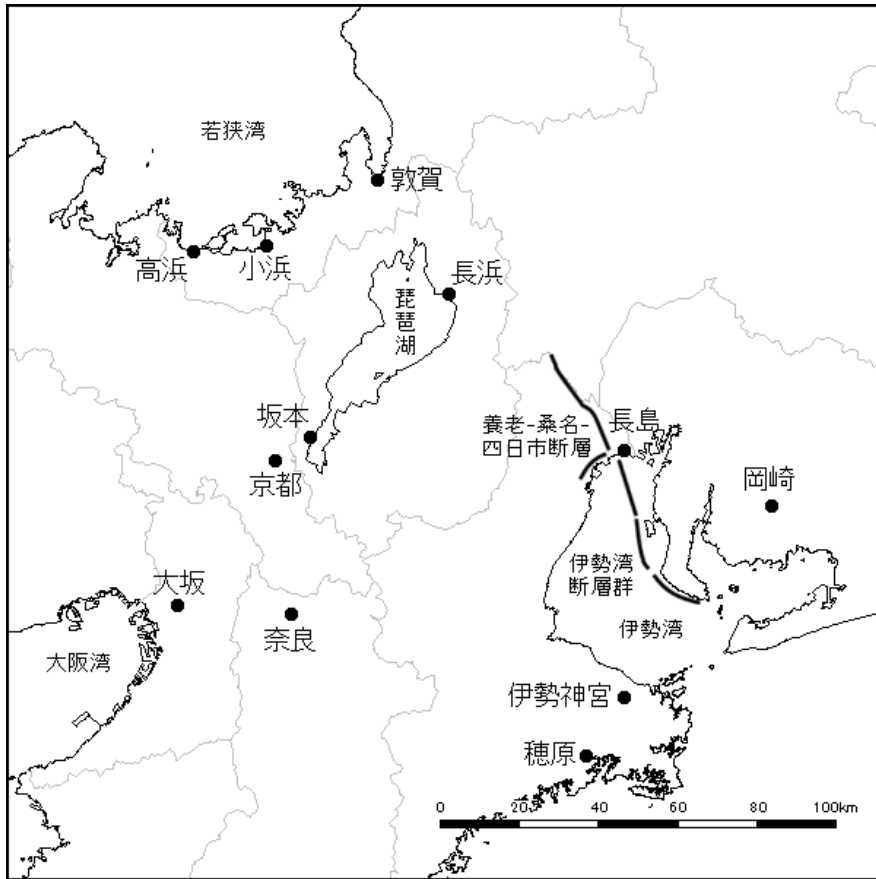


図 2：天正地震の主要被害地および震源断層（一部）

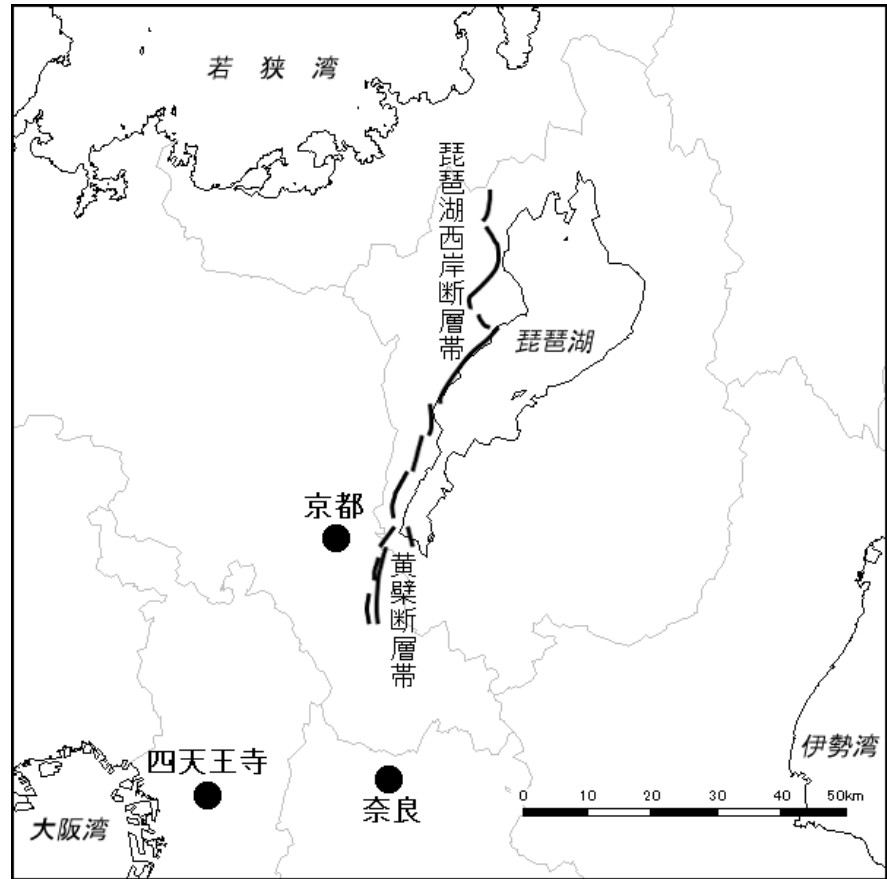


図 1：元暦二年京都地震の主要被害地および震源断層

第二章 文禄五年の地震による瀬戸内海周辺の状況

はじめに

第一章では、歴史津波研究における史料の利用について述べた。そこで示した検討方法は歴史地震を研究する際にも利用することが可能である。しかし近世初期以前の、特に地方で発生した地震について研究する場合には史料が少ないため、近世に作成された年譜や地誌を用いなければならない。本章では、地誌を用いた歴史地震研究の方法を提示することを一つの課題としている。

文禄五年（慶長元年、一五九六）に発生した豊後地震と伏見地震は西日本各地に揺れと被害をもたらした。この両地震について宇佐美龍夫氏は、豊後地震・伏見地震それぞれのマグニチュードを推定している。^① マグニチュードの推定には被害範囲と有感範囲が用いられており、^② 宇佐美氏は伊予の被害を豊後地震、讃岐の被害を伏見地震によるものと明確に分けて考えている。これは各史料に記載された地震の日付が根拠の一つになっていると推測される。

四国の被害のうち伊予のものについては、これまでも両地震とは別に「伊予地震」と呼ぶべき地震が発生した結果生じたとする見解が存在した。それは、堤浩之氏や後藤秀昭氏らによる中央構造線活断層帯の調査によって示されたものである。^③ これらの調査では、断層の活動時期を一四世紀以降・一八世紀以前の可能性が高いと推定し、この時期に合致する地震記述をもつ史料を調べた結果から、文禄五年の地震による伊予の被害に対応しうであるという結論にいたっている。この活断層調査によって推定された伊予地震発生説に対して、中西一郎氏は史料調査の面から考察を加えている。^④ 中西氏は史料記載の地震発生日を確認し、そこから「豊後と伊予において、九日に二つの地震が発生した可能性」を指摘している。中西氏によるこの指摘は文禄五年の地震像を明らかにする上で重要と考えるが、豊後地震・伏見地震との関連性の考察には検討の余地があり、また伊予の地震被害についてもいまだ曖昧なままという印象が残る。

このように文禄五年の地震による伊予の被害についてはまだ検討すべき課題があり、讃岐にいたってはほぼ放置されたままの状態である。同様に、この時期の地震による瀬戸内海沿岸地域の被害や有感範囲についても検討すべき余地が多い。よって本章では、これまでに知られている文禄五年閏七月に発生した地震に関する史料のうち、瀬戸内海沿岸地域

に関係するものを対象として解釈をおこなない、その上で当該地域での地震被害の実態を明らかにすることを目的とする。また、これによって明らかとなった地震被害の情報を基にして、文禄五年閏七月に発生した地震の姿、そして伊予地震発生の有無がどのように理解できるのかについて考察したいと思う。

一 讃岐の被害状況

文禄五年時に讃岐国を治めていたのは、生駒親正であつた。⁽⁵⁾ 生駒氏による讃岐統治は文禄四年（一五九五）に豊臣秀吉に封地されて以後、生駒家の御家騒動いわゆる「生駒騒動」によつて寛永一七年（一六四〇）に改易されるまで続いた。

讃岐国内での地震被害について書かれた史料は江戸時代に成立したものしか残されておらず、萩原尊禮氏らは書かれた内容の曖昧さや編纂時期が隔たっていることから被害記述に疑問を呈している。⁽⁶⁾ 萩原氏らが検討対象とした史料『讃岐国大日記』『讃岐一宮盛衰記』『一宮由来帳』はそのような理由から、萩原氏らは讃岐での地震被害に関する史料記述が豊後地震・伏見地震と結びつける根拠に欠けるものだとして評価している。

このように萩原氏らは讃岐での地震被害について疑いをもっているわけだが、あらためて検討方法をみると不備があるように思われる。萩原氏らは検討対象とした史料のうち文禄五年の地震に関係した部分しかみておらず、さらに成立年には注目するもののそれ以外のこと、すなわちどのような史料がもたくなって編纂されているのかといったことはまったく触れていない。こういった萩原氏らが見落とした、史料としての性格や編纂過程といった部分に注目すれば、これらの史料に書かれた地震被害の記述が信頼できるものか否かが分かるのではないだろうか。その上で、讃岐での地震被害と豊後地震・伏見地震との関係性について考えてみる必要があるだろう。

まず『讃岐国大日記』について検討してみる。この史料は承応元年（慶安五年、一六五二）の成立とされ、古代から近世初期の慶安四年（一六五一）までの讃岐の歴史をまとめた編年史料である。著者である友安盛員は石清尾八幡宮の祠官であつたという。⁽⁷⁾ この『讃岐国大日記』には、文禄五年の地震について次のように書かれている。

【史料1】讃岐国大日記⁽⁸⁾

慶長元年壬七月十二日^{九日ノ誤}ナラン之夜大地震、山崩地裂、白水涌出、其余波四五十日不止、

斯時豊後国府内、大地沈落成^二蒼海^一、其方一里有半矣、

萩原氏らはこの地震被害の記述が讃岐でのことかはつきりとしていないと評価していた。しかし『讃岐国大日記』中の災害記述に注目し確認してみると、讃岐に何らかの影響を及ぼしたもののみが記されていることが分かる。よって、【史料1】の記述も讃岐での出来事を示していると解釈することができるのだが、「山崩地裂、白水涌出」をそのまま讃岐で実際に起きたこととはできないかもしれない。それは似たような表現が様々な史料で確認され、地震についての定型句として用いられている可能性が高いためである。⁽⁹⁾ただし、讃岐で地震による揺れがあったことだけは間違いないだろう。

次に『讃岐一宮盛衰記』をみてみよう。讃岐国の一宮は現在の田村神社だが、この史料は享保二年（一七一七）に同社の祠官であった田村晴望が編纂したものだ⁽¹⁰⁾。原本はすでになく、現在は写しのみが残っている。『讃岐一宮盛衰記』中の文禄五年の地震に関する記述は、次の通りである。

【史料2】讃岐一宮盛衰記⁽¹¹⁾

生駒讃岐守一正治国之事

一正ハ、近規ノ継嗣ニシテ、讃州ヲ襲封シ玉フ。

出ニ國中勸進之御書ニ事 文禄五年七月十二日、大地震アリ。月ヲ逾テ不止。是ニ依

テ本社・摂社・末社・塔・仏閣ニ至マテ尽零落ス。同八月十七日、一正御名御判ヲ記ベ、國中勸進ノ御書ヲ出シ玉フ。其書ニ曰。香東郡ハ氏子ナリ。柱ヲ寄附スヘキ事ヲ命ス。此時浸衰降スト云ヘトモ、一郡猶氏子ナリ。

荒地高十二石寄附之事 事ハ下ノ條、正俊ノ治国ニアリ。

この史料によれば、文禄五年の地震によって本社を始め堂塔がごとく「零落」したという。萩原氏らはこの「零落」の語意について「元来「おちぶれる」という」意味だといい、建物の損壊を指すのか神社の衰退を意味するのか曖昧だとしている。しかし、ここでは素直に土地や建物が荒廃することの意味でとるべきであり、被害の程度はともかくとして地震による損壊があったことを疑うことはできないだろう。注目されるのは、地震の翌月に生駒一正から国内に田村神社修補のための勸進をうながす文書が出されたという点である。この『讃岐一宮盛衰記』では引用した史料が存在する場合にその写しを載せるこ

とがあり、それに対応する文書を現在でも確認することが可能となっている。ここに挙げた【史料2】では文書をそのまま写すのではなく「其書二曰」という形で文意を記すにとどまるが、これに当たると考えられる文書の写しが、やはり地震後に作成された『一宮由来帳』という史料に載せられている。

【史料3】一宮由来帳⁽¹²⁾

一宮今度之大地震に、社当^(頭)こほれ申に付、為^三本願^一天輪坊に建立申付候間、心もち次第に勧進に可^レ被^レ入候、香東郡はうち子にて候条、はしら勧進に入可^レ申候、為^レ其如^レ此候者也、

文禄五年

讃岐守

八月十七日

一正判

国中

これを見ると、【史料2】に記されている「香東郡は氏子であり、柱を勧進するように」と同じ内容を確認することができる。萩原氏らは成立年代・被害記述の曖昧さを指摘していたが、史料の成立時期が隔たっていることを理由に書かれた内容を否定することは難しいのではない⁽¹³⁾。田村神社の被害の全体像を【史料2】【史料3】から知ることができる⁽¹⁴⁾が、少なくとも柱の勧進が求められていることから殿舎が被災していることを読み取ることができるだろう。讃岐国内の被害の全体像はまだはっきりとしないが、田村神社の被災からは讃岐国内でいくつかの建物被害があったであろうことが想定できる。

讃岐の被害は伏見地震によつて生じたとするのが定説となっている⁽¹⁵⁾が、後述する伊予の震源断層との関係を考える必要や、同時期に徳島県の鳴門南断層が動いた可能性が指摘されていることから⁽¹⁶⁾、同時期の西日本一帯での地震活動について整理し直す必要があるだろう(図1)。この点は本章での論考から外れるためこれ以上踏み込まないが、四国東部での地震の姿を明らかにする上で、この讃岐の被害は重要となる。

二 瀬戸内海西部地域の被害状況

豊後地震については、主に豊後国内での被害についての研究がさかんにおこなわれているが、その周辺に位置する地域、とりわけ豊予海峡を隔てた伊予国内での被害状況に

はあまり目が向けられていない。豊後地震による被害が伊予にまで及んでいるという見解⁽¹⁶⁾と、「文禄五年伊予地震」と呼ぶべき別の地震の発生を主張する説⁽¹⁷⁾が並存したままとなつている。これは伊予の被害に関する研究が曖昧なまま進んでいることに原因がある。そこで伊予の被害状況をはつきりとさせるために、史料の考察をおこなねばならない。また瀬戸内海を挟んで伊予の対岸に位置する安芸の被災状況を確認することで、四国西部での地震の姿がよりはつきりとしたものになる。以上の検討によって伊予地震は想定可能なのか、また想定できるとすればその規模はどれくらいだったのかを考察する。

(一) 安芸の地震状況

文禄五年の地震について書かれた史料を調べてみると、山陽地方に関するものが少ないことに気がつく⁽¹⁸⁾。その少ない山陽地方の地震史料は、安芸国とりわけ厳島神社周辺に関するものに集中しているのが特徴的である。それは、厳島神社が瀬戸内海を航行する船にとって重要な神社であったこと、安芸を本拠とする大名・毛利氏による信仰と瀬戸内海流通掌握のために支配された神社であることが理由だろう。これまで文禄五年の地震に関する安芸の状況についてはまったく分かっていなかった⁽¹⁹⁾。伊勢神宮の御師・村山氏に宛てた毛利家臣・杉原重政の書状に地震記述はあるが、萩原氏らはこれが京都での出来事を示しているとの見解を示しており、安芸についてはまったく分からない状態だった

しかし近年、西尾和美氏によって地震後に毛利氏側から厳島神社神主である棚守左近衛将監へ宛てられた地震見舞いの書状の検討がおこなわれたことで、安芸の被災状況がどのようなものだったのか分かるようになってきた⁽²⁰⁾。ここでは、西尾氏の成果をもとに安芸での地震による被災状況を整理してみる。

【史料4】穂田元清書状⁽²¹⁾

呉々早々被仰越令祝着候／＼、以上、

如^レ仰夜前者大地震事々敷儀候、御仰天令^レ察候、御神前廻・経堂其外不相損之由、肝要目出候、随而上辺之儀無^ニ相替^一儀之由候、先ハ族申乱候へ共相静之由候、官人御対面之儀、大坂千疊敷相調候ハ、則御召寄之由候、御武者立を重而罷上、官人被^ニ待付^一之由候之条、いづともなき儀候、珍敷到来候ハ、從^レ是可^ニ申入^一候、恐々謹言、

治部

(慶長元年)
壬七月十日

元清(花押)

棚左まいる

御返報

【史料5】穂田元清書状⁽²²⁾

態申入候、先日者早々被^ニ仰越^一、令^ニ祝着^一候、さて／＼此中打続地震事々敷儀候、当嶋之儀、御社頭□・経堂□其外何方も不^ニ相損^一候哉、承度存候、爰元御城其外各屋敷不^ニ相損^一候之間、可^ニ御心安^一候、某元之様子承度候て申入候、恐々謹言、

治部

^(慶長元年)
壬七月十四日

元清（花押）

棚左まいる

御宿所

【史料6】毛利輝元書状⁽³¹²⁾

地震之儀付而、為^ニ祈念^一湯立執行候而、御湯御久米到来令^ニ頂戴^一候、此地諸所雖^ニ大破候^一、家中聊無^ニ異儀^一候、併 神慮故候、弥懇祈專要候、次嶋中無^ニ別儀^一之由、尤珍重候、猶萬吉重疊可^レ令^レ申候也、

^(慶長元年)
八月三日

（輝元花押）

棚守左近衛将監とのへ

地震後に棚守へ宛てられた書状は三通存在し、うち【史料4】と【史料5】は桜尾城（広島県廿日市市）城主の穂田元清によるものである。【史料4】によれば、厳島神社の建物には目立った被害がみられなかったことが読み取れる。これは地震直後に棚守から元清宛てに地震見舞いがあり、そこに神社内での様子が記されていたことを受けての記述であろう。一方で元清からは自分たちの被害の有無については述べられていないが、文書中には「夜前者大地震事々敷儀候」と大きな揺れがあったことが示されており、被害に関する記述がないのは桜尾城が揺れのみだったためであろうと推測できる⁽²⁴⁾。この地震を九日とすることは、「官人御対面」「御武者立」という秀吉と明使節の対面に関する記述からも妥当であると考えられ、ここでは西尾氏の理解に従う。

次に【史料5】をみると、元清から厳島神社の被害状況を尋ねた後に「爰元御城其外各屋敷不相損候」と記されている。元清はこの当時桜尾城にいたと考えられることから、こ

の「御城」は桜尾城を指していると理解でき、元清からは桜尾城および各屋敷が無事である旨が棚守へ伝えられたことが分かる。文書中の「先日者早々被仰越」について西尾氏は、【史料4】の前に棚守側から届いた見舞いを指しているとする。そうだとすると「打続地震」は九日から続いている地震活動を意味しており、【史料4】から【史料5】の間に地震の揺れが続いていたということが分かる。

【史料5】では元清側から厳島神社の被害状況を尋ねていたが、棚守から回答が届いていたことを示すのが【史料6】である。それによれば「嶋中無別儀」とあり、厳島では被害がなかったことが伝えられていたようだ。ちなみに【史料6】には「此地諸所雖大破候、家中聊無異儀候」と書かれているが、「此地」は当時輝元が所在していたと考えられる伏見のことを指している。伏見の所々で大きな被害が生じたが、輝元の周辺ではこれといった被害はなかったらしいことが分かる。そういう意味では、この【史料6】は伏見地震による伏見城下の被害状況を考える上でも重要なものといえるだろう。

以上、安芸での被災状況を確認してきたが、桜尾城・厳島ともに揺れのみで被害はなかったことが分かった。広島などの他の場所については史料記述を確認できずよく分からないが、桜尾城や厳島の状況から推測してみると、安芸国内では地震被害はなかったと考えることができる。

山陽地方では他に、安芸・備後の境に近い位置にある仏通寺（広島県三原市）の『仏通禅寺住持記』という史料に地震の記述がある。そこでは、文禄五年の地震について次のような記述がある。

【史料7】 仏通禅寺住持記 (26)

慶長丙申 長松派

仁仲宗芳禅師 再住 侍真全琳

納所 常法寺 令順

向上 三嶋之
納所 周養 西光寺

中之橋隆景御建立

今年僧堂上葺、依于隆景御助成、納所営之

丙申歲閏七月九日ヨリ十二日マテ大地震ユル、少宛ハ八月廿日迄陶也、取分洛

中之諸館崩裂ス、人多死

〈頭注〉

同年含暉庫裡・客殿隆景御再興、閏七月十三日作事始

日本江従大明国將軍并二大子為懇望被渡、於于伏見与大坂太閤様御対面畢

(※頭注は以下の通り)

含暉上棟 南膳部州大日本国安芸州豊田郡沼田庄御許山仏通禪寺開山塔含暉院、
再興大檀那小早川筑前侍従平朝臣隆景、住持小比丘備後国康徳寺長松○仁仲^(一)
宗芳叟、于時文禄五年丙申八月吉日、作事奉行国貞神左衛門宗次、納所常法寺
令順、御影侍者全琳敬白、大工紀州之住四郎兵衛

これによれば、閏七月九日から一二日まで大地震があり、小さな揺れは八月二〇日まで「陶」つまり盛んであったと記されている⁽²⁷⁾。京都での被害はともかく、この地震動の記述について、萩原氏らは「三原でも相応の震動を感じたであろうが、三原での状況を直接物語るものではない」と結論づけている⁽²⁸⁾。萩原氏らは【史料7】が京都での地震被害を知った上で書かれたものであるから「大地震ユル」が京都での地震を示すのだとするが、そうであれば八月二〇日までの揺れを理解することができなくなる。伏見地震以降、京都で感じられた余震は年を越えてなお止んでいないことが公家などの日記から読み取ることができ、八月二〇日までとするこの記述と合致しない。また、当時来日中であった朝鮮使節の日記によれば、八月一五日夜に牛窓（岡山県瀬戸内市）で地震動を感じたが、その約一ヶ月後に再び同地を通過した際には地震動の記録がなくなり⁽²⁹⁾、こういった状況から考えると、【史料7】に書かれた「大地震ユル」は三原で起きたものと理解すべきだと考える。安芸の史料記述からは、瀬戸内海の北側では地震による揺れのみで被害はなかったという結論を得た。これは伊予での地震の姿を考える上で大いに参考となる。

(二) 伊予の被害状況

伊予国における地震被害について記述された史料は讃岐や安芸に比較するとやや多いものの、そのほとんどが近世の地誌である。伊予での地震については史料の検討よりも活断層の活動履歴調査が先行し、その結果と従来知られていた歴史地震が対比されていた。つまり、近世の地誌が無批判に利用されてきたわけだ。このような状況に対して、史料の調査・検討の必要性を感じた中西一郎氏は伊予の地震史料について考察することで、活断層の活動履歴との対比を試みている⁽³⁰⁾。中西氏による史料の検討は、現在確認できる伊予の地震史料を網羅するものであり、評価すべきものである。しかしその検討以降、伊予の地震史料に関する研究はあまり進歩していない。また中西氏による史料の検討も十分なものとはいえないことから、彼の成果を踏まえつつ、伊予での地震被害の状況について考察

してみようと思う。

1. 南予地方

従来知られていた文禄五年の地震に関する伊予の被害は、瀬戸内海に面した伊予国の北部（現在の愛媛県東予・中予地方）に集中していたが、中西氏によって南予地方にある宇和島での地震被害が紹介されたことで、被害が広範囲に及ぶと推定された⁽³¹⁾。宇和島での地震被害について記述しているのは、『公室年譜略』という津藩藤堂家の年譜の一つである。この史料は安永三年（一七七四）頃に喜田村矩常が種々の史料をもとに編纂したものである⁽³²⁾。なお原本は一九二三年（大正一二）の関東大震災によって焼失してしまったという。この史料には、文禄五年の地震について次のように書かれている。

【史料8】公室年譜略⁽³³⁾

閏七月小

○十二日 五畿内并二近国大地震ナリ、四国辺モ最モ強シ、板嶋ノ城宮破損アリ、則チ此月ヨリ城構ノ修補ヲ加ヘ玉フ、

私ニ曰、此修造ノ事旧譜ニ失ストイヘトモ、白雲君ノ遺帖ニ依テ爰ニ挙ル、

これによれば、閏七月一二日に発生した地震によって板島城（現在の宇和島城）が破損したため、修補が加えられたのだという。この記述には註が付されており、『公室年譜略』以前の年譜には書かれていなかったものを「白雲君」藤堂虎高（藤堂高虎の父）の遺帖から採録したとある。この記述について中西氏は、豊後地震や伊予での地震を記述する史料では閏七月九日に発生したとあるのに対して、【史料8】では一二日と記されている点に注目し、この「日付の違いは編者が伊予での被害を近畿の文禄五年地震によるとした」ためであろうとする⁽³⁴⁾。この【史料8】の記述からは具体的な被害の様子を知ることはいけな
いが、中西氏はこの記述を基に宇和島でも地震被害があったとして、震源位置の検討などをおこなっている。

問題となるのは、『公室年譜略』以前の藤堂家の年譜にはなかったという板島城修補の記事が、藤堂虎高の遺帖によって加えられたという点である。実は『公室年譜略』の約二十年前に編纂された藤堂家の年譜『宗国史』にも同様の記述が確認される。

【史料9】宗国史⁽³³⁾

丙申 慶長元年^{明萬曆二十四年} 夏五月、 徳川公叙^シ正二位^ニ任^ス内大臣^ニ、 太閤ノ世子秀頼叙^シ三位^ニ任^ス参議^ニ、^{時甫一四歳} 六月西師振旅^ス、 秋閏七月十二日山西地大^ニ震^ス、 八月修^ス板島城^ヲ、

謹按此條旧譜失^レ載^ヲ、 據^テニ 白雲公遺牘^ニ一補^レ之^ヲ語、

【史料9】も【史料8】同様閏七月一二日の地震のあとに板島城修補の記述があり、この記述が「白雲公遺牘」によって補ったとある。【史料9】が修補の日付を八月と記している点異なる以外、両者の記述は極めて似通っているが、『公室年譜略』の「引書目録」をみると『宗国史』をはじめとする藤堂家の年譜が参照されており、この箇所が『宗国史』を引用したものである可能性が高い。⁽³⁶⁾ よって「白雲公遺牘」は【史料8】の「白雲君ノ遺帖」と同じものと考えられる。

では、両者が引用する「白雲君（公）」藤堂虎高の遺帖には板島城修補がどのように記述されているのか。中西氏はこの遺帖をみつけることができなかったが、今回史料を調べたところ、『宗国史』のなかに高虎の文書などと一緒に虎高の文書が写されており、該当すると考えられるものも含まれていることが分かった。

【史料10】藤堂虎高書状⁽³⁷⁾

扱々今度於ニから嶋一番舟一番切乗被^レ竭ニ粉骨一身耳、 佐渡守同家中迄揚^レ名事無^ニ比類一手柄、 常々の心懸此時相頭、 扱々満足此事候、 帰朝候は身上あかり可^レ申と喜悦被^レ申候計候、 次に同太良左は 上様被^レ成御留にて不^レ下候定御吉左右可^レ有^レ之と取なし、 御腰物拝領申候由候、 其外諸大名衆も小袖・樽以下宝の山をつみ候と申来候、 将又当城板嶋普請不^レ成大形出来候、 其外皆々無^ニ何事一御心安可^レ被^レ存候、 次郎左手重由候、 いかゞ無^ニ心元一候、 随分念を被^レ別養性候やう肝要ニ候、 猶太郎佐渡海候時可^レ申候 恐々 謹言

九月五日 虎高 花押

新七郎殿 白雲

返事

【史料10】には年紀がないが、文禄四年の高虎の板島入城後であること、朝鮮出兵（慶

長の役、丁酉倭乱)における「から嶋」(巨済島)での海戦についての記述があることから、これは慶長二年(一五九七)のものと考えられる。両年譜が参照する虎高の遺帖はおそらく同じものであり、この虎高の文書が「白雲君遺帖」に当たるものである。【史料10】には「当城板嶋普請不成大形出来候」と書かれており、両年譜のように板島城の普請(修補)がいつ始まったのかについては書かれていない。両年譜で修補の始まった時期が異なっている点から考えると、恐らく年譜の編纂者が板島城普請の始まった時期をそれぞれ想定し、文書の書かれた前年に地震が発生していたことから、普請は地震で被災した板島城の修補を目的としたものと考えたのだらうと思われる。

両年譜の編纂者は文禄五年の地震と慶長二年の虎高文書の記述を結びつけたわけだが、【史料10】からは板島城が地震により被害を受けたかどうかは分らない。地震以外に板島城の普請がおこなわれた理由は考えられないのだろうか。同時期の板島城周辺のことについては、近世の地誌から板島城普請の理由の手がかりを得ることができる。例えば天和元年(延宝九年、一六八一)に成立した地誌『宇和旧記』には、宇和島城下にある山王宮(現在の宇和津彦神社)について次のように記している。

【史料11】宇和旧記⁽³⁸⁾

一山王宮

上棟、皇国安寧、国土泰平、神徳増益、当郷繁榮、此山王宮者、自昔年一被^レ仰^二当城鎮守一有^二靈驗一、鳥積兔久矣、雖^レ然三十有年以前、藤堂泉州太守、為^二当城之主一時、遷^二此山一者乎、志^レ之無^二人民一而今社稷廢壞畢、嗚呼時哉々々、今又伊達遠州太守秀宗公、為^二当国之主一時、万民快樂、而今茲寛永二、旃蒙赤奮若中冬切磋吉日良辰、以^二自他之勲功一再興之一、緇素共競、而默祈^レ之、默禮^レ之、寔天長耶地久、御願円満也、以^レ茲檀越寿山聳、福海無量、子葉孫枝、益蕃茂矣、更祈当郷君臣慶会、日照天臨也、純助^二無為之化一、則百姓彌耕^レ田、鑿^レ井、曉作夕息、奇哉快哉、然則社門吉利、無^二腐敗傾危之難一、而昭々神徳、必及^二億萬世一者乎、主祝至禱、再拝々々、觀藏主盟林叟謹書^レ之、

維時寛永二曆乙丑霜月如意珠日敬白、

侍衆助成在^レ之、当町勸進在^レ之、材木從^二大鋸町一寄進、上葺板大工與三左衛門寄進、大工越智朝臣八左衛門、鍛冶藤原朝臣平右衛門、本願主賄賂奉行若藤彌兵衛高茂。

【史料11】には寛永二年（一六二五年）の棟札の写しが載せられているが、板島城の鎮守であった山王宮を「三十有年以前」に藤堂高虎が「此山」（毛山村の山麓）に遷したと記されている。寛永二年の三十年程前であるので、文禄四・五年頃に遷されたのだということができる。また同史料には、宇和島城下にある一宮（のちに山王宮とあわせ宇和津彦神社となる）について「但先年は丸串城天守の臺に社有之由、藤堂泉州之時、今の所へ奉_レ移之由」と書かれている。「先年」がいつのことを指すのか分からないが、高虎の統治の時代とあることから、恐らく山王宮と同時期に神社を遷したのだろうと考えられる。ここに記されている丸串城は高虎入城後に板島城に改名されていることから、一宮はもともと板島城内にあったことが分かる。

このような板島城の鎮守や城内にあった神社の移転は、板島城の修補と何らかの関係があるように思われるが、なぜ高虎はこのような移転をおこなう必要があったのだろうか。そこで宇和島城下から宇和郡全域に視野を広げて、他に文禄五年に関する記述がないか調べてみると、次のようなものがみつかった。

【史料12】宇和旧記⁽³⁹⁾

一三島宮舞殿棟札写

（中）龔_二上棟_一、当社舞殿、金輪聖王、天長地久、御願円満、武運康泰、如意吉祥之處、

（右）大檀越藤堂佐渡守、当国御拝領内、宇和郡周智郷野村、当山御社頭拝殿御新造相成候、

御願主山城国綴喜郡薪庄之住人森川彌介、藏野村両所御代官、公私無_レ恙、子孫榮昌祈、

（左）同此材木、郷内上下百姓、為_二合力_一遠所近隣氏子思々助成也、

付大川為_二余水_一築地興行、末代之田地圍也、此宮造同年如_レ此、仍如_レ件、

（左下）大工先祖豊後住平朝臣主水助、小工次郎三郎、鍛冶大工五郎、本願、権大僧都神力坊、当社祝言也、

于時文禄五年丙申八月吉日

（下）本村肝煎、緒方與次兵衛、同泉貨、同三ノ太夫、釘旦那、三浦左京、同彌右衛門、田中治部太夫

○うらに寄附者の氏名あるも略す、棟札現存、長三尺四寸六分、巾五寸五分、厚三

分、檜材、

これは野村三島神社（愛媛県西予市）の舞殿にあった文禄五年八月付の棟札の写しである。文禄五年の地震が閏七月に発生していることから、その約一ヶ月後に舞殿が完成していることになる。この棟札の写しには地震に関する文言がないことから、舞殿が地震によって損壊したために造営したというわけではない。文禄五年には、前年に南予地方の三郡（宇和・喜多・浮穴）を与えられた高虎によって神社の造営・再興がおこなわれており、野村三島神社の舞殿もそういったものの一つであると考えられる⁽⁴⁰⁾。高虎による神社の造営・再興の背景には、南予三郡への入部以前にこの地を治めていた戸田勝隆による領内での圧政による、領地の荒廃と領民の高い不信感があつた⁽⁴¹⁾。このような領民の不信感を取り除くための高虎の政策の一環として神社の造営・再興は位置付けられる。野村三島神社の舞殿造営はそういった政策の一部としておこなわれたものだった。神社の造営・再興政策は文禄五年以降も続けられており、地誌に載っている棟札には慶長年間の年紀が入ったものがいくつも確認されることがそれを物語っている。そうであれば、山王宮や一宮の移転・造営もこの政策によるものと考えるべきであろう。

宇和島での文禄五年の地震による状況は他に史料がないことから、はっきりとは分らない。しかし、高虎による神社の移転・造営政策に関係した史料からは、特に被害があつたようには考えられない。また【史料8】【史料9】が参照したであろう虎高書状の記述からは、板島城の普請が地震被害からの修補を目的としていたということもできない。以上のことから、文禄五年の地震によって宇和島および南予地方では多少の揺れはあつたかもしれないが、被害を出すほどではなかったと考えられる。

2. 東予・中予地方

伊予国北部では、現在の愛媛県松山市（中予地方）と西条市（東予地方）で地震被害があつたことを示す史料が知られている。中西氏は両地方の被害に関する史料記述を整理し、そこから分かる被害状況を基に地震の発生位置を考察している。中予地方については目招山薬師寺蔵「大般若波羅蜜多經 卷第十七」の奥書と『古蹟俗談』の二点を挙げている⁽⁴²⁾。

薬師寺が所蔵する大般若経については土居聡朋氏が詳しく紹介している⁽⁴³⁾。土居氏によれば薬師寺所蔵の大般若波羅蜜多経は鎌倉中期に書写されたものであり、そのなかに天正一四年（一五八六）と文禄五年の奥書が記されたものがあるという。なお両奥書の筆者は別

であろうとされている。このうち文禄五年の奥書には、次のように書かれている。

【史料13】 大般若波羅蜜多經 卷第十七 奥書⁽⁴⁴⁾

文禄五年^{丙申}潤七月九日^ニ大^ニ地振候て國中迷惑仕候其時^申

これによれば、閏七月九日に大地震があり「國中」が迷惑したという。具体的な被害記述はないものの「國中」で何らかの被害が出ていたことがうかがえる。この「國中」について中西氏は「この史料は伊予の国の各地で地震による被害を被ったことを示している」としている。中西氏のいうように、この「國中」は伊予国内のことを指していると解釈できるが、あるいは当時この地域を治めていた加藤嘉明の領内のことを指している可能性も考えられ、さらなる検討を要するだろう。なお奥書の「其時」(【史料13】の波線部)は異筆であり、二文字のあとに余白も確認できる⁽⁴⁵⁾。土居氏はその理由を不明としながらも、初めからこの二文字のみが記され、その続きは書かれなかったのだとしている。豊後国にある興導寺(大分県国東市)にも奥書をもつ大般若波羅蜜多經が所蔵されている。ここには「文禄五年丙申閏七月九日大地震仕豊後奥浜悉ク海成人畜二千余死ス前代未聞条書付申畢」と書かれた後に異筆で「奥浜計二万人死ストモ」とあることから⁽⁴⁶⁾、おそらく【史料13】にもこの大般若波羅蜜多經の奥書のような死者数などの情報が書かれる予定だったのかもしれない。しかし、実際には書かれなかったわけであり、その理由は謎として残ったままである。

【史料13】には被害についての記述はなかったが、具体的な被害記述をもつものとして中西氏が挙げているのが『古蹟俗談』である。中西氏によればこの史料は一九一四年(大正三)に成立したもので、近世の地誌『予陽旧蹟俗談』の写本であるという。そのなかに、大般若波羅蜜多經を所蔵する薬師寺の被害についての記述があり、天正年間に伊予を領した福島正則によって伽藍や社領が破壊され、その後地震によってわずかに残っていた本堂や仁王門が崩れたのだという。この記述を信用すれば、薬師寺自体が地震の被害を受けていたことになるわけだが、そうであれば大般若波羅蜜多經の奥書に何らの記述もないことが疑問として出てくる。あるいは、異筆の「其時」のあとには寺の被害を記すつもりだった可能性もありうる。また、『予陽旧蹟俗談』には寺が福島正則によって破壊された旨が記述されているが、一方で正則は伊予で寺社領の安堵をおこなっていたともいい⁽⁴⁷⁾、この地誌の記述をそのまま信用できるのか怪しいところである。

東予地方では、現在の愛媛県西条市での被害に関して『小松邑志』という史料が知られている。これは小松藩領に属する村々についてまとめた地誌で、万延元年（一八六〇）に成立したという。この史料からは、広江村（愛媛県西条市）と北条村（愛媛県西条市）の地震被害に関する記述を確認することができる。

【史料 14】小松邑志 広江村⁽⁴⁸⁾

密林山徳蔵寺

徳蔵寺不^レ知^ニ創起之因縁^一、（中略）慶長丙申七月大地震、人屋顛倒、此邑無^ニ棟宇之全者^一、於^レ是乎村老□議^レ遷^ニ邑居於今地^一、以^ニ此地良沃稼穡滋咸^一衆民權□各ト^ニ居室^一邑吏久米氏□衆民出^レ財建^ニ寺及神祠^一、今徳蔵寺五所明神祠（以下略）

里正久米氏

彦右エ門通保

初而広江村ニ住ス

一此時在所今之北津下ニ在ト云

彦兵衛通元

初而庄屋役勤ル

一文禄四 慶長六 同八 御水帳三冊

一慶長元酉七月大地震之後在所ヲ今ノ所ヘ移ス

一同六年加藤様御時代御免定足立半右エ門殿

一同八年右同断都志新助殿

一同御時代小物成銀御請取書数通有り但シ元和三年ヨリ寛永十一年迄

一加藤様藤堂様御名前前御領地分ケ為替御書写

【史料 15】小松邑志 北条村⁽⁴⁹⁾

鶴岡八幡宮

地頭多賀谷修理大夫道保、北条ノ地ヲ領シ、□□之時氏神鶴ヶ岡八幡宮ヲ鎌倉ヨリ勸請シ奉ル所ナリト云、

多賀谷道保ノ事未詳故ニ八幡宮勸請年月日亦不^レ可^レ知

文禄四年壬辰閏七月九日戊剋ノ地震ニ、宮殿・宝蔵・神器・記録ニ至迄大半顛覆シテ地中ニ陥没ス、

往古ノ額板今社中ニ在リ、地震前ノ遺物

其后今ノ地ニ板殿ヲ營ミ遷座シ奉リシカ、誰有テ再造ヲ企ル者モ無ク、社殿ノ衰廢此
ニ至テ極レリ、然ルニ慶長五年塩見五郎兵衛景則^{北条}、^{村々長}發ニ造營之志^一、宮殿始テ成就
セリ、一色弥兵衛重次^{三ツ屋村々長}御輿ヲ寄附シ奉リ、神事於レ是復レ旧ニト云、

広江村については、同村内の徳蔵寺についての記述と歴代里正の事項の中に被害記述がある。【史料14】によれば、文禄五年の地震によつて無事な人家がないほどの倒壊被害があり、そのために村を現在の場所に移転、地震当時里正であつた久米彦兵衛通元によつて寺や神社の造営がおこなわれたのだという。寺自体の被害についての記述はないが、「此邑無棟宇之全者」とあることから何らかの被害があつたと想像することができる。⁽⁵⁶⁾『東予市誌』では『密林山徳蔵寺由来記』の「村宅湮没」という記述から、広江村の地盤沈下と低湿地への変化を想定している。⁽⁵⁷⁾【史料14】からは地盤低下などを読み取ることはできないが、中西氏は地震当時の広江村が現在よりも海に近い場所にあつたと推定しており、この推定を信用すれば地盤変動があつたと考えることは可能だろう。また災害による集落移転は様々なところでおこなわれていることから、移転という手段は現地での復旧が不可能な場合にとられた一種の災害対応としても位置付けることができる。⁽⁵⁸⁾

なお天保一三年（一八四二）成立の『西条誌』には、広江村がもとは隣接する石田村の一部であり、時期は不明だが分村したのだとされている。広江村が属する小松藩は寛永一三年（一六三六）に石田村が属する西条藩から分かれており、分村はこの頃のことだったと考えられる。『西条誌』の記述が正しいとすると、広江村の成立は文禄五年の四〇年後とということになり、【史料14】に記されている地震を原因とする村落移転は分村をモチーフに創作された伝承の可能性が出てくる。両地誌の記述については、さらに検討する必要があるだろう。

次いで北条村については、【史料15】に村内の鶴岡八幡神社（史料では鶴岡八幡宮とある）の被害に関する記述がある。これによれば「文禄四年壬辰閏七月九日」に地震があり、建物や宝物などが「地中ニ陥没」したという。地震後現在地に遷座されたことから、文禄五年当時は所在地が異なつていたことが分かる。中西氏は『愛媛県神社誌』や『多賀村誌』の記述を基に、現在地から約七百メートル東北東に位置する水田を旧地として推定している。立地する場所が広江村における徳蔵寺に類似していることから、鶴岡八幡神社での「地中ニ陥没ス」という被害は地盤沈下によるものと考えることができそうだが、北条村は広江村と違い村落移転についての記述がない点は注意が必要だろう。近接する両村

で異なる対応が取られたのか、あるいは先に示したように広江村の村落移転がなかったのか、さらに検討しなければならない。

北条村の地震記述で特に問題となるのは、地震の発生年が文禄四年（一五九五）となっている点である。この点について中西氏は他に文禄四年の地震を示す史料が存在しないことから文禄五年の誤記であるとし、宇佐美氏は「真偽不明」としつつも、やはり文禄五年の誤記ではないかとしている⁽⁵³⁾。いずれも文禄四年は文禄五年の誤りと理解しているわけだが、おそらく年紀の違いは中西・宇佐美両氏のいうように単なる誤記と理解して問題ないだろう⁽⁵⁴⁾。

以上、南予地方と東予・中予地方に分けて文禄五年の地震による伊予の被害について検討してきた。その結果、南予地方で考えられていた地震被害が存在しないことがはっきりし、被害の範囲が東予・中予地方でも瀬戸内海に面した狭い一帯にとどまることが分かった。ただし、地誌の検討にはまだ問題も残っていることから、被害はさらに限定されるかもしれない。

三 文禄五年伊予地震説の検証

瀬戸内海西部地域で文禄五年に発生した地震による被害地域は、伊予北部に限定されることが分かった。従来この地域の被害は、史料に記述された地震の発生日がいずれも閏七月九日であることを根拠として、同日に発生した豊後地震によるものとして考えられていた。これに対し活断層調査による成果として、地質学の側からこれとは異なる意見が出されている。それは、閏七月九日に四国中央部の断層が動き（伊予地震）、一二日に別府湾内（豊後地震）、一三日に四国中央部・四国東部・淡路島東部の断層と有馬―高槻断層が動いた（伏見地震）というものである⁽⁵⁵⁾。地質調査では幅のある年代特定しかできないため、現在知られている歴史地震と照合していった結果として、文禄五年がもっとも適当であること、そして史料に記述された日付から地震の発生順序が想定されている。

いずれも史料に記述された豊後地震の日付が根拠となっているが、地震発生日は「文禄五年丙申閏七月九日大地震仕」（『大般若波羅蜜多經 卷第四百二十四』奥書⁽⁵⁶⁾）、「去七月十二日之地震之時」（『玄与日記』⁽⁵⁷⁾）、「同（引用者注…閏七月）九日大地震シテ」（『柴山勘兵衛記』）のように、九日と一二日が混在している。このことが豊後地震の発生日についての対立を生じさせているわけだが、一方が正しくもう一方は誤記であるとはいいたい。

この点については第七章で詳細に検討しているが、閏七月一二日とする史料は伏見地震ないし南九州での震動を記したものであり、豊後地震は閏七月九日に発生していると結論づけられる。

豊後地震が閏七月九日に発生したことが分かったことで、地質学側で提唱された説は誤りであると結論づけられるが、伊予の地震被害も豊後地震によるものと考えてよいのだろうか。豊後地震では別府湾内の断層が動いた結果津波が発生し、豊後の各所に被害をもたらした。しかし伊予では、津波による被害と考えられる史料記述は見つかっておらず、豊後地震による津波は伊予に被害をもたらしていないと考えられる⁽⁵⁸⁾。豊後地震以外に原因を求めていくと、四国の中央構造線活断層帯、特に伊予の被害地である広江村・北条村の南五キロメートル内に存在する川上断層が文禄五年を含む時期に動いたとする地質調査の成果があり、この断層帯が動いた結果として伊予で被害が生じた可能性が浮上する(図2)。史料からは時間差がどの程度あったのかまで知ることはできないが、閏七月九日には別府湾内の断層を起源とする地震と四国の断層を起源とする地震の二つが起きたと考えることができそうである。

文禄五年に四国の断層運動による地震があったとすれば、その規模はどの程度だったのだろうか。地震被害は東予・中予地方で建物の倒壊や地盤変動がみられるが、被害があったとされる地域は狭く、さらに断層に近い村で大きな被害が生じたと考えられる。また有感範囲については、安芸や南予地方での震動が豊後地震の有感範囲と重なっている可能性があるため、どこまで広がっていたのか判断することは難しい。被害の範囲が限定的、しかも断層に近い地域のみであることから、地震の規模は大きくともマグニチュード六・〇程度といったところだったのではないだろうか。

おわりに

文禄五年の地震による西日本の被害を概観すると、瀬戸内海を挟んだ山陽地方と四国北部で被害の有無がはっきりとあらわれることが分かる。特に伊予と安芸の間で顕著にみられるこの違いの原因がどこにあるのか、また豊後地震との関係をどう考えればよいのか。本章では伊予の地震被害を、被害地域に近い伊予国内の震源断層が動いたために生じたものとした。しかし、まだ検討すべき点は多い。

伊予の被害地域が限定的な理由についても、考慮しなければならないことがあるように

思われる。伊予では文禄年間に地震だけではなく、ほかにも災害が発生していた。保国寺（愛媛県西条市）蔵の『万年山保国禅寺歴代略記』には、文禄四年に洪水が発生したと書かれているという⁶⁰。東予地方（新居郡）で起きた加茂川の洪水によつて罹災した保国寺は、文禄五年時点では復旧を終えていなかったと考えられる。この寺のように、洪水によつて被害をうけ、復旧しないまま地震を経験した寺社は他にもあったと考えられる。地震の被害が限定的なのはそのためかもしれないが、史料上では確認することができない。

伊予での地震被害については、近世以降に編纂された地誌や寺社の記録のような史料に頼ってきたが、こういった史料がどのような情報源をもとにして編まれたのかを調査する必要がある。讃岐の場合には、情報源の一部に生駒家が発給した文書を用いていると分かる場合もあるが、やはり同様の課題を抱えている。宇和島での地震被害が虎高の文書を基にして、近世に年譜を編纂する過程で考えられたものと分かったように、編纂史料自体を研究することには大きな意義がある。近世以前を対象とする地震研究では特に必要なことであり、文禄五年の地震像を考える上でも重要なことといえる。本章での考察で明らかになったこともあるが、課題として残っていることもある。それらを整理し、あらためて文禄五年の地震像を考えてみなければならないだろう。

註

- (1) 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』（東京大学出版会、二〇一三年）。
- (2) 本章では基本公式を省略するが、詳しくは註1前掲書などを参照。
- (3) ①堤浩之・岡田篤正・後藤秀昭・松本宏彰「中央構造線活断層帯川上断層の完新世後期における活動履歴」『活断層研究』第一九号、二〇〇〇年。②後藤秀昭・中田高・堤浩之・奥村晃史・今泉俊文・中村俊夫・渡辺トキエ「中央構造線活断層系（四国）の最新活動時期からみた活断層系の活動集中期」『地震 第2輯』第五三巻第三号、二〇〇一年。③後藤秀昭・中田高・奥村晃史・梅木謙一・水元完児「中央構造線活断層帯・重信断層の歴史時代の断層活動」『活断層研究』第三一号、二〇〇九年）。

- (4) ①中西一郎「文禄五年閏七月九日（1596年9月1日）の地震による伊予での被害を示す史料」『地震 第2輯』第五五巻第三号、二〇〇二年。②中西一郎「文禄五年（1596）閏七月豊後・伊予地震による伊予国板島城（現宇和島城）の被害―藤堂

虎高の遺帖―」(『北海道大学地球物理学研究報告』第七二号、二〇〇九年)。

- (5) 生駒親正はいくつかの別名を名乗っていたが、そのうちの 하나가「近規」である。この名で署名されている文書は多く、文書以外の史料でもこの名で示されることがある。今回検討対象とした史料でも親正は「近規」とされているが、本章では通り名としてよく知られている親正で統一した。

- (6) 大長昭雄・萩原尊禮・松田時彦・山本武夫「文禄五年(慶長元年、一五九六)閏七月十三日地震―伏見桃山地震の総括的見解」(萩原尊禮編『古地震探究―海洋地震へのアプローチ』東京大学出版会、一九九五年)。萩原氏らは史料解題をもとに両史料の成立年が隔たっていることを理由に良質なものとはいいたいとしている(『讃岐国大日記』は地震後五十余年、『讃岐一宮盛衰記』は百二十余年後の成立とされている)。加えて『讃岐国大日記』には地震被災地の記述がはっきりとしておらず本当に讃岐での被害といえるのか、また『讃岐一宮盛衰記』では文意が曖昧であるとも述べている。さらに『一宮由来帳』に写しがあるという生駒一正(生駒親正の子)の書状を挙げ、この史料も成立年が大きく隔たっており(『一宮由来帳』は地震後一五二年の成立とされる)、被害内容の記述も不明確であるとする。

- (7) 香川県編『香川叢書 第二巻』(香川県、一九四一年)。

- (8) 註7参照。

- (9) たとえば第一章で取り上げた元暦二年京都地震に関する史料『方丈記』では、「山崩れて河を埋み、(中略)土さけて水わきいで」と記されている。

- (10) 香川県編『香川叢書 第一巻』(香川県、一九三九年)。

- (11) 註10参照。

- (12) 一宮村史編集委員会編『一宮村史』(一宮村史編集委員会、一九六五年)。

- (13) 『一宮由来帳』に載る生駒一正の文書については、(A)一正が発給した寄進状などはいくつか残っているにも関わらずこれに該当する文書が現在確認できない、(B)『一宮由来帳』が『讃岐一宮盛衰記』の記述をもとにして一正の文書を作成した可能性、の二点から偽文書の可能性も考えられる。しかし(B)であれば『讃岐一宮盛衰記』が作成された時点では文書が存在していたことを否定できず、(A)も明確な根拠とはいえない。ただし、当時の讃岐は一正の父である親正が統治していたことから、父を差し置いて子の一正が勸進をうながすようなことがはたしてあったのか、疑問である。この点について本章では未検討のため、さらに検討しな

ればならないだろう。

(14) 註1前掲書。

(15) ①矢田俊文「中世阿波国撫養地域と1596年地震」『災害・復興と資料』第八号、二〇一六年。②小野映介・佐藤善輝・矢田俊文・海津颯「徳島県撫養地区における塩田開発と1596年の地震との関連性」『歴史地理学』第五八卷第三号、二〇一六年。年。

(16) 註1前掲書。

(17) 註3前掲論文②③。

(18) これは現在知られている地震史料の数が少ないというだけであり、今後研究が進めば増える可能性もある。

(19) 宇佐美氏らも豊後地震・伏見地震の有感範囲に安芸を入れておらず(註1前掲書)、ここからも安芸の被災状況が分かっていなかったことが理解できる。

(20) 西尾和美「文禄5年(1596)閏7月の地震と安芸―「厳島野坂文書」所収の穂田元清書状の検討―」(前近代歴史地震史料研究会『2015年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』二〇一五年)。

(21) 広島県編『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』(広島県、一九七六年。以下『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』とする) 一三四九号(厳島野坂文書)。

(22) 『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』一三五〇号(厳島野坂文書)。

(23) 『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』五五八号(厳島野坂文書)。

(24) この文書中には元清が当時どこにいたのかはつきりと書かれていないが、西尾氏はこの地震が閏七月九日であり、さらに棚守とのやりとりの時間を考慮して、元清は地震当時桜尾城にいたとするのが妥当であるとしている(註20前掲論文)。

(25) 秀吉と明使節の対面および武者揃が閏七月中に計画されていたことは『義演准后日記』(弥永貞三・鈴木茂男校訂『史料纂集 義演准后日記 第一』続群書類従完成会、一九七六年)文禄五年閏七月一二日条に「来月供養可延引之由風聞、唐人来朝、為見物武者御用意延引故歟」とあることから分かる。なお秀吉と明使節の対面については第六章で触れている。

(26) 三原市編『三原市史 第五巻 資料編Ⅱ』(三原市役所、一九八一年)。

(27) 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第二巻』(東京大学地震研究所、一九八二年)に掲載されたものでは「陶」に「ふるう」と仮名をふっている。

(28) 註 6 前掲論文。

(29) 黄慎(中村栄孝翻刻)『交隣紀行 日本往還日記』(『青丘学叢』第一一号、一九三三年)。

(30) 註 4 前掲論文①②。

(31) 註 4 前掲論文②。

(32) 上野市古文献刊行会『公室年譜略―藤堂藩初期史料』(清文堂出版、二〇〇二年)。

(33) 註 32 参照。

(34) 註 4 前掲中西論文②。また中西氏は【史料 9】の「慶長元丙申年八月修板嶋城」という記述が、【史料 8】に書かれているように文禄五年の地震によって損壊したためのものであると考えている。

(35) 上野市古文献刊行会『宗国史 上巻』(上野市、一九七九年)。

(36) 註 32 参照。

(37) 註 35 参照。

(38) 愛媛青年処女協会編『予陽叢書 第二巻』(愛媛青年処女協会、一九二八年)。

(39) 註 38 参照。

(40) 藤田達生『江戸時代の設計者 異能の武将・藤堂高虎』(講談社現代新書、二〇〇六年)。

(41) 註 40 前掲書。

(42) 註 4 前掲論文①。

(43) 土居聡朋「愛媛県松山市保免・薬師寺所蔵の大般若経について」(愛媛県歴史文化博物館編『研究紀要』第一八号、二〇一三年)。

(44) 註 43 前掲論文。

(45) 註 43 前掲論文中に該当箇所の写真が掲載されている。この写真でも「其時」が他と墨の濃さが異なっており、異筆であることが分かる。

(46) 大分県総務部総務課編『大分県史 中世篇Ⅲ』(大分県、一九八七年)。

(47) 福尾猛市郎・藤本篤『福島正則 最後の戦国武将』(中公新書、一九九八年)。ここでは、正則が越智郡畑寺村(愛媛県玉川町)の光林寺に発給した安堵状が紹介されている。

(48) 東京大学史料編纂所蔵。

(49) 註 48 参照。

(50) 中西氏は、徳藏寺所蔵で延宝三年（一六七五）の成立という『廣江之由来 第十号 正』を引用し、ここに「村宅湮没寺社亦不免」と書かれていることから、寺の倒壊が表現されているのだという（註4前掲論文①）。しかし、この『廣江之由来』は分らないことが多い。中西氏は『廣江之由来 第十五号 副』に【史料14】と同記述の文章が掲載されているというが、成立年は宝永七年（一七〇八）としている点も不審である。『廣江之由来』がどのようなものなのか未確認であるため、今回は検討対象から外すこととした。

(51) 東予市誌編さん委員会編『東予市誌』（東予市、一九八七年）。なお記述内容が『廣江之由来 第十四号 正』とほぼ同じであることから、『廣江之由来』が由来記を引用している可能性も考えられる。

(52) たとえば遠江国橋本宿（静岡県新居町）が新居宿（静岡県新居町）へ移転した原因が明応七年（一四九八）の明応東海地震による被災であったとされる（矢田俊文「明応東海地震の津波被害と中世安濃津の被災」『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年。初出は二〇〇五年）。

(53) 註1前掲書。

(54) ただし『小松邑志』では年紀が誤っているだけではなく、干支が「壬辰」と書かれており文禄四年および五年のいずれとも一致していないという問題もある。文禄四年の干支は乙未であり、文禄五年の干支は丙申だが、もっとも近い壬辰年は天正二〇年（文禄元年、一五九二）である。年紀に加えて干支まで異なるのは不審だが、あるいは文禄年間に伊予で起きた様々な災害を混在してしまったために起きた誤記なのかもしれない。

(55) 四国の中央構造線活断層帯の調査成果は、岡田篤正・杉戸信彦「四国中央部の中央構造線活断層帯の地形・地質・地下構造」『地質学雑誌』第一一二巻補遺、二〇〇六年）にまとめられている。またこの論文以降にも調査結果は発表されており、いずれも伊予地震発生説を支持している。

(56) 大分県国東市の興導寺所蔵。本章では註46を参照。

(57) 塙保己一編『群書類従 第十八輯 日記部・紀行部』（続群書類従完成会、一九七九年訂正三版）。

(58) 村上仁士氏は文禄五年の地震によって伊予でも津波被害があったとしている（村上仁士・島田富美男・山本尚明・上月康則・後藤田忠久「四国4県における地

震・津波の記録と被害状況について」『歴史地震』第一五号、一九九九年。山本尚明・村上仁士・島田富美男・上月康則・佐藤広章「記録に基づく四国4県の歴史地震津波に関する被害状況」『歴史地震』第一七号、二〇〇一年。しかし、村上氏らが津波被害と解釈したものは北条村での地盤沈下を指すものであり、津波によるものではないことが本章での考察によって明らかとなっている。よって、伊予では津波被害はなかったといえることができる。

(59) 註3前掲論文①。

(60) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 年表』（愛媛県、一九八九年）。

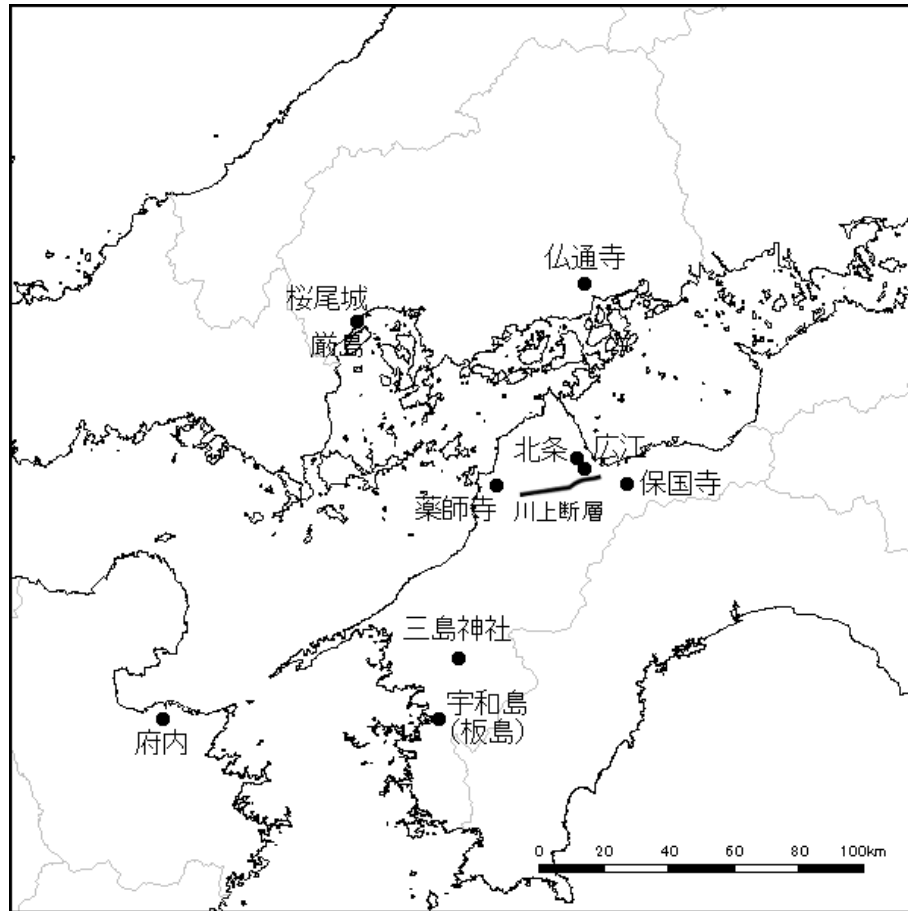


図 2：瀬戸内海西部地域における文禄五年地震関係地

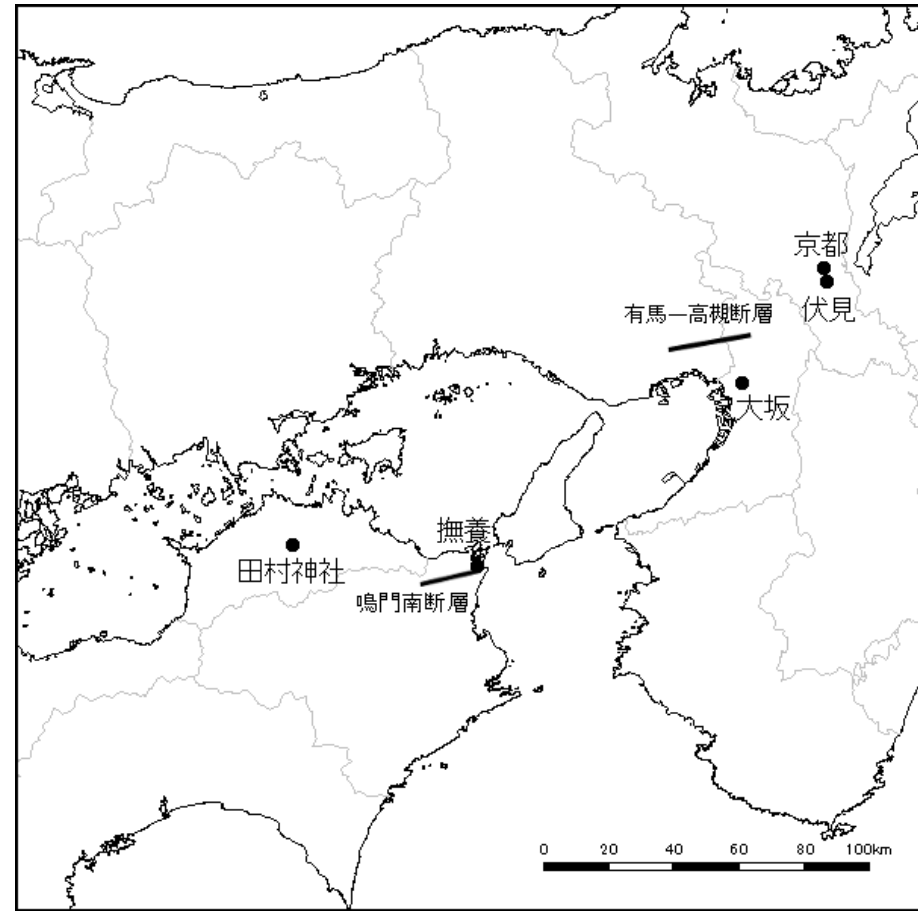


図 1：瀬戸内海東部地域における文禄五年地震の主要被災地

付章 明和日向灘地震による豊後国内の被害状況と気象災害の被害規模

はじめに

第一章では、史料記述から中世および近世初頭における津波発生の有無を検討した。その際に検討方法を提示しているが、これは古代・中世の課題に対応した方法であって、近世には第一章で示したものは別の課題があると指摘した。本章では近世における津波発生の有無の具体的事例を挙げ、どのような問題が存在するのかを確認してみようと思う。

本章で事例として提示したのは明和六年（一七六九）に日向灘で発生した、いわゆる明和日向灘地震である。日向灘沿岸地域は、歴史上多くの地震被害をこうむってきた地域の一つである。そのうちの一つ、明和日向灘地震はマグニチュード七・五〇―八・〇〇と推定されており、九州西部を中心とした広範囲に被害と揺れを与えた地震であった^①。

この地域で発生した歴史地震のなかでも規模の大きいものと考えられているが、研究は少ない状況にある。関連史料には地震による被害と大風雨による被害の記述がそれぞれ残されている。しかし史料に記述された海面変動が地震による津波なのか、あるいは大風雨による高潮なのか、その違いを把握することの困難さが問題となっている。このことは、同地域で発生した他の地震と比較して明和日向灘地震の知名度が劣っている原因となっているとも考えられる。

このような状況にある明和日向灘地震について、羽鳥徳太郎氏は九州東部沿岸で発生した歴史津波についての現地調査をするなかで、この地震による津波被害の考察を試みている。^②羽鳥氏は大風雨のあったことを考慮しているものの、残念ながら大風雨の影響は十分に反映することができていない。羽鳥氏以降、この地震についての研究はおこなわれていないことから、あらためて史料の再解釈が必要であると考えられる。

一方で気象災害である大風雨に注目した研究もほとんど存在しない。豊後国内の気象災害について研究したものとして、臼杵藩における近世の気象災害に注目したものが存在する。^③しかし、臼杵藩に被害をもたらした気象災害の一覧表に明和六年の気象災害は挙げられていない。このように、明和日向灘地震および明和六年の大風雨は研究の余地があるといえる。

本章では、そのような状況にある明和日向灘地震について、豊後国の沿岸部、その中でも推定震度の大きい臼杵と府内および佐伯の被害状況を整理する。その際に、津波に関す

る記述に触れることとする。また、大風雨による被害がどの程度のものだったのか、その評価もおこなってみたいと思う。

一 豊後国沿岸部の被害状況

明和日向灘地震について、宇佐美龍夫氏は豊後国内の臼杵・府内の震度を七と推定しており、この地震でも特に大きな揺れのあった場所だと考えている。⁽⁴⁾ また、佐伯は震度六と推定されており、沿岸部が大きな揺れにおそわれたと考えられている。羽鳥氏はこの地震による津波被害について「地震被害に比べ大したことはなかった」と述べて、津波高を臼杵で二メートルから二・五メートル、佐伯で二メートル程度と推定している。⁽⁵⁾ しかし、羽鳥氏は同日に風雨があったことを把握しながらも津波被害とされる記述との関連性を考慮していない。そこで、豊後国内の沿岸部の被害状況がどのようなものだったのか、史料の記載をもとに整理し、津波被害があったのかを考えてみようと思う。

(一) 臼杵の被害

臼杵藩では、地震後幕府に対して地震・大風雨による被害状況の報告がなされている。その報告書の写しは『御会所日記』に掲載されている。

それによれば、まず九月四日付の報告書で地震・大風雨により被害のあったことが報告された。しかしこの段階では、まだ被害を把握するに至っておらず、被害状況についての報告は後日行われる旨が記されている。そして一月に入り、把握できた被害状況を第二報として届け出している。

【史料1】御会所日記 明和六年十一月一六日条⁽⁶⁾

御届書写

豊後国臼杵私領分当七月廿五日暁より未ノ刻迄大風雨、同廿八日卯ノ刻より雷雨、申ノ前刻より地震強、八月朔日暁より酉ノ前刻迄大風雨仕、城内櫓・塀其外所破損仕、尤侍屋鋪并在町破損、田畑損毛、人馬怪我等之儀は未相知候段先達而松平右京太夫殿江御届申上置之猶又委ク懸ニ吟味一候処、城内并侍屋敷・在町損所左之通御座候

地震ニ付損所之覚

一城中櫓三ノ曲輪迄所々破損仕候

但門櫓并門共

内

櫓三ヶ所大破、門壺ヶ所倒、其外は瓦落壁割損

一城中囲塀不_レ殘破損仕候

内

塀二ヶ所合五拾間余倒、石垣共損、其外は瓦落壁割損

一潰家 五百三拾壺軒

但土藏共

一半潰家 貳百五拾三軒

但土藏共

右家中侍屋鋪并寺院・在町共

但家中侍屋敷并寺院門・練塀破損数カ所

一潰入田畑荒貳千六百六拾六歩

内

田方 六百四拾五歩

畑方 貳千貳拾壺歩

一大石落 四拾五ヶ所

内

六ヶ所 往還通路不_二相成_一

三拾九ヶ所 田畑立毛又は林等損

一岸崩 百六ヶ所

但屋鋪内又は井手溝堤往還共損

一大小橋 拾五ヶ所

一怪我人 五人 内 男貳人
女三人

一牛馬怪我 三疋 内 馬壹疋
牛貳疋

七月廿五日・八月朔日風雨ニ付損所之覺

一城中三ノ曲輪迄塀所々破損

櫓塀瓦落壁損等多御座候

一潰家 貳百七拾五軒

一半潰家 百九拾三軒

右家中侍屋鋪并寺院・在町共

一往還道崩 合貳千百拾貳余

一川除土手堤崩 合三千八百三拾八間余

一井手損 合九百拾六ヶ所

一倒木 貳百五拾本余

一大小橋損 拾壺ヶ所

一山谷潰入岸崩 合貳百五拾六ヶ所

一溺死 女貳人

一牛馬怪我無御座候

右之通御座候此段御届申上候、尤田畑損毛之儀は未相知不_レ申候、追而收納之上猶又御届可_二申上_一候 以上

十一月十六日

御名

このなかでは、被害を地震によるものと大風雨によるものに分けている。地震による被害では建物の被害が多く、人や牛馬の怪我も地震にのみみられる。一方で、地震被害では現れない溺死者が大風雨によって出ていることも注目される。

十一月時点では地震による田畑の被害面積についての把握は済んでいたが、まだ田畑の損耗高については把握できておらず、約一ヶ月後の一二月半ば過ぎにようやく田畑の損耗高の全容が把握できたらしい。その内容が一二月二二日付の報告書として示されている。

【史料2】御会所日記 明和六年一二月二二日条_⑦

御届書写

豊後国臼杵私領分当七月廿五日暁より未ノ刻迄大風雨、同廿八日卯ノ刻より雷雨、申ノ前刻より地震強、八月朔日暁より酉ノ前刻迄就_二大風雨_一、收納之上損毛左之通御座候

一田畑方 壺万七千貳拾石余

内

壺万千百拾四石三斗余 田方

五千九百五石七斗余 畑方

右之通御座候此段御届申上候 以上

十二月廿二日

御名

田畑の損耗高は、地震・大風雨あわせて一万七〇二〇石余にのぼった。時代は隔たるが『元禄郷帳』による臼杵藩の村高は五万三一五石余とあり、これを参考にすると村高の三パーセントが被害を受けたことになる。

一月一六日付の報告書には、地震によって田畑二六六六歩の被害が出たとあったが、羽鳥氏はこの被害を「汐入」つまり津波が溢れた結果によるもの⁸⁾としている。しかし、御届書にある田畑の被害は臼杵藩全体のものであり、この被害がすべて津波であると理解することはできない。さらに、落石による田畑の被害もあったことから、内陸での被害も相当あっただろうことが想像される。つまり、御届書からは沿岸部の田畑の被害がどの程度であったのかは読み取ることができず、これを利用して津波高を推定することは極めて困難である。

さらに羽鳥氏は大風雨による水死者二名を津波によると理解をし、これらの被害状況をもとに、臼杵の津波高を二メートルから二・五メートルと推定している。羽鳥氏の理解では、津波による水死者が大風雨によるものと誤解されたことになるが、これも御届書の記述でそこまでいうことはできない。つまり、臼杵の被害からは明和日向灘地震での津波発生を明確に示す史料記述はないということになる。

(二) 府内の被害

府内藩でも臼杵藩同様、被害状況についての報告が幕府に対してなされている。府内藩では九月二五日付で報告書が提出されており、『御八代目松平主膳正近形公御代留記』にその写しが掲載されている。

【史料3】御八代目松平主膳正近形公御代留記⁹⁾

豊後国府内私領分当丑七月廿八日未中刻強地震仕候付破損之覺

一 城中櫓不_レ残破損仕候

内

二 重櫓三ヶ所潰申候同前二大破二御座候

同二ヶ所大破仕其上傾申候

平櫓壱ヶ所潰申候同前之大破二御座候同壱ヶ所石垣共堀江倒込申候

一 多門櫓不_レ残破損仕候

内

壺ヶ所棟木折申候

四ヶ所大破仕其上傾申候

一 大門四ヶ所破損仕候

内

式ヶ所破損仕其上傾申候

式ヶ所潰申候同前二大破二御座候

一 石垣崩八ヶ所

一 練塀崩式拾八ヶ所

一 二曲輪西丸台所向潰其外家作修覆難ニ相成一程破損仕候

一 三丸門侍屋敷潰家拾軒并潰門七ヶ所

一 同所練塀崩五百拾五間其外侍屋敷所々破損仕候

一 三之曲輪外侍屋敷石垣崩式拾間

一 御高札場倒無御座候

一 田畑損無御座候

一 潰家式百七拾壺軒

但寺院共

一 怪我人無御座候

一 牛馬損無御座候

右之通御届申上候 以上

九月廿五日

御名

府内藩では、府内城をはじめとする建物の被害のほかには、田畑の被害や死傷者はなかったといい、さらに、大風雨による被害についての報告がないという点が注目される。これは史料中にみえないだけで、実際には別途報告書が提出されたのかもしれないが、他に史料がなく不明である¹⁰⁾。

この報告書にもある府内城の被害であるが、他に『豊後国府内城櫓門破損絵図』『豊後国府内城石垣破損絵図』という二種類の絵図が残されている。それぞれ櫓や門・塀と石垣の破損箇所を示しているのだが、これらの絵図は、幕府から城の修復の許可を得るために作成されるものである。絵図には、ともに「明和七庚寅年」の年紀が入っており、地震の翌

年に提出されたことが分かる。なお、これらの絵図の作成から修復の許可に至るまでの過程が『御城御修復御願一件』にまとめられている⁽¹¹⁾。

この絵図を見ると、府内城の被害は本丸から三の丸に至るまで、北側に集中していることが分かる。被害が北側に集中している理由であるが、これは府内城が大分川の河口に位置し、海に面していることが原因として考えられる。府内城は慶長二年（一五九七）に築城されたのだが、正保城絵図をみると城の周辺には芦原が点在しており、湿地帯も残るような場所だったことが分かる。このことから、府内城はその立地条件のために、河口に面した北側に被害が集中したではないかと考えられる。

この府内城の事例から、潰家二七一軒についてもその多くは府内藩の沿岸にあったものが多かったのではないかと推定できる。これらのことから、府内藩の被害は、沿岸部に集中していたのではないだろうか。また津波被害と読み取れる記述がないことから、府内藩沿岸部での被害は地震のみによるものと考えることができよう。

なお、府内藩は一七〇七年の宝永地震でも被害を受けている。その時には、府内城で櫓が五ヶ所破損、塀が三ヶ所、石垣が二ヶ所崩れたといい、その他にも天守などで瓦が落ちるなど、建物の被害もあったという。また、城下では家が五二軒、堂社が十二軒潰れたと記録されている。さらに宝永地震では女性が一名死亡しており、明和日向灘地震では見られなかった死者がいたことが分かる⁽¹²⁾。しかし、全体として被害は明和日向灘地震のほうが大きかったといえるだろう。これは、震源の位置が近かったことも影響しているのかもしれない。

(三) 佐伯の被害

佐伯については、この地震に関する史料が豊富に残っていることから、被害状況は臼杵藩・府内藩よりも詳細である。そのうちの一つである『明和六己丑年 御用日記』には、領内沿岸で津波の様子を確認していることが記されている。

【史料4】 明和六年御用日記 七月二十八日条⁽¹³⁾

一八ツ半時過頃強致^ニ地震^一候付、御家老中御部屋江被^ニ罷出^一 徳十郎様御機嫌被^ニ相伺^一候、拙者共御郡代御目付会所江罷出御用向申付、夫より拙者共御用人御郡代共 徳十郎様御機嫌相伺何茂致^ニ退出^一候処、津浪打来候之由及^ニ風聞^一候付、御家老中始拙者共御郡代御目付即会所江出座、右風聞候故、 徳十郎様三ノ御丸江御登 城今晩中

御見合被_レ成可_レ然旨九左衛門より御用人ヲ以被_二申上_一候処、則御登 城被_レ成候、
一右津浪之様子致_二吟味_一候様九左衛門被_二申聞_一候付、御船頭共致_二吟味_一候処、引汐之
時節ニ候得は高汐満度々汐差引有_レ之候由申_レ之候、松ヶ鼻辺為_レ致_二吟味_一候処、地震
以後暫時之間度々汐之差引兼々有_レ之候、沖之様子浪立候様子ニも相見へ不_レ申候得共、
殊之外沖相高汐ニ付、あひき浪強御座候由同所番人申_レ之候ニ付、九左衛門江申達候、
右汐之差引有_レ之津浪之取沙汰いたし候付、御城下諸人所々口々馳集甚及_二騒動_一、火
之元諸事不用心有_レ之、尤沖相右趣故万一今夜中高汐又は津浪之程茂難_レ斗、第一諸人
及_二騒動_一如何ニ候間、為_二安心_一長嶋・松ヶ鼻本町・枅形右三ヶ所江御船頭・小頭・
足輕・水主共左之通明朝迄右場所江相詰、若浪立候ハ、為_レ知玉目拾刃之異風三放ツ、
打可_レ申候、勿論夜中無_二油断_一一匱末成義無_レ之様随分入念沖之様子遂_二吟味_一、相図之
鉄砲為打可_レ申旨九左衛門被_二申聞_一候付夫々申渡候、右三ヶ所江鉄砲三挺ツ、相渡遣
候

御船頭並

長嶋

浅利万右衛門

小頭

山田作兵衛

足輕三人

水主三人



御船頭

松ヶ鼻

浅利勘右衛門

小頭

甲斐孫作

足輕三人

水主一人



御船頭

枅形

中谷作太夫

小頭

衛藤順左衛門

足輕三人

水主耆人

一前条之通相図之鉄砲被^二仰付^一置候間、銘々宿々江引取火ノ元入念可^レ申候、万々一相図有^レ之候ハ、其節ハ夜中たり共不^レ苦候、御城内江も勝手次第馳集可^レ申旨相触させ候様九左衛門被^二申聞^一候付、御家中并両町江相触候様町奉行御目付江申渡候、一何そ津浪と申程之義ニハ無之候得共、甚強地震後其上沖相高汐ニ而刻限不^二相応^一ニ、汐之差引暫時之間度々有^レ之候付、万一大変之程も難^レ斗、何茂無^二心元^一存候付則、大明神・若宮八幡・大日寺・不動御領内安全之御祈禱被^二仰付^一、可^レ然旨何茂相談之上被^二申聞^一候二付、寺社奉行江申渡候、

これによれば、二八日時点で津波がくるとの風聞があつたため船頭たちを吟味したところ、引き潮の時節であるため高潮のおそれがあると述べたという。その後、潮の差し引きは確認されたものの、波が立っている様子もなかったといい、目視で津波を判別できなかったようだ。一方で『郡方・町方御用日記』には、七月二十八日に「例よりハ汐高ク有之候」と具体的な数値は示されないものの、普段よりも高いと判別できる波が襲来していたことが分かる。⁽¹⁴⁾当日は風雨も襲っていたことから、大風雨による高潮の可能性は考えられる。また、仮にこの「高汐」が津波であつたとしても、それによる被害記述がないことから、二メートルという羽鳥の推定津波高よりも低かつたと考えられる。⁽¹⁵⁾

なお佐伯藩では、万一津波や高潮が発生することを警戒して長嶋・松ヶ鼻本町・枳形の三ヶ所に一〇匁という大鉄砲が三挺ずつ渡されている点が注目される。この後の日記には大鉄砲が使用された形跡はなく、佐伯藩沿岸に大きな津波が襲来することはなかったようだが、この当時の津波対策を示す重要な事例といえるだろう。

二 内陸部の被害状況と気象災害の評価

前節では豊後の沿岸部の被害状況をみてきたが、それと比較すると宇佐美氏による内陸部の推定震度は小さい⁽¹⁶⁾。その根拠となる被害状況はどうだったのか、本節では推定震度五とされている岡藩を例として確認してみることにする。また、明和六年日向灘地震の津波の推定を難しくしている大風雨被害について、岡藩を事例に規模の評価をしてみたい

と思う。

(一) 岡の被害

宇佐美氏らによる岡藩の震度推定の根拠となった資料は、一九六九年（昭和四四）に刊行された『中川史料集』中の記述である^{①⑦}。この資料は、岡藩によって編纂された『中川家御年譜』をもとに北村清士氏がまとめた資料集であった。基である『中川家御年譜』には本編である年譜とは別に、編纂時に利用された文書や記録の写しがまとめられた付録があり、ここに明和六年の地震に関する御届書の写しも含まれている。その御届書には次のように書かれている。

【史料5】中川家御年譜 附録・別録^{①⑧}

明和六年己丑

一、七月二十八日、地震并大風雨且御損毛、十一月九日御届ノ條

〔附録〕記録ニ、御用番板倉佐渡守様へ被差出候御届書、先達而御届申上候私領分豊後国岡、当七月廿八日未刻過地震ニ付、城内并侍屋敷、在町破損所、人馬怪我之覺

一、城内櫓破損 九ヶ所

内 壱ヶ所潰
三ヶ所潰同前大破仕、其上傾申候

一、同櫓台崩 壱ヶ所

一、同櫓門破損 四ヶ所

内 壱ヶ所潰
壱ヶ所潰同前大破仕候

一、同本丸門破損 壱ヶ所

但、潰同前

一、同舛形崩 貳ヶ所

一、同石垣崩 六拾七ヶ所

但、間数凡四百廿五間半余、崩孕共二

一、同塀損倒共 五拾三ヶ所

但、間数凡千八十間余

一、同地割 貳拾八ヶ所

但、間数凡三百八十七間余

一、同土蔵潰破損共 拾七ヶ所

一、同本丸、二ノ丸、三ノ丸住居強曲所々破損

一、同番所破損 拾ヶ所

内、潰式ヶ所

一、侍屋敷・在町共二潰家 五百九軒

一、同破損家 千五百七十三軒

一、潰堂社 十六ヶ所

一、同破損 六十九ヶ所

一、転土蔵 九拾壺ヶ所

一、破損土蔵 式百五拾式ヶ所

一、倒木 三百六十八本

一、落石 千百九十ヶ所

一、岸崩地割 五百八十五ヶ所

一、山崩 百五十七ヶ所

一、堤崩 三拾九ヶ所

一、井手崩 百七十三ヶ所

一、川除崩 拾壺ヶ所

一、同所石垣崩 百四十七ヶ所

一、落橋 式十七ヶ所

白目山敷

一、押潰 百四拾間余

一、同所石崩 五ヶ所

一、田畑永荒 廿九ヶ所

但、田六反三畝廿九歩
畑壹丁三反七畝十六歩

一、田畑当荒 百三十式ヶ所

但、田壹丁五反式畝廿一步
畑式丁六反三畝廿七歩

一、城米蔵損、谷へ落込埋候

米高千八百九拾九石余

一、死人 男四人

一、怪我人 式十七人

内 男九人
女十八人

一、死牛 三疋

一、痛牛馬 式十三疋

右之通御座候、此段御届申上候、以上

十一月 中川修理大夫

先達而御届申上候私領分豊後国岡、当七月廿九日夜より八月朔日夜迄大風雨二而、城内并侍屋敷、町在、破損所之覺

一、城中所々破損仕候

一、侍屋敷、町在共二潰家四百八拾壹軒

一、町在并堂社寺院破損家式千四百五軒

一、山崩 九十三ヶ所

一、落岩 式十四ヶ所

一、井手崩 式百四拾式ヶ所

一、落橋 三拾六ヶ所

一、堤崩 三拾六ヶ所

一、倒木 五千六百拾七本

一、川除崩 十三ヶ所

一、田方永荒 壹ヶ所

但、三畝拾壹歩

一、畑当荒

但、六畝式拾五歩

一、怪我人并人馬損無御座候

右之通御座候、此段御届申上候、以上

十一月 中川修理大夫

私領分豊後国岡、当春以来度々雨降続、夏中天氣不順、田畑虫付候所茂御座候、其上当七月廿八日強地震仕、同廿九日より八月朔日夜迄大風雨二而、收納之節二至、田畑損毛之覺

一、高五万五百七拾五石八斗五升

内

田高三万千八百四拾四石六升

畠高壹万八千七百三十壹石七斗九升

右之通御座候、此段御届申上候、以上

十一月

中川修理大夫

宇佐美氏らは『中川史料集』に記述されている「七月二十八日、岡風雨大地震。御三階櫓崩、御領内破損夥し」をもとに「岡城ところどころ破損」とのみ記している。しかし、その基となった【史料5】では他藩同様に地震と大風雨の被害を区別し、それぞれの詳細な被害状況をまとめて御届書を提出していた。藩内では建物被害の他、山崩れや落石などの被害もあり、死者も出ていることが分かる。

また田畑の被害に注目すると、臼杵藩とは異なり「永荒」「当荒」という区別がなされている点が特徴的である。永荒とは災害によって復旧の見込みの立たないほど田畑が荒れることをいい、当荒は当年の収穫が見込めない被害を指す。永荒・当荒ともに地震被害のほろが大風雨被害よりも大きかったことが分かる。一月九日に出された御届書には地震・大風雨合わせて六万一四七八石余の損毛高が記されているが、このうちの多くは地震によるものだったということができるだろう。『元禄郷帳』には岡藩の石高が七万二一七石余とあり、明和年間にもほぼ同じ石高だったと仮定すれば、損毛率はおよそ八八パーセントと非常に高かったことになる。これは臼杵藩のように落石による被害だけではなく、山崩れなど様々な要因による。

このほか岡藩の被害については、岡城の石垣被害について描かれた絵図が存在していることが分かっている¹⁹⁾。絵図には本丸以下城内各所の石垣の被害状況が記され、「右石垣合六十七ヶ所、内崩石垣二十八ヶ所、孕石垣三十九ヶ所」とまとめられているという。ただし、これらの被害については地震によるものか大風雨によるものか、その区別がなされていない点には注意が必要だろう。

以上史料を確認してみると、岡藩の地震および大風雨の被害がかなり大きかったことが分かる。宇佐美氏らは震度五と推定したが、実際には臼杵や府内同様に強い揺れがおそっていたのではないだろうか。

(二) 明和六年の気象災害の規模評価

ここまで明和日向灘地震の被害状況をみてきたが、前項までみてきた史料では、地震と

大風雨の被害を分けて記述しているにも関わらず、同時期に九州をおそった大風雨についてほとんど研究がなされていない。これは、大風雨の被害と地震による被害が混同されている可能性の問題、そして高潮と津波の区別が困難であった結果によると考えられる。

確かに被害の区別は難しいが、史料では明確に分けられている以上、それを採用しない必然性はないと考える。問題となるのは、明和六年の大風雨の規模がどの程度だったのかという点である。服部徳一氏は台風被害の指数算出式「被害指数＝ $1/3$ （死者・行方不明）＋ $1/10$ （全壊・流失家屋）＋ $1/1000$ （被害耕地）」から、臼杵の元禄元年（一六八八）以降の被害指数を示している^{②⑥}。服部氏の推定方法は一見すると利用可能なように思われるが、この方法を前近代の事例に利用することの妥当性は検証されておらず、そのまま利用することはためらわれる。

では明和六年の大風雨の被害規模はどのように評価をすることができるだろうか。その時々で規模や被害が異なるのは大風雨も他の災害と同じである。この点を重視すれば、他年に発生した大風雨被害との比較によって規模の評価が可能ではないかと考えられる。岡藩の『中川家御年譜』には風雨被害の御届書もいくつか掲載されており、これらを用いることで明和六年の大風雨被害の規模を評価することができる。たとえば、宝暦一二年（一七六二）の風雨被害については次のように書かれている。

【史料6】中川家御年譜 附録・別録^{②①}

宝暦十二年壬午

一、八月、岡風雨洪水ノ條

附録記録ニ、私領分豊後国岡当七月十五日、八月八日・九日大風雨洪水ニ而損所之覺

一、転家 百軒

一、落橋 六拾三ヶ所

一、川除 長百十九間
平均高サ八尺

一、井堰 千百五拾間

一、井溝 貳千三百六
拾老間四尺

一、水車 六輛

一、倒木大小 五千貳百三拾七本

一、塩浜土手 百間

一、圧死人 八人

内 男四人
女四人

一、同死牛 壹疋

右之外、城内別条無^ニ御座^一候、田畑損亡高之儀、未相知不^レ申候、先此段御
届申上候、以上

中川修理大夫

宝暦一二年の風雨被害と明和六年の大風雨被害を比較すると、明和六年のほうは岡城や城下での建物被害があるなど項目が多いこと、宝暦一二年には明和六年にはない死者・死牛の項目があることが特徴的である。一方で両者に共通してみえる項目で比較すると、落橋数は宝暦一二年のほうが多い点が注目される。しかし明和六年には地震による二七ヶ所の落橋があり、地震・大風雨の落橋の合計は宝暦一二年と一致する点を見逃してはならないだろう。このようにみていくと、宝暦一二年には死者が出ているものの、被害規模としては明和六年のほうが大きかったと考えることができる。

このように、個別の風雨被害を比較していくことで、相対的な被害評価が可能となる。本章ではこれ以上の検討をおこなわないが、岡藩のように長期にわたって同じ地域を支配している藩であれば、相対評価が可能であると思われる。ただし、時代による藩域の変化や、開発によって耕地が広がるといった状況を踏まえる必要があり、単純な評価はやはり難しいだろう。そういった地域の変化を踏まえた被害評価の方法を模索しなければならぬ。

おわりに

本章では明和日向灘地震の被害状況および津波発生の問題と、歴史気象災害の規模評価について考えてきた。まず豊後国沿岸部での被害状況については、臼杵藩と府内藩で地震被害・大風雨被害を区別して認識していたことが分かる。これは報告書を幕府へ上申する必要性から生じたのだと考えられるが、大風雨の影響が沿岸部に現れていない点が疑問として残る。なぜ溺死者や怪我人がいなかったり、田畑の被害がなかったのか、さらに検討する必要があるだろう。また佐伯藩では臼杵・府内両藩と異なり、高潮ないし津波について検討する材料が提示されている点が特徴的であった。

このほか、豊後国内陸部の岡藩の事例をもとにして風雨被害の規模評価を試みた。本章

での検討方法は他地域にも適用可能であるが、他の諸条件を考慮する必要がある、さらに事例を増やして評価方法を策定しなければならないだろう。

従来あまり研究されてこなかった明和日向灘地震であるが、史料は豊富に残されていることから、大風雨の問題はあるものの、検討することが困難な歴史地震ではないと考える。本章では扱わなかった日向国内についても被害に関する史料が残されていることから、九州全域・四国西部の被害状況を検討することで、地震の実像と大風雨の実態を明らかにすることができないのではないだろうか。

註

- (1) 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』(東京大学出版会、二〇一三年)。
- (2) 羽鳥徳太郎「九州東部沿岸における歴史津波の現地調査—1662年寛文・1769年明和日向灘および1707年宝永・1854年安政南海道津波—」(『東京大学地震研究所彙報』第六〇巻第三号、一九八五年)。
- (3) ①服部徳一「大分県の一災害記録(臼杵藩)とその若干の考察」(『測候時報』第四六巻第一号・第二号、一九七九年)。②深石一夫「臼杵藩・御会所日記」の天気記録からみた江戸時代後半期の気候変動」(『社会科学』学研究』第一七号、一九八九年)。
- (4) 註1前掲書。
- (5) 註2前掲論文。なお羽鳥氏は府内では津波被害がないと考えているらしく、津波高を推定していない。
- (6) 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第三巻』(東京大学地震研究所、一九八三年。以下『新収日本地震史料 第三巻』とする)。本章では臼杵市立臼杵図書館が所蔵する『御会所日記』の写真帳を参照している。

(7) 註6参照。

(8) 註2前掲論文。

(9) 『新収日本地震史料 第三巻』および大分県立先哲資料館蔵『府内藩記録』写真帳。なお『新収日本地震史料 第三巻』では史料名を『府内藩日記』としているが、これは『府内藩記録』に含まれる日記群のことであり、正確な史料名はここに記載したものになる。『府内藩日記』という名称では、残念ながら史料に当たることが極

めて難しく、今回も資料館の方に協力していただいたおかげで見つけることができたことを付記しておく。

- (10) 『新収日本地震史料 第三卷』に掲載された府内の被害に関する史料には『豊府指南』(『大分市史』掲載)がある。しかし、これも建物被害についてのみ記載されており、大風雨被害の報告の有無は分からない。

- (11) 『新収日本地震史料 第三卷』および大分県立先哲資料館蔵本。また絵図二点も同様に大分県立先哲資料館蔵である。

- (12) 『楽只堂年録 第二百十巻 宝永四丁亥十月下』(東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第三巻別巻』東京大学地震研究所、一九八三年)。

- (13) 『新収日本地震史料 第三巻』所収。

- (14) 『新収日本地震史料 第三巻』所収。

- (15) 註2前掲論文。

- (16) 註1前掲書。

- (17) 北村清士校注『中川史料集』(新人物往来社、一九六九年)。

- (18) 『中川氏御年譜 附録第七』(竹田市教育委員会編『中川氏御年譜』竹田市、二〇〇七年)。

- (19) 本田耕一「豊後国岡城石垣損所之覚(絵図)」(『季刊ぐんしよ』第一〇巻第一号、一九九七年)。

- (20) 註3前掲論文①。

- (21) 註18参照。

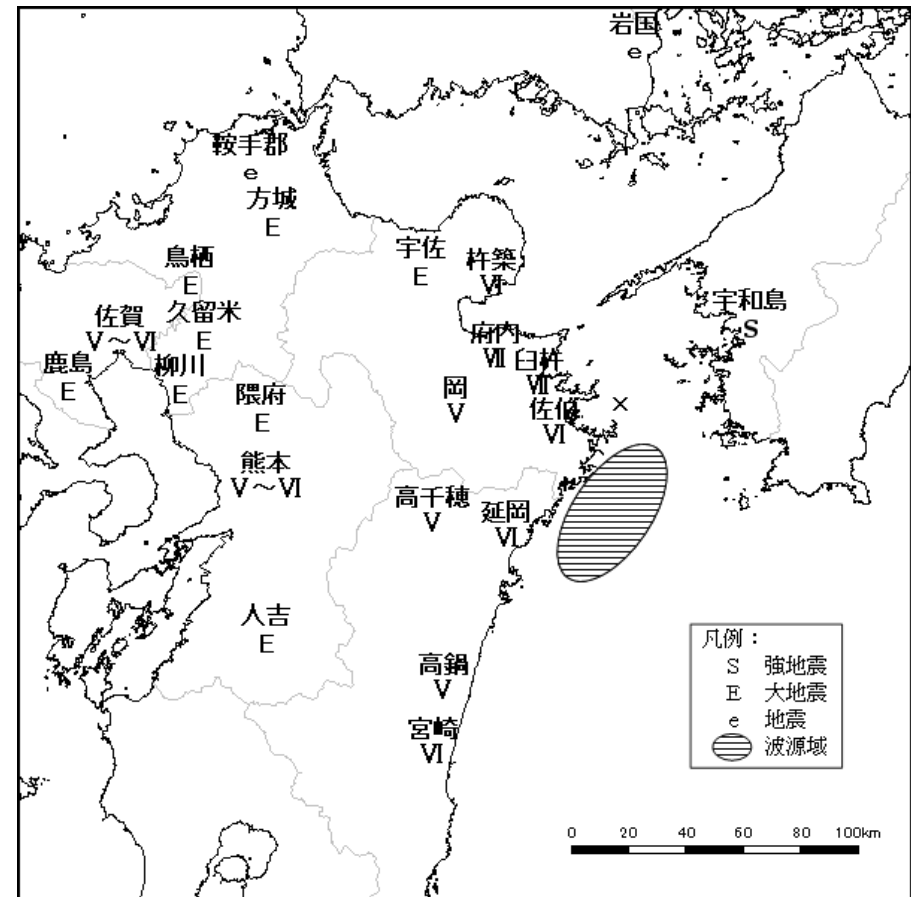


図 1：明和日向灘地震の震度分布および津波波源域

第三章 『大日本地震史料』採録史料の収集過程

―文禄五年伏見地震関連史料を例として―

はじめに

前章までみてきたように、歴史地震を研究する特に多くの理工学系研究者は『新収日本地震史料』などの地震史料集を参照している。ここには明治期以前に日本で発生した地震に関する様々な記録が採録されていることから、それらを利用して多くの研究成果が現在まで生み出されている。一方で、西山昭仁氏が指摘するように、地震史料集は問題点を抱えていることも知られている。^①地震史料集は史料のみならず、それらを用いた学術論文や自治体史の通史編をも含み込んでいることから、先行研究のなかにはこれらの区別なく利用しているものも少なからず存在している。さらに、史料の素性・信頼性の検討がなされないまま利用されている場合もある。特に史料の信頼性の検討は、理工学系研究者には難しい課題であったといえよう。

これまでも、この問題点を解消することが試みられてきた。たとえば石橋克彦氏は既刊史料集の問題点を指摘した上で、地震学・歴史学などによる学際研究として校訂作業をおこない、成果をデータベース化して公表する計画を示している。^②その対象とされたものは『増訂大日本地震史料』（編纂者「武者金吉」の名をとり、以降は『武者史料』とする）であった。それは、明治以降で最初の地震史料集である『大日本地震史料』（後述する「田山實」の名をとり、以降は『田山史料』とする）を含みこむ形で編纂された、実質的な地震史料集の始まりに位置し現在でも利用されているためである。歴史地震研究で用いられる史料自体を対象とする研究は、文献史学を専門とする研究者にとっても重要な課題といえるだろう。

筆者もこの問題点に注目し、文禄五年（慶長元年、一五九六）に発生した伏見地震に関する史料について、地震史料集に採録されたものの整理と信頼性の検討をし、さらに未採録の史料の収集をおこなってきた。地震史料集に採録された伏見地震に関する史料のなかには、素性不明のものも少なからず存在し、その一つに本章で取り上げる『田山史料』甲巻（および『武者史料』第一巻）に採録された『慶長甲寅之記』（以下『甲寅記』）がある。書かれている内容自体は他史料にも記述されていることから、『甲寅記』を用いた先行研究は極めて少なく、現在にいたるまでその素性・信頼性も検討されていない現状にある。

本章では、この『甲寅記』の素性を明らかにするためにあった調査の結果を示す。先に調査結果を述べると、地震史料集に採録された『甲寅記』は正確性に欠ける引用がなされており、これが地震史料集編纂過程で起きたらしいことまでが分かった。『甲寅記』がどのような史料であるのか、そしてなぜ不正確な引用がなされたのかについて調査結果から考察する。

一 『慶長甲寅之記』に関する疑問点

伏見地震に関する歴史地震研究で『甲寅記』を用いたものは西山氏の他には見出すことができない。⁽³⁾ また、磯田道史氏のように一般書のなかで引用するものもほとんど存在しない。⁽⁴⁾ それは以下に示す『甲寅記』が被害に関する独自の情報をもたないためであろうと考えられる。

【史料1】慶長甲寅之記⁽⁵⁾

※史料中の括弧記号は引用者による

(A) 慶長元年申ノ七月十三日之夜丑ノ下剋、^(圖脱カ) 伏見中大地震、

御殿淀川^(B)多悉動崩し、土井石垣も大かたゆりくずし申、諸大名之屋敷より死人の出候事、

其限も無^(B)二御座一候、権現様御屋敷にても、かゞ爪備前守、浅野一庵^(B) ○本書、一庵ヲ家康ノ家臣ト蔵覚書記載ト合ハズ、恐クハ非ナラン、但シ又蔵覚書、一庵ノ姓氏^(B) 為セリ、ト齋覚書及ビ木村又

ヲ横浜ニ作り、本書ト違フ、未ダ孰レガ是ナルヲ詳ラカニセズ、動殺され申候、其外小身の者は式百人余程も果候由に候、^(B) 其時権現様御屋敷^(B)被^(B)レ参候衆、最上出羽守、南部信濃守、御

見廻被^(B)レ申候而被^(B)レ帰候は、伏見城中は石垣共に不^(B)レ残くずし申候間、太閤は御出候事は成まじきと存候間、日本の者の為にも候、其上未異国も鎮り不^(B)レ申候間、夜明候はゞ、

ゆりやみ可^(B)レ申候儘、夜明までは御出被^(B)レ成候事、御無用之由被^(B)レ申候、被^(B)ニ罷歸一候、

(C) 是ヨリ先清正、三成・行長等ノ讒スル所ト為リ、秀吉ノ譴ヲ得テ私第二屏居ス、会々地大ニ震ス、清正従卒三百人ト馳セテ、秀吉ヲ候ス、既ニシテ清正城門ヲ守ル、三成等至ル、清正納レズ、三成之ト争フ、秀吉之ヲ聞キ、三成ヲシテ入ラシム、明日、秀吉、家康・利家等ノ救解ヲ以テ清正ヲ許ルス、

この史料に書かれた内容は、三つの部分から構成されているとみることができる。第一は伏見地震による被害と死者に関する情報【史料1】(A)。第二は徳川家康周辺の動向【史

料1】B）。第三がいわゆる「地震加藤」の逸話である（【史料1】C）。このうち第三は有名な逸話であることから、関連記述をもつ史料が豊富に残されている。また第一についても、被害記述や死者についての情報で他史料と比較して目新しいものは存在しない。これまで『甲寅記』が史料の素性を検討されることなく放置されてきたのは、このためである。

一方、第二部分では、地震直後に徳川家康屋敷を「最上出羽守」「南部信濃守」が訪問し、豊臣秀吉の安否が不明であること、「日本の者の為にも」夜明けまで登城するのは控えるのがよいと述べたことが書かれている。この部分は被害に関する情報ではないが、『甲寅記』にのみみられる情報であることから、西山氏はこの第二部分のみを引用している⁽⁶⁾。

このように『甲寅記』は内容を三つに分けることができるが、ここで整合性のとれない、おかしい点があることに気がつく。それは、秀吉・家康の史料上の表記が変化しているという点である。第一・第二部分では秀吉を「太閤」、家康を「権現様」と表記しているが、第三部分になると「秀吉」「家康」と変化しているのである。史料中の登場人物が何かを語っている部分で人物表記が異なることはあり得るが、この第三部分はそのような箇所ではない。語りではない文章中で人物表記が変化するのは極めて不自然であると思われる。なぜ『甲寅記』では人物表記の変化が起きたのか。この史料についての大きな疑問点である。

二 『慶長申子之記』『慶長申寅之記』と『慶長甲寅之記』

(一) 『慶長申子之記』について

伏見地震に関する、既刊の地震史料集に未採録の史料は、たとえば吉田兼見の日記『兼見卿記』などを含め多くみつかる⁽⁷⁾。そのうちの一つに、内閣文庫（国立公文書館）蔵の『慶長申子之記』（以下『申子記』）がある。

この『申子記』については、江戸城内にあった紅葉山文庫の蔵書であったことが、その蔵書印である「秘閣図書之章」が押されていることから分かる。加えて、以下に示す奥書によってどのような史料なのかをある程度知ることができる。

【史料2】慶長申子之記 奥書⁽⁸⁾

源弘賢題ニ卷首一曰、是書旧題号無、余獲ニ諸書肆一、而仮名ニ慶長申子記一、以納ニ不忍文庫一、

これによれば、もともと題号のついていなかった書を購入した「源弘賢」が仮に「慶長申子記」と命名し、「不忍文庫」に納めたのだという。「是」以下には「源弘賢」が題号を付した由来が書かれている。つまり内閣文庫蔵の『申子記』は、もとは題号のなかった書であつたことが分かる。

さらに、この史料の原本に当たるものが「不忍文庫」に納められていたということも分かる。この文庫は、江戸時代の蔵書家として知られた幕臣・屋代弘賢の書庫であつた。屋代弘賢こそ、奥書にある「源弘賢」その人である。岡村敬二氏によれば、彼は和学者として、塙保己一などとの交友関係も知られており、収集した書物は屋敷内の書庫へ収められていたという。⁹⁾「不忍文庫」の名は、弘賢の屋敷が不忍池のほとりにあつたことに由来するそうだ。弘賢の蔵書は、死後にその大部分が徳島藩蜂須賀家に譲られ、現在は国立国会図書館や内閣文庫に収められているという。

この「不忍文庫」の目録は、現在慶應義塾大学に残されている¹⁰⁾。その目録の一項目「武諸雑」という中に『慶長申子記』という書名を見出すことができる。ここから、『申子記』の奥書の記載が正確であることが分かる。しかし、内閣文庫本『申子記』には「不忍文庫」の蔵書印がないことから、これは弘賢の蔵書とは別のものと考えられる。

残念ながら、原本の行方は分かっていないため、『申子記』がいつ、誰によって書かれたものなのか、また弘賢がいつ入手したのかを知るすべはなく、これ以上の情報を得ることは難しい。だが、少なくとも弘賢が没する天保一二年（一八四一）までには『申子記』の原本が成立していたというとはいえるだろう。

（二）『慶長申子之記』の伏見地震記述

内閣文庫本『申子記』は、慶長元年（丙申、文禄五年）以降の出来事が書かれている前半部と、慶長一七年（壬子、一六一二）から慶長一九年（甲寅、一六一四、大坂夏の陣）までの後半部で構成されている。不忍文庫本『申子記』も同様の構成だったのであろうが、弘賢はこの前・後半部それぞれの最初の十二支（申と子）を取って命名したのだろうと推測することができる。

さて、『申子記』中の伏見地震に関する記述は、前半部の最初に書かれており、内容は大きく二つに分けることができる。

【史料3】慶長申子之記 伏見地震部分⁽¹⁾

※史料中の括弧記号および丸数字は引用者による

(a)慶長元年申ノ七月十三日之夜丑ノ下剋、伏見中大地震、太閤^①も伏見に御座候、殿守御殿淀川多悉動崩し、土井石垣も大かたゆりくすし申、諸大名之屋敷より死人の出候事、其限も無^二御座^一候、権現様^②御屋敷にても、加々爪備前守^③、浅野一庵^④動殺され申候、其外少身之者は式百人余程も果候由に候、(b)其時 権現様御屋敷多被^レ参候衆、最上出羽守^⑤、南部信濃守^⑥、御見廻被^レ申候而被^レ帰候ハ、伏見城中は石垣共に不^レ残動くすし申候間、太閤は御出候事は成ましきと存候間、日本の者の為にも候、其上未異国も鎮り不^レ申候間、夜明候ハ、ゆりやミ可^レ申候儘、夜明までは御出被^レ成候事御無用之由被^レ申被^二罷帰^一候、(c)寅ノ刻に

権現様為^二御見舞^一登城被^レ成候に、大手の門に五奉行の者^⑦罷出衆被^レ申候所多、権現様御越被^レ遊、太閤御様体御尋被^レ成候えは、五奉行のもの共申候は、無^二御恙^一出御被^レ成、山里くるはに御座候、何も御見廻の衆これより返し申候、此之由兼而被^二仰付^一候、若^二内府様^⑧於^二御出^一者、御座候処多右之内一人案内仕可^レ参由、御意被^レ成候間、御供可^レ申由にて、右衛門尉^⑨御同道申、御供之衆は大勢無用之由に候、侍衆三人程挟箱持草履取はかりにて御通り被^レ成候者也、其内に夜明申候、山里にては太閤は高きところへ御あかり仰に、城を御付候て、太閤無^二何事^一出是に御座候と、たか／＼と御呼り被^レ成候を、御供のしう集候所まできこ多候よし物語承候、夜明辰ノ下剋、権現様も御屋敷多御かへり被^レ成候

人物注

①太閤…豊臣秀吉。前関白。

②権現様…徳川家康。武蔵江戸の大名。内大臣。

③加々爪備前守…加々爪政尚。徳川家康家臣。備前守ではなく隼人佑とする史料もある。

④浅野一庵…横浜一庵の誤り。地震当時、伏見城の櫓の当番であったとされている。

⑤最上出羽守…最上義光。出羽山形の名。

⑥南部信濃守…南部利直。陸奥盛岡の大名・南部信直の嫡子。

⑦五奉行の者…浅野長政(甲斐府中城主)・前田玄以(丹波亀山城主)・石田三成(近江佐和山城主)・増田長盛(大和郡山城主)・長束正家(近江水口城主)の五名。

⑧内府様…徳川家康。

⑨右衛門尉…増田長盛。

まず、伏見地震による伏見城下(家康屋敷を含む)の被害状況が記されており(【史料三】a)、次に地震当時の家康の動向を記している(【史料三】b)。この第二部分の途中「被_二罷帰一候」までは『甲寅記』と内容が一致しており、以後の記述(【史料三】c)が異なっている。その記述内容は、およそ次のようなものである。

最上・南部両名が退出した後、家康は寅の刻(午前三時頃)に伏見城へ登城。大手門からは供の侍衆三人のみをつれ、五奉行の一人・増田長盛の案内で秀吉のもとへ参上し、辰の下刻(午前八時頃)に屋敷へ帰ったという。

このように、『申子記』の伏見地震記述は終始家康に関する事項で埋められており、「地震加藤」の話どころか加藤清正の名すら出てこない。ここが、『甲寅記』との大きな違いである。

(三)『慶長申子之記』と『慶長申寅之記』の関係性

内閣文庫本『申子記』に類似した史料が存在する。それは『朝野旧聞哀藁』が引用する『慶長申寅之記』(以下『申寅記』)である。¹²⁾『朝野旧聞哀藁』の解題によると、この史料は幕臣で儒学者の林述齋の建議によって文化六年(一八〇九)から編集に着手され、天保一三年(一八四二)に完成したものだ¹³⁾という。この時期には弘賢も存命であったが、彼は編集に関わっていないようである。ただし、弘賢と述齋はともに『寛政重修諸家譜』編纂者となっていることから、二人には接点があった。

内閣文庫本『申子記』と『申寅記』の伏見地震に関する記述はまったく同じなのだが、内閣文庫本『申子記』の題簽に注目すると、「寅」の文字が消されて「子」と書き加えられていることが分かる。内閣文庫本『申子記』の題簽は、もとは『慶長申寅之記』と書かれていたわけである。加えて、内閣文庫本『申子記』が収められていた紅葉山文庫には、林家からの献上本も含まれていた。ここから、内閣文庫本『申子記』と『申寅記』は同じものと考えることができる。

一方で、前述のとおり内閣文庫本『申子記』は不忍文庫本『申子記』とは別のものであることが分かっている。弘賢と述齋に接点があったこと、そして内閣文庫蔵本の蔵書印から考慮すると、これが不忍文庫蔵本と照合したものであることが分かる。おそらく題簽の

修正もこの時になされたのだろう。⁽¹⁴⁾

このことから、不忍文庫本『申子記』・内閣文庫本『申子記』・『朝野旧聞哀藁』所収『申寅記』の関係を想定し図示すると、図1のようになる。

以上より、『申子記』と『申寅記』は同じ原本から生じたものであることが分かった。では、『甲寅記』との関係はどうなのだろうか。そして、『甲寅記』はどのような経路で『田山史料』に採録されることとなったのだろうか。この点を明らかにすることによって、『甲寅記』の人物表記が変化している理由がみえてくるはずである。

三 『慶長甲寅之記』採録の過程

(一) 『大日本地震史料』編纂と史料収集

現在、理工学系の歴史地震研究者は『田山史料』を用いない。これは『田山史料』の内容を容易に確認・利用できなかったことに加え、その増補改訂版である『武者史料』が比較的容易に入手することができるからである。しかし『武者史料』が『田山史料』を基に編纂されている以上、『甲寅記』について考察するためには『田山史料』のことを知る必要がある。『田山史料』の編纂過程については、石橋氏が言及しているもの⁽¹⁵⁾、深く検討したわけではなく不十分なものであった。そこでまず、関連する資料をもとにしてその編纂過程を整理しておこうと思う。

一八九二年（明治二五）に成立した「震災豫防調査會」は、その調査事業の一つとして「古来ノ大震ニ係ル調査即地震史ヲ編纂スルヲ」を挙げていた⁽¹⁶⁾。宇佐美龍夫氏は、一八九三年（明治二六）に調査会委員であった理学博士・関谷清景の監督の下で田山實が囑託として地震史編纂の材料となる史料収集をおこなったとするが⁽¹⁷⁾、宇佐美氏の記述は少し正確さに欠けている。『震災豫防調査會報告』の第一号によれば、先年すなわち一八九三年以前から関谷が「材料蒐集」に着手していたという。田山による史料収集は、関谷から引き継いだものであった。このことは、一八九一年（明治二四）十一月二五日発行の『東洋學藝雜誌』第一二二号に掲載された「濃尾大地震史」中で、「関谷博士が兼て編纂中なる「日本地震記」の未定稿の中より」濃尾地方における地震の記録を掲げており⁽¹⁸⁾、この「日本地震記」こそ関谷が収集した史料をもとに編纂を試みたものであったことからうかがえる。

関谷のおこなっていた史料収集作業は田山によって引き継がれた。この作業は一九〇二

年（明治三五）八月二五日に終結したことが、『震災豫防調査會報告』第四六号に掲載されている田山の上申書から分かる⁽¹⁹⁾。『田山史料』は関谷没後に史料収集の監督者となった大森房吉が一九〇三年（明治三六）五月二八日付けで震災豫防調査會長・眞野文二に提出していることが同四六号に掲載されており、収集作業終了のおよそ九ヶ月後に完成したことになる。なお大森は収集作業の終了時期を一九〇二年五月としている。

しかし『震災豫防調査會報告』第三九号によれば、田山自身は一九〇二年九月五日に解嘱されており、『田山史料』の完成まで携わっていたわけではない⁽²⁰⁾。この解嘱の理由は、嘱託されたことが地震史の「材料蒐集」であり、その役目を終えたためとも考えられるが、実際にはそれだけではなさそうである。皆川完一氏や福田敬子氏によると、田山は彼の恩人であった岡谷繁実の著作権違犯事件に関係したために、本来の職場である東京帝国大学史料編纂掛（現・東京大学史料編纂所）を一九〇二年三月一日に「依願史料編纂員ヲ免」ぜられたのだという⁽²¹⁾。この事件は、東京帝国大学が岡谷の著書『皇朝編年史』に対して、史料編纂掛の『大日本編年史』稿本を剽窃したものとして告訴したというものであった。田山の失職は、彼がこの稿本を持ち出して岡谷に貸し与えたと考えられたためらしい。史料編纂掛失職の約六ヶ月後に、彼は震災豫防調査會の嘱託も解嘱されたことになる。

田山に対するこの疑いが事実であったかは分らないが、少なくとも彼が『大日本編年史』稿本を閲覧できる立場にあったことは間違いない。そして、この稿本は『田山史料』にも利用されたことが、『震災豫防調査會報告』でも確認可能である。『震災豫防調査會報告』第一号には、「又帝国大学史誌編纂掛（引用者注…後の東京帝国大学史料編纂掛）ノ蒐集シタル「史料」中地震ニ関スル記事少カラス今先ツ「史料」中ヨリ此等ノ記事ヲ抜粹セシメントス」とあり、さらに『震災豫防調査會報告』第四六号では「本書ト編年史料」として「本書ハ主トシテ編年史料（引用者注…『大日本編年史』稿本および後述の『大日本史料』稿本）ノ地震記事ヲ抄録シ」とあることから明らかである⁽²²⁾。

以上より、『田山史料』の史料収集は関谷から田山が引き継いでおこない、史料集が提出されたのは田山解嘱後であったこと、そして田山解嘱の理由であった『大日本編年史』稿本が『田山史料』の編纂にも使用されていたことが明らかとなった。

（二）『慶長甲寅之記』採録の経緯

『田山史料』編纂過程における史料収集の継承と『大日本編年史』稿本の利用が明らかとなったが、では『甲寅記』もこの稿本から採録されたのだろうか。『大日本編年史』自体

は一八九三年(明治二六)に編纂・刊行計画が中止されており、史誌編纂掛も廃止となった。⁽²⁾⁽³⁾
その後、一八九五年(明治二八)に新たに史料編纂掛が設置され、一九〇一年(明治三四)からは『大日本史料』の刊行が始まった。⁽²⁾⁽⁴⁾

この『大日本史料』の未刊行分の稿本は、現在東京大学史料編纂所の「大日本史料総合データベース」で内容を確認することができる。本章で問題としている『甲寅記』はこのデータベースで確認できないが、『申寅記』は内容を確認できる。そこには地震当時の家康の動向が記されているが、これは原本を同じくする『申子記』の第二部分【史料三】b以降)に相当するものである。

このことから、史料編纂掛によって『朝野旧聞哀藁』所収『申寅記』(あるいは内閣文庫本『申子記』)が収集されていたことは間違いないさそうである(不忍文庫本『申子記』の可能性もあるが、史料名が異なるため、こちらではないと考えられる)。おそらく田山は史料編纂掛が収集した『申寅記』をみていたのだろう。『甲寅記』の第一・第二部分が『申子記』および『申寅記』に類似しているのは、『甲寅記』がこの収集史料を参照しているからだろう。しかし、その場合でも『甲寅記』のように「地震加藤」の話はおろか人物表記が変化するとはありえない。では、『甲寅記』の人物表記はどの時点で変化したのだろうか。

(三)『慶長甲寅之記』人物表記の変化

田山による地震史の「材料蒐集」は、『大日本編年史』『大日本史料』編纂のために収集された史料を参照していたことが分かったが、実は田山の参照したものは史料だけではなく、『大日本史料』の体裁そのものであった。『震災豫防調査會報告』第四六号の田山自身による上申書には「本書ノ体裁」として、「体裁ハ東京帝国大学出版ノ大日本編年史料(引用者注…『大日本編年史』『大日本史料』のこと)ニ准拠シ、各地震ノ首条ニ綱文ヲ附シテ約説セリ」とある。⁽²⁾⁽⁵⁾ いうなれば、『田山史料』は『大日本史料』から生みだされたものである。

『甲寅記』の第三部分はいわゆる「地震加藤」の話だったが、『大日本史料』稿本では「地震加藤」について、伏見地震とは別に綱文を掲げて、関連する三史料を挙げている。その綱文は次の通りである。

【史料4】大日本史料 綱文⁽²⁾⁽⁶⁾

是ヨリ先。加藤清正秀吉ノ譴ヲ得テ私第二屏居ス。今日地震フ。清正馳セテ秀吉ヲ候ス。

明日秀吉。清正ヲ許ルス。

これをみて分かるとおり、『大日本史料』の綱文は『甲寅記』第三部分よりも短いものの、内容はほぼ一致している。そして、『田山史料』では『甲寅記』の次に『大日本史料』稿本でも採録されている「地震加藤」関連史料の一つ『木村又蔵覚書』を掲載している。加えるならば、『朝野旧聞哀藁』にも「地震加藤」関連の史料が採録されており、その綱文では家康と前田利家の取りなしがあった旨が記されている。ここから、田山はこういった稿本そのものを参照していた可能性が考えられる。

以上によって、『甲寅記』第三部分は本来『田山史料』で「地震加藤」についての綱文として田山が記述したものだたと推測される。先に示したように、田山自身は史料収集が終わった時点で解嘱されており、『田山史料』が大森によって提出される形になるまでは関わっていなかった。つまり、田山が原稿に綱文として書いていたものが、誤って『甲寅記』の第三部分として加えられてしまったわけである。そして、その誤りに誰も気付くことなく、『甲寅記』の一部として『田山史料』に載せられたのだ。そうであるならば、田山の原稿には史料名を『申寅記』と記述していたが、「申」を「甲」と誤読されたために『甲寅記』として『田山史料』に採録されてしまったと考えることができる（図2）。

武者金吉は『武者史料』の序に、（1）『田山史料』の誤謬の訂正（2）『田山史料』で引用された文献の再調査と遺漏補足（3）『田山史料』に引用されていない地震関係史料の採録を挙げて、『田山史料』の増補改訂をおこなったとしている。しかし『甲寅記』については、武者も綱文が史料記述とされた誤謬に気付くことなく、そのまま『武者史料』に載せてしまっている。

田山が収集した時点では、史料中の人物表記の変化はなかった。人物表記が変化しているのは、『田山史料』編纂過程での誤謬が原因だったのである。

おわりに

本章では『田山史料』の編纂過程での史料収集に注目し、『甲寅記』の人物表記の変化がなぜ起きたのかを検討してきた。結果『田山史料』が明治期の歴史学研究者たちによって収集された史料を底本としていたこと、そして『田山史料』編纂の際に綱文を史料と誤解していたことが分かった。このような問題点はあるものの、『武者史料』以降の地震史料集

とは異なり、『田山史料』が史料のみを採録している点は評価できるだろう。現代の歴史地震研究では、比較的入手が容易な『武者史料』以降に編纂された地震史料集を利用しているが、その原点ともいえるべき『田山史料』をもう一度見直すべきではないだろうか。

さて、本章で検討をおこなわなかったことに、『甲寅記』の原書といえるべき『申子記』の記述の信頼性がある。先に示したとおり『申子記』は写本しか残っていないため、いつ、誰によって書かれたものかまったく分からない。では信頼性を評価するためには、どこに注目すればよいのか。最後に『申子記』の信頼性評価に向けて、課題となる点を整理したいと思う。

①「浅野一庵」の誤り

『申子記』には伏見地震によって死去した人物として、家康家臣の「加々爪備前守」と「浅野一庵」の二名が挙げられている。伏見地震による死者の名は他の史料でも確認することができる。「加々爪備前守」は『言経卿記』では「加々爪隼人佑」とあるように、官職は異なるものの家康家臣中の死者として他史料でも挙げられていることから、大きな問題はない。一方「浅野一庵」は、「近衛前久書状」で秀吉家臣中の死者とされている⁽²⁷⁾。寺沢光世氏が指摘するように、彼はもと豊臣秀長家臣であり、秀長死後に秀吉に仕えたことが知られている⁽²⁸⁾。また、名も「浅野」ではなく「横浜」であることが分かっている。このような人物比定が誤っている点は、『申子記』の信頼性を考える上で重要になると思われる。なお『甲寅記』では家康家臣として「恐クハ非ナラン」としつつも、「未ダ孰レガ是ナルヲ詳ラカニセス」という田山の注が付けられている。

②「南部信濃守」来訪の理由

『申子記』では地震後に「最上出羽守」「南部信濃守」が家康の屋敷を訪れたとある。磯田氏は「最上出羽守」(最上義光)が家康の屋敷を訪れたのは、秀吉に恨みがあったためであるとしている⁽²⁹⁾。確かに、彼はいわゆる秀次事件によって娘を殺された経緯があるために、秀吉に対して良い感情をもっていなかったとされる。義光はそれで説明できるかもしれないが、もう一人の「南部信濃守」(南部利直)についてはどうなのか。磯田氏は義光にしか注目していないが、利直を無視しては、説明不足の感が否めないのではないか。利直が家康屋敷を訪れたとする理由を考えることは、『申子記』の事実性を検討する上でも大事な点となるだろう。

以上①②のような点を検討することで、『申子記』の伏見地震記述が信頼できるのかが判別できるようになるだろう。そして、この信頼性を検討することは、『田山史料』自体の信

頼性評価につながっていくのではないだろうか。

註

- (1) 西山昭仁「近世史料に記された地震と地震災害」(『新しい歴史学のために』第二八四号、二〇一四年)。
- (2) 石橋克彦「日本の古代・中世の地震史料の校訂とデータベース化」(『月刊地球』第三一七号、二〇〇五年)。石橋氏が計画していたデータベースは、現在「[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β 版)」(<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/>)として公開されている。
- (3) 西山昭仁「文禄5年の伏見地震直後の動静②―武家・民衆を中心として―」(『歴史地震』第一一号、一九九五年)。
- (4) 磯田道史『天災から日本史を読みなおす』(中央公論新社、二〇一四年)。
- (5) ①震災豫防調査會「大日本地震史料 甲卷」(『震災豫防調査會報告』第四六号(甲)、一九〇四年。以下『震災豫防調査會報告 四六甲』とする) および②文部省震災豫防評議會編『増訂大日本地震史料』第一卷(震災豫防協会、一九四一年)。
- (6) 註3前掲論文。
- (7) 橋本政宣・岸本眞実・金子拓・遠藤珠紀校訂『史料纂集 兼見卿記 第六』(八木書店、二〇一七年)。
- (8) 内閣文庫(国立公文書館)蔵。
- (9) 岡村敬二『江戸の蔵書家たち』(講談社、一九九六年)。
- (10) 朝倉治彦編『慶應義塾図書館所蔵 屋代弘賢・不忍文庫蔵書目録』第一卷(ゆまに書房、二〇〇一年)。
- (11) 註8参照。
- (12) 史籍研究会『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第一 朝野旧聞哀藁 第八卷』(汲古書院、一九八三年)。
- (13) 福井保「『朝野旧聞哀藁』解題」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第一 朝野旧聞哀藁 第一卷』汲古書院、一九八二年)。
- (14) 不忍文庫本『申子記』が弘賢によって命名されたことは奥書から分かる。では内閣文庫本『申子記』が当初『慶長申寅之記』とされていたのはどこに由来するのか。これは、最後に書かれている年の干支が「甲寅」であることから、最初の年「申」

と最後の年「寅」を合わせた名であったと考えられる。命名者は不明だが、弘賢とは異なる明確な理由からの命名であったことが分かる。

- (15) Ishibashi Katsuhiko 「Status of historical seismology in Japan」 (『Annals of Geophysics』第四七号、二〇〇四年)。
- (16) 震災豫防調査會「震災豫防調査會調査事業概略」(『震災豫防調査會報告』第一号、一八九三年)。
- (17) 宇佐美龍夫「地震史料収集刊行の歩み」(『古地震を語る』古今書院、一九九六年)。
- (18) 関谷清景「濃尾大地震史」(『東洋學藝雜誌』第一二二号、一八九一年)。橋本万平『地震学事始 開拓者・関谷清景の生涯』(朝日新聞社、一九八三年)。
- (19) 田山實「大日本地震史料蒐集終結ニ付上申書」(『震災豫防調査會報告 四六甲』)。
- (20) 震災豫防調査會「委員臨時委員及囑託員」(『震災豫防調査會報告』第三九号、一九〇二年)。
- (21) 皆川完一「『大日本地震史料』の田山実」(『東京大学附属図書館 図書館の窓』第一六卷第九号、一九七七年)。福田敬子「『大日本地震史料』と田山實」(『神戸市立工業高等専門学校 研究紀要』第三五号、一九九七年)。
- (22) 小路田泰直「国史の誕生と『大日本編年史』編纂の中止」(『東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社、二〇〇四年)。
- (23) 宮地正人「史料編纂所の歴史とその課題」(『東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社、二〇〇四年)。
- (24) 註19前掲文書。
- (25) 東京大学史料編纂所「大日本史料総合データベース」(二〇一一年、<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>)。
- (26) 大阪城天守閣「(新収蔵資料) 近衛前久書状」(『大阪城天守閣紀要』第三二号、二〇〇四年)。
- (27) 寺沢光世「大和郡山城代横浜一庵について」(『月刊歴史手帖』第一九卷第三号、一九九一年)。
- (28) 註4前掲書。

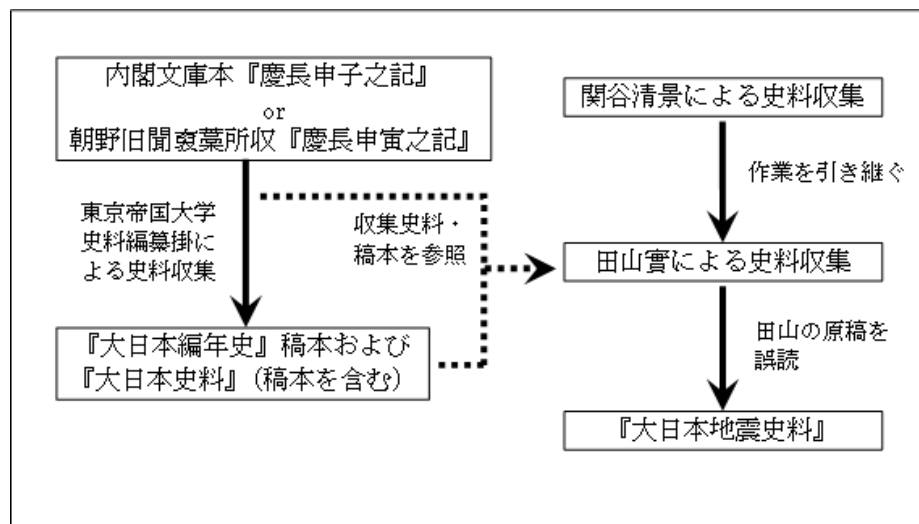


図2：『大日本地震史料』の『慶長申子之記』採録過程

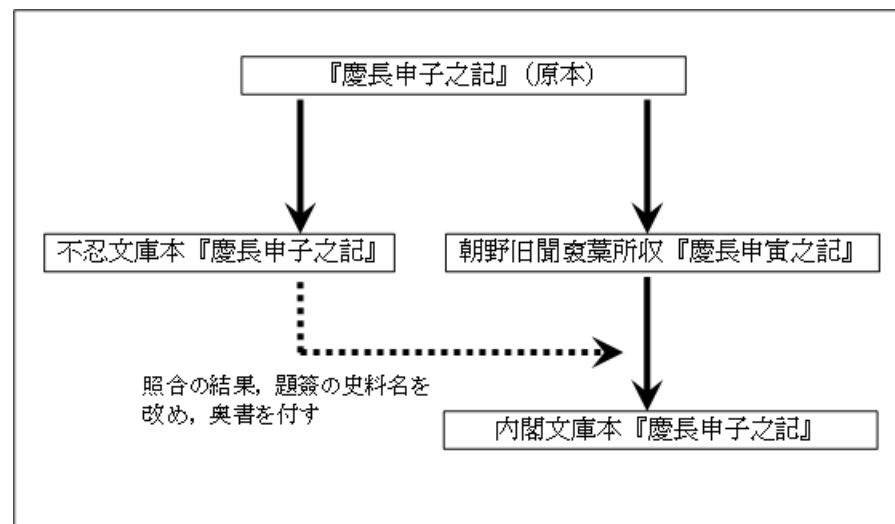


図1：『慶長申子之記』不忍文庫本と内閣文庫本の成立過程

第四章 文禄五年豊後地震による今津留村の被害と船着移転伝承

―中川家船奉行・柴山氏と今津留村について―

はじめに

文禄五年（慶長元年、一五九六）に発生した豊後地震は、別府湾内の断層が震源と考えられており、特に豊後府内の外港とされる沖の浜の被災がもつともよく知られている。^①この被災は江戸期に「瓜生島海没伝承」として広まり、現代まで語り継がれるようになる。沖の浜が実際に海没したのかどうかは分からないが、沖の浜の被害はこの地震による最大のものと考えられている。

これまで豊後地震については、羽鳥徳太郎氏による研究成果が規模の検討に利用され、^②また大分県内の研究者らで構成された「瓜生島調査会」によつて、「瓜生島」（＝沖の浜）に関わる様々な研究成果が残されている。^③それ以降も震源断層に関する調査などがおこなわれたが、被害に関する研究はあまり進まなかった。しかし近年、松崎伸一氏らによつてこれまでの成果に対する再検証が進められ、各地の被害の実態が明らかにされている。^④第三章で示した地震史料集の問題点は豊後地震にも当てはまり、松崎氏らがおこなっているようなこれまでの研究で使用された史料の再検証作業が課題として位置付けられる。

豊後地震の被害地の一つに、今津留村（大分県大分市）がある。これまでの研究では、天保年間成立の『雉城雑誌』中にある今津留村内の寺社の被害を紹介した羽鳥氏の成果が知られる。^⑤しかし、羽鳥氏は史料記述を紹介したのみであり、記述内容の検討はおこなっていない。従来あまり注目されてこなかった被害地であるが、沖の浜にあった船着が地震後に今津留村へ移転したとする中川家の史料が残っていることもあり、別府湾沿岸では沖の浜とともに注目すべき被害地であると考えられる。そのような点から、今津留村の被害についての再検証は重要であるといえるだろう。

また、今津留村の被害については中川家の船奉行であった柴山氏の史料である柴山勘兵衛重成の伝記『柴山勘兵衛記』などからも読み取れる。柴山氏と今津留村のあいだにはどのような関係があり、なぜ豊後地震についての記述を残すことになったのか。この点に注目することは、豊後地震に関する史料が作成される過程を知ることにつながるだろう。以上より、本章ではこの今津留村と柴山氏の関係に注目する。地震による村の被害について、周辺の被害状況と照らし合わせて検討し、さらに船着移転についても考察する。そして『柴

『山勘兵衛記』の記述を中心に検討し、地震後の船着移転とそれにともなう今津留村の変化を柴山氏と今津留村の関係から考えてみようと思う。

一 今津留村の被害

豊後地震の被害を記す同時代史料は少ない。この時期の地震災害について書かれた同時代史料は京都を中心とした地域に偏在しており、地方ではその数が少ない傾向がある。よって、これは豊後地震に限ったことではない。この点については、豊後地震の被害地の一つであり、本章で注目する今津留村も同様である。

それでは、地震以前の今津留村とはどういった場所だったのだろうか。今津留村の地理的な位置について、森山恒雄氏は史料の分析から今津留村が大野川河口と大分川河口の間にある村であったとする^⑥。豊後府内（大分県大分市）を描いた絵図のうち現在確認できるもっとも古い、戦国期の府内を描いた「府内古図」と呼ばれる絵図によれば、今津留村は大分川河口の中洲島の中に描かれている^⑦。またルイス・フロイスの『日本史』には天正一三年時の府内周辺の受洗者数が記されているが、そのうち「津留」では五〇名と記されている^⑧。これ以前の受洗者数が分からないため、もともとキリシタンが多かったために増えていないのか、あるいは「津留」ではキリシタンが少ないのかは分からない。ただ、近接する高田では千人以上が受洗したとあるので、あるいはもともと多かった可能性はあるだろう。

このように府内に近い、河口の村だった今津留村であるが、数少ない豊後地震による被害を示す同時代史料として、次に挙げる慶長六年（一六〇一）の中川家の知行目録がある。

【史料1】豊後国之内御知行目録^⑨

御知行方目録

一五千四百八拾三石弍斗三升	豊後国直入郡	朽網郷
一五百弍拾四石四斗九升	同	和泉郷

（中略）

一参千弍百弍拾五石五斗九升三合	大野	井た村
一弍百弍拾四石六斗三合	同	高むれ郷
一参千八百九石七斗四升八合	同	藤北名

一百五十石

大分郡
今鶴村

外三百五拾九石式斗式升 地震くづれ

一貳百参拾八石九斗内 拾八石七斗四合百
卅五石一斗八升 同 花鶴村一 萩原村

外六百五石三斗五升 同

合六万六千石者

右如本知被_レ進_レ之候、御仕置可_レ被_二仰付_一候、重_而 御朱印申請可_レ進_レ之候、以上

慶長六年 加藤喜左衛門

四月十六日 正次在判

大久保十兵衛

長安_(安)か在判

彦坂小刑部

元正在判

片桐市正

且元在判

中川修理亮殿_(秀政)
参

付墨六枚

中川氏は天正一一年（一五八三）の賤ヶ岳合戦で戦死した中川清秀を祖とする。その嫡子・秀政は文禄元年（天正二〇年、一五九二）に朝鮮で戦死し、その跡を継いだ弟・秀成は翌年、播磨国三木（兵庫県三木市）から豊後国岡（大分県竹田市）へ転封され、以降明治を迎えるまで同地の大名として存続した。慶長六年時の中川家は大野郡・直入郡・大分郡内の村を領していた（図1）。この史料には、当時の中川家が有していた各郡内の村の石高が記されている。このうち大分郡内では今津留（今鶴）村と萩原村が中川家領として記されているが、この二村にのみ「地震くづれ」による被害石高が書かれている。中川家が豊後に入ってから以降、慶長六年までの時期に被害をもたらす地震がいつ発生したのかを考えると、これが豊後地震によるものであることは間違いない。

この【史料1】によれば慶長六年時の今津留村の石高は一〇五石、これとは別に三五九石余が「地震くづれ」とあるという。ここから、地震以前の今津留村の石高は四六四石余であったと推定できる。今津留村の石高を示す史料は地震前後でいくつか残されている。まず、この知行目録が作成される二年前の日付をもつ今津留村の検地帳が挙げられる。

【史料2】豊後国大分郡今津留村御検地帳⁽¹⁰⁾

慶長四年九月廿八日今津留村御検地帳^(大分郡)

川はた

中畠七畝拾三歩 五斗九升六合 雅 楽

(中略)

下畠九畝貳拾歩 五斗八升 同 人

合内畠六反貳畝貳拾九歩

分米六石貳斗九升六合七勺

合上畠壹町五反壹畝拾壹歩

分米拾五石壹斗三升七合

合中畠五町七反五畝貳拾貳歩

分米四拾四石壹斗六升三合五勺

合下畠六町五反壹畝拾六歩

分米三十八石四斗九升貳合

都合高百四石八升六合貳勺

この検地は、豊臣政権の蔵入地の代官でもあった府内城主・早川長敏によるものである。それによれば今津留村の石高は百四石余とあり、【史料1】よりも約一石少ない。これは、地震被害から立ち直る過程で徐々に増加していた可能性が考えられるが、はつきりとしたことは分らない。【史料1】には「地震くづれ」分が示されており、ここから地震以前の今津留村の石高を類推することができるが、次に挙げる史料にも地震以前の石高が明示されている。

【史料3】豊臣秀吉朱印状⁽¹¹⁾

※後に論点となるため、一部の返り点を省略している。

豊後国大分郡内今鷲村四百六拾貳石五升事、令^レ執^ニ沙汰^一可^ニ運上^一之、依為船着御代官被仰付候也

八月廿五日

(豊臣秀吉
朱印)

中川修理大夫とのへ
(秀成)

【史料3】は、豊臣蔵入地であった今津留村からの年貢の運上を秀成に命じたものである。ここには、文禄三年（一五九四）時の今津留村の石高が四六二石余と書かれている。【史料3】と【史料1】との間には二石ほどの差異があるが、豊後地震によって石高の多くが失われていることを考慮すれば、二年間での増加分ということになるであろう。

【史料1】の「地震くづれ」が地割れや液状化、あるいはそれ以外による被害を指すのか、この記述だけでは分からない。「地震くづれ」がどのような被害であるのかを考えるために、あらためて今津留村の地理的位置を確認しておく、今津留村は大野川・大分川の河口すなわち沿岸部に位置しており、中洲島も含まれる村であった。そう考えれば液状化を示している可能性が高い。加えて、今津留村に近接する高田庄（大分県大分市）の被害状況も参考になるだろう。

【史料4】一五九六年一月二八日付、長崎発信、ルイス・フロイスの年報補遺⁽¹²⁾

(前略)

四千名以上のキリシタンたちが居住しており、またかの善良な老人ジョランが殉教の栄冠を受けた高田の町においても同じ頃に地震があり、海はある大きな川を横切って、およそ三千（歩）の境界線まで進み、その進行に際しては非常な騒音を出したため海辺に住んでいた人々は危険を逃れるためにわが家を捨てて田畑や山へ逃げた。その浸水は長くは続かなかったが、ひどい水害を与えずには水はもとの場所へひかなかった。なぜなら多数の家が倒壊し、また多くの人々が水死したからである。

(後略)

【史料4】によれば、高田庄では豊後地震の津波によって家の倒壊といった被害や水死者が生じたという。田畑の被害についての言及はないが、おそらく無被害ということはなかったろうと考えられる。そうであれば、高田庄と同様の被害が今津留村で生じていたとしてもおかしくはない。豊後地震による今津留村の被害石高数は三五九石余とあるが、その被害割合は実に七割以上となる。それだけ大きな被害を生じさせた原因は一つに限定されるものではないだろう。今津留村が大野川・大分川河口の中洲島を含んでいたこと、そ

して近接する高田庄での被害状況から考えると、今津留村で生じた「地震くづれ」という被害は液状化にくわえて津波を原因とするものだったのだろう。

二 沖の浜と今津留村―中川家の船着

秀成は今津留村に設定された豊臣蔵入地の年貢運上を【史料3】によって命じられていたわけだが、ここである「船着」とはどこを指しているのだろうか。この問題の鍵となるのは、後段に当たる「依為船着御代官被仰付候也」の解釈である。この部分の解釈は、おそらく二種類に分けられると考えられる。一つは「依^レ為^ニ船着^一御代官被^ニ仰付^一候也」「今津留村は中川家の」船着であるので（蔵入地の）代官を仰せ付ける」と解釈する「船着^ニ今津留村^一」の断定案、もう一つは「依^レ為^ニ船着御代官^一被^ニ仰付^一候也」と読み「（秀成は）船着の代官なので（蔵入地の年貢運上を）仰せ付ける」と解釈する船着を断定しない案である。

森山氏は前者の解釈を採用し、今津留村が重要な湊であったこと、そういった湊は豊臣政権の政策によって直轄化されたことを指摘している¹³⁾。森山氏によれば、中世の今津留村は大野川によって運ばれた大野庄の年貢米を上方へ運搬する湊であったといい、中川家の年貢米の集積・積み出し港ともされたのだという。また江戸時代、岡藩によって編纂された中川家の記録『中川氏御年譜』には次のように書かれている。

【史料5】中川家御年譜 第三 中川秀成譜¹⁴⁾

文禄三年甲午 御年二十五歳

（中略）

一、八月二十五日、今津留村御拝領、同所沖ノ浜御船着トナル、依テ太閤ヨリ御書

豊後国大分郡内今蘰村四百六拾貳石五升事、

令執沙汰可運上之、依為船着御代官被仰付候也

文禄三八月廿五日 御朱印秀吉公

中川修理大夫とのへ

（後略）

【史料5】では【史料3】の朱印状を引用した上で、船着を今津留村の「沖ノ浜」であ

るとする。後にふれる『柴山勘兵衛記』でも船着を沖の浜としているが、【史料5】での解釈はおそらく『柴山勘兵衛記』が慶長元年一月に船着を沖の浜から今津留村へ移転したとする記述（後掲の【史料7】傍線部③）をもとにしたものだろうと考えられる。

こういった森山氏や『中川家御年譜』の指摘・解釈を受けたものが『大分県史』の解釈である。ここでは、今津留村が「大分川河口の重要な船着場であった」こと、そして沖の浜が今津留村に含まれているとしている¹⁵⁾。

このように、従来の研究では前者の解釈が採用されており、後者の解釈を採用するものは存在していない。よって本章でも前者の解釈を採用することとするが、先行研究では船着の比定地が二分されており、さらに検討を加える必要がある。つまり、沖の浜は今津留村の内にあるのか外にあるのかということである。この点について検討するためには、豊後地震当時の沖の浜がどのような場所だったのかを知る必要がある。沖の浜について、ルイス・フロイスの書簡には次のように書かれている。

【史料6】一五九六年一月二八日付、長崎発信、ルイス・フロイスの年報補遺¹⁶⁾

府内に近く三千（歩）離れたところに、沖の浜と言われ多数の停泊港である大きな集落、または村落があり、この地に因んで沖の浜のブラスと呼ばれているこの善良な男は、他の諸国から集まって来る種々の人々に自分の家を宿泊所として提供していることから、豊後では非常に有名である。

彼は（地震のことを）こう言った。或る夜突然何ら風にあおられぬのに、その地へ波が二度三度と（押し寄せ）、非常なざわめきと轟音をもって岸边を洗い、町よりも七ブラサ以上の高さで（波が）打ち寄せた。このことはその後、或る非常に丈の高い古木の頂上によって知られたことである。そこで同じ勢いで打ち寄せた津波は、およそ千五百（歩）以上も陸地に浸水し、また引き返す津波はすべてを沖の浜の町とともに呑み込んでしまった。これらの界限以外にいた人々だけが危険を免れた。それにしてもあの地獄のような深淵は、男も女も子供もいっさいのものをすべていっしょに奪い去り、陸地のその場には何もなかったかのようにあらゆるものが海に変わったように思われた。

（中略）

これらの停泊港、とりわけ沖の浜には多数の船が停泊していたが、それらの多くは太閤のもので、現在彼によって領有されている諸国の貢物を運送するために豊後に来っていたのであった。これらの船の多くは、すでに積荷を終って出港の時を待っていたもので、

また或る船はすでに積荷を始めていた。これら（の船）以外に、そこには種々の商人たちの小舟が無数に停泊していた。ブラスはこう言っていた。「私はこれらすべてがあるいは破砕するか、あるいは同じ場所で沈没してしまつて一隻も損傷を受けずにはすまなかつたことを確認した」と。

【史料6】によると、沖の浜は府内に近い多数の船の停泊港をもつ町であり、ここに停泊する船の多くは秀吉の領有する国々の貢ぎ物を運送するためのものであるという。ここでいう秀吉が領有する国々の貢ぎ物とは、九州各地に設置された豊臣蔵入地からの年貢を指すと考えられる。「諸国」とあるが、正確には豊後国内の各郡のことではないだろうか。【史料6】からは、豊後地震当時の沖の浜が豊後国内の豊臣蔵入地からの年貢の集積港であつたことが読み取れる。

秀成が管理する豊臣蔵入地は大分郡の今津留村のほか、秀成の居城・岡城がある大野郡内にも存在した。先述のように、大野川によつて運搬される大野庄の年貢米が集積する湊は今津留村だつた。当然、大野郡内にある豊臣蔵入地の年貢も同じように大野川で運ばれ、今津留村に集められたはずである。

『中川家御年譜』によれば、堺に住む柴山両賀重祐・勘兵衛重成父子が文禄四年（一五九五）に秀成によつて豊後国に招かれ、両賀は沖の浜で船奉行となつたという。この点について森山氏は、「堺・京都の上方体制への海上交通を重視した直轄港への任務」のために両賀を船奉行としたとする。九州においては、水軍の直接把握により朝鮮出兵の出港地として各地の湊を確保し、同時に豊臣蔵入地の積出港としたとする森山氏の指摘は重要であると思われ⁽¹⁷⁾。秀成が代官を務める船着もまた、そのような湊の一つだつたはずである。

史料や「府内古図」のような絵図から分かるように、今津留村は大分川・大野川の河口にあつたいくつかの中洲島からなる村であつたと推定できる。また山村亜希氏は近世の府内関係の絵図群を分析した結果として、一七世紀半ばには大分川の分流と住吉川の合流点手前に広い水域が存在していたといい、そこには千代ヶ洲や中島などの中洲島が存在していたとする⁽¹⁸⁾。さらに近年の研究では、沖の浜は大分川（恐らく分流）河口に存在した陸繋島であつたと指摘されている⁽¹⁹⁾。このように、一七世紀半ばの別府湾南岸の大分川・大野川・住吉川河口にはいくつもの中洲島が浮かぶ光景が広がっていた。そして、恐らく豊後地震が起こつた一六世紀末にも、これと似たような光景が広がっていたのではないだろうか。先述の通り、大分川と大野川の河口の間に今津留村があり、いくつかの中洲島を含

み込んだ村であった。そうであるならば、船着は村内の中洲島にあったのだと想定できるだろう。

では『中川家御年譜』にあるように、大分川河口にあった陸繋島と考えられる沖の浜も今津留村の一部だったのだろうか。現在のところ沖の浜の正確な位置は不明であり、今津留村に含まれていたと断定する証拠も存在しない。そのため『中川家御年譜』のいうように、本当に沖の浜が今津留村の中に存在したのかどうかは分からない。しかし少なくとも、以上の検討結果から、秀吉朱印状中にある船着は今津留村内に存在した湊であると考えられるだろう。⁽²⁰⁾

三 柴山氏と今津留村

柴山勘兵衛は、文禄二年（一五九三）に播磨国三木から豊後国岡へ転封された中川氏に仕えた人物である。文禄四年に彼の義父・両賀が中川家の船奉行として船着に置かれた際、勘兵衛も義父とともに豊後に下っている。

彼の伝記である『柴山勘兵衛記』は同時代史料ではないが、豊後地震の被害地として今津留村のことが記述されている点で、無視することのできない史料である。そこで、この『柴山勘兵衛記』中の今津留村の記述を確認し、柴山氏と今津留村のつながりについて検討してみよう。

（一）『柴山勘兵衛記』と柴山氏の事績

『柴山勘兵衛記』は岡藩士・津山氏の祖である両賀・勘兵衛父子の事績をまとめた伝記である。原本の所在は不明で、現在確認できる最も古い写本は後藤碩田による天保一五年（一八四四）のものである。⁽²¹⁾ 碩田が写した時期には、すでに虫損によって奥書と思われる部分を読むことができなくなっていたらしく、この史料がいつ書かれたものか確認することはできない。

津山氏（柴山氏）の記録には、ほかに『津山系図并世譜』（以下、『津山氏世譜』）というものがある。この『津山氏世譜』には事績とともに引用史料が記されているのだが、そのうちの一つに「重成記」という名を確認することができる。この「重成記」は碩田が写した『柴山勘兵衛記』の原本ではないかと考えられており、少なくとも『津山氏世譜』が編集されたと考えられる天明年間（一七八一―一七八八）以前に『柴山勘兵衛記』は成立し

ていたと考えることができるだろう。なお『津山氏世譜』によれば、柴山氏は勘兵衛の嫡男である佐良の代に津山へ改姓したのだという。

『柴山勘兵衛記』によれば、両賀はもと室町幕府最後の將軍である足利義昭に仕えており、義昭が京都から追放された際に下野、堺で商人となったという。その後、両賀は娘に婿として勘兵衛重成を迎えて跡を継がせたという(図2)。柴山氏の系譜は『津山氏世譜』からも確認できるが、こういった由緒をそのまま信用することはできないだろう。義昭に仕えたという点はやしいが、堺で商人であった可能性はあるのではないかと思われる。両賀が中川家の船奉行となったのは、豊後に入る際に船を建造し献上したことがきっかけだったといい、数隻の船を建造するだけの財力があつたとすれば、比較的裕福な商人だったのかもしれない。

(二)『柴山勘兵衛記』中の豊後地震の記述

豊後地震の際、両賀は秀成とともに朝鮮に渡海中であつたが、勘兵衛は沖の浜の屋敷で留守居を務めていたという。中川家の船着が今津留村にあつたことから考えると、はたして柴山氏の屋敷が沖の浜にあつたのか疑わしいところもあるのだが、この点についてはとりあえず置いておく。さて、沖の浜の屋敷にいた勘兵衛はそこで豊後地震を経験したとされるのだが、『柴山勘兵衛記』にみえる豊後地震の記述は以下の通りである。

【史料7】柴山勘兵衛記⁽¹²⁾⁽²⁾

同閏七月五日ニ重成内室始テ平産有リ。同九日大地震シテ、沖濱ノ浦ヨリ湖(引用者注…潮の誤りか)ヲヒタ、シクセキ上大波立テ、両賀ノ屋シキ海中ト成ル。重成イソキ家ノ系図ト度々ノ感状ノ入タル挟箱ト持鑓ハカリヲ取出シテ、内室トタ、二人家ノヤ子ヲ脇指ニテ切ヤブリ、二人トモニヤ子ノ上ニ居テ有リケル所ニ、七尋ハカリ有ル舟板家ノ上ニナカレカ、リタリ。是ヲ幸ノ事ト思ヒテ、二人トモニ乗テ有ケレハ、引潮ニ沖ニ引出サレテアヤウキ事度々有リ。シハラク有リテ波モ風モシツマルト思フ時ニ、小イサキ舩ヲヲシテ来ル者有リ。此舩ニノセラレ候ラヘ、タスケ申ヘシト云ケレハ、二人ナカラウレシクテ、イソイテ舟ニノリタリ。書物ノ箱ヲモ鎗ヲモ取ノセテ、此者ニタスケラレ行ケルナリ。^①シハシノアイタニ今津留ト云所ノ島ニ著ケルニ、此所モ大波ニ崩レテ人家モ見ヘスナリケル。此所ノ氏神ニ天満宮有リ。二人トモニ爰ニ休居テ、ツカレヲハラシケル。内室ハ産ヲシテ五日メノ事ナレハ、取分勞レテ有ナリ。同十日ニ、沖の濱ヨリ吉

右エ門・与右エ門・九良兵衛ナト、云家頼ノ者共尋テ来ルナリ。汝等ハ何トシテ助リタルソト重成問ヘハ、崩タル家ニトリ付テ南ノ山キは迄大波ニ打寄セラレタルニヨリ、則山ニ上リ申テ候ト申。残りノ者トモハ如何ニト問ケレハ、大方助リ申テ候ト云。女ハ誰々コソ助リタリ、亦タレ々々コソ見ヘソウラハズト申ス。金銀ノ倉武具諸具ノ倉モツフレ候ヘトモ、金銀モ武具諸具モ不失申ト云。重成先仕合ヨシトテ、其日沖濱ニ販リケル。先カリヤヲ立テ居ニ、世間ノ躰ヲ聞ニ、諸国皆一度ニ大地震セシナリ。^②扱重成危命助リテ、世間モシツマリテ、小舩ヲ乗リテ来テ助タル者ヲ尋ルニ、我コソ夫ト云モノナシ。是ハ今鶴村ノ天満天神ノ加護ニテ助リケルトテ、是ヨリ重成天満宮ヲ信仰イタシケルナリ。

^③同年霜月ニ今津留村ニ船着替地ニ成。

同二年正月廿八日両賀高麗ヨリ皈朝。^④同月下旬ヨリ居宅普請シテ四月下旬大方出来ス。此時高麗ヨリ男女四十三人召連来ルナリ。両賀自分ノ家来ノ者・与力ノ水父トモニ男五十二人、是等カ妻子トモ都合四百余人ナリ。是等ガ屋宅ヲモ同時ニ作リテ、夫々ニ皆取ラスル也。

【史料7】によると、沖の浜での津波は屋敷の屋根の高さほどまでであったことが読み取れる。松崎氏らは沖の浜での津波高について検討しているが、⁽²³⁾それと照らし合わせてみるとさほどの差はなく、誇張された表現とはいえない。もちろん、船板に乗って漂流したという記述をそのまま信用できないのは当然だが、豊後地震津波の記述の情報源はある程度正確なものであった可能性が高い。

一方、今津留村についての記述をみると、被災した勘兵衛夫妻は「今津留ト云所ノ島」に上陸し、その氏神である天満宮で休息したという（傍線部①）。『柴山勘兵衛記』では今津留村を「島」とするが、これは先に示したように、今津留村を構成する大分川河口にあった中洲島の一つを指していると思われる。また村の被害状況について、大波によって「人家モ見ヘス」とあるが、知行目録にみえる被害から考えると、中洲島の一つの島の被害としても決して誇張された表現とはいいきれない。今津留村の被害に関する記述の情報源は、良質なものであったと想像できる。

船着の移転については、慶長元年一月に沖の浜から今津留村へ移転したとあり（傍線部③）、また地震の翌年には、船着移転にともない、屋敷も今津留村に移したことになる（傍線部④）。これに対して『中川家御年譜』では、慶長二年（一五九七）冬に「今津

留浦御普請成就、御家人等引移る」とあり、『柴山勘兵衛記』の記述とは時期のずれがみられる。どちらの時期が正確かは分らないが、新たな船着の普請が終わった後に沖の浜にいた柴山氏が今津留村に移転したことを示していることは間違いないだろう。ただし、川家の船着は当初から今津留村にあったことから考えれば、この船着移転が実際にあったことなのか、疑わしいといえる。いずれにせよ『柴山勘兵衛記』からは、柴山氏にとって豊後地震が今津留村とのつながりの始まりとして位置付けられていたことが分かる。

四 柴山氏にとっての今津留村

柴山氏は豊後地震をきっかけとして、今津留村の天満宮を信仰するようになったという【史料7】傍線部②。これは、豊後地震の奇跡譚であり、そのまま信用するわけにはいかない。しかし、この話は柴山氏にとって今津留村が由緒のある重要な地であったことを示すために記述されたものとして注目される。

次の史料からも、柴山氏にとって今津留村が意味ある場所であったことが分かる。やや長いが、関連する部分を挙げてみよう。

【史料8】雉城雑誌 一四⁽²⁴⁾

一、了可松 同邨天神
社ノ西。

雑誌曰、了可ハ、柴山氏、始ノ名ハ勘兵衛、剃髪シテ了可ト号。(中略)慶長庚子ノ乱、臼杵ノ城主太田飛騨守一吉石田方ノ与党ナルヲ以、黒田如水ト謀シ合セ、出勢ノ先手トシテ、田原、宗像百余騎ニテ、秀成ノ旗ヲ押立馳向ケルカ、兩人途中ヨリ心替シテ引違ヘ、石田方ナル旧主大友義統ヘ加勢トシ、速見郡立石ヲサシテ押行ケル。秀成此由ヲ聞ケレトモ詮方ナク、臼杵ノ城ヘ攻寄セケル。斯テ同郡石垣原ニ於テ、大友方打負、宗像ハ討死シ、義統降参ニ及ヒシカハ、田原紹忍ハ、今度ノ合戦ニ死ニモヤラス。臼杵ヘモ行レス。岡城ヘモ帰ラレス。如何ハセント案ジケル。折節、秀成ノ家臣中川平右エ門、古田喜太郎重則、柴山了可、同勘兵衛、萱野五右エ門ヲ始、多人数城州伏見ヨリ下ル由聞ヘシカハ、セメテ是等ノ人々ト一ツニ成テ、臼杵ヘ後レ馳ニモ行タラハ、合戦ノ最中ナレハ、切腹ニモ及フマシト、佐賀関ニ出向テ、着船ヲ待 或説云、紹忍石垣原ヨリ遁レ走テ、柴山了可ノ出勢スル途中、萩原邑ニテ先非ヲ悔ヒ、従軍セン事ヲ乞フ。了可コレヲ辱シメ、竟ニ携テ佐賀関ニ至ル。受テ是ヨリ直ニ臼杵ヘ寄スベシトテ、其夜ハ関ノ権現ノ社内ニ、陣取

テソ居タリケル。然ル処ニ、中川ノ家人ニ狼藉ノモノアリテ、近邨ノ野山ニアリシ牛ヲ取テ、権現ノ社前ニテ焼テ喰ヒ、酒杯呑ミ、軍ノ首途祝也ト云ケルカ、折節、魔風烈鋪火ヲ吹チラシ、猛火十方ニ覆ヒ、社壇ヨリ民家迄忽チ一時ノ烟ト失シカハ、是ヲ見テ社司郷民共、臼杵ノ城へ早舟ヲ以テ中川勢、佐賀関口ヨリ寄セテ、権現堂へ火ヲ掛ケ、民家ヲ焼払ヒ、狼藉以ノ外也ト告ケレハ、飛驒守カ代官小垣源内、橋本傳藏足輕少々引具シ、急ニ馳向フ。中川平右衛門、田原紹忍ヲ始メ、惣勢二百五十余人、佐志生ノ峠ニカ、リケル処ヲ、地下人共下リ合テ、鍋倉山左義長カ鼻ニテ待受、散々ニ鉄炮ヲ撃掛ケタリ。中川勢是ヲ物共セス。追払々々押通ルヲ、峠ノ下口、茂ミノ内ヨリ小垣、橋本伏兵ト成テ、一度ニ起リ火花ヲ散シ戦ケル。中川勢モ、爰ヲ先途ト働キケレハ、小垣、橋本モ已ニ危クミヘケル処ニ、臼杵城ヨリ加勢トシテ、戸井田太郎右エ門三百余人ヲ引卒シ、船ニテ押寄セ横合ヨリカ、リシカハ、中川勢一支モセス。坂中ヨリ追落サレ、中川、古田、田原ノ諸士ヲ始メ、了可モ討死ス。其子勘兵衛苦戦シテ、数ヶ処ニ手ヲ負ヒ引退クノ処、了可ノ討死ヲ聞キ、取テ返シ了可カ首ヲ持タル兵ヲ討止メ立帰ル処ニ、花ヤカニ鎧タル武者老騎追掛ケ来ルヲ、勘兵衛竟ニ鎗付ルト雖、深手故首ヲ取ニ及ハス、残兵ト共ニ船ニ取乗リ、當村ニ帰り、父ノ首ヲ葬リ塚ノ印ニ植タル松也ト云リ。以上、柴山家々譜及関ヶ原大全ヲ以テ記ス。此松、當代枯果テ、里人ノ為ニ伐取レテ、其切株今儼存ス。

記者云、同処ヨリ西、数百歩ニシテ、柴山氏ノ墓アリ。右ハ其子孫、当時犬飼及三佐等ニコレアリテ、近世建ル処ト云リ。

【史料8】にある「慶長庚子ノ乱」とは慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦を指す。このとき九州では、西軍・毛利輝元によって派遣された大友義統と東軍・黒田如水が豊後国石垣原で合戦に及んでいる。また石垣原合戦の後、東軍についた中川秀成が西軍である臼杵城主・太田一吉を攻撃、その過程で発生したのが佐賀関合戦である。⁽⁶⁾この合戦で両賀（【史料8】では「了可」とある）が戦死したことは他史料からも明らかであるが、『雉城雜誌』によれば、両賀の首は勘兵衛によって屋敷のある今津留村に葬られ、その首塚に植えられた松が「了可松」と呼ばれたという。なお【史料8】では「柴山家々譜」を引用しているが、これは『津山氏世譜』のことと思われる。

重要なのは、その西には柴山氏の墓があるという点である。墓の建てられた時期ははっ

きりとしなが、祖先の首塚が今津留村にあることから、その墓を松の近所に建てたのだろう。『雉城雜誌』は天保年間（一八三〇—一八四四）に豊後国・府内藩の儒学者であった阿部淡斎の編集した府内藩の地誌である。また天明年間に成立したとされる『津山氏世譜』の両賀の項には「法号両賀葬^二于今津留村^一」とあり、こういった記述から江戸後期には両賀の墓（首塚）が今津留村に存在したという伝承が存在すること、そして彼の首塚に由来する松の伝承の存在から柴山氏の墓が今津留村に存在すると今津留村内で考えられていたことを、この記述は示している。

柴山氏は今津留村の天満宮を信仰したというが、今津留村内に天満宮が存在していたことは、次に挙げる『雉城雜誌』の記述から分かる。

【史料 9】 雉城雜誌 一四⁽²⁾

一、天満宮同邑

雜誌曰、當社ハ、旧府中、川西ニアリ。今天神島ト云地、其址也。慶長ノ水災ニ流失、其後、此処ニ祀ル。或曰、天神島ハ、同慈寺中ニアル処ノ、菅神ノ御旅所也トモ云リ。

【史料 9】には旧豊後府内の「天神島」という場所に天満宮があったと書かれている。『雉城雜誌』の「西應寺」（大分県大分市）の項目をみると、この寺の本尊の由来について「旧府中今津留邑ノ地、天神島」にあった阿弥陀寺の仏像が豊後地震によって流され、この寺に至ったとある。「天神島」の現在の場所は不明だが、ここから、天神島は今津留村の内にあったことがうかがえる。

また『雉城雜誌』中の春日大明神（大分県大分市）の項には、その境内社・天満宮に関する由来として「沖の浜の鎮守である天満宮が豊後地震による津波で漂流し、勢家のこの境内に到った」と書かれている。この鎮守・天満宮と柴山氏の関係をうかがうことはできないが、柴山氏の屋敷が沖の浜にあったとすれば、豊後地震以前から天満宮を信仰する素地はあったのかもしれない。また屋敷が沖の浜になかったとしても、天満宮の存在が柴山氏と沖の浜を結びつけたと考えることもできるだろう。

豊後地震以前からの天満宮の信仰と今津留村に存在した天満宮、そして津山氏の祖・両賀の首塚の存在、この二つが結びついた結果として、今津留村に関わる『柴山勘兵衛記』の奇跡譚が生まれたのではないだろうか。

おわりに―その後の今津留村の船着

豊後地震後、今津留村はどうなったのか。『中川家御年譜』および『津山氏世譜』によれば、元和二年（一六一六）七月の大風雨によって今津留村の船蔵が浸水し、多数の船が破損したという。このため、一〇月二六日に新たな船着として萩原村で屋敷地や町割の縄張りがおこなわれ、船着は今津留村から萩原村へと移転したのだという。

この風水害によって今津留村で失われた石高は、慶長六年の知行目録と『正保郷帳』を比較することで推定することが可能である。『正保郷帳』には「水損所」今津留村の石高は一〇一石余とあり、慶長六年からは四石ほど減少している。恐らく、これが元和二年に失われた石高に相当するのだろう。

『中川家御年譜』には、元和九年（一六二三）に中川家領であった萩原村が松平忠直配流の地として召し上げられ、その替わりに三佐が与えられたとある。今津留村は『正保郷帳』では府内藩領とされているが、萩原村と一緒に召し上げられたのだと思われる。【史料五】に津山氏が今津留村ではなく「犬飼及比三佐等」にいたというのは、このためである。中川家による今津留村の支配が終わったことで、柴山氏（その子孫である津山氏）との関係も断たれることになるが、それでも柴山氏にまつわる伝承は村内に残されていたのだろう。

豊後地震による被害地は別府湾内に広く分布するとされている。これまでは沖の浜の被害に注目が集まっていたが、本章で今津留村についてみてきた結果として、複数の中洲島を含み込んだ今津留村全域が大きな被害をうけていたことが分かった。ここから、別府湾南岸地域では同様の被害があったことが想像される。沖の浜の被害が「瓜生島海没伝承」として伝承されたように、今津留村の被害は柴山氏との関係で記憶されていた。本章でおこなった考察からは、災害の記憶が別の出来事や関係性と結びついて記憶されることが示されているといえる。別府湾沿岸の他の被害地についてははたしてどうなのか、今後さらに検討を加えていきたいと考えている。

註

- （１） 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』（東京大学出版会、二〇一三年）。

- (2) 羽鳥徳太郎「別府湾沿岸における慶長元年(1596年)豊後地震の津波調査」(『東京大学地震研究所彙報』第六〇巻、一九八五年)。
- (3) 「瓜生島」調査会『沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎』(「瓜生島」調査会、一九七七年)。
- (4) ①松崎伸一・平井義人『玄與日記』が記す「かみの關」地点の比定(1596年豊後地震)」(『歴史地震』第二九号、二〇一四年)。
②松崎伸一・日名子健二・平井義人「文禄五年豊後地震における早吸日女神社の津波痕跡高の推定」(『歴史地震』第三〇号、二〇一五年)。
③松崎伸一・日名子健二・平井義人「文禄五年豊後地震における奈多宮の津波高」(『歴史地震』第三一号、二〇一六年)。
- (5) 註2前掲論文。
- (6) 森山恒雄「豊後旧大友領の蔵入地」(『豊臣氏九州蔵入地の研究』吉川弘文館、一九八三年。初出は一九七七年)。
- (7) 玉永光洋・坂本嘉弘『大友宗麟の戦国都市 豊後府内』(新泉社、二〇〇九年)。原本は大分県立先哲史料館蔵。
- (8) ルイス・フロイス『日本史』第六章(第二部七一章)(松田毅一・川崎桃太訳『日本史8 豊後篇Ⅲ』中央公論社、一九七八年)。
- (9) 神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』(臨川書店、一九八七年。以下『中川家文書』とする) 九六号。
- (10) 大分県立先哲史料館蔵および渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成五(下) 豊後国植田荘・津守荘(同句保)・戸次荘・丹生津留畠地・高田荘・毛井村・大佐井郷・小佐井郷史料』(別府大学附属図書館、一九九〇年)。
- (11) 『中川家文書』七一号。
- (12) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第1期第2巻』(同朋舎出版、一九八七年)。
- (13) 註6前掲論文。なお森山氏の豊臣蔵入地研究に対しては批判も出されている(橋本操六「太閤蔵入地と代官支配」『大分県地方史』第一六七号、一九九八年)。豊臣蔵入地は重要な研究テーマであるが、本章の主旨から外れるので特に論じることはいない。豊臣蔵入地をめぐる最近の研究としては堀越祐一氏の「文禄期における豊臣蔵入地―関白秀次蔵入地を中心に―」(『豊臣政権の権力構造』吉川弘文館、二〇一六年。初出は二〇〇二年)がある。

- (14) 『中川氏御年譜 第三』(竹田市教育委員会編『中川氏御年譜』竹田市、二〇〇七年)。なお『中川氏御年譜』では、この朱印状によって中川秀成が今津留村を拝領したとしているが、森山の研究(註6前掲論文)によって、今津留村は豊臣蔵入地の一つであることが明らかとなっている。この時点ではまだ中川家領にはなっていないことから、年譜の記載は誤っているということが出来る。

(15) 大分県総務部総務課編『大分県史 近世篇Ⅰ』(大分県、一九八三年)。

(16) 註12参照。

(17) 註6前掲論文。

(18) 山村亜紀「中世前期における国府と港湾」(『中世都市の空間構造』吉川弘文館、二〇〇九年。初出は二〇〇三年)。

(19) 鹿毛敏夫「川からの中世都市」(鹿毛敏夫編『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院、二〇〇八年)。

(20) 近世に編纂された地誌をみると、豊後府内の近くには、沖の浜に存在していた町が豊後地震によって移転したという由緒をもつ事例がある(たとえば『雉城雑誌』)。ここからは、沖の浜は豊後府内とのつながりが強かったと考えられ、今津留村の一部だったとはいえない可能性が高いと思われる。

(21) 『碩田叢史 九』所収(大分県立先哲史料館蔵。本章では東京大学史料編纂所蔵の写本で確認している)。また刊本としては加藤知弘編・訳『津山氏世譜・柴山勘兵衛記』(大分県図書文献刊行会、一九七八年)がある。

(22) 註21参照。

(23) 松崎伸一・日名子健二・平井義人「1596年豊後地震における沖ノ浜の津波高7ブラサの検証」(『歴史地震』第三二号、二〇一七年)。

(24) 大分県立先哲史料館蔵および垣本言雄校訂『大分県郷土史料集成 続上巻 地誌篇』(臨川書店、一九七三年)。

(25) 『中川氏御年譜 附録第三』(竹田市教育委員会編『中川氏御年譜』竹田市、二〇〇七年)。

(26) 註24参照。

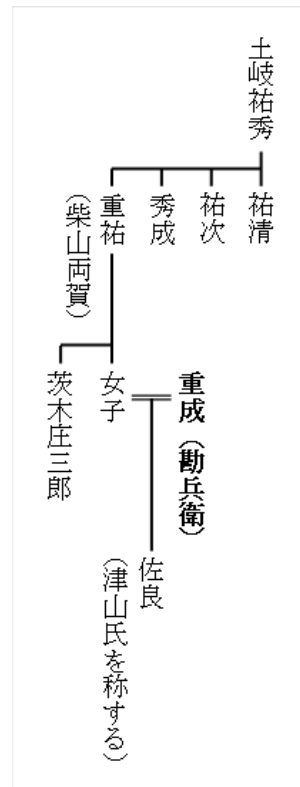


図2：柴山氏（津山氏）略系図
『津山氏世譜』による

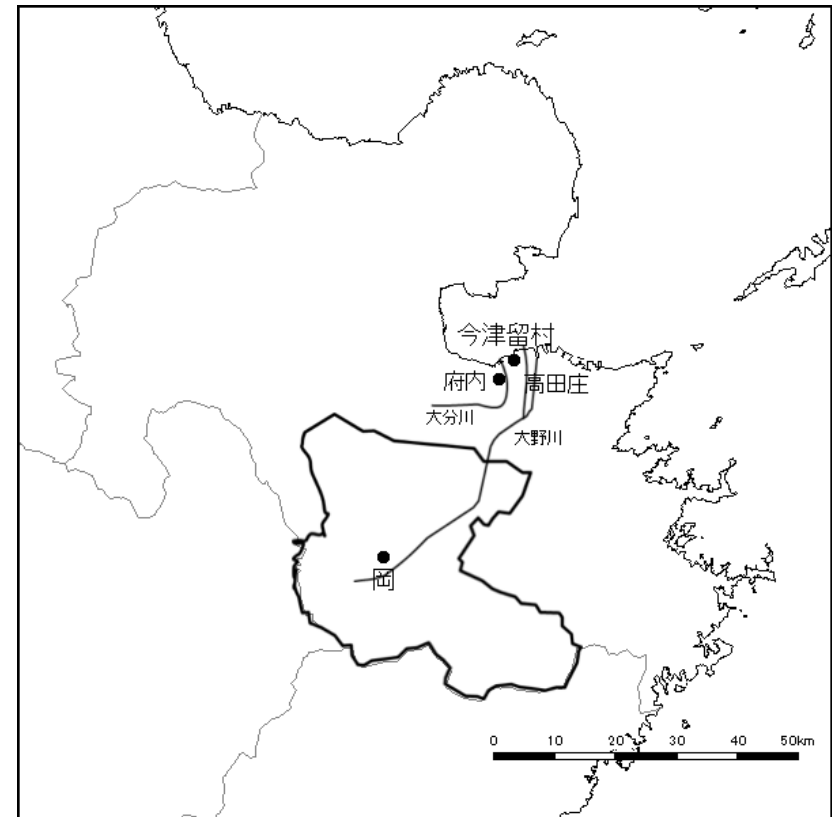


図1：岡藩（中川家）の領域と今津留村の位置

第五章 『言経卿記』にみる文禄五年伏見地震での震災対応

―特に「和歌を押す」行為について―

はじめに

文禄五年（慶長元年、一五九六）に発生した伏見地震は、政權都市の所在する畿内に大きな被害を与えた。伏見城にいた豊臣秀吉をおそった地震として知られる伏見地震は史料も多く残っており、様々な研究がおこなわれている。そのうち西山昭仁氏は伏見地震時に朝廷（公家）・寺社・武家・民衆がそれぞれのような行動をしていたのかを確認しており、特に民衆の行動について、洛中洛外の被害・死者数についての記述を確認した上で、復旧事業は町や町組の協力（下京）・秀吉の援助（伏見）のもとにおこなわれていたことを想定している。^① 西山氏の研究は災害時の人々の行動や復旧過程を明らかにした点で重要だが、これ以降におこなわれた伏見地震についての研究では、このような観点について検討したものはない。^②

本章では西山氏が検討した伏見地震直後の人々の対応について、特に『言経卿記』で記述されているものに注目する。それは、記主である山科言経が天正一三年（一五八五）六月一九日に勅勘を蒙り京都を出奔してから慶長三年（一五九八）に勅免となるまでの一年半の間、市井で生活しており、庶民と接触を持つという点で他の公家の日記と比べて幅の広い記録を有し、重要であると考えからだ。

『言経卿記』の伏見地震に関する記述の中でも特に注目されるものとして、地震後に三種類の和歌が門に押された（貼られた）というものが挙げられる。文禄五年のこの行為について西山氏は特に触れておらず、また各和歌についての解釈もこれまでおこなわれていなかった。ただし三種類の和歌のうち、三番目の歌は「要石の歌」と呼ばれよく知られており、要石に関する研究自体も比較的多い状況にある。その中でも鹿島神と地震の関係について検討している都司嘉宣・山本賢両氏^④、中世の要石に注目した黒田日出男氏^⑤の成果は注目される。都司・山本両氏は、鹿島神がどのようにに信仰されているのか（場所・地震信仰の有無・分祀の時期）を確認し、鹿島神がいつ、どのようにして地震信仰を得たのかを考察している。その結果として、鹿島神宮が地震神としての性格を備えたのは貞観六年（八六四）あるいは安和二年（九六九）以後保元二年（一一五七）までの間と推察している。しかしこの検討は全国の鹿島社の伝承に注目してのものであり、その伝承の真偽まで

確認されていない点においては不備なものといえるだろう。

黒田氏は「大日本国地震図」より、龍（図中では魚といっている）の頭を押さえている「鹿島の要石」に注目、同図中に「要石の歌」が載っており、この「呪い歌」が少なくとも文禄五年（『言経卿記』中のもの）まで遡りうることを確認している。その上で、中世の要石について各史料を用い検討を加えている。その結果として、「鹿島の要石」は中世（日本）（地図に描かれた、国土としての日本）にいくつもあった中心軸（と主張する聖地）の一つであること、また（国土）が漂い出さないよう繋ぎとめ、あるいは地震で揺れないよう押さえる役割を持った長大な石であることを読み取り、要石は一三世紀に生み出され、鹿島動石・石御座と呼ばれていたものが、室町時代を通じて要石といわれるようになったとしている。この研究は要石が中世を通じて生み出されたものであることを明らかにしたという点において重要である。

このように要石についてはよく研究されており、「要石の歌」自体もその中で触れられてきたが、他の歌についての検討は管見の限りまったくみられない。「和歌を押す」ことの意味についての検討は、三種類全てについて検討されなければならないのではなからうか。

「和歌を押す」行為については、西山氏が文政一三年（一八三〇）京都地震の際にみられる「地震治めの落首」の一事例として紹介している^⑥。これは、「落首（戯歌）」を民衆が紙に書き、戸口・大黒柱に貼っているというもので、西山氏は「一種の呪符として用いられていた」とし、この「地震治めの落首」呪符が広まった背景として地震による破壊や混乱に起因した民衆の社会不安を想定している。さらに「落首」の書かれている史料に「地震も納まり世なをしとかや」とある点に注目、この「世直し」観念を社会不安の激化に伴って表出したものとし、当時の政権に対する批判が内包されていたと推察している。西山氏の論では、これらの和歌が「呪符」として用いられていたとし、注目される。しかし西山氏は「要石の歌」の解釈として「地震によっていくら地面が揺れようとも、地中の鯰が暴れないように押さえつけている要石は、鹿島大明神がその要石を押さええている限り、万が一にも抜けることはない」としているが、黒田氏が明らかにしたように、要石は（国土）を繋ぎとめ、地震で揺れないよう押さえる役割を持つものと解釈されるべきであって、この歌からはいわゆる地震鯰を読み取ることは不可能である^⑦。また「和歌を押す」ことの震災対応としての位置付けも曖昧であるといえる。

そこで本章では、『言経卿記』に記述された伏見地震に関する記事を分析し、中近世移行期の民衆の震災対応がどのようなものであったかを明らかにすることを目的とする。特に

地震直後よりみられる「和歌を門に押す」行為について、その内容と意味を考察し、震災対応としての位置付けを検討する。

一 山科言経と『言経卿記』について

今回考察に用いた『言経卿記』とはどのような史料か。山科言経の半生については今谷明氏が若干触れているほか、⁸⁾『言経卿記』については花田雄吉氏や飯倉晴武氏によってまとめられている。⁹⁾それら先行研究の成果と『大日本古記録』に所収されている『言経卿記』を利用し、簡単ではあるが山科言経と『言経卿記』について確認しておこう。

記主である山科言経は天文一二年（一五四三）に生まれた。父は権大納言で『言経卿記』の記主・山科言継、母は右大弁葉室頼経女である（図1）。天文二二年（一五五三）に元服して以降、順調に昇進を重ねていたが、天正一三年六月一九日に勅勘を蒙り、以後慶長三年一月三日に勅免されるまでの一三年半の間浪人生活を送った。その後慶長七年（一六〇二）に正二位に叙され、慶長一六年（一六一一）二月二七日に六九歳で亡くなっている。

言経自身は家業である衣紋道や音楽の筈に堪能で、また妻の実家が和歌の家である冷泉家であることもあり、和歌・漢詩にも熱心であったようだ。さらに医薬関係も詳しく、自分で薬草を採集・栽培し、薬を精製して周囲の人々に与えている。衣紋道と医薬関係は、浪人中の山科言経家の重要な収入源の一つであったようである。

一つ書きが山科家歴代の記録の特徴ということができるが、『言経卿記』も当然一つ書きで書かれている。言経は織豊期から江戸初期という時代に生きていたこともあり、『言経卿記』には織田信長や豊臣秀吉、徳川家康の動向が記されている。また有職故実や古典の書写・和歌や連歌といった学芸関係の記事がよくみられるが、もっとも特徴的なのは医薬関係の記事の多さであろう。薬を用いた治療の記事から、薬の配布といった診療簿としての側面ももっている日記であると評価できるであろう。

このような特徴をもつ『言経卿記』には、もちろん伏見地震に関する記述も多くみられる。まずは、どのような震災対応がとられていたのかを日記中の記述からみていこう。

二 山科言経周辺における被害

『言経卿記』中にどのような震災対応が記されているのかみていく前に、地震発生直後

以降の記述から山科言経の行動を読み取り、彼がどのようにして震災情報を得ていたのかを確認しておきたいと思う。

まず、地震直後より西御方を見舞うということがある。ここからは、言経の屋敷があった堀川末から西御方の住む興正寺へ向かう途中に本願寺寺内町の被害の様子を実見していること、また興正寺を訪れた際に寺内町についての情報を得たということが考えられる。次に、各地より見舞いなどの人々が訪れていたことがある。ここからは、言経邸に来た者から各地の情報を聞き出していたことが想像されよう。最後に、伏見の徳川家康邸へ地震見舞いに伺っていることがある（閏七月二四日）。ここから、伏見の様子や伏見へ向かう途中の各所の様子を実見したことが考えられる。

伏見地震発生時、山科言経は本願寺寺内町内に住んでいた。言経周辺での地震被害がどのようなものであったかを、『言経卿記』より拾ってみよう。地震被害についての記述は閏七月一三日条に集中してみられる。少々長いがすべて引用しよう。

【史料1】言経卿記 文禄五年閏七月一三日条¹⁰

十三日、戊申、天晴、大地震、子刻、申^リ小

一、去夜子刻大地震、近代是程事無^レ之、古老之仁語也、小動不^レ止、昼夜不^レ知^レ數了、

一、地動ニ付而方々ヨリ見舞二人々来了、

一、冷早朝ニ堺へ下向了、

一、西御方へ見舞ニ罷向診脈了、異無^レ之、

一、快気散方々ヨリ所望了、遣了、八包也、香薷散ニ包同方々へ遣了、

一、地動ニ相損所々、先私宅ユカミ了、庭上ニ出テ夜ヲ明了、当町ニハ川那部宗兵衛・

大野伊兵衛等家顛倒了、其外大破ニ及了、

一、寺内ニハ門跡御堂・興門御堂等顛倒了、両所ニテ人二三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間モ無之、

一、上京ハ少損了、下京ハ四条町事外相損了、以上二百八十余人死也云々、東之寺共瓦フキハ崩了、

一、禁中ハ少々相損也云々、

一、伏見御城ハテンシユ崩了、大名衆家共事外崩了、江戸内府ニハナカクラ崩了、加々爪隼人佑死去了、雑人ハ十余人相果了、同中納言殿ニハ侍共ハケカトモ有之、死者無之、但雑人ハ六七十人死也云々、其外町々衆家崩之間、死人千ニアマリ了、

- 一、東寺ハ塔・鎮守八幡社・大師堂、此外七ツ崩了、但坊々不_レ苦也了、
- 一、大仏ハ堂ハ不_レ苦、但柱ヲ二寸程土へ入了、御仏ハ御胸ヨリ下少々損了、樓門ハ戌亥方へ柱ユカミ了、
- 一、三十三間ハ少ユカミ了、
- 一、東福寺ハ本堂年来東へユカミ了、此度地動ニ西へ相直也云々、奇特了、伽藍トモ不_レ苦了、但常樂寺相損也云々、
- 一、山崎事外相損家悉崩了、死人不_レ知_レ数了、
- 一、八幡在所是又悉家崩了、
- 一、兵庫在所崩了、折節火事出來了、悉焼了、死人不_レ知_レ数了、
- 一、近江国ヨリ関東ハ地動無_レ之云々、
- 一、アタコ坊々六有_レ之、悉顛倒了、少々小座敷相残了、権現相残了、少々人相損了、
- 一、和泉堺事外相損、死人余多有_レ之、
- 一、大坂ニハ御城不_レ苦了、町屋共大略崩了、死人不_レ知_レ数了、

まず言經の住んでいた本願寺寺内町内では、御堂が顛倒し二、三人が死去、また各家が大破・崩壊し無事な家は「一間」もなかったという。寺内町での死者数は「三百人」とされている。言經邸も被害を受けており、崩壊には到らなかったものの歪んでしまったために、その日からしばらく庭で夜を明かすことになったという。

京都市中も大きな被害を受けており、「一、上京ハ少損了、下京ハ四条町事外相損了、以上二百八十余人死云々」とあるように、上京よりも下京の方が大きな被害を受けていることが分かる。

言經は勅勘中、徳川家康から扶持を受け生活していた。その関係から、たびたび伏見を訪れていたことが日記に記述されている。伏見地震後にも地震見舞いのために家康邸を訪れた。伏見の被害については「一、伏見御城ハテンシユ崩了、大名衆家共事外崩了、江戸内府ニハナカクラ崩了、加々爪隼人佑死去了、雑人ハ十余人相果了、(中略)其外町々衆家崩之間、死人千ニアマリ了、」と記述されており、伏見城の被害よりも家康邸の被害についての方が詳細である。また伏見城下の死者数の多さが他所の被害と比較して目を引くところである。

三 震災対応の検討

山科言経や彼の周辺の人々・民衆は、伏見地震の際にどのような対応をとったのか。以下で考察していこう。『言経卿記』に記述されている震災対応は、主に直後（閏七月一三日、

【史料1】から一六日までに集中して集中してみることができる。

【史料2】言経卿記 文禄五年閏七月一四日条〜一六日条⁽¹⁾

十四日、己酉、天晴、地動昼夜及度々、

一、方々見舞ニ使来了、

一、大工才二郎ヨリ快気散所望、三服遣了、

一、西御方へ見舞ニ罷向了、診脈了、

一、下間宮内卿妻ヨリ愛洲薬所望、七服遣了、

一、興門へ柱十本・竹十五本借用、フルキ道具也、

十五日、庚戌、小雨、小地動昼夜及度々、

一、方々ヨリ見舞ニ使来了、

一、西御方へ見舞ニ罷向了、診脈了、

一、大工才二郎来了、診脈了、煎薬ニ包遣了、

一、花恩院内小性丹波来、脈ヲトリ了、茶調散三服遣了、

一、恵都見舞ニ来了、同知人——アイス薬所望、十服遣了、

一、大野伊兵衛尉ヨリ愛洲薬所望、一包遣了、

一、四条殿冷へ見舞ニ和泉堺下向了、小者と二郎相添了、

一、地震ニ付而、毎日雑説有^レ之、又大地震可^レ有之間沙汰有^レ之、各女子・ワラヘトモ

也、夜ハ盗人用心トモ、寺内ニハ夜眠トモ稀也云々、

一、地震ニ付而、去十三日ヨリ歌トモ有^レ之、門ニ押^レ之也、誰人ノ所意不^レ知^レ之トモ町々押^レ之、松竹ノ葉ヲ同サシ了、

ム子は八ツ門ハ九ツ戸ハ一ツ身ハイザナミノ門ニコソスメ

チハヤフル神ノイカキモ三日月ノユリヤナヲサン我身成ケリ

ユルクトモヨモヤヌケシトカナメ石ノカシマノ神ノアランカキリハ

十六日、辛亥、小動昼夜及度々、晴、

一、地動又有之由雜説之間、大野伊兵衛尉後園茶屋竹ノ辺也、其へ予・北向・阿茶丸・御春・家中衆悉罷向了、無何事了、後刻チマキ同妻持来了、

一、西御方へ罷向、煎薬二包進了、

一、大工才二郎来了、診脈了、煎薬三包遣了、

一、石河日向守ヨリ見舞ニ使来了、

一、方々見舞二人来了、

一、岩鶴雇之、夜番ヲサセ了、

一、丹波来了、診脈了、茶調散三服遣了、

一、兵部卿ヨリ愛洲薬所望、五服遣了、

一、絵屋吉蔵ヨリ頭痛之由申来之間、茶調散三服遣了、

一、下女ツル父堺ヨリ上洛了、一昨日下也云々、来了、冷泉女中十二日夜大地動ニ家顛

倒ニ付而死去也云々、廿四才也、絶ニ言語了、子息二人ハ無事儀也云々、

以上より読み取ることのできる震災対応としては、次のものが挙げられる。

・避難

・盗人用心

・和歌を押す

・地震再来の噂への対応

以上の震災対応について、個別に検討していく。なお、「和歌を押す」行為については後に詳述する。

(一) 避難

言経は地震直後（閏七月一三日）より邸宅が歪んでしまったために庭で夜を明かすという避難生活を送った。邸宅の修理は八月中に終わったらしく、この状況は約一ヶ月半の間続いたことになる。

この避難生活はどのようなものだったのだろうか。八月二日条を見ると、「一、雨フル間座敷ニ始而各臥了、」とあり、雨のため一時的に座敷で寝たことが日記中から読み取れる。しかし八月二日以前にも雨が降っており、その際には座敷で寝たことは書かれていない。では言経はどのようにして雨を防いだのだろうか。地震の翌日の閏七月一四日条を見ると、「興門へ柱十本・竹十五本借用、フルキ道具也」とあり、古い柱・竹を興正寺より借りて

きたことが分かる。返却したのは一二月二日で、「一、花恩院殿へ古キ材木十一・古竹十三・

(佐超)

打ヒ二ツ等返了」と書かれている。借りてきた時と返却時の数が若干違っているのだが、これは言経の誤記によるかあるいは数え間違いかと思われる。また「打ヒ(打樋)」は竹で作られるものであることから、借りてきた竹の中に「打ヒ」も含まれていたのだろう。

古柱・竹(打樋を含む)を借用し、何に利用したのか。八月二五日条に「一、上京へ

(四条隆昌)

(山科言経)

阿 罷向了、ヤ子ノ木取ニ被行了、」とあり、邸宅の修理には別に材木を用いていることから違うと思われる。柱・竹は借用され、返却していることから、言経は地震小屋を設けるために柱・竹を必要としたのだと考えられる。山科言経家では庭に地震小屋を設けて避難生活を送ったのである。嘉永七年(安政元年、一八五四)伊賀上野地震について記述された『地震の記』という史料には次のような記述がある。

【史料3】地震の記⁽¹²⁾

何れも仮屋の難儀なる、竹・しふかみ・桐油紙も小雨にハよけれど、大雨打続てハふせきかたく、藪・畑中等にて床とてハなく、古木・古竹にてゆひ合せし家根に、土間に板敷きもあり舗ぬもありて、こも・むしろ舗のふしと雨にぬれて湿気甚しく、(後略)

ここからは地震小屋が、大雨を避けることはできないけれども、小雨程度ならば避けることを読み取ることができる。言経の地震小屋は同じようなものではなかったかもしれないが、少なくとも言経の地震小屋も小雨を避けるには十分なものだったのだろうと考えられる。

地震小屋を設けるために使われた柱・竹は「フルキ道具」だと書かれているが、これはどういうことか。【史料3】には「古木・古竹」で地震小屋が設けられていることを記しており、同様に伏見地震の際にも返却の際に「古キ材木」「古竹」との表現がなされている。こういった事例から考えると、どうも地震小屋には古い柱や竹が使われていたようである。更にいえば、そのような古い柱・竹を再利用していることから、地震小屋のための道具はあらかじめ用意されており、このような際に用いられていたことが想定される。以上のことから考えると「フルキ道具」とは、興正寺であらかじめ用意されていた地震小屋の道具(古柱・竹)の中でも、特に古いものを意味するのだと思われる。

なお醍醐寺の座主・義演の日記『義演准后日記』には次のような記述がみられる。

【史料4】義演准后日記 文禄五年閏七月一四日条⁽¹³⁾

十四日、霽、地震未^レ休、諸人不^ニ安堵^一、家ヲ去^テ道路ニ臥也

今日夜中大仏・東寺為見舞発足、仰天不^レ斜、委如^ニ右記^一、帰路ニ伏見へ越了、言語道断次第也、全所一所モ無^レ之、諸人猥雑、大路難ニ通路ニ一体也、大地裂^テ落入了、伏見向野^{川中}也、去春ヨリ大御普請御城出来、是以大地震ニ石クラニ間余ニエ入^ト云々、依^レ之今日同伏見山ニ御綱張云々、

伝聞、唐人為^ニ見物^一武者御用意延引云々、唐人堺津ニ逗留、大略地震ニ死去云々、実説歟、追而可^レ記^レ之、

次天ヨリ毛降、似^ニ馬尾^ニ、或一二尺、或五六寸計也、色ハ白黒、又赤色ナリ、京都・醍醐同前^ニ降、■■

これによれば、人々は止むことのない地震に安心できず、家を出て道路で寝ている様子が書かれている。しかし『言経卿記』に描かれる山科言経の避難生活から、「諸人」も地震小屋を営んでいたのではないかと考えられる。雨ざらしの野宿というわけではなかったのだろう。

(二) 盗人用心

地震後の本願寺寺内町内では火事場泥棒が現れることが懸念されていたようで、盗人用心として寝ずの番が置かれたことが閏七月一五日条の「夜ハ盗人用心トモ、寺内ニハ夜眠トモ稀也云々」という箇所から分かる。

これが山科言経家では河原者の「岩鶴」なる者を雇って夜番をさせた。この「岩鶴」について川嶋將生氏は、山科家と極めて親しい関係にあり、未進年貢の徴収といった所務に関わっていることから、単なる従者以上の存在であったと評している。⁽¹⁴⁾「岩鶴」による夜番は八月初めまで続けられており、言経はこれに対して、一〇月八日に「一、岩ニ百疋・木綿ニタン遣了、地動已後ニ番ニヤトイ見舞了」と礼物を遣わしていたことが分かる。

(三) 地震再来の噂

伏見地震発生の翌々日から、また地震が起きるといふ噂・流言のあったことが『言経卿記』には書かれている。閏七月一五日条では「地震ニ付而、毎日雑説有之、又大地震可有

之間沙汰有之、各女子・ワラヘトモ也」とあり、一六日条には「地動又有之由雜説之間、大野伊兵衛尉後園茶屋竹ノ邊也、其へ予・北向・阿茶丸・御春・家中衆悉罷向了、無何事了」と記述されている。特に一六日には実際に言経一家は避難までしている。これについて西山氏は「当時の人々が「地震の際には竹林に逃げ込んだ方が良い」という、ある種の地震対策の知識を持っていた」としている⁽¹⁵⁾。このような行動は『源平盛衰記』の中にもみることができる。

【史料5】源平盛衰記⁽¹⁶⁾

同十四日に弥益弥益に震ひけり。堂舎の崩るる音、雷の鳴るが如し。塵灰の揚る事は煙を立てたるに似たり。(中略)

公卿僉議ありて、祈禱あるべきの由、諸寺諸山に仰す。「今夜亥子丑寅の時は、大地打返すべし」と占ひ申したりといひて、家の中に居たる者は上下一人もなし。薮・遣戸を放ちて大庭に敷き、竹の中、木の本にぞ居ける。(以下略)

これは元暦二年(一一八五)京都地震について記述された部分であるが、ここをみても「竹の中、木の本」に逃げ込んだ者がいたことが分かる。竹林に逃げ込むというのは、古い言い伝えのようなものだったのかもしれない。

しかし一方で、また違った対応がなされたのではないかと考えさせる史料がある。舟橋宣賢の『慶長日件録』慶長九年(一六〇四)七月二一日条および同二二日条には、以下の記述がある。

【史料6】慶長日件録 慶長九年七月二一日条・二二日条⁽¹⁷⁾

廿一日、晴、竹田宰相来、堯曰篇講^レ之、論吾一部終功者也、

来廿五日可^レ有^二北野御法楽和歌御当座^一、各可^二令^レ参給^一之旨被^二仰下^一候也、七日廿一日、光豊 広橋大納言殿 入道前侍従中納言殿 伯二位殿 平宰相殿 飛鳥井宰相殿 三條宰相中将殿 鷲尾宰相殿 頭弁殿 阿野少将殿 四辻少将殿 左衛門佐殿 蔵人弁殿 飛鳥井少将殿 平少納言殿 猪熊少将殿 蔵人式部丞殿

右御触折紙、自^二長橋之局^一被^レ触之間、加^レ奉了、

次自^二殿中納言様^一為^二服部忠兵衛御使^一、明日御在所之近所川狩^二可^レ有^二御成^一、可^レ参乎之由被^二仰下^一之、予也明日当番致^二相博^一可^レ参之由返事申入畢、次全斎得効方借寄、

令^ニ一覽^一即時返獻畢、次西洞院より有^ニ使者^一、今晚中院入道・伯^二二位來談也、予也可^レ來云々、雖^レ然折節客來之條不^レ行、高倉嗣良より相博之間、宿番^ニ參^一内、今夜大地震^ニ申^一可催來之由風説、洛中洛外専なる間、京中町人不^レ寢云々、内裏^ニ毛^一作^ニ風説^一被^レ驚、鶏鳴時分より上^ニ格子^一也、少も不^ニ地震^一、一犬吠虚万犬吠ト可^レ謂者也
廿二日、晴、町人來云、夜前丑寅刻可^ニ地震^一由雜説故、世間騒動以外也云々、次自^ニ庭田殿^一雲雀⁺被^レ惠、予也腹中氣之砌令^ニ祝着^一畢、次冷泉へ使者遣^レ之、訪^ニ夜前^一雜説畢、当番參^ニ内^一、終日候^ニ御前^一、平野五郎左衛門より書狀到來、今夜山科内蔵頭へ有^ニ嫁娶^一、新庄越前女子云々、

地震が来るとの噂・流言に対して、京都の町人は寢ずにおり、また内裏では早朝から格子を上げていたというのだ。ここからは、実際には避難することがなくとも、地震が来ればいつでも避難できるような態勢をとっていたということを読み取ることができる。つまり、実際に避難した人々もいた一方で、避難はせずにいつでも避難できる態勢をとっていた人々もいたであろうと考えられるのである。

重要なのは、噂・流言があつたことで迅速に避難する（あるいはその態勢をとる）ことが可能であつたという点である。もちろん、それによつて人々の不安感が増幅され「世間騒動」という問題点もあるわけだが、それとともに噂によつて避難へつながるといふ良い面もあつたのである。

四 「和歌を押す」行為の検討

震災対応の一つに「和歌を門に押す」ことがあつた。これは、地震直後にあらわれた三首の歌を言経が門に押したというもので、誰の仕業か不明だが町々（住宅の門か木戸口）に押しているというものであつた。ここからは具体的にこの行為について検討していこう。

一見すると、三種類の和歌は落首のようにみえる。実際、『言経卿記』の刊本の脚注では「落首」とされている。三谷栄一氏は、和歌は古来からの「言葉はそのまま実現する」という言霊信仰に基づいており、「まじない」も多く短歌の形式を取ることが多いとしており⁽¹⁸⁾、今回のように地震の後に押される和歌というものも、そのような呪い歌の一種と考えるのが妥当ではないだろうか。『言経卿記』に書かれている三種類の和歌は「呪い歌」であると思う。このような一見落首のような呪い歌は、平安末期の歌学書『袋草子』（藤原清

輔・著）にも「誦文歌」として一七首書かれている。

【史料7】袋草子⁽¹⁹⁾

一、誦文歌

吉備大臣夢違誦文歌

あらしをのかるやのさきにたつしかもちかへをすれはちかふとそきく

（中略）

見人魂歌

たまはみつぬしはたれともしらねとも結ひとゝめつしたかひのつま

三返誦^レ之、男左女右ノツマヲ結ヒテ。三日経テ解之云々、

（中略）

造酒歌 家持如^二萬葉集^一。

なかとみのふとのりことゝいひはらへあかふいのちもたかためにする

已上各三返誦^レ之云々、

（以下略）

一七首書かれているうち、使用方法まで書かれているのは「見人魂歌」「造酒歌」の二つしかない。「見人魂歌」では男は左、女は右の（着物の）端を結び、三日後に解くように、「造酒歌」では三回繰り返して唱えるように書かれている。以上のように門に押して用いるものは残念がらなかったが、呪歌は古くから伝えられてきたものだということが確認できようかと思う。

伏見地震時の「和歌を押す」行為と同じ事例は、寛文二年（一六六二）の近江・若狭地震の際にもみることができる。【史料8】は当時書かれた仮名草子『かなめいし』（浅井了意・著）である。

【史料8】かなめいし⁽²⁰⁾

（前略）何ものの仕いだしけん、禁中よりいだされて、此哥を札に書いて、家々の門柱に押しぬれば、大なるふり止むとて、

棟は八つ門は九つ戸はひとつ身はいざなぎの内にこそすめ

諸人、写し伝へて、札に書き、家々の門柱に押しぬれども、地震は止まず。（中略）「こ

の哥は、むかし慶長の地震に、其時の人となへ侍べりし」と、ふるき人は語られ侍べり。
(以下略)

また同年に成立した『太極地震記』(著者不明)には伏見地震についての記述があり、その中で「和歌を押す」行為も書かれている。

【史料9】太極地震記⁽²¹⁾

○後陽成院慶長元年丙申七月十二日夜子丑時大地震、諸国以テノ外ト雖モ、別シテ五畿内甚シクシテ、死人ノ数四万五千。其時御門ヨリ御詠二首出テ、比屋門戸ニ之ヲ張ル。

○むねは八ツ門ハ九ツ戸は一ツ身はいざなぎのかどにこそすめ

○千はやふる神のいがきも三日月のゆりやなをさんわが身なりけり

上記二史料は共通して、禁中から御詠が出たとしている。つまり、地震後に出た和歌(寛文二年の事例ではないし二種類)は天皇の詠んだ歌であるというのだ。しかし『言経卿記』からそのようなことを確認することはできず、実際に伏見地震時に御詠が出たのかは分らない⁽²²⁾。しかし古橋信孝氏によれば天皇の言葉には呪的な力があり、宣命や和歌は呪的な天皇の言葉をみせるものだと考えていいだろうという⁽²³⁾。仮にこれらの和歌が御詠ではなかったとしても、天皇の詠歌がみせる呪的な力への期待から御詠であるという伝承が生まれたのではないだろうか。

以下より、具体的に「和歌を押す」という行為について考察を加えていくことにしよう。

(一)「和歌を押す」ことの意味

『言経卿記』に書かれている三種類の和歌は、(紙あるいは木の)札に書かれ、呪符(護符)のように利用されている。呪符の使い方としては、たとえば鎌倉期に描かれた『春日権現験記絵』に牛王宝印を貼り付けているものがあり⁽²⁴⁾、またルイス・フロイス著『日欧文化比較』中の「第五章 寺院、聖像およびその宗教の信仰に関すること」の一つとして、次のような項目がある。

【史料10】日欧文化比較 第五章 寺院、聖像およびその宗教の信仰に関すること⁽²⁵⁾

23 われわれは聖像と護符を部屋の中に置く。日本人はこれらを道路に面した門口に釘

付けにする。

このような呪符は、押す（貼る）という形で用いられることがある。『言経卿記』の他の個所にも呪符を押して用いている事例がある。それは慶長九年正月一八日条の記事で「一、如例年牛玉札トモカホニテ押之、」とある。「牛玉札」とは牛王宝印のことであり、やはり押している。保立道久氏は『松崎天神縁起』『春日権現験記絵』中の牛王宝印の使い方に注目し、全て扉の前に押されていることから、「鎮宅の呪符として、そこに神を勧請し納戸を火災や盗難から守るために」使用されたとする⁽²⁶⁾。場所は違っているものの、呪符（護符）を押して使用するというのは、しばしばみることのできるものであるとこれらの事例からいえる。

『言経卿記』中の地震後に押された呪符や【史料10】の事例は、門に押しているが、なぜこれらの呪符（護符）は門に押すのであろうか。中野豈任氏は門口（戸口）に札を押すことは、境界における呪的儀礼の一つとみることができるとしている⁽²⁷⁾。この場合の境界は、実際にある家の敷地の境界というよりは、むしろ精神的に家内を聖域化し安定を求めるために想定された境界と考える方がよいだろう。『春日権現験記絵』には家の門口における呪的儀礼の様子を描いた部分があるが、これも境界での儀礼だ。つまり門口は一種の境界と見立てられていたのだ。そして門口で呪的儀礼（境界儀礼）をおこなうことにより、家内における災難除けの役割を期待したわけである。

以上のことより、伏見地震後に言経や町で呪符を住宅の門や木戸口に押したのは、地震再来の際にも無事であることへの祈りが込められており、地震除けの役割が期待されていたと考えられる。

（二）松竹の葉を挿すことの意味

さて、この札を押す際に一緒に松竹の葉を挿していると書かれているが、これはどういうことだろう。松に限っていえば、永久不変・長寿・若さのシンボルとみられており、和歌の中でも長寿の願いとして詠み込まれていることを瀬田勝哉氏は指摘する⁽²⁸⁾。しかしそれでは竹を挿した説明にはならない。松と竹がセットになっているところに意味があるのではないだろうか。すると、これは門松の表象とみることはできないか。吉川正倫氏によれば、門松には歳の神を迎えるという松迎えの意味があるという⁽²⁹⁾。正月でもないのに門松（の表象）が出てくるのはおかしいようにも思えるが、この場合には流行正月としての門松が出てくると考えるのが妥当である。流行正月とは、世の中の悪い年に、正月でもな

いのに門松などを立て、早くその年を終わらせ翌年にしようとする呪術的行事のことである。つまり、呪符と共に松竹の葉を挿すことによって門松を立てる代わりとし、流行正月であることを表そうとしたと考えられる。

五 和歌に込められた祈り

伏見地震の際に現れた『言経卿記』中にある三種類の和歌は、地震に対しての呪歌であった。そしてそれらの和歌を呪符として門に押し、地震除けを期待しているわけだが、各歌についてもやはり地震除けの祈りが込められているのだろうか。

まず、あらためて『言経卿記』に記述されている和歌をみてみよう。

言経卿記 文禄五年閏七月十五日条【史料2】より抜粋)

一、地震ニ付而、去十三日ヨリ哥トモ有^レ之、門ニ押^レ之也、誰人ノ所意不^レ知^レ之トモ町々押^レ之、松竹ノ葉ヲ同サシ了、

ム子は八ツ門ハ九ツ戸ハ一ツ身ハイザナミノ門ニコソスメ

チハヤフル神ノイカキモ三日月ノユリヤナヲサン我身成ケリ

ユルクトモヨモヤヌケシトカナメ石ノカシマノ神ノアランカキリハ

各歌の意味をとっていくと、最初の歌は「棟は八つ、門は九つ、戸は一つ（の建物）で、自分自身はイザナミの門に住む」、また二番目の歌は「三日月が揺れて（満月に）直るように、私も神（の住む場所）の齋垣を結び直したい」となる。三番目の歌は有名な「要石の歌」と呼ばれるもので、「鹿島の神がいる限りは、揺れたとしても要石が抜けることはないだろう」という意味である。

黒田氏によれば、地震と要石が関連性を持つようになるのは中世（一三世紀）であるという⁽³⁾。そうすると、他の二つの歌についても中世に生み出されたものと想定することが可能ではないだろうか。そこで以下において、各歌の内容について解釈し、人々が「和歌（呪歌）を押し」行為に期待したことは何だったのかを考察してみようと思う。なお、三番目の「要石の歌」については黒田氏の詳細な検討があり、またこの歌が地震鎮めのものであることは疑うべくもないと思われるので、今回の考察からは省くこととする。

(一) ム子は八ツ門ハ九ツ戸ハ一ツ身ハイザナミノ門ニコソスメ

この歌では何らかの建造物を想像させる内容が詠み込まれている。ではその建造物とは何か。結論からいえば、それは具体的に現在あるような建物ではなく、架空の建造物であろうと思われる。「棟は八つ」とは八棟造という神社の本殿づくりの一つを指し、「門は九つ」は九門、すなわち皇居の門の表象としての言葉である。つまり、その建造物とは神の住む建物であり、そこは聖なる場所であることが詠み込まれているのである。

聖域が詠み込まれているのと同時に、この歌では「イザナミ」という神の名が詠み込まれているが、なぜ「イザナミ」なのだろうか。これについては、「イザナミ」の持つ様々なイメージを検証することによってその理由が明らかとなる。

先に、黒田氏が地震と要石が関連性を持つようになるのが中世であることを指摘しているのを受け、「要石の歌」以外の歌も中世に生み出されたものが関連しているのではないかと想定した。その点から考えると、「イザナミ」のイメージとして二つのものが浮かび上がる。一つは「イザナミ＝皇祖神」というものである。伊藤喜良氏は天皇には「戦乱・災害を防ぐ」という国土安穩、病気や怨霊を阻止するというような生命保全、現世利益をまねく福の招来」をもたらす呪術的権威が期待されていたとする⁽³¹⁾。つまり「イザナミ」にも天皇の持つこのような呪術的権威が期待されたのではないかと考えられるのだ。

もう一つは「イザナミ＝魔王」というイメージである。彌永信美氏によれば、中世の神話解釈(中世神話)における「イザナミ(イザナキ)」には魔王のイメージがあるという⁽³²⁾。それは次の史料から読み取ることのできるものである。

【史料11】太神宮参詣記⁽³³⁾

一。俗ノ云ク。此事实ニノカレカタキ難也。但シ又。或人ノ申し侍シハ。第六天ノ魔王トハ伊舍那天ノ事也。伊舍那ト申ハ、即伊佐奈岐尊ノ御事也。其説同キ也。不_レ可_レ疑ト申侍リキ。

これは鎌倉期の僧・通海の『太神宮参詣記』という史料である。ここでは第六天魔王とは伊舍那天のことであり、「イザナキ」のことだとする。また、伊舍那天が「イザナキ」のこととする史料として、北畠親房の『神皇正統記』がある。

【史料12】神皇正統記⁽³⁴⁾

其後火神軻俱突智ヲ生マシ／＼〔シ〕時、陰神ウラミイカリテ、火神ヲ三段ニキル。ソノ三段ヲノ／＼神トナル。血ノシタ、リモノ、イデ神トナレリ。経津主ノ神（斎主ノ神トモ申。今ノ檄取ノ神）健甕槌神（武雷ノ神トモ申。今ノ鹿嶋ノ神）〔ノ〕祖也。陽神猶シタヒテ黄泉マデオハシマシテ〔サマザマノ〕チカヒアリキ。陰神ウラミテ「此国ノ人ヲ一日ニ千頭コロスベシ。」トノ給ケレバ、陽神ハ「千五百頭ヲ生ベシ。」トノ給ケリ。ヨリテ百姓ヲバ天ノ益人トモ云。死ルモノヨリモ生ズルモノヲホキ也。陽神カヘリ給テ、日向ノ小戸ノ河櫛ガ原ト云所ニテミソギシ給。コノ時アマタノ神化生シ玉ヘリ。日月神モコ、ニテ生給ト云説アリ。伊弉諾尊神功スデニヲハリケレバ、天上ニノボリ、天祖ニ報命申テ、即天ニトゞマリ給ケリトゾ。或説ニ伊弉諾・伊弉冊ハ梵語ナリ、伊舍那天・伊舍那后ナリト云。

以上の史料より、「イザナミ（イザナキ）」は中世には魔王というイメージを持たれていたということになる。

以上二つのイメージから考えると、この歌では聖なる場所があり、その中でも「イザナミ」のいる場所にいるので、地震を起こす何かが寄りつかない、地震を避けることができるというように解釈することができる。「イザナミ」の持つイメージとして、皇祖神と魔王というのは一見すると相反するもののだが、どちらであっても「イザナミ」のいる場所にいるので地震を避けうることになり、結論としては同じことになる。つまり人々はこの歌に地震除けの祈りを込めていたのである。

寛文二年以降の事例では、【史料8】【史料9】のように「イザナミ」は「イザナキ」に変わっている。どちらが正しく、あるいは「イザナミ」から「イザナキ」に変化したとは軽々にいうことはできないが、上記の二つのイメージからはどちらであっても問題はないように思われる。

(二) チハヤフル神ノイカキモ三日月ノユリヤナヲサン我身成ケリ

「千早ふる」というのは枕詞で神にかかる言葉であり、例えば伏見宮貞成親王の日記である『看聞日記』応永二八年（一四二一）七月一日条に、次のような和歌がある。

【史料13】 看聞日記 応永二八年七月一日条⁽³³⁾

十一日、晴、伊勢宮人一人来、去六月七日伊勢有⁽³⁴⁾御詫宣云々、去々年蒙古襲来之時神明依⁽³⁵⁾治罰⁽³⁶⁾異賊若干滅亡了、其怨靈成⁽³⁷⁾疫病⁽³⁸⁾万人可⁽³⁹⁾死亡⁽⁴⁰⁾云々、神歌四首有⁽⁴¹⁾之、如⁽⁴²⁾此事いたく申歟之間不⁽⁴³⁾及⁽⁴⁴⁾信仰⁽⁴⁵⁾、然而神歌記⁽⁴⁶⁾之、

千はやふる神も居墻はこえぬへしむかふ箭さきにあくまきたらず

ちはやふる神のまへなるやふさめ引⁽⁴⁷⁾とはみれとはなつ箭もなし

風ふくと梢うこかし花ちらしあらふる神のあらんかきりは

千はやふる神のしき地に松うへて松もろともに我もさかへん

ここでは疫病に対して、伊勢神宮の御託宣としての「神歌」四首が見られる。⁽³⁸⁾『言経卿記』の「チハヤフル」の歌もそうだが、このような「神歌」では神の「イカキ(齋垣)」というのが、大変意味を持っているように思われる。神の住む場所(聖域)との境界としての「イカキ」の存在、それは結界の役割を持つ。『看聞日記』中の「千はやふる」の歌では神が「居墻」を越えただろうといい、『言経卿記』中の「チハヤフル」の歌では神の住む地の「イカキ」を結い直そうというのである。神のいる聖域を区切る齋垣は、どちらの場合にも象徴的に用いられているわけだが、『言経卿記』中の歌で「イカキ」が詠み込まれていることには、重要な意味があるように思われる。「和歌を押す」という行為は、家内を一種の聖域化しようということを目的としており、門口がその境界となる。そして和歌中の「イカキ」は正に聖域との境界を示すものである。ここから、「イカキ」を詠み込むことは、「こは聖域なのだ」ということを改めて確認することになり、「和歌を押す」ことの目的を強める意味をもっていると考えられる。

さて、この和歌で注目されるのは「揺りや直さん我が身」という箇所である。この歌が地震に対しての呪歌である以上、地震と何らかの関わりのある内容を詠んでいるのだろうと考えられる。私は、ここに二つの意味が詠み込まれているのではないかと考えている。まず「揺りや直さん」は「揺り直し」ということであり、地震の際に唱えられた呪文に通じる言葉であるということが挙げられる。謡曲『道成寺』には、鐘が落ちた場面後の間狂言として次のような台詞がある。

【史料14】 道成寺⁽³⁷⁾

さてもさてもしたたかな鳴りやうであつた。某は地震かと思つて揺り直せ揺り直せと云

うて這ひ廻うて遁げた。今一人の者は何としてかしらぬ。

(中略)

いやいや神鳴ではあるまい。ことのほか地響がしたに依つて地震かと思うて揺り直せ揺り直せというたことぢや。

この『道成寺』の間狂言で地震に対しての呪文として「揺り直せ」という語をみることができる。「揺りや直さん」とは、地震に対しての呪文を詠み込んだものなのである。

もう一つは、私自身を「揺り直」したいという歌の解釈からは、自分自身を立て直したい・やり直したいとの意味が考えられる。この場合の「我身」とは、「和歌を押」した人のことであり、特定の人物を指す語ではないと思われる。「和歌を押」という行為は、個人(広くともその家の者)だけを対象とした祈りであるが、これが世間に広く流布することによって、個人の立て直し(やり直し)は世間の立て直しになり、「世直り」へと変化していくのだと思われる。アウエハント氏は地震を「世直し(世直り)」と表現するのは室町時代頃からあったと推測しており、⁽⁸⁾網野善彦氏はその推測が十分にありうるものだと評価している。⁽⁹⁾しかしこの和歌からは「世直り」の意味を見出すことは難しい。地震のことを「世直り」と表現することが室町期まで遡りうるのかは分らないが、少なくともこの事例でそこまでいうことはできないだろう。

松竹の葉を挿すことは、流行正月を表そうとしているのだと想定したが、これは世の中のやり直しを意味している。一方この「チハヤフル」の和歌からは地震鎮めなどと同時に、自分自身のやり直しの意味が詠み込まれていると考えられる。「押」された和歌が個人(家内)の立て直しを、挿された松竹の葉が世間のやり直しを表しており、役割の分担が成り立っているのである。

おわりに

以上、『言経卿記』から伏見地震時の震災対応をみてきた。山科言経は伏見地震時には、勅勘中で市井で生活していた。そのため市井の様子をつぶさに観察・聞き出し・記録することが可能であった。そのように市井を観察した結果として『言経卿記』には、民衆の震災対応として四つのものを見出すことができた。まず避難があり、地震小屋を設けたのだが、これは地震発生以前から道具を用意していたことを想定することができた。現代でい

うならば、仮設住宅が地震に備えて準備されているようなものかと思われる。次に盗人用心のために夜番が置かれ、そして地震再来の噂が流れた。地震後の流言飛語というとあまりいい印象を与えないが、噂が流れることによって迅速な避難が可能となり、噂・流言というのも一種の対応であったということができよう。四つの対応を挙げたわけだが、まず避難があり、次に盗人用心、地震再来の噂があつて、最後に「和歌を門に押す」という順番でおこなわれたと考えられる。この順におこなわれたこともまた、意味のあることであつたかと思われる。

四つある民衆の震災対応の中でも、「和歌を門に押す」という行為は大変注目される。これは、門口という一種の境界を守ることによって、家内における災難除け（地震除け）を期待したものであつた。伏見地震直後より、巷には地震再来の噂が流れた。人々はその噂に対して不安感を抱いていたはずであるが、この和歌を書いた呪符を門口に「押す」ことによって安心を得ようとしたのである。現代からみればおまじないの類にしか過ぎないが、当時の人々にとって「和歌を押す」ということは非常に現実的な対応だったのだ。

『言経卿記』には三種類の和歌が書かれていたわけだが、それはただ地震除けの祈りが込められているだけではなかつた。地震をきっかけにして、自分自身を立て直すという人々の意思を見出すことができた。そこには地震の恐怖に打ち震えるだけではなく、地震後の立ち直り、震災復旧への人々の強い意志が現れているように思われる。「ム子ハ八ツ」の和歌で地震を除け、「チハヤフル」の歌で自分自身を立て直し、「ユルクトモ」の和歌で地震が起きても安心だといっている。地震後に現れた和歌は三つがそれぞれ役割分担されており、うまい具合に組み合わさっているといえる。これらの和歌は三種類あることに意味があつたのだ。

註

- (1) ①西山昭仁「文禄5年の伏見地震直後の動静―公家・寺社・朝廷を中心として―」(『歴史地震』第一〇号、一九九四年)。②西山昭仁「文禄5年の伏見地震直後の動静②―武家・民衆を中心として―」(『歴史地震』第一号、一九九五年)。

- (2) 本章を論文として発表した二〇〇六年以降におこなわれた、伏見地震に関する研究には次のようなものがある。①下川雅弘「鎌倉期から江戸初期における地震災害情報」(『歴史地震』第二三号、二〇〇八年)。②寒川旭『秀吉を襲った大地震 地震考古学で戦国史を読む』(平凡社新書、二〇一〇年)。③三枝暁子「天正・文禄の大

地震と京都改造」(『年報都市史研究 20 危機と都市』山川出版社、二〇一三年)。

④小野映介・佐藤善輝・矢田俊文・海津颯「徳島県撫養地区における塩田開発と1596年の地震との関連性」(『歴史地理学』第五八巻第三号、二〇一六年)。①は中世から近世初期の間に書かれた日記をもとに災害情報の伝達・収集手段を検討したものが、内容は事例を列挙したにとどまるもので、具体性に欠ける印象がある。②は地質調査をもとに歴史地震を研究したものである。一般向けの書籍だが、寒川氏のこれまでの調査成果がもたれていることから、「地震考古学」とよばれる分野への入門書として位置付けることができるだろう。③は秀吉による都市京都の「改造」を地震との関係で論じたもので、都市史の分野から歴史地震をあつかったものとして位置付けられる。④は地理学・歴史学の研究者の共同研究で、塩田開発と地震の関係について述べている。震災対応・復旧過程という西山氏や本章の論点の流れに沿うものといえるだろう。

(3) 西山氏は註2前掲論文①で『言経卿記』の記述をもとに本願寺寺内町での人々の動静について述べているが、「和歌を押す」行為についてのみ触れていない。

(4) 都司嘉宣・山本賢「災害文化の成立―地震と鹿島信仰―」(科学研究費研究報告書『災害多発地帯の「災害文化」に関する研究』、一九九三年)。

(5) 黒田日出男『龍の棲む日本』(岩波新書、二〇〇三年)。

(6) 西山昭仁「文政十三年(1830) 京都地震における震災対応」(『歴史地震』第一七号、二〇〇一年)。

(7) 註5前掲書。

(8) 今谷明『戦国時代の貴族―「言経卿記」が描く京都―』(講談社学術文庫、二〇〇二年。初出は一九八〇年)。

(9) 花田雄吉『「言経卿記」考』(高橋隆三先生喜寿記念論集刊行会編『古記録の研究』、続群書類従完成会、一九七〇年)。飯倉晴武『日本史小百科・古記録』(東京堂出版、一九九八年)。

(10) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記 七』(岩波書店、一九七一年)。
(11) 註10参照。

(12) 荻原尊禮編『古地震』(東京大学出版会、一九八二年)。

(13) 弥永貞三・鈴木茂男校訂『史料纂集 義演准后日記 第一』(続群書類従完成会、一九七六年)。

- (14) 川嶋將生「山科家をめぐる散所と河原者」(『洛中洛外』の社会史)思文閣出版、一九九九年。初出は一九九六年。

- (15) 註1前掲論文①。

- (16) 水原一考定『新定 源平盛衰記 第六卷』(新人物往来社、一九九一年)。

- (17) 山本武夫校訂『史料纂集 慶長日件録 第一』(続群書類従完成会、一九八一年)。

- (18) 三谷栄一「おまじないと和歌」(『実践国文学』一九号、一九八一年)。

- (19) 塙保己一編・太田藤四郎補『続群書類従 第十五輯下 和歌部』(続群書類従完成会、一九五七年)。

- (20) 谷脇理史・岡雅彦・井上和人校注・訳『新編日本古典文学全集 六四 仮名草子集』(小学館、一九九九年)。

- (21) 『江戸科学古典叢書十九 太極地震記・安政見聞録・地震豫防説・防火策図解』(恒和出版、一九七九年)。

- (22) 『小槻孝亮宿禰記』(宮内庁書陵部蔵) 文禄五年閏七月一日日条をみると、割注に「ム子ハ八門ハ九戸ハヒトツ身ハイサナキノカトニコソスメ、門ケニ地震之歌トテオスナリ」と記されており、しかもこの歌は「禁中ヨリ出云物」であるとの記載もある。この記述を信じるならば、言経が門に押した歌も天皇の御詠であつたと考へることができる。ただし、この割注は他の記載に比べて墨が薄く、一部が十五日条にかかっているというように、自筆であるのかはつきりしない点がある。一方で、本文の続きには「門ケ地震歌トテオス也。ム子ハ八門ハ」が見せ消しになっていることから、この割注についてはさらに検討する必要がある。なお『言経卿記』では「イサナミ」とされていた部分が『小槻孝亮宿禰記』では「イサナキ」とされている。この表記は『かなめいし』や『太極地震記』と同じであるが、『小槻孝亮宿禰記』の割注が自筆であつたとすれば『言経卿記』のほうの誤記であつた可能性もありうる。第五節で歌の解釈をおこなっているが、仮に言経が誤っていたとしても本章での論旨に大きな影響はないと考へる。

- (23) 古橋信孝「天皇の言葉と和歌」(網野善彦・樺山紘一・宮田登・安丸良夫・山本幸司編『天皇と王権を考へる 第九卷』岩波書店、二〇〇三年)。

- (24) 小松茂美編『続日本の絵巻 十三 春日権現験記絵(上)』(中央公論社、一九九一年)。

- (25) ルイス・フロイス著(岡田章雄訳注)『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波書店、

- 一九九一年)。
- (26) 保立道久『中世の愛と従属―絵巻の中の肉体』(平凡社、一九八六年)。
- (27) 中野豈任『祝儀・吉書・呪符―中世村落の祈りと呪術―』(吉川弘文館、一九八八年)。
- (28) 瀬田勝哉『木の語る中世』(朝日新聞社、二〇〇〇年)。
- (29) 吉川正倫『門松考』(『大手前女子大学論集』第一〇号、一九七六年)。
- (30) 註5前掲書。
- (31) 伊藤喜良「中世における天皇の呪術的権威とは何か」(『日本中世の王権と権威』思文閣出版、一九九三年。初出は一九八六年)。
- (32) 彌永信美「第六天魔王と中世日本の創造神話(上)」(『弘前大学国史研究』第一〇四号、一九九八年)。
- (33) 埴保己一編・太田藤四郎補『続群書類従 第三輯下 神祇部』(続群書類従完成会、一九五七年)。
- (34) 岩佐正・木藤才藏校注『日本古典文学大系 87 神皇正統記 増鏡』(岩波書店、一九六五年)。
- (35) 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 看聞日記二』(明治書院、二〇〇四年)。
- (36) この『看聞日記』の条には疫病に関連して「去々年蒙古襲来之時」の話が記されている。これは応永の外寇と呼ばれるものである。応永の外寇については西山克氏などの先行研究に詳しい(「応永の外寇異聞」『関西学院史学』第三一号、二〇〇四年)。なお、この西山氏の論文には『看聞日記』のこの条が紹介されており、伊勢の宮人の語りは「外寇の誘発した社会的な危機を回収するのは、神歌を提示する伊勢の神しかないのだというメッセージ」であったとしている。
- (37) 「道成寺」(野上豊一郎編『解説 謡曲全集 卷四』中央公論社、一九八四年)。
- (38) アウエハント・谷川健一・宮田登「鯨絵の世界―都市民俗学の可能性を探る」(『月刊百科』第二一一号、一九七九年)。
- (39) 網野善彦「徳政雑考 アウエハント『鯨絵―民俗的想像力の世界』にふれて」(『中世再考―列島の地域と社会』講談社、二〇〇〇年、初出は一九八〇年)。

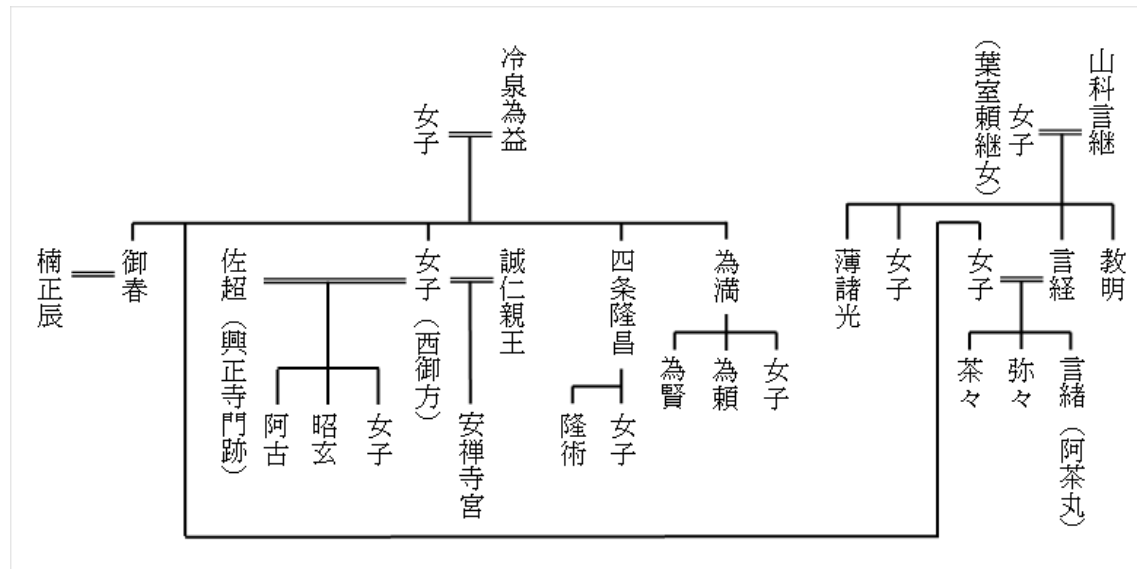


図1：山科言經關係略系図

第六章 醍醐寺座主・義演による災異解釈の背景

―文禄五年の降物現象を例として―

はじめに

文禄五年（慶長元年、一五九六）には地震災害のほかにも種々の災異が発生していたことが史料で確認できる。大風雨・洪水のような気象災害に加えて、日蝕や彗星の出現といった天変現象が起きている。天変現象は災害とは異なる。しかし発生すると祈禱をおこなうといった対処がなされている点に災害との共通性を見出すことができることから、現代のような科学的知識に乏しい時代には災害に準じた自然現象として扱われたと考えられる。天変の認識や対処・対応についてはこれまでも研究がなされてきた^①。

天変現象は史料上しばしば確認される現象であるが、文禄五年には天変現象とは異なる現象も発生していた。それは、空から砂や灰、毛が降ったという現象である。この降砂や降毛の記録については、小山真人氏が火山噴出物である火山灰や火山毛が降ったことを示していると指摘しており、同年に浅間山が噴火したとする史料の存在から浅間山噴火由来のものとする研究者もいる^②。この点は火山学や地質学の分野で重要な研究課題と考えるが、本章の主旨からは大きく外れるため、今回は特に検討しない。

通常空から降ってくるのではない砂や毛といった物が降ってきたことについて当時の日記には「不可思議怪異」と記されているが、注目されるのはこの現象に対して「怪異」という言葉が用いられていることである。近年、中世社会における怪異については盛んに研究がおこなわれており、本章でもその知見から学ぶところは多いと考えている^③。日記に降砂・降毛現象を「怪異」と記述した醍醐寺座主・義演は、これらの現象を「怪異」として認識するだけではなく、その発生要因について彼自身の解釈もおこなっている。高谷知佳氏は「怪異を切り口にすることで、政治・経済・文化にまたがる人びとの思考を、われわれは動態的にみてゆくことができる」と述べている^④。義演の「怪異」解釈の背景を探るとは彼自身の思考を探るだけではなく、彼の生きた時代の人々の思考をみることにつながっていくのだといえる。そこで本章では、降砂・降毛現象という「怪異」が義演によってどのように解釈されたのかを確認し、その背景にある彼の思考を考察することを目的とする。

なお本章では、降砂現象や降毛現象を怪異ではなく災異と呼んでいる。それは、自然現

象としての災害に準じるものとして降砂・降毛現象をあつかうことを意図してのものである。また、降砂・降毛現象をまとめて述べる際には「降物現象」と呼称している。

一 中世における降物現象認識

中世の記録には、数は多くないものの降物現象に関する記述が残されている。火山噴火にともなう噴出物に関するものもあるが、^⑦原因が分からず災異として扱われているものもある。災異とされた降物現象はどのように認識され、対処されたのか、義演の災異解釈について確認する前に、文禄五年以前の降物現象認識をみておくことにする。

災異としての降物現象を記録する史料では、ほとんどのものがただ災異の発生を述べているだけで、どのように解釈し対処したのかを記したものはあまり存在しない。その数少ない災異発生への対処の事例としてみられるのが、寛喜二年（一二三〇）の災異に対する「変異御祈」である。

【史料1】 吾妻鏡 寛喜二年十一月八日条・一日条^⑧

○八日乙未。晴。大進僧都觀基參^ニ御所^一。申云。去月十六日夜半。陸奥国芝田郡。石如^レ雨下云々。件石一進^ニ將軍家^一。大如^レ柚。細長也。有^レ廉。石下事廿余里云々。○一日戊戌。晴。勝長寿院内新造塔婆上棟。武州監臨云々。又被行^レ行^ニ変異御祈^一。今日。

巖殿觀音堂居引地云々。

ここでは將軍御所に参上した護持僧・觀基の話として、寛喜二年一〇月一六日夜半に陸奥国芝田郡（宮城県柴田郡）に石が降ったこと、大きさは柚の実ほどで細長く、二十里ほどの範囲に降ったと記されている。陸奥国での災異が觀基から伝えられた三日後に、「変異御祈」がおこなわれている。祈禱の具体的な内容は記されていないが、災異の発生に対して祈禱をおこなうのは通例だったといえることができる。寛喜二年には天変に対する「天変御祈」も数回おこなわれており、この年の事例からは、降物現象も天変のような変異として同じように扱われていたことが分かる。

鎌倉期に限らず、降物現象に対する祈禱はおこなわれていたのだと考えられる。それを示すのが次の史料である。

【史料2】園太暦 康永四年二月三日条^⑨

三日、晴陰不_レ定、兵庫頭宗長法師入来、謁_レ之、有_二雜談事等_一、近來諸社怪異以外事也、公家・武家無_二驚御沙汰_一、以外也、伊豆国三嶋社仏地回録、下野雨_レ石、鎌倉光物、八幡宮光物并鳴動、彼は重畳以外之由示_レ之、

康永四年（貞和元年、一三四五）に各地で起きた「怪異」の一つとして、下野国で石が降ったとの話が出ている。これらの「怪異」への対処を示す記事はなく、『園太暦』の記主・洞院公賢は公家・武家ともに「驚御沙汰」がないことに対してとんでもないことだと述べている。ここでいう「驚御沙汰」がどのような対処を指すのかは分からないが、祈祷の命令だった可能性が考えられる^⑩。

このように、降物現象のような災異が発生した場合には祈祷の沙汰を含む対処が命じられるのが通例であったと考えられる。これは地震のような災害であっても同様で、災害が発生した場合には朝廷や幕府で卜占がおこなわれ、それを受けて寺社に対して祈祷をおこなうよう命じる。災異は災害と同じ対処をするべきものとして認識されていたということができるだろう。以上の事例では、卜占による吉凶の判断がなされたとの記述はない。しかし祈祷がおこなわれたということからは、何らかの判断はされていたと考えることができる。おそらく、降物現象への対処が記されていない場合でも吉凶を判断していたことが想定される。

二 文禄五年の降物現象

文禄五年に起きた降物現象については、いくつかの日記に記述が残されている。それらの記事からは、降物現象が伝聞による情報ではなく、記主たちが実際に目撃したものであったこと、降砂と降毛が別の日に起きた出来事だったことが分かる。

本章では、『義演准后日記』の記述を中心に降物現象の概要を確認していく。この日記は醍醐寺第八〇代座主であった義演が記したもので、文禄五年から没年に当たる寛永三年（一六二六）までの記載がある。約一年間の不記載期間はあるが、それ以外のおよそ三十年間は完全に記載されている。この日記では朝廷や武家の種々の動向、特に宗教儀礼などが詳しく記されている^⑪。文禄五年の降物現象のうち、最初に起きた降砂現象について『義演准后日記』では文禄五年六月二七日条に記載されている。

【史料3】義演准后日記 文禄五年六月二十七日条⁽¹²⁾

廿七日、霽、午半刻^{ヨリ}、喩者土器ノ粉ノ如クナル物天^{ヨリ}降り、草木ノ葉ニ相積^テ、曾以不^レ消、大地只霜ノ朝ノ如シ、不可思議怪異、非ニ只事^一、四方曇^テ雨ノ降カ如シ、今日伏見^ヘ唐人御礼云々、若さ様ノ故哉、尤不審^{／＼}、

五智院弟子夜前得度、為^レ礼師弟来、盃賜候、寺家繁昌、珍重^{／＼}、仮名帥、実名澄然云々、

二條殿并鷹司殿并上臈御局^ヘ、庭前林檎少々進^レ之、返書到来、親王御方来廿九日御移徙云々、

義演は降砂現象が確認された時刻を午半刻と記しているが、官務家・小槻孝亮の日記『小槻孝亮宿禰記』では未刻としており、⁽¹³⁾ここから昼のあいだに起きた出来事だったことが分かる。降ったものについては義演が「土器ノ粉」とするほかに「塵露」や「塵埃」⁽¹⁴⁾といった表現が確認され、細かな粒子だったことがうかがえる。また藤原惺窩の『南航日記』⁽¹⁵⁾には、草木に積もる光景が霜の降りたようであると書かれていることから、⁽¹⁶⁾白に近い色の砂だったと考えられる。さらに降砂の様子について『義演准后日記』は、雨が降っているように周囲は陰っていたとも記述している。降砂の影響で昼でも暗い状況だったらしい。この現象を当時の人々は「奇意疑ナス」と感じていた。⁽¹⁷⁾

一方で降毛現象は、降砂現象の約一ヶ月半後の閏七月に確認されている。確認された日は各日記で異なっており、『義演准后日記』が閏七月一四日条に記述している他は、すべて閏七月一五日条に記している。この点について『小槻孝亮宿禰記』では、降毛現象の確認された時刻が「八時程」すなわち午前二時と書かれており、河内将芳氏は「このころの感覚としては、夜明け前までが前日であり、したがって、降毛は、夜明け前からはじまつたとする」⁽¹⁸⁾。おそらく、『義演准后日記』の一日のずれは夜明け前に確認された現象であつたためなのだろう。

さて、降毛現象について『義演准后日記』には次のように記述されている。

【史料4】義演准后日記 文禄五年閏七月一四日条⁽¹⁹⁾

十四日、霽、地震未休、諸人不ニ安堵^一、家ヲ去^テ道路ニ臥也、

今日夜中大仏・東寺為^二見舞^一発足、仰天^レ斜、委如^二右記^一、帰路ニ伏見^ヘ越了、言

語道断次第也、全所一所^モ無^レ之、諸人猥雜、大路難^ニ通路^一一体也、大地裂^テ落入^了、伏見向野^{川中}也、去春^{ヨリ}大御普請御城出来、是以大地震^ニ石クラ^二間余^ニエ入^ト云々、依^レ之今日同伏見山^ニ御綱張云々、

伝聞、唐人為^二見物^一武者御用意延引云々、唐人堺津^ニ逗留、大略地震^ニ死去云々、実説歟、追而可^レ記^レ之、

次天^{ヨリ}毛降、似^二馬尾^ニ一、或一二尺、或五六寸計也、色^ハ白黒、又赤色ナリ、京都・醍醐同前^ニ降、

降ってきた毛の形状について、義演は馬の尾（の毛）に似ており、その長さは長いもので一・二尺、短いもので五・六寸ほどだったと記している。色も白や黒、さらに赤いものもあったという。この点については他の日記もほぼ同様の記述をしているが、『小槻孝亮宿禰記』では毛の特徴として青色の毛もあり、人髪（日記中には「白髪」とある）のような柔軟さがなく、曲げると折れてしまう堅さを持っていたと記している⁽²⁰⁾。なお、この降毛現象に対して神龍院梵舜の日記『舜旧記』は「不審奇特云々」と記しており、当時の人々がよく分らない不思議な現象として捉えていたことを読み取ることができる。

以上から、文禄五年に確認された降物現象についてまとめると、以下のようなことになる。降砂現象は六月二七日に確認され、砂の形状は土器の粉や塵・灰のようであったこと、降り積もるとまるで霜が降りたような光景となる白色のものだった。そして降毛現象は閏七月一二日の伏見地震以降に確認され、色は白・黒・赤・青、長さは長短混じっており、馬の毛や人の髪の毛のようだが柔軟さはないという形状のものだった。降物現象を義演は「不可思議怪異」と評しているが、『舜旧記』が「不審奇特」とすることとの共通性をみることで、当時の人々の降物現象認識を示している点で興味深い。

なお『当代記』には信濃などでも降灰があり、一寸ほども積もったとの記載がある⁽²²⁾。これについては『小槻孝亮宿禰記』にも「於^二禁中^一聞、於^二信濃国^一針力子降、長サ一尺斗ト云々、」とあることから⁽²³⁾、文禄五年当時から禁裏でもそのような情報が流布していたことが分かる。また『当代記』は、この降物現象について「其故にや秋毛少々凶と云々」と秋の収穫への影響に言及しており、降物現象が災異としてだけではなく、実害を伴う災害としても認識されていた点で注目される。

三 義演の降物現象解釈

文禄五年の降物現象に関する記述からは、当時の人々が不審さや不思議さを抱き、ここから「怪異」という認識に発展していたことを読み取ることができた。しかし義演は降砂現象について「不可思議怪異、非只事」と記しているだけではなく、「今日伏見へ唐人御礼云々、若さ様ノ故哉、尤不審／＼」とも記述している。彼は、降砂の起きた同じ日に「唐人」が伏見へ「御礼」に来たことを降砂現象の原因ではないかと解釈している。後日、彗星の出現とともに「旁凶事」と評していることと合わせて重要な記述といえる。⁽²⁴⁾

義演は降物現象の原因を、当時朝鮮出兵（文禄の役、壬辰倭乱）の講和交渉のために来日中だった明使節が伏見の豊臣秀吉のもとへ「御礼」に来たことと考えている。なぜ彼は明使節の「御礼」を問題にしたのだろうか。想定しうる理由は二つある。一つは、明使節が伏見へ来ていることから敷衍させて、義演は明使節の来日そのものを問題視する排外的な意識を持っていたため。もう一つは、明使節による「御礼」を重視して、義演は秀吉が伏見城で明使節と対面したことを快く思っていなかったため。義演はどちらの認識によって災異を解釈したのか、当時の社会状況を踏まえつつ考えてみようと思う。

（一）『義演准后日記』にみる明使節の動向

義演による災異解釈が排外的理由にあるとすれば、そこには義演自身の対外認識が介在していることが考えられる。特に来日中の明使節に対する義演の反応からは、彼が抱いていたであろう対明認識を把握することが可能なはずである。そこで『義演准后日記』に書かれている明使節の動向に関する記事から、義演の対明認識を考えてみたいと思う。

文禄五年の明使節の動向に関する『義演准后日記』の記事は、全部で一二件存在する（表1参照）。明使節の動向に関する最初の記事は、文禄五年正月二六日条に現れる。ここでは、明の「官人等」が三千人来日するとの伝聞情報が記されており、そのために対面の場として大坂城で用意がなされるとある。また二月九日条には、近く明使節が来日するため、全国の武士へ武者揃の用意をさせるとの情報が記されている。これらの情報は、同年一月に使節の一人である遊撃將軍・沈惟敬（のち、副使に昇格）が釜山から渡海したことに対応するものであると考えられる。⁽²⁵⁾

沈惟敬に続いて正使一行が渡海する予定だったが、四月二日に正使である李宗城が逃亡する⁽²⁶⁾という事件が発生したため、六月半ばに副使・楊方亨が正使となつて渡海している。

『義演准后日記』には正使逃亡事件に関する記述はないものの、七月五日程に「唐勅使」が近く上洛するとの記述があり、これが楊方亨の渡海に相当するものと考えられる。⁽²⁷⁾

正使渡海についての記述の前には、先行して来日した沈惟敬に関する記述が残されている。六月一九日程には、近く「大唐官人」が伏見へ召されるとの伝聞情報が記されており、この「官人」が沈惟敬に相当する。沈惟敬ら一行が堺から伏見へ入るまでの動きを、義演は逐一書き残している。

【史料5】義演准后日記 文禄五年六月二二日程～二五日程⁽²⁸⁾

廿二日、晴、唐人從^レ堺小阪へ罷越云々、 從^二東寺^一来廿五日大仏千僧会、大覚寺宮

御煩^ニ付、御出仕難^レ叶云々、仍書状到来、予又可^ニ出仕^一旨返答、大蔵卿返報、

廿三日、夕立、唐人伏見参著、為^二見物^一予罷向、依^ニ夕立^一八幡橋本^仁逗留了、

廿四日、千僧会為^二出仕^一、今夕^{ヨリ}罷向了、

廿五日、霽、千僧会○初真言宗如^レ例、導師予、理趣三昧セイ／＼如^レ常、調声普賢院アサリ堯政、讃慈心院俊長、今日自宗一向無人、六十余云々、則以^二宰相^一東寺へ急度可^レ申旨仰遣了、御齋如^レ常、予^ハ常御所へ罷向、只予計齋受用、其後宿坊へ早速罷帰了、予装束、襲衣・五帖ケサ・末ひろ扇・念珠・半装束如^レ常、

今日唐人伏見へ参著云々、仍從^二大仏^一直伏見へ罷越、見物了、

ユウゲキ將軍^ト申、最初幡持廿人計敷、馬上にて幡^ヲ持、^二行行烈^一、或鉾寶棒ノ様ナル物、或札^ニ大文字アル^ヲケタチタル物、或管弦ノ樂器持タル者種々也、名^ヲモ^レ知、右

悉馬上前行^二也^一、其後主人ユウゲキ、馬上笠^ヲサシカク^也、^笠ホコ、装束^ハ唐冠^{如常}、赤唐織物

也、結構也、笠^ヲサシタル衆七人敷有^レ之、其後^ハ金欄ノホウシ也、ヒラリト後^ハ二尺ハ

カリ垂タル也、其後^ハ笠^也、又[■]其下^ハ常ノ唐人ノホウシ也、衣装^ハ絵^ニ書タルコトシ、

上下三百人云々、下人^ハ一向ミクルシキ者^モ有^レ之、荷物種々也、先最初^馬二足引^レ之、

言語道断ノ生類也、

叡山松禅院弟子三位樽二荷・三種進上、不^レ寄^ニ存知^一、今夜一宿、五智院宗然法印明日弟子得度、樽一荷・両種遣^レ之、

六月二二日に、沈惟敬一行は来日中滞在していた堺から大坂に入り、翌日大坂を出立。雨の影響により伏見に入ったのは二五日になってからであった。この間方広寺千僧会に導師として出仕していた義演は、終了後に方広寺から直接伏見へと向かい、沈惟敬の伏見入

りを見物している。日記には使節の様子が詳細に記されており、注目される。なお沈惟敬は四日ほど伏見に滞在した後、二九日に大坂へ戻っていることも義演は記述している。

このあと、秀吉と明使節の対面は楊方亨の堺到着後に予定されたが、伏見地震のために延期されることとなった。⁽²⁹⁾【史料4】には、この地震によって使節の多くが死去したという噂が流れたとの記述がみえる。この噂について義演は「実説歟」として疑いを持っていたが、翌日には使節の下人が数名死亡したとの話が記述されており、⁽³⁰⁾噂を聞いた後に正確な情報を得ていたのだろうと考えられる。秀吉と明使節の対面は九月一日に延期されるのだが、この時の対面について義演はなにも記述を残していない。

以上が『義演准后日記』に記された明使節の動向である。注目されるのは、沈惟敬の伏見入りを義演が見物に行っていることである。この記事では持ち物や風俗について詳細に描き残しており、沈惟敬の装束を「結構也」、行列の連れている馬を「言語道断之生類」と賞賛する一方で、下人については「ミクルシキ者」もいると難じている点からは、義演が明使節をどうみていたのかを読み取ることができると思われる。方広寺千僧会から直接使節の行列を見物に行った点からは、義演が明使節への高い関心を持っていたことが分かる。行列をみた義演の感想からは、明使節に対して決して悪感情を抱いておらず、公平な立場で行列を眺めていたのではないかと考えることができる。

ただし、降砂が確認された六月二七日の記述には「唐人御礼」とあり、明使節の伏見入りは秀吉への「御礼」言上が目的であると義演が理解していたという前提があることは見逃せない。義演は、明使節へ好意を抱いていたというわけではないのである。義演は明使節の動向について詳細に記録しているが、その情報を義演は豊臣政権側から得ていたと推測される。だからこそ義演は明の使節派遣の目的を秀吉への「御礼」言上のためであると理解したのである。

なお、義演が記録をしていない九月の正使との対面について、『小槻孝亮宿禰記』文禄五年九月四日条には「唐人於大坂大閤御対面云々」と九月一日から三日まで対面がおこなわれたと記載されている。このことは、九月の対面が公になっていたことを示している。九月四日の『義演准后日記』をみると、「四日、」のあとは空白になっている。その理由は不明だが、義演は九月四日条に何かを記すつもりだったのかもしれない。

(二) 義演と豊臣政権

義演の得た明使節に関する情報は、豊臣政権からもたらされたものであり、ここからは

義演と豊臣政権の強い結びつきを読み取ることができる。彼は六月の災異解釈とは異なる解釈もおこなっており、その解釈も彼と政権の関係を考える上で重要なものであると思われる。

【史料6】義演准后日記 文禄五年八月一日条⁽³¹⁾

朔日、出世・坊官乃至披官^{マテ}各出仕、酒賜^レ之、如^レ常、珍重、

日蝕、巳午八分、早天^{ヨリ}陰雲、但蝕時刻晴^テ正現、御祈誰人哉、近年無其沙汰、珍事

／＼、

地震動ス、愛染護摩開白如^レ例、

太平御覽八百七十七卷咎微部^{四日敷}

雨^{フラス}土^{ラス}

東^{ケイ}易^カ傳^ニ曰、内^{ヨウラン}搖^ニ乱^ニ、百姓^ニ勞苦^{トキハ}、則^ニ天^ニ雨^レ土^ヲ、此^レ小^ニ人^ニ將^{スレ}起^{ラント}、是

レ^ヲ謂^ニ黃^ニ生^目、土^ニ失^{時ハ}性^ヲ、則^ニ雨^ニ塵^ニ土^ニ沙^ニ灰^ニ、皆^ニ土^ノ之^{ナリ}類^也、

尚書ノ中候曰^ニ、殷^ノ紂^時、十日^雨土^ヲ於^ニ毫[、]紂^{ツイ}竟^ニ国^滅フ、

雨^レ毛[、]同

隋^ス書^ニ曰、文帝^開皇^六年、京^{ケイ}雨^レ毛[、]如^ニ馬^尾、長^キ者^ハ二^尺、餘^ハ六^七寸、其^ノ月^ニ梁^{リヤウ}

土^{ケン}・半^{キン}文^{リウバウ}・割^{ホウ}助^テ以^ニ謀^反、一^{チウ}誅^{セラル}、明^年發^ニ二^十萬^人、築^{ツク}二^長城^ヲ、又^於テ

二^楊州^ニ一^開キ^レ山^ヲ造^テ流^{トク}、以^{トウ}通^運ス、衆^役繁^ク興^ル雨^レ毛^ヲ之^應ナリ也、

右書物、東福寺僧撰出云々、去六月廿七日天^{ヨリ}沙降、又去月十四日夜、白毛或黒毛降、

誠百姓ノ劳苦此時也、地檢^ラセラレ、剰^ニ晝^夜普^請ニ責^遣、片^時無^ニ安^事一^也、仍^雨土^無

余儀^一敷、次^ニ去年^開白^秀次^叛反、被^レ誅、今^年以^ニ數^萬人^ヲ、伏^見山^ヲ開^ク、衆^人群^集、

寔^レ毛^ヲ故^也、書物ト符合、奇特／＼、

ここで示されているものは、「東福寺僧」によつて『太平御覽』から「撰出」された漢籍の記事をもとにした災異解釈である。六月と閏七月に発生した災異が、漢籍の記事に合致しているとされ、「百姓」を檢地による増税や普請への動員で「責遣」したことが砂を降らし、さらに「叛反」と表現している文禄四年（一五九五）の秀次事件や伏見地震後の伏見木幡山築城への動員といったことが毛を降らしたのだとしている。義演は「東福寺僧撰出」の漢籍の記述が実際の社会状況と一致していることを「奇特」と評しており、河内氏は秀吉および豊臣政権批判と呼ぶことのできるこの解釈が義演の理解でもあったとしている。⁽³²⁾

義演自身が文禄五年の災異と漢籍記事の合致を述べていることから考えると、河内氏のいうように政権批判は彼自身の解釈でもあったのかもしれない。

八月一日の災異解釈は、漢籍を引用して豊臣政権ひいては秀吉の政治が原因であるというものである。しかし義演は秀吉と密接な関係にあった人物とされており、⁽³³⁾そのような人物が秀吉批判と受け取れる災異解釈をするとは、普通は考えられない。では、なぜ彼は政権批判となる解釈をしたのか。その理由を考えるために、あらためて義演と秀吉の関係性について確認しておく必要がある。

義演と秀吉の関係を考える上で重要なことは、彼がしばしば豊臣家のための祈禱をおこなっているということである。たとえば、義演は天正二〇年（文禄元年、一五九二）に東寺で朝鮮出兵のための祈禱をおこなっており、⁽³⁴⁾さらに豊臣家に連なる人々のための祈禱もおこなっている。⁽³⁵⁾祈禱以外にも方広寺千僧会への参列や、伏見地震により中止された方広寺大仏の開眼供養で呪願師を勤める予定であったなど、豊臣家や豊臣政権のために働く立場、いくなれば豊臣家（政権）の護持僧としての位置付けであったといえる。また義演の側からみれば、秀吉の推挙で准三后に任ぜられたことに対するお礼のための奉公、さらに醍醐寺再興に秀吉の協力を得るための手段という意味があっただろう。

義演による災異解釈について、河内氏は「秀吉や朝廷などから「恠異」への対処の一環として祈禱要請がなされる可能性」に備えたものとしている。⁽³⁶⁾秀吉に対する義演の立場が豊臣家の護持僧であったことから考えると、河内氏の説は妥当であるといえる。だからこそ、義演は秀吉や豊臣政権に関わるような災異に対して敏感に反応し、解釈をおこなったのである。

災異に限らず、義演は秀吉や豊臣政権に関わる噂・風聞の収集もおこなっている。文禄五年四月一〇日条には、伏見において「雑説風聞」があったと記されている。義演は具体的な内容を記していないが、山科言経の日記『言経卿記』の同日条をみると、この噂が政権の中枢にいた人物の一人・浅野長政に関するものであったことが分かる。⁽³⁷⁾つまり義演にとって、秀吉や豊臣政権に関わると解釈される災異や噂は把握しておく必要があったのである。逆にいえば、『義演准后日記』に記されている災異は秀吉や豊臣政権に関係すると義演が解釈したものと考えることができるだろう。八月の義演の解釈は、まさに秀吉側からの祈禱要請に備えてのものであったわけである。では六月の災異解釈はどうであろうか。これも秀吉や豊臣政権に関係すると解釈されたのだろうか。

(三) 秀吉と明使節の対面

文禄五年六月二十七日、正使・李宗城の逃亡によって副使へと格上げされた遊撃將軍・沈惟敬が伏見で秀吉と対面したことは、先に示したとおりである。義演は対面があったことのみを記しているが、その具体的な様子までは記述していない。この対面の様子についてはルイス・フロイスの報告書に記載があり、正使・李宗城逃亡事件に関する記述の後、次のように書かれている。

【史料7】一五九六年一月二十八日付、長崎発信、ルイス・フロイスの年報補遺⁽³⁸⁾

(前略 ※明正使・李宗城逃亡事件に関する記述)

その間に(小西)アゴスチノはもう一人の使節(楊方亨)を呼ぶために朝鮮に赴いた。(寺沢)志摩守(広高)は名護屋に帰り、そこから遊撃(沈惟敬)を伴って都へ赴き、(遊撃)は伏見で太閤から親切に、また大いに親愛を示して迎えられ、(沈惟敬)老人自身は少なからず狡猾であったが、またそれに応えて大いに好意的態度で報いた。

遊撃(沈惟敬)は贈物としてシナの錦織四百七十巻、滑らかな絹二十函、シナの黄金色の布二十巻、黄金七十金、深紅の絹織物百ポンド、駱駝二頭、駿馬二頭、騾馬二頭を(太閤)に献上した。

太閤はこれに応じて二度(沈惟敬)に饗宴をふるまった。一度はすべての用意と給仕を日本国風にした公的なものであり、もう一度は城の階層においてであり、すなわちただ婦人たちの給仕によるもので、食膳は真の黄金製であり、他の箇所でも記したようにわずかに二バルモ四方のものであった。米飯をもつてあった椀も黄金製であった。それから遊撃(沈惟敬)が堺の方へ退き、そこで使節を待つ許可を与えられるよう望んだところ、太閤は彼に二重ねの揃いの武器、二振りの刀剣と非常に精巧に作った短刀と槍を贈った。そして(太閤)はそれらをシナへ持参すべき贈物としてではなく、単なる友好の印しに、来るべきものの前触れとして呈したのである。これらは伏見で行なわれた。それゆえ太閤は、(遊撃沈惟敬)が退去する時は非常に美しくて高貴な船に乗り込むまで見送ったが、その船は川の上で何らかの遊興をする時にと、太閤のために建造されたものであった。我らの修道士某は、その船を見に行つて中に入ることがあるが、こう言っている。(その船)は全長二十ブラサあり、どこもかしこも寝室その他の場所を問わず一面に金箔で覆っており、櫂にいたるまで鍍金してあった、と。

(後略)

フロイスの報告書によると、沈惟敬から贈物が献上されたのに対して、秀吉が二度の「饗宴」すなわち対面をおこなったとある。沈惟敬から秀吉への贈物のうち「駿馬二頭」は、『義演准后日記』に記されている使節一行が連れていた「言語道断」の馬「二疋」と対応するものである。饗宴の豪華さや沈惟敬個人への贈物といったフロイスの報告書の記述からは、秀吉による明使節の歓迎ぶりを読み取ることができる。この点について明側の記録には「恭敬感激」とある⁽³⁹⁾。この対面でどのような会話が交わされたのかは分からないが、秀吉による歓迎の理由は義演が記しているように、明使節が「御礼」を目的としたものと認識されていたためだろう。秀吉にしてみれば、この対面は自らの威勢を海外に示すことを重視したもので、相手が副使であろうと明使節の一員である以上、力を誇示するためのイベントと考えたのかもしれない。

一方で、義演は豊臣政権側から明使節の動向に関する情報を得ており、六月に秀吉と対面した使節が正使ではないことを知っていた。それは沈惟敬を「ユウゲキ將軍」と記している点からも分かる。その使節に対して排外的悪感情を抱いていたわけではない彼が問題としたことは、この対面の内容だったのではないだろうか。義演はこの対面の内容や儀礼的な部分、すなわち秀吉が正使ではない沈惟敬を厚遇しすぎていることを問題と認識し、降参現象の原因と考えたと推測されるのだ。

天正一八年（一五九〇）に秀吉の全国統一を祝う目的で来日した朝鮮使節について、豊臣政権側は武家伝奏を通じて彼らの参内を希望しているが、その際には伝奏らの反対により実現しなかった⁽⁴⁰⁾。跡部信氏は異域や異人を穢れた存在とみなし、神聖である禁裏へ入れることを問題にしたのだろうとしているが⁽⁴¹⁾、一方で池内敏氏は慶長六年（一六〇一）に「高麗人」が宮中に入るなど外国人と天皇が接近している事例を紹介していることから、跡部氏の見解は採用できない⁽⁴²⁾。また、慶長二年（一五九七）七月二九日に「大唐」より渡来した虎・象が参内し観覧に供されている事例も、跡部氏の説を否定するものといえる⁽⁴³⁾。天正一八年の反対理由が穢れ観に基づくものではないように、文禄五年の事例もまた同様に穢れ観とは異なる理由の存在を示している。

跡部氏のように当時の穢れ観の影響は無視できないが、「御礼」言上の使節との理解や行列見物の例から考えると、義演が問題としたのは秀吉の明使節への対応であったと考えるのが妥当だろう。義演にとって、外交使節との対面における格（正使と副使の違い）の問題は重要だったのである。

四 義演の神国意識と災異解釈

ここまで文禄五年の災異をめぐる義演の解釈を考えてきたが、六月の解釈と八月の解釈で共通するのは、秀吉の外交や政治姿勢に反応した結果という点である。豊臣家の護持僧としての彼の立場から政治・外交に関わる情報を収集し、何か起きれば即応できるように備えている。文禄五年の事例からは、そのような彼の姿勢をうかがうことができた。

しかし、ここで考えておかなければならないことは、六月の解釈に明使節の来日を問題とする排外的理由はまったく考えられないのか、という点である。先にも触れたように、『義演准后日記』の記述からは彼の排外的姿勢を読み取ることはできず、「結構也」や「ミクルシキ者」といった表現からは、好意的ではないものの少なくとも悪意を抱いているというわけでもない様子をみることができた。豊臣政権側からの情報により、明使節の来日目的を秀吉に「帰伏」したことによる「御礼」のためであると理解していた義演であつたが⁽⁴⁴⁾、彼自身の対明認識や対外認識とはどのようなものだったのだろうか。そして、その認識は災異解釈に影響を及ぼしていなかったのだろうか。この点についても考えてみる必要がある。

慶長七年（一六〇二）一二月四日に、京都の方広寺大仏殿が炎上するという事件が起きた。義演もこの事件を記録しているのだが、そのなかで彼は文禄五年に発生した伏見地震による本尊の被害とその原因について言及している。そこからは、彼の対明認識を読み取ることができる。

【史料 8】義演准后日記 慶長七年一二月四日条⁽⁴⁵⁾

四日、晴、

辰剋大仏殿炎上、本尊鑄懸、仍本尊ノ身内ヨリ焼出云々、後光へ火付テ、其ヨリ堂内へ則時火災^{廻テ}午剋成^ニ灰燼^一了、^申本六十余州山木、只三時之間相果了、大閤数年之御劳功無^レ程滅了、時刻到来雑計、廻廊へ東方焼了、自余三方へ奉行衆馳走^ヲ以^テ消云々、照高院不^レ残一字焼失、妙法院へ無^ニ異儀^一、珍重、豊国明神以下被^レ除^ニ此災^一、誠神慮不思議々々、鳥辺之芝^モ焼云々、

一、本尊事、先最初大閤大伽藍御建立御発起之時、先最初異朝者来テ、本尊ヲシツクイニテ造立了テ、其後堂周備、^榮先年^木地震之時^{本尊}破裂[■]本尊云、後光^ト云、悉黒漆、

其上^ラ金薄^{ニテ}奉^レ押^レ之、光明殊勝非^レ所^ニ言詞^一、爰先年大地震之時、本尊破裂、既御供養之有増也、雖^レ然不慮大災^ニ依^テ被^ニ打置^一了、其後大閤御計^ト、善光寺之阿弥陀被^レ迎、被^レ奉^ニ安^一置彼本尊^一了、無^ニ幾程^一大閤御遠行^ニ付、為^ニ御遺言^一彼阿弥陀如^レ元善光寺へ帰入了、爰本尊モ無^ッ、慶長三年八月廿二日当堂供養千僧会舞楽御執行了、導師へ照高院道證准三后、其後秀頼卿仰^ト、本尊如^ニ南都^一以^レ銅奉^レ鑄了、最初興山上人令^ニ奉行^一テ、大座ノ蓮花御膝ノ辺^{マテ}鑄了、尔処天下大乱^ニ付、上人陰頓、仍文殊院申請令^ニ奉行^一、奉^レ鑄了、悉秀頼卿料物被^レ出^レ之了、但家康御下知也、剩四天・脇士^モ被^ニ仰出^一、多聞・持国ノ二天[■]并脇士^モ一尊出来了、本尊大都鑄懸云々、足代^モ少々取ヲロシト云々、最初^{ヨリ}良材ヲ以^テ造立アルヘキヲ、唐人申^ニ付^一シツクイニテ造立、地震^ニ破裂シテ氷タル土ノコトク成了、仍如^レ此度々変異非^ニ只綺^一、天魔之所行、仏法之衰微、歎^モ有^レ余者歟、

岳西院百ヶ日引上テ、於^ニ彼院^一山上・山下皆□仏事、

伏見地震によつて方広寺の本尊である大仏が破損したという被害については、たとえば『言経卿記』に「少々損」とあるなど、いくつかの史料から確認することができる。義演も地震直後の日記に被害を記述しているが、⁽⁴⁶⁾その際には記されていなかった「本尊破裂」の原因について、最初から良材で造立すべきところを「異朝者」「唐人」の言により漆喰で造立したためであるとしているのである（「異朝者」と「唐人」は同義であろう）。河内氏は方広寺大仏が漆喰で造立されたという点について、「同時代の信頼できる史料」が多くな⁽⁴⁷⁾く真偽は判断しがたいものの、完成を急ぐためにこのような形で造立された可能性があると指摘している。実際に方広寺大仏が漆喰で造立されたのかは分らないが、ここでは義演が漆喰での造立を「唐人」が提案したのだと理解している点に注目する。義演は、伏見地震による大仏の破損や慶長七年の大仏殿炎上といった方広寺で発生した災異が「天魔之所行」であり、さらに「仏法之衰微」との評価を述べている。

この義演の評価、とくに「仏法之衰微」とする背景には、彼の神国意識が反映されていると考えられる。慶長元年（文禄五年）に起きたいわゆる「二六聖人殉教事件」について、彼は日記に「仏法未地墮、神国奇特／＼」と記している⁽⁴⁸⁾。仏法に守られた神国という意識がここには示されており、方広寺での災異に対する評価に通じるものがあるといえる。つまり義演の神国意識とは、仏法と密接に関係したものであったのである。鍛代敏雄氏は、キリスト教国と「神国」を対置させる義演の神国意識が、当時の知識人や政治家に共通す

る国家論・宗教観を明らかにしていると述べている⁽⁴⁹⁾。そうであれば、神国意識に基づく義演による方広寺での災異解釈は、彼だけではなく他の知識人などにも共有されていた可能性も想定しうる。

方広寺の災異に対する義演の解釈には、神国意識が影響を与えていた。方広寺の災異では「唐人」に対する認識が示されていることから考えると、日記では直接的な表現をしていないが、文禄五年の明使節来日に対する彼の評価にもこの神国意識が影響を及ぼしていた可能性は考えられる。そして、降物現象に対する彼の解釈もまた、神国意識の影響を反映しているということができるかもしれない。義演は秀吉が明使節を厚遇していることを、使節の格の問題とともに問題にしたのだろう。

おわりに

文禄五年の災異に対する義演の解釈には、豊臣家の護持僧としての立場によるものと神国意識に基づいたものの二種類が存在していたと結論づけられる。この二つの間には何も関係がないようにみえるが、おそらく義演自身のなかでは単に並立しているわけではなく、密接に関係したものだのだと考えられる。北島万次氏⁽⁵⁰⁾は秀吉による宗教勢力の掌握について述べるなかで、豊臣政権が寺社や公家勢力の掌握を企図して聖護院道澄を媒介に天台系の神国意識を組み込み、政権独自の神国意識すなわち国土の加護と夷狄の排除を創出したとする⁽⁵¹⁾。これは義演の神国意識と同じものではないが、豊臣家の護持僧としての彼の立場を考慮すれば、まったく関係がないとはいえない。一見無関係な降物現象解釈をしているようだが、実際には相互に関連し合っていたといえるのだ⁽⁵²⁾。

この義演の降物現象解釈とは異なる認識も存在していた。民衆の間では、降毛を瑞祥として袋に入れて腰に帯びるものがいたという⁽⁵³⁾。神国意識や政治批判といった凶兆とは異なり、吉兆・瑞祥としての降毛認識である。本章ではこれ以上踏み込んで検討することは避けるが、このような瑞祥としての認識は安政二年（一八五五）に発生した安政江戸地震の際にもあらわれている。凶兆としてではない降毛認識については、さらなる究明が必要であろう。また今村明恒氏は、中近世の降毛と火山噴火の対応例を挙げるなかで「吾々の祖先は、降毛を龍の毛とし、龍毛の降るのは飢饉の兆とした。火山の本地が龍（菜花状噴煙と閃電との観察に基づき）であり、大蛇（火口湖の濁水の奔馳状態に基づき）であるとした思想と相俟つて、幾分の眞實を傳えてゐるやうである」と述べている⁽⁵⁴⁾。飢饉の予

兆としての降毛認識は、先に挙げた『当代記』の「其故にや秋毛少々凶と云々」と合致するものであり、この点も今後十分な検討を要するだろう。

最後に、文禄五年の降物現象に関する史料を一つ紹介したい。それは「(年未詳)南部利直書状」である。このなかで利直は次のように記している。

【史料9】南部利直書状⁽⁵⁴⁾

(前略)

一、廿日ノ日入時分より俄ニ大雨ふり出、風もふき、神なりなり候間、近年不覚ほとニ候、其元も左様ニ候哉、其雨ニつれ候て、先年伏見ニ者、唐人の参候時ふり候様成しろき毛ふり候、長さ五六寸候、月毛馬のかしらのことくニ候、先年ふり候よりハ、ことの外しろく候、先年伏見ニてハ、ミかきすなノ様成土にましりふり候、今度ハ雨につれふり申候、先年之ハ、おうは御覚可^レ有候、よき時分ニ下候て満足候、恐々謹言、

六月廿六日

利直(花押影)

^(南部利直)
彦八郎殿

彼は自身が目撃した雨に混じる砂・毛について述べるなかで、文禄五年の降物現象について触れている。注目されるのは、それが明使節来日という出来事とともに回想されている点である。利直自身も文禄五年に降物現象を目撃していたのだと思われるが、この現象が明使節来日と結びつけて記憶されているのだ。利直自身がどのような災異解釈をしていたのかは分からない。しかしここからは、原因と考えられる出来事と災異は一体のものとして記憶されるのだということができるだろう。もしかすると災害の記憶もまた、別の出来事と結びついて記憶されるものかもしれないが、この点は今後の検討課題としたいと思う。

註

- (1) たとえば山下克明「暦・天文をめぐる諸相」(『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年。初出は一九九三年)や大江篤「平安時代の「怪異」と卜占」(安田政彦編『生活と文化の歴史学8 自然災害と疾病』竹林舎、二〇一七年)が挙げられる。

- (2) 小山真人「歴史記録と火山学」(『東大出版会UP』第二八一号、一九九六年)。

(3) この点について、小山氏は風向きの問題から浅間山噴火による灰が京都で降るのかという疑問を呈している。この小山氏の疑問に対して、早川由紀夫・中島秀子両氏は夏期の日本上空での風向きから想定可能であるとし(『史料に書かれた浅間山の噴火と災害』『火山』第四三巻第四号、一九九八年)、樋口和雄氏は一九九四・九五(平成六・七)の風向きの事例から文禄五年にも同様の風が吹いたと述べている(『浅間山噴火 鳴動と火山灰のふるまひ—1596、1783年について—』『信濃』第五七巻第一一号、二〇〇五年)。

(4) 後述の【史料3】参照。

(5) 中世の怪異に関する研究で、本章が特に参考としたのは以下のものである。①西山克「怪異学研究序説」(『関西学院史学』第二九号、二〇〇一年)。②高谷知佳「『怪異』の政治社会学 室町人の思考をさぐる」(講談社、二〇一六年)。③木場貴俊「一七世紀の怪異認識」(『人文論究』第六二巻第二号、二〇一二年)。

(6) 註5前掲書②。

(7) たとえば、応永一五年(一四〇八)から応永一七年(一四一〇)にかけて那須岳が噴火した際には、硫黄などが降ったと『神明鏡』に記述されている。また天文一年(一五四二)の阿蘇山噴火では「火石」が降ったと『八代日記』に記されている。

(8) 黒板勝美編『新訂増補国史大系 第三十三巻 吾妻鏡 後篇』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

(9) 岩橋小弥太・斎木一馬校訂『園太暦 巻一』(続群書類従完成会、一九七〇年)。

(10) 「驚御沙汰」の用例としては、『吾妻鏡』貞応二年(一二二二)四月二十九日条が挙げられる。「若君出_レ御御西御台_一。有_二例手鞠会_一。此間令_レ懸_二鳥糞_一給。有_二驚御沙汰_一。占申。御病事之由云々。」手鞠会の中に鳥の糞がかかったことに対して「驚御沙汰」があったと記されており、具体的な対処として卜占がおこなわれている。卜占を受けた結果どうしたのかは不明だが、災異への対処として祈祷以前におこなわれたものとして注目される事例である。

(11) 飯倉晴武『日本史小百科・古記録』(東京堂出版、一九九八年)。

(12) 弥永貞三・鈴木茂男校訂『史料纂集 義演准后日記 第一』(続群書類従完成会、一九七六年)。以下『義演准后日記』とする。

(13) 『小槻孝亮宿禰記』(宮内庁書陵部蔵。以下『小槻孝亮宿禰記』とする) 文禄五

年六月二十七日条。

(14) 註13参照。なお「塵露」は灰のようなものをいう。

(15) 鎌田純一校訂『史料纂集 舜旧記 第一』（続群書類従完成会、一九七〇年。以下『舜旧記』とする）文禄五年六月二十七日条。

(16) 『南航日記』（国民精神文化研究所編『藤原惺窩集 下巻』思文閣出版、一九七八年復刊）文禄五年六月二十七日条。

(17) 註15参照。

(18) 河内将芳『落日の豊臣政権 秀吉の憂鬱、不穏な京都』（吉川弘文館、二〇一六年）。

(19) 註12参照。

(20) 『小槻孝亮宿禰記』文禄五年閏七月一五日条。

(21) 『舜旧記』文禄五年閏七月一五日条。

(22) 『史籍雑纂 当代記・駿府記』（続群書類従完成会、一九九五年）。

(23) 『小槻孝亮宿禰記』文禄五年閏七月二十七日条。

(24) 『義演准后日記』文禄五年六月二十九日条。

(25) 明使節の動向については、中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』（吉川弘文館、二〇〇六年）などを参照。

(26) 明正使逃亡事件については、以下で詳細に述べられている。①黒田省三「冊封日本正使李宗城の奔還に就て（上）——壬辰役研究の断章——」（『青丘学叢』第二〇号、一九三五年）。②黒田省三「冊封日本正使李宗城の奔還に就て（下）」（『青丘学叢』第二四号、一九三六年）。③佐島頭子「日明講和交渉における朝鮮撤退問題——冊封正使の脱出をめぐる——」（中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、一九九七年）。

(27) 楊方亨の渡海と同時期には、朝鮮の使節も日本に來ている。しかし『義演准后日記』には朝鮮使節に関する情報は一切見られない。ここからは、義演の対外認識や国家間の序列認識を読み取ることができると思われるが、今回は特に検討しないでおく。

(28) 註12参照。

(29) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』（鹿児島県、一九八三年）巻三七—九九号（文禄五年カ八月一〇日付島津義弘書状）。

(30) 『義演准后日記』文禄五年閏七月一五日条。

(31) 註12参照。

(32) ①註18前掲書。②河内将芳『秀吉の大仏造立』(法蔵館、二〇〇八年)。

(33) 義演は摂関家である二条家の出で、父は二条晴良、兄弟には二条昭実・鷹司信房がいた。将軍・足利義昭の猶子として醍醐寺三宝院に入室するが、これは室町期に満済が足利義満の猶子として入室して以来恒例化したものとされる(藤井雅子「室町時代における三宝院門跡の実態」『中世醍醐寺と真言密教』勉誠出版、二〇〇八年)。その後、義演は秀吉の推挙によって准三后に任ぜられるが、これは彼の兄である二条昭実と近衛信輔(信尹)による関白職をめぐる争いのなかで、秀吉が近衛前久の猶子として関白となったことにともなう代償としてのものだったと考えられている(生駒哲郎「世俗権力に左右される門跡寺院」神田裕理編『ここまでわかった戦国時代の天皇と公家衆たち』洋泉社、二〇一六年)。これ以来、義演は秀吉を後盾としている。文禄三年七月一日に東寺長者職に任ぜられたこと(『義演准后日記』文禄五年正月二七日条)もそのような事情によると考えられる。

(34) 義演著『五八代記』に記述されているが、筆者は未確認であるため、ここでは註33前掲生駒論文の記載によっている。

(35) 朝鮮出兵に関係するものとしては、秀吉の養女である前田利家女の依頼で、夫である宇喜多秀家のために出陣の祈念をおこなっている(『義演准后日記』慶長二年七月七日条)。そのほか朝鮮出兵とは無関係なところでも、慶長三年(一五九八)には秀吉の不例に対する祈禱をおこない(『義演准后日記』慶長三年七月七日条)、秀頼のためにも祈禱をおこなっている(『義演准后日記』慶長三年八月二九日条)。

(36) 註18前掲書。

(37) 浅野長政に関する噂について、日本の史料でその内容を記したものは確認できないが、ルイス・フロイスの年報補遺には関連すると思われる記述がある(松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第1期第2巻』、同朋舎出版、一九八七年)。フロイスはこの噂について、前年に発生した「秀次事件」に関連するもので、長政がその共謀者であると告発されたというものだったとしている。内容については吟味する必要があるものの、日本の史料で噂があったとする時期とフロイスの記述の時期が一致していることから、彼はある程度正しい情報を得ていたのだろうと推測される。

(38) 註37前掲書参照。

(39) 『明神宗実録』(日本史料集成編纂会編『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部3』国書刊行会、一九七五年) 万曆二四年八月癸丑条。

(40) 『晴豊記』(竹内理三編『続史料大成 晴右記・晴豊記』臨川書店、一九九四年) 天正一八年一〇月一九日条・一〇月二五日条。

(41) 「秀吉の朝鮮渡海と叡慮」(『豊臣政権の権力構造と天皇』戎光祥出版、二〇一六年。初出は二〇〇三年)。

(42) 池内氏は慶長六年のほかに、慶長一八年(一六一三)・元和二年(一六一六)の事例を挙げている(池内敏『大君外交と「武威」』第一章、名古屋大学出版会、二〇〇六年。初出は二〇〇五年)。なお註41前掲論文で跡部氏は論文の註でこの池内氏の著書を引用し、天正一八年の伝奏の反対理由は儀礼面での参内資格を問題としたものではないかと述べている。

(43) 『義演准后日記』慶長二年八月一日条。

(44) 『義演准后日記』文禄五年五月二五日条。

(45) 『義演准后日記』(弥永貞三・副島種経校訂『義演准后日記 第三』続群書類従完成会、一九八五年) 慶長七年一二月四日条。

(46) 『義演准后日記』文禄五年閏七月一五日条。

(47) 註32前掲書②。

(48) 『義演准后日記』慶長元年一二月一五日条。

(49) 鍛代敏雄『神国論の系譜』(法蔵館、二〇〇六年)。

(50) 北島万次氏「豊臣政権の対外認識と東アジア世界」(『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、一九九〇年。初出は「豊臣政権の対外認識」永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、一九八六年)。

(51) 生駒氏によれば、義演は室町期の醍醐寺座主・満済を強く意識していたという(註33前掲生駒論文)。三宝院門跡で准三后に宣下された立場の類似性がその背景にある。満済は室町幕府の護持僧であったことから、義演も豊臣政権の護持僧という認識を抱いていたと考えられる。

(52) 姜沆著(朴鐘鳴訳注)『看羊録』(平凡社、一九八四年)。記主である姜沆(一五六七―一六一八)は秀吉の朝鮮出兵(慶長の役、丁酉倭乱)の際に捕虜となり日本に連行された儒者で、『看羊録』は彼の俘虜生活の見聞録・報告書である。藤原惺窩との交流でも知られている(桂島宣弘「姜沆と藤原惺窩」 荒野泰典・石井正敏・村

井章介編『日本の対外関係5 地球的世界の成立』吉川弘文館、二〇一三年）。

(53) 今村明恒「降毛考」『地震 第一輯』第一六卷第三号、一九四四年）。

(54) 青森県史編さん中世部会編『青森県史 資料編 中世1南部氏関係資料』（青森県、二〇〇四年）。

表 1 :『義演准后日記』中の明使節関係記事一覧

No.	年月日	明使節の動向に関する事項
1	文禄 5 年 1 月 26 日	明より使節 3000 人来朝と伝聞。大坂城も内々に用意という。
2	文禄 5 年 2 月 9 日	明使節の来朝近しという。このため日本国中の武士へ、武具を用意するよう仰せあり。明の使節が見物するという。
3	文禄 5 年 6 月 19 日	明の使節が、近日伏見へ召されるという。
4	文禄 5 年 6 月 21 日	今日伏見城へ明使節が大坂より罷り越すという。しかしながら昨日の雨により延引し、明日用意するという。
5	文禄 5 年 6 月 22 日	明使節が堺より大坂へ罷り越すという。
6	文禄 5 年 6 月 23 日	明使節が伏見へ参着するとのことで、見物のために義演が伏見へ罷り向かう。夕立により八幡橋本に逗留した。
7	文禄 5 年 6 月 25 日	今日明使節が伏見へ参着。義演は方広寺大仏より直接伏見へ罷り越し、遊撃將軍の行列を見物。
8	文禄 5 年 6 月 27 日	今日伏見へ明使節がお礼をしているという。
9	文禄 5 年 6 月 29 日	明使節は今日大坂まで帰ったという。
10	文禄 5 年 7 月 5 日	明の勅使がまた近日上洛するという。そのため武者揃の御沙汰があったという。
11	文禄 5 年閏 7 月 14 日	地震のため明使節の武者御用意（武者揃）が延引という。明使節は堺に逗留するが、大方地震で死去したとの噂。
12	文禄 5 年閏 7 月 15 日	今回来朝している明使節も、下人が少々地震で死去したという。

第七章 紀行文『玄与日記』における地震記述の考察

はじめに

中世を対象とする歴史地震研究では、これまで史料から地震災害の実態を把握することを目指してきた。第一章や第二章のように、関連史料の増加や信頼性の再評価により実態把握は現在も続けられているが、近年おこなわれている研究では、地震を記述した史料そのものの分析に重点を置くものも出てきている。それは、文書や日記といった良質とされる史料の多くが京都周辺のことを記述していること、そのために研究対象となる地震が偏っていたこと^①に対して、地方で発生した歴史地震を研究する必要性から生じたものであった。

地方の歴史地震を研究するには、同時代に書かれた史料がほぼ存在しないことから、年代記などの編纂史料が利用されている。しかし、作成背景や史料の性格が十分に把握されないまま利用されることが多く、はたして研究成果を信用することができるのか、疑問の余地を残すものも見受けられる。そういったこともあり、史料自体を研究することには大きな意義があるということができるだろう。

近年の歴史地震史料の研究では、年代記を対象として記述の信頼性をどう評価するのかについていくつかの成果が出はじめている。田良島哲氏は年代記上の個別記事と同時代史料や他の年代記の記事を比較することで評価しようとし、片桐昭彦氏は年代記の書誌学的検討をおこなうことで信頼性を判断しようと試みている。^{②③}一方で、年代記以外の史料を研究対象としたものはほとんど存在しておらず、様々な史料に目を向ける必要があるといえる。

年代記のほかに歴史地震研究で用いられる史料の一つに紀行文・旅日記がある。中世の紀行文は国文学や文化史で研究テーマや対象として利用されてきた。歴史地震研究では、そこに描かれている宿の姿から、地震以前の様子を復元したり、^④地震による地域の変化を見たりするために利用されている。^⑤中世の紀行文では地震の発生や被害について記述したものは数が少なく、記述があった場合には貴重な情報として利用される。^⑥

本章では、このような紀行文の一つである『玄与日記』中にみられる地震記述を検討対象とする。記主である黒斎玄与（以下、玄与）の旅の目的、それは文禄三年（一五九三）に薩摩へ配流され文禄五年（一五九六）に赦免されて帰洛することになった近衛信尹（信

輔）に供奉することであった。玄与らは文禄五年七月一〇日に鹿児島を出立、佐賀関（大分県大分市）には八月三日、鞆の浦（広島県福山市）には八月一〇日というように、九州東部から瀬戸内海を船で移動した。途中風待ちや悪天候のために湊にとどまった日もあったが、八月一八日に大坂に到着している。また、その後も玄与は約半年間伏見を拠点に活動している。『玄与日記』には上洛の道中に玄与が見聞したことや各地での文化活動の様子などについて記述されている。そして玄与が旅した時期には、豊後地震・伏見地震が発生したことが分かっており、この日記には豊後地震の被害について記述が残されている。その一方で伏見地震についてはまったく触れられておらず、地震記述の有無がどこから生じているのか、検討する余地があると考えられる。

これまで『玄与日記』の記述の特徴や内容の精査といった日記自体を検討した研究は存在しなかった。しかし、この点に注目することは日記中の地震記述を検討する上で重要であると考ええる。そこで本章では、記主および史料について検討しつつ、地震記述から読み取れる被害の実態や、書かれた地震と書かれなかった地震の違いがどのような意図によるのかを考察する。

一 記主・黒斎玄与と『玄与日記』

『玄与日記』および記主である玄与については、桑田忠親氏によって詳しく紹介されている。⁷⁾ 桑田氏は主に記主・玄与の人となり进行を明らかにすることを論の中心に据えており、日記自体の分析はあまりおこなっていない。また桑田氏が使用した史料のほかに、新たに玄与に関する記述をもつ史料がみつかったことから、今回は桑田氏の成果に依拠しつつも、新たに分かったことを加えながら玄与および『玄与日記』について確認していくことにする。

（一）黒斎玄与の出自

日記の記主が玄与という名であることは日記の奥書の署名「黒斎玄与」から明らかである。では彼は何者なのか。桑田氏によるとそれを示す記述が日記に二ヶ所あるのだという。一つ目は外之浦（宮崎県日南市）から内之浦（宮崎県宮崎市）への航路中にある鶴戸の岩屋をみた際にみずからの氏神を「阿蘇の明神」と述べている箇所、二つ目は室津（兵庫県たつの市）出航の後に高砂の松（兵庫県高砂市）をみた場面で「彼松、愚身先祖一見之事」

と述べている箇所である。ここから、桑田氏は玄与が阿蘇大宮司家につらなる人物であったこと、そして『阿蘇家譜』中の「惟賢」という人物の箇所に「後祝髪^レ墨斎玄誉ト号ス」と書かれていることから、「黒斎玄与」は阿蘇惟賢の出家後の名乗りであると結論付けている。⁽⁸⁾

また桑田氏が玄与の名を確認するために使用した史料からは、彼の親族を確認することもできる(図1)。「天正十八年四月阿蘇惟賢起請文写」⁽⁹⁾中からは彼の父・惟前の名を、そして「阿蘇玄与入道墨斎書出」⁽¹⁰⁾からは「玄与伯父阿蘇宮内少輔と申す者^江軍兵千程相添」「玄与養子六才^ニ成候を浅野殿同心して、箱崎御陳所^ニ而身上無別儀相済候」と新九郎(子)・宮内少輔(叔父)の名が見出される。なお書出では玄与の子である新九郎を養子としているが、『阿蘇家譜』にはそのような記述はない。また、信尹の日記『三藐院記』の文禄四年(一五九五)とされる残簡に、「玄与子息」が錫製の酒器入りの酒と食籠を献上したと記述されているが⁽¹¹⁾、これも新九郎のことであろう。

惟賢は天正一五年(一五八七)の豊臣秀吉による島津攻めの後に父・惟前とともに薩摩へ下り、島津家臣となったとされる。その惟賢が出家し玄与と名乗った時期について桑田氏は、先に示した起請文では惟賢のままであり、黒斎玄与の初見が『玄与日記』であることを理由に、天正一八年(一五九〇)五月から文禄五年七月までの間のことと推定している。しかし、新たに惟賢の名を確認できる史料がみつかったことから、出家の時期はさらに限定されることが分かった。『天正廿年 玄旨 詠草』中に連歌興行の参加者の一人として「惟賢」の名がある。これが現状で最後に確認される事例である。⁽¹²⁾「玄与」の初見事例は先に示した『三藐院記』の文禄四年とされる残簡の記述であることから、出家の時期は天正二〇年(文禄元年、一五九二)から文禄四年の間であると推定できる。

(二) 文化人としての黒斎玄与

玄与は連歌に関係する人物の一人としてその名を知られてきた。それは『玄与日記』に数多くの連歌・和歌に関する記述があるためである。では、玄与が生きていた時代に彼はどのように評価されていたのだろうか。

『玄与日記』をみると、彼は文禄五年九月七日からの伏見滞在中、頻繁に細川幽斎(幽斎玄旨とも。出家前の名乗りは藤孝)との交流をもっていたことを示す記述があることに気がつく。幽斎は中近世移行期を代表する文化人であるが、そのような人物との出会いはこの時が初めてではなかったことが、先に示した『天正廿年 玄旨 詠草』から分かる。

【史料1】天正廿年 玄旨 詠草⁽¹³⁾

九月廿七日興行

○わかつてみんなみちや春の桜嶋

なみに雁啼夕あけほの

珠長

こく舟の秋吹かせにさそはれて 惟賢

かたふけるとまやなからもすみけらし

まぐらのゆめをたゝ松のこゑ

遠きゆかりもともとめゆかはや

身はかくていつこの国にさすらへん

【史料1】は、天正二〇年に朝鮮出兵（文禄の役、壬辰倭乱）のため肥前名護屋へと下向、さらに薩摩へと足を伸ばした幽斎がその時々におこなった連歌興行に関するものである。鶴崎裕雄氏は、この史料は歌と連歌の詞書を並べることと幽斎の旅の行程が分かり紀行文として読むことができるものと指摘する⁽¹⁴⁾。幽斎による天正二〇年九月二七日の興行には島津家の連歌師であった高城珠長とともに玄与が参加していた。このことから、玄与が天正二〇年時点で幽斎と知り合っていたことが分かる。土田将雄氏によれば、幽斎の著作『詠歌大概抄』のうち文禄三年（一五九四）の奥付をもつものは玄与に伝授されたものらしいという⁽¹⁵⁾。このように、両者の交流は天正二〇年以降も続いたものと考えられる。

また桑田氏は、『玄与日記』の以下の記述からは玄与が幽斎から多くのことを学ぼうとする姿を読み取ることができるという⁽¹⁶⁾。

【史料2】『玄与日記』D⁽¹⁷⁾

廿八日^(十一月)より伊勢物語の注写し侍りぬ。八条宮様へ幽斎御伝受也注なり。

【史料3】『玄与日記』E

九日^(十一月)に幽斎老丹州へ御下向。拙子は御留守居し侍りぬ。是書写諸本多き故也。

このように、玄与は幽斎が所持する多くの書物を書写し、古典・歌道を学び取ろうとしていた。

幽斎のほかにも、玄与が交流を深めた人々は存在するが、連歌師・里村紹巴もその一人である。幽斎主催の連歌会に同席したり、三井寺近くにあった紹巴の庵を訪問したりするほかに、玄与が自分の詠んだ連歌に対して点合を依頼もしている⁽¹⁸⁾。このように玄与と在京文化人たちの交流は、歌会や連歌会での場が主であったといえる。それは、玄与の歌の腕前が評価されていたことの証でもあると考えられる。そして、彼自身にとって信尹に供奉しての上洛は、さらに文化的素養を身につけるための絶好の機会となったのだろうと思われる。

(三)『玄与日記』の概要

先に示したとおり、『玄与日記』の奥書に「右一冊玄与上洛の道すから又京都にてのこと、も書しるし侍り候也」とあることから明らかなように、日記中には玄与が道中に見聞したことや各地で興行された歌会・連歌会で詠まれた歌、伏見滞在中の在京文化人（幽斎や紹巴など）との交流の様子、そして伊勢参宮など名所・旧蹟をめぐる旅のことが記述されている。この日記は大きく前半部と後半部に分けることができ、前半は信尹に供奉する鹿児島から大坂・伏見への旅の道中記として、後半は伏見を拠点に在京文化人との交流や名所・旧蹟をめぐるといった文化活動の記録としての意味をもっているといえる。福田秀一氏は『玄与日記』を「文学とは言えないが記事は面白く、文化史の資料としては有用なものである」と評しているが、まさにこの日記の特徴をいい得ている⁽¹⁹⁾。

『玄与日記』の記述は、他の史料と内容を照合することが可能である。前半部は信尹の日記『三藐院記』に残っている軼の浦までの記事で（図2）、後半部の玄与と幽斎との交流については吉田兼見の日記『兼見卿記』にみえる幽斎の動向を確認することで可能となる⁽²⁰⁾。このようにして『玄与日記』の記述を他史料と照合してみると、一致しない箇所があることに気がつく。それは前半部の、佐賀関から軼の浦へと移動する際の寄港地が異なっている点である。『玄与日記』では讃岐を経て軼の浦に到着したことになっているが、『三藐院記』にはそのような記述はみられないのだ⁽²¹⁾。いずれかに誤りがあるわけだが、はたして玄与らは讃岐に立ち寄ったのであろうか。

『玄与日記』の奥書には慶長二年（一五九七）四月と書かれているが、玄与の荘内（宮崎県都城市）到着は慶長二年三月二三日とあることから、日記は帰国後にまとめられたことが分かる。ここから、道中にメモをしていたものをもとに日記（紀行文）がまとめられる際に錯誤が生じた可能性が想定される。讃岐に立ち寄っていたとするならば、それはい

つの時点だったのだろうか。往路と復路でそれぞれ考えてみると、次の時点を設定できる。

【史料4】『玄与日記』B

十日備後(鞆の浦)どもの浦へ着給ふ。夫よりは順風も心のまゝにて、播磨の室の津に御着也。十五日朝天に、室の津を御出被_レ成。

【史料5】『玄与日記』F

三月三日住吉の塩干を見物申侍る也。

五首の法楽、

(中略)

住吉の行あひの間、ほそ江・あられ松原・津守・遠里小野など見侍りぬ。又住よしの花かけにて、

帰るさも忘れこそすれ咲花の陰をしめつゝ住吉の里

かくて海上長閑にて。三月十七日月になりて、細待_(細島カ)へ着ぬ。

往路であれば文禄五年八月一〇日から一四日の移動(鞆の浦から室津)の間に、復路であれば慶長二年三月四日以降一七日まで(住吉から細島)の間ということになる。往路だった場合を考えてみると、天正一六年に上洛した島津義弘の航路が参考になる₍₂₂₎。義弘は安芸国高崎(広島県竹原市)から阿伏兔観音を眺めつつ鞆の浦、讃岐国塩飽島(香川県丸亀市)を経て牛窓(岡山県瀬戸内市)に入っている。これを玄与の航路に当てはめてみると、佐賀関出航後鞆の浦に入港し、讃岐を経て室津へと向かったことになる。そうであれば、玄与は日記編纂の際に讃岐寄港の順序を入れ替えたのだと考えられる(図3)。

二 『玄与日記』中の地震記述

ここまで記主・玄与と『玄与日記』についてみてきたが、ここからは日記中の地震記述の内容と、そこから読み取れる情報について考えてみたいと思う。『玄与日記』には地震記述が二カ所存在するが、それは次のようなものである。

【史料6】『玄与日記』A⁽²³⁾

大嶋と申浦へ其夜明し、三日に(保戸島)ほとゝいふ所へ着給ふ。雲とまりと申所。ちかくみえければ。

影きゆる月やいつこの雲とまり

と申狂句仕候。夫よりさかの(佐賀關)関迄御着被^レ成候。去七月十二日之地震之時、かみの(正關)関と

申浦里は、大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの数をしらす。哀なる事ともなり。彼須磨の巻に、高塩に落て、むすめをは岡辺の里へやり侍ると見へしも、こ(伊予カ)とはり思ひしられ侍りぬ。同七日にいまの海へ渡りぬ。

【史料7】『玄与日記』C

夫方和田の御崎、難波の浦伝ひなどとして、大坂近くなれば、船子ともものうたふ声にきはしく成て、十八日大坂へ着船なり。地震の折節、波たかく風はけしき海上、つゝななく侍りつること、仏神のまもりうたかひなく思ひはへりぬ。近衛様の御門前市のことくに見え、枯たりし木の春にあへることく也。

まず【史料6】では津波被害に関する佐賀關で見聞したことを記し、【史料7】では道中を無事に過ぎし大坂へ到着できたことの仏神への感謝を記している。このうち【史料7】については、そのまま読めば単なる感情を吐露したものとして片付けられるだろうが、この裏には玄与自身が地震の揺れを体験したことが隠れていると考えられる。それは、この道中に規模の大きな地震、すなわち豊後地震と伏見地震が発生しているからである。⁽²⁴⁾玄与が地震を体験したと考えられる期間は二度あった。最初は外之浦滞在中の閏七月七日から一五日の間で、この時期に豊後地震・伏見地震が発生している。同時期、琉球經由で明への渡航を企図し鹿児島に滞在していた藤原惺窩の『南航日記』には、閏七月九日・一二日・一二日に鹿児島で地震の揺れがあったことが記されている(後掲の【史料14】参照)⁽²⁵⁾。おそらく玄与も惺窩と同じ日にちに揺れを体験したのではないかと考えられる。二度目は八月一〇日以降、すなわち室津から大坂に到着するまでの間である。伏見地震は発生後、年を越えて余震をともなったことが京都在住の公家らの日記によって知られる。⁽²⁶⁾玄与らが東へ向かっているのと同じ時、朝鮮出兵の講和交渉のために来日した朝鮮使節も大坂へ向かっていたのだが、その正使・黄慎が記した『日本往還日記』には、牛窓到着以降それまでにはなかった「地震」の記述が表れるようになる。⁽²⁷⁾このことから、大坂へ近づくに

つれ玄与らも地震の揺れを体験していたのではないかと推測される。

もう一つの地震記述である【史料6】は具体的な記述である点が【史料7】とは異なる。この地震記述は、豊後地震による津波被害を記したものととしてこれまでも注目されてきた。豊後地震は、「瓜生島」という別府湾内に存在したとされる島が地震・津波によって沈没したとされる伝承によって知られ、近世の地誌の多くにこの地震についての記述が残されている。その一方で、同時代に書かれた関連史料は少ないとされていることから、『玄与日記』は重要なものと認識されている。そのため、この日記の地震記述を詳細に検討することは大きな意味をもつわけである。

（一）被災地「かみの関」の位置

まず、もっとも重要な問題は被災地として記述されている「かみの関」がどこかという問題である。これまで、「かみの関」の位置については三つの説が唱えられてきた(図4)。

一つ目は、豊後国一尺屋上浦(大分県大分市)に比定するものである。羽鳥徳太郎氏は豊後地震による津波についての調査のなかで『玄与日記』の記述に触れ、これを一尺屋の上浦のこととして現地で調査をおこない、津波高四メートル程度と推定した⁽²⁸⁾。ただし、「かみの関」を一尺屋上浦に比定した理由を羽鳥氏は述べていない⁽²⁹⁾。

二つ目の説は周防国上関(山口県上関町)に比定するものである。白井忠功氏は信尹が薩摩へ下向する際に八島(山口県上関町)に立ち寄っていることを根拠にして位置を比定している⁽³⁰⁾。また筆者らは白井氏の説を受け、豊後地震の被災地を上関として考察したが⁽³¹⁾、地震の約一ヶ月後に朝鮮使節が立ち寄っているにもかかわらず『日本往還日記』には津波やその被害についての記述が一切みられない点が疑問として残っていた。

三つ目の説は、豊後国佐賀関上浦(大分県大分市)とするものである。松崎伸一氏は近世に編纂された豊後国の地誌を用い、そこで佐賀関の上浦が「上ノ関」「上関」と記されていることを根拠として挙げている⁽³²⁾。しかし、松崎氏らが挙げたものは近世の地誌のみであり、これが本当に文禄五年当時にもそう呼ばれていたのか疑問となっていた。

このように比定地として三地点が挙げられていたものの、決定的な根拠を示すことができたものは存在しなかった。しかし、その後松崎氏は平井義人氏と協力してさらなる史料調査を続け、その結果『臼杵安養寺慶念朝鮮日々記』の慶長二年六月の記事中に佐賀関上浦を「上せき」と表現している箇所を発見した⁽³³⁾。このことから、「かみの関」の位置をめぐる論争は終止符が打たれることになった。

後述するように佐賀関には上浦・下浦があり、玄与がどちらに寄港したのかは分らないが、彼は佐賀関に立ち寄った際に佐賀関の一部である上浦の津波被害を見聞したということが分かるわけである。

(二) 地震の日付

佐賀関上浦に被害をもたらした津波は、別府湾内を震源とする豊後地震によるものとされている。玄与は、この地震の発生した日付を「去七月十二日」と記しているが、この日付も問題とされてきた。豊後地震が発生したのはいつなのかをめぐり、二つの説が主張されている。一つは閏七月九日発生説であり⁽³⁴⁾、もう一つは閏七月一二日発生説である⁽³⁵⁾。これらは、史料によつて地震の日付が混在していることが原因となっている。

閏七月九日発生説では、津波について記述する史料の多くが九日の地震としていることを理由に、一二日とする史料は九日を誤記したものと推定している。またこの説では、伊予で確認される被害も豊後地震によるものとして捉えている。他方、閏七月一二日発生説では、九日の地震は伊予で発生した別の地震であると捉え、津波をもたらした地震と区別している点で閏七月九日発生説と異なっている。しかしこの説では、津波を記述する史料の多くが九日としている点をどう理解するのかについての見解が示されていない。

これまでの発生日について述べた研究では、史料の素性など重要な情報に触れることなく議論がおこなわれ、一次史料と二次史料が同列に扱われて論が進められていた。そこで、あらためて一次史料および信頼性が高いと考えられる史料を確認し、そこでは地震の日付がどうなっているのかを整理してみることにする。まず津波の被害を受けた豊後の史料である。

【史料 8】 由原宮年代略記⁽³⁶⁾

慶長 後陽成院
十九年

坂行ノ年代記ニハ十二日トアリ

元年 丙 閏七月九日戌刻大地震、当社拝殿・回廊・諸末社悉顛倒畢、又此日府中洪濤起

テ、府中並近辺ノ邑里悉成海底、黄昏時分也、同慈寺本堂斗相残^ル、大波至三

○同十二月拝殿造立 宮師豪華為本願以府
内奉加物建立之

【史料 9】 興導寺大般若波羅蜜多經 奥書⁽³⁷⁾

文祿五年 丙 閏七月九日大地震仕、豊後奥浜悉ク海成、人畜二二千余死ス、前代未聞条、

書付申畢、奥浜計二一万人死ストモ当官司豪泉記之、
(以下、異筆)

【史料8】は豊後国一宮である杵原八幡宮の年代記で、原本の所在は不明だが東京大学史料編纂所に謄写本が所蔵されている。(38) 文禄元年(天正二〇年)から元禄八年(一六九五)までの記録のなかに、豊後地震の記述がある。また興導寺(大分県国東市)所蔵の【史料9】にも、豊後地震の記述を確認することができる。いずれも地震の発生日を閏七月九日としているが、【史料8】には「板行ノ年代記」つまり版木で印刷された年代記には一二日とあるとの傍注が付されている。

次に、豊後地震との関係が問題となっている伊予および近隣の安芸の史料記述をみてみよう。

【史料10】薬師寺大般若波羅蜜多經 奥書(39)

文禄五天丙申潤七月九日ニ大地震振候て国中迷惑仕候其時(異筆)

【史料11】穂田元清書状(40)

呉々早々被仰越令祝着候、以上、

如レ仰夜前者大地震事々敷儀候、御仰天令レ察候、御神前廻・経堂其外不相損之由、肝要目出候、随而上辺之儀無ニ相替一儀之由候、先ハ族申乱候へ共相静之由候、官人御対面之儀、大坂千疊敷相調候ハ、則御召寄之由候、御武者立を重而罷上、官人被ニ待付一之由候之条、いともなき儀候、珍敷到来候ハ、從レ是可ニ申入一候、恐々謹言、

治部

(慶長元年)
壬七月十日 元清(花押)

棚左まいる

御返報

薬師寺(愛媛県松山市)が所蔵する【史料10】には、閏七月九日に地震があつた旨が記されている。この寺は、福島正則が伊予を領有していた天正年間に寺領を失い、さらに文禄五年の地震によって本堂などが倒壊したと近世の地誌に書かれている。(41) なお奥書が「其時」で終わっている点については第二章で触れているが、続きはもとと書かれていなかったとされる。一方、【史料11】では「夜前者大地震」とあり、はっきりとした日付は書

かれていない。しかし差出の日付が閏七月一〇日であることから、これも閏七月九日のことを指していると思われる。元清は毛利輝元家臣で、地震当時は居城である桜尾城（広島県廿日市市）にいたと考えられている⁽⁴³⁾。

ここまで豊後地震に係する地域についての史料を確認してきたが、豊後地震はその規模から遠方でも揺れがあったと考えられている。そこで京都および薩摩での史料記述もみてみることにしよう。

【史料12】言経卿記 文禄五年閏七月九日条⁽⁴³⁾

九日、甲辰、天晴、戌刻地動

一、西御方ヨリ持薬取給間、藿香氣散加味ノ三包進了、香薷散加減ノ二両進了、
(以下略)

【史料13】小槻孝亮宿禰記 文禄五年閏七月九日条・一二日条⁽⁴⁴⁾

九日天晴、今夜為ニ地震事外一、酉戌刻間也^{云々}、

(中略)

十二日、天晴、今夜四時^ニ至^テ大地地震也、主上大庭御座^ニカマヘマシマス、(以下略)

【史料14】南航日記 文禄五年閏七月九日条ノ一二日条⁽⁴⁵⁾

九日。赴^ニ鹿兒島^一。乗舟。午時著^レ島。以^ニ幸侃付状^一与^ニ伊集院本田六兵衛^一。地震微雨。

十日。以^ニ風雨^一遲留。

十一日。風雨不^レ休。

十二日。風雨不^レ息。大地震。夜亦震。

十三日。前度会下僧巡宗等来話。風雨。大地震。

【史料15】樺山紹劍自記⁽⁴⁶⁾

一文禄五年^{丙申}、専和平之懸引也、閏七月九日、薩摩ハ大地震也、京都ハ十二之夜也、諸屋形町屋などは不^レ及^レ申、金銀を芥はめたる御殿崩て、数百人打殺畢、高麗之取人渡^ニ本朝^一へ、何と御談合も成行候也、太閤様御機嫌悪候、ゆふけきも腹立の体^ニ而出津候、然処本朝衆も又高麗^江押渡候而、高麗を可^レ従とて、過半打取畢、

【史料12】を除き、遠方の京都・薩摩では九日・一二日にそれぞれ地震があったことが記述されている。しかし、内容を確認すると、【史料15】では一二日の地震は京都のことを指すとあり、【史料13】の閏七月一二日条も京都での地震被害が続くことから、これらの史料にある一二日の地震は伏見地震に当たると考えられる⁽⁴⁷⁾。

以上の史料記述を整理すると表1のようになり、すべての史料が地震を九日のこととして記述していることが分かる。問題は、【史料8】の注記および【史料14】にみえる閏七月一二日の記述である。この点について、松崎氏らが次のような見解を示している⁽⁴⁸⁾。柞原八幡宮や興導寺の津波記述は後日入手したものであり、地震が頻発したことから混乱状態にあったため、地震および津波の発生日の記憶が曖昧となったのではないか。すなわち、豊後では九日と一二日の二度強い地震が発生し、津波は一二日の地震にもなつて起きたと解釈すれば、史料によって日付が異なることの理由として整合性がとれるだろうというのである。松崎氏らの推論を整理すると、以下のようになる。

- ・ 閏七月九日―伊予・豊後地震（豊後でも被害あり）
- ・ 閏七月一二日―豊後地震（別府湾で津波発生）
- ・ 閏七月一三日―伏見地震

確かにこの理解であれば、『玄与日記』が津波を起こした地震を一二日としていることと整合性はとれる。しかしこの推論では、【史料8】の注記が年代記の書かれた際同時に付されたということになり、注記の解釈として極めておかしいものであるといえるだろう。

では、この注記は何を意味しているのだろうか。先にも示したとおり、「板行ノ年代記」とは版木で印刷された年代記のことである。わざわざこのような傍注を付す意味を考えると、【史料8】には原本ないし書写されたものとは別に、木版印刷されたものが存在していたことから、それを示すために傍注が付けられたとの推論が成り立つ。そして、地震の日付を前者は九日、後者は一二日としていたのではないか。そうであるならば、松崎氏らの推論は成り立たないことになる。

木版印刷された【史料8】はなぜ地震の日付を一二日としていたのだろうか。考えられるのは、伏見地震の日付との混同である。一次史料でも伏見地震の日付を一二日とするものが存在することは先に示したとおりであるが、年代記や地誌ではまず全国規模の出来事を記し、その後に身近な出来事を記すことがある。たとえば、元禄十一年（一六九八）に戸倉貞則によって著された『豊府聞書』には、「文禄五丙申年閏七月十二日晡時^{或ハ九。日ト云。}天

下巨地震。因^レ之。豊後大地震」とあり、⁽⁴⁹⁾「天下」の後に「豊後」の話が書かれている。【史料8】の、特に木版印刷本は、この『豊府聞書』と同様の構成を意図して記しているのではないだろうか。

さて、そうすると年代記や地誌ではない『玄与日記』の「七月十二日」はどう解釈すればよいだろうか。『玄与日記』を読み返してみると、玄与は他者から聞いた内容をそのまま記述しているわけではないことに気がつく。唯一の例外は讃岐での浦人との対話であるが、それすらも「こゝに松山のみへたるを、いかなる所と浦人に問侍れば、是なんしら峯と申侍る。」という僅かなやりとりでしかない。佐賀関での話も例外ではなく、慶長二年四月の薩摩帰国後に旅の記録をまとめる際に玄与自身の言葉に置き換える工程を踏んだうえで記述されているのである。この編纂過程の中で讃岐寄港の旅程に錯簡がみられたわけだが、佐賀関でも同様のことが起きていたのではないだろうか。玄与自身も地震の揺れを体験しており、その実体験の日付と佐賀関での見聞の日付が混同されたのではないか。

閏七月一二日、玄与らは外之浦に滞在中であった。【史料13】や【史料15】が伏見地震を一二日としているように、玄与の感じた揺れも伏見地震によるものだったのかもしれない。この点について『三藐院記』⁽⁵⁰⁾をみると、文禄五年閏七月九日条には「風雨」とのみ記述されており、同一二日条にいたってはまったく記載がない。そのため、実際のところ外之浦で揺れは感じられたのか分からないが、以上の検討からは豊後地震が閏七月九日に発生したのだということができ、閏七月一二日発生説は誤りということになる。⁽⁵¹⁾

(三) 佐賀関の被害の実態

文禄五年閏七月九日の地震による津波は、佐賀関に被害をもたらしたことを『玄与日記』は示している。しかし、佐賀関がどのような湊だったのかを玄与は記していないため、その被害規模の大きさを知ることができない。それを知るためには、津波被災前の佐賀関がどのような湊だったのかを知る必要があるだろう。

中世の佐賀関は、豊後を統治していた大友氏の家臣・若林氏の支配下にあった。この時代の佐賀関については鹿毛敏夫氏の成果に学ぶところが大きい。⁽⁵²⁾ここではその成果に学びつつ、天正年間以降の佐賀関について確認をしておく。天正一六年（一五八八）に大友義統から若林越後入道へ宛てて出された掟書が残されている。それは、佐賀関支配についての法度としての性格を持つものであった。

【史料 16】大友義統袖判条々掟書⁽⁵³⁾

(大友義統)
(花押)

條々

一、関両浦町立之事 付東西構之事并
掃除之事、

一、計屋両浦可為三間之事 付員数等、同銀錢可召遣趣、
府内・臼杵可為同前 ばかりてんひん
たるへき事、

(中略)

一、宮山之儀者不及申、若御子山・烏帽子岳其外山野法式、殊猪鹿同前之事 付牧場不可
成綺事、

(中略)

已上、

右、背法度輩於在之者、不謂最賈用捨、以交名承、可加下知者也、

天正十六年六月廿八日

若林越後入道殿

これによれば、佐賀関の両浦（上浦・下浦）に町を立てること、さらに両浦には計屋（銀の秤量を担った商人）を三軒ずつ設置することとされている。鹿毛氏はこの計屋での秤量活動が府内・臼杵同様になされていることから、大友氏による量衡制を統一することが企図されていることを示すものとして評価しているが、大友領内で府内・臼杵と並ぶ経済拠点に位置付けられていたことも読み取れるだろう。佐賀関の町衆が伊勢へ参宮した記録も残っており、そのような点からも経済拠点として栄えた佐賀関の姿をみることができる⁽⁵⁴⁾。
ろう。

【史料 17】三藐院記 文禄三年四月二四日条⁽⁵⁵⁾

廿四日、八嶋ヲ出テさかの関^下へ着、廿八里ハシリタリ、家ナトモ如^レ形疊シキタル家ハナシ、

文禄三年に薩摩へ配流され下向した信尹は、その道中に佐賀関に寄港している。大友領内の経済拠点として位置付けられた佐賀関だったが、【史料 17】には畳敷きの家がないとある。白井氏はこの記述について、潮流の早い豊予海峡を渡ったにもかかわらず、畳の敷かれた家がないことの侘びしさに信尹が落胆したことによるのだとしている⁽⁵⁶⁾。確かに信尹の落胆が表れているのかもしれないが、ここは京都と湊町の住居のありようを対比させ、

その侘びしさを表現しようと意図した記述だったのではないだろうか。

【史料 18】南航日記 文禄五年七月七日条⁽⁵⁷⁾

七日。曉發。而已刻泊^二豊後嵯峨関^一。海涯蜃舎五六十許。午時僦^二魚戸^一行浴。削^レ瓜斟^レ酒。頗消^レ暑。警者友珍。播之龍野之産也。歌^二平家^一。鼓^二沙弥仙^一。有^二牛馬之牧^一。

佐賀関は商人たちがいただけではない。【史料 18】には「蜃舎」すなわち海人の住居が五、六十余軒あったと記されている。【史料 16】には両浦町の「東西構」という記述がみえ、鹿毛氏は両浦の町の東西に設置された木戸口のことを指すのだろうとしている。おそらく「蜃舎」はこの木戸口の外にあったと考えられる。また、惺窩は「牛馬之牧」の存在に言及しているが、佐賀関半島の先端にある関崎には牧場が存在し、明治末年まで経営が続けられていたという。⁽⁵⁸⁾【史料 16】にみえる「牧場」も同じものを指すと考えられ、佐賀関の町同様に支配がおこなわれていたことが分かる。

豊後国内の経済拠点として発展した佐賀関は、文禄五年の津波によって被害をうけた。

【史料 6】の記述をみる限りでは、壊滅的な被害であったと読めそうだが、実際のところはどうなのだろうか。他の史料で佐賀関の津波被害を確認してみよう。

【史料 19】一五九六年一二月二八日付、長崎発信、ルイス・フロイスの年報補遺⁽⁵⁹⁾

(前略)

沖の浜近くで、同様な海難に遭遇した他の四カ所、すなわちハマオキ (Fama oqi) 、エクロ (Ecluro, *Cucusu c.) 、日出 (Fingo, *Fuigi) 、カシカナロ (Cascicanaro, *Caxeranari) 、それに佐賀関の一部が、人々の言うところでは冠水したとのことである。また浜脇ではキリシタンはただ一人しかおらず、彼だけが皆の中で助かった、という。(後略)

【史料 20】稲葉家譜⁽⁶⁰⁾

古老伝言、慶長元年丙申閏七月十二日大地震、海水溢^二陸地^一、没^二豊府沖浜之民戸^一十余町、人多溺死、又曰、此時潮水来^二臼杵原山麓今川崎藤八重昌宅前之坂口^一、及高田郷家嶋人家之棟木・佐賀郷佐賀関神社之島居流云、今案、是歳大潮滅^二於往昔^一乎、雖^レ然貞通遷^二鎮於臼杵^一以来凡一百九年、所^レ難^レ聞也、

【史料19】は、当時長崎に滞在していた宣教師ルイス・フロイスによる報告書である。豊後から伝えられた情報として、津波の被災地の一つに佐賀関（の一部）が挙げられている。ただし、具体的な被害の様子は示されておらず、ここからは津波が襲ったことしか分らない。【史料20】は、臼杵藩稲葉家の家譜である。宝永四年（一七〇七）に発生した南海トラフ地震、いわゆる宝永地震に関する記述のなかに、古老の語った豊後地震の話として佐賀関のことが出てくる。それによれば、「佐賀関神社」の鳥居が津波によって流れたのだという。この神社は早吸日女神社のことで、海上安全祈願の神として地元民や大友氏によって崇敬されたという⁽⁶¹⁾。神社の鳥居が流されたという点から、高い津波が神社を襲ったことが想像されるが、『稲葉家譜』が地震後百年以上経過して書かれたものであることに注意する必要があるだろう。それでも、支配領域にはない佐賀関の話が臼杵で語り継がれていることから、豊後地震が豊後国内でも重大な災害として認識されていたことを示しているのだといえる⁽⁶²⁾。

【史料6】【史料20】の記述からは、佐賀関が甚大な被害をこうむったように思われるが、湊の機能はどうなったのだろうか。地震の翌年（慶長二年）、朝鮮出兵（慶長の役・丁酉倭乱）で出陣する臼杵城主・太田一吉に医僧として従った安養寺の僧・慶念が「上せき」（佐賀関上浦）から乗船している⁽⁶³⁾。【史料6】にある佐賀関の被害が一部ではなく湊町全域におよぶものとすれば、慶念が乗船するまでの約一年間で湊の機能が復旧したことになる。また玄与らの寄港地について史料には佐賀関としか書かれておらず、上浦・下浦のいずれに立ち寄ったのか不明であるが、仮に上浦に寄港していたとすれば、湊が約一ヶ月で復旧したとは考えられず、地震後も機能が維持されていたことになる⁽⁶⁴⁾。当時、湊が被災した場合にどのような復旧過程を経たのか、この点についてはさらに検討を加える必要があるだろう。

三 豊後地震が記述された理由

玄与が旅した時期には様々な災害が起きているが、彼が日記に記したのは豊後地震についてのみであり、同時期に発生した伏見地震や八月に畿内近国で起きた水害・洪水については一切の記述がみられない。なぜ玄与は豊後地震についてのみ書き残したのだろうか。その理由としてまず、玄与は伏見地震や水害についての情報を得ていなかった可能性が考えられる。しかしこの可能性は、伏見滞在中の玄与が頻繁に幽斎と交流していたことか

ら否定される。『兼見卿記』には伏見地震によって幽斎邸が被災したこと、また八月の水害で居城である丹後田辺城が被災したことが確認でき⁽⁶⁵⁾、玄与と幽斎の間でまったく話題にのぼらなかったとは考えにくい。長く伏見に滞在しながら伏見地震の情報に触れることがなかったとも考えられない。

他の災害についての情報を得ていたにもかかわらず玄与は記述しなかったとすれば、その理由は何なのか。そこで、あらためて日記中の豊後地震の記述をみてみると、被害について記した後に『源氏物語』須磨巻・明石巻の一節を思い返し、物の道理を感じた旨を述べている点が注目される。白井氏はこの『源氏物語』を想起したという記述について「玄与の古典文学の教養の豊かさを知ることができる」と評しているが⁽⁶⁶⁾、『玄与日記』の他の箇所でもこのような古典・和歌を想起するという記述が見受けられる。千野湊（宮崎県串間市）を出航した際には百人一首の法性寺入道前関白太政大臣（藤原忠通）の歌を、讃岐・白峰山では『保元物語』の崇徳院の歌、そして伊勢参宮の際には西行の歌を想起したと記している。これらは玄与の教養深さを示すというだけではなく、彼が意図的に古典・和歌を想起する地を選択して記述しているように思われる。つまり、彼は佐賀関の被害から『源氏物語』を想起することが可能であるために「かみの関」を選んだと考えられるのだ。

しかし、これだけでは伏見地震や洪水が記述されなかった理由にはならない。京都のような都市での災害であれば『方丈記』を引用することもできるだろうし、あるいは他の古典を結びつけることもできただろう。記述されなかった理由を考えるためには、玄与が日記を編集した際の意図ないし主題を読み取る必要があるように思われる。

大隅和雄氏によれば、中世の紀行文は都と鄙の対比が軸となって構築された貴族文化を確認するものだとい⁽⁶⁷⁾う。この確認は文人や歌人にとって重要な営みであり、それを記録したものが紀行文であるということになる。『玄与日記』もこれに連なるものとして位置付けられるのではないか。日記全体を見渡せば、船旅の記述と伏見滞在中の内容が明確に異なる点にも気がつく。ここに、『玄与日記』における都と鄙の対比が表れている。豊後国蒲江（大分県佐伯市）では宿となる場所もなく、米水津（大分県佐伯市）も人家が少ない湊であると記す。一方で伏見到着後には頻繁に歌会や茶会が催され、華やかな風景を読者に思い描かせる。

また、玄与は名所・旧蹟をめぐることに加え、その名所には彼自身の先祖にゆかりのある地が含まれていることも記述している。こういったことから、『玄与日記』の主題は名所・旧蹟をめぐるなかで先祖との所縁を読み取る旅であったこと、そして侘びしい寄港地と文

化的な京都周辺という都鄙を比較することにあるといえるだろう。

この主題に合わせる形で、玄与は都鄙の比較を強調するために日記中で意図的な表現をおこなっている。讃岐寄港の順序が異なっていることは、単なる錯簡である以上に、意図的におこなわれた操作といえるだろう。崇徳院が讃岐へ配流されたことは都から鄙への移動になり、玄与は讃岐を鄙の世界として位置付けていることが分かる。しかし鞆の浦は当時の瀬戸内海航路で栄えた湊であり、『玄与日記』からも鞆の浦から大坂へと向かう記述に鄙の侘びしさを読み取ることはできないことから、彼がここを境界に位置付けていると考えることができる。都鄙の境となる鞆の浦のあとに鄙の世界である讃岐に寄港しては、彼の意図から外れることになる。そのため、讃岐寄港は鞆の浦の前に置かれたのである。

そして、佐賀関の記述も彼の意図した主題に合うように表現されている。先に示したとおり、佐賀関は豊後国内の経済拠点として発展した湊である。そこで湊の賑わいを表現しては鄙の世界のイメージを崩すことになる。たとえ町場や神社が被災していても、それを登場させることは日記の主題から外れることになるのだ。だからこそ、玄与はわざわざ「浦里」という言葉を用い、佐賀関も鄙の世界の一部であることを示そうとしたのではないだろうか。⁽⁶⁸⁾このように考えてみると、玄与は佐賀関での被害から『源氏物語』を想起したというよりも、佐賀関（の一部）の被害が『源氏物語』の鄙のイメージとしての須磨巻に合うことから選ばれたといえるだろう。⁽⁶⁹⁾

豊後地震を記述し、伏見地震や畿内での洪水を記述しなかった理由。それは、都鄙を対比するうえで豊後地震の被害は鄙のイメージに合致し、伏見地震や洪水は都のイメージを崩すことになる⁽⁷⁰⁾と判断されたためであると考えられる。

おわりに

玄与の旅は、期せずして被災地をめぐるものにもなった。彼自身は被災することはなかったわけであるが、はたして彼が見聞した被災地の姿は実感をもつものとなっていたのだろうか。佐賀関上浦の被害について、玄与は「哀なる事ともなり」と記している。被害の大きさに対する悲哀や嘆きを表していると解釈できるが、別の解釈も可能ではないか。彼は、米水津を出航後しばらくして日向の船が沈没した光景を「哀なる有様を見侍り」と述べている。これらは、鄙の世界を進む玄与の船路がいかに困難なものだったのかを示すための記述だったと考えられる。佐賀関の被害も蒲江や米水津同様、宿に困る有様を想起さ

せるために記述されたように思われる。大坂に到着した際、仏神の加護に感謝する記述はこれらの表記と結びつくものだったのだろう。

玄与がこのような都と鄙のイメージを紀行文に織り込んだことは、読み手の存在を意識していたようにも考えられる。『玄与日記』はどのような人々に受容されていたのか、どのような過程で『群書類従』に所収されることになったのか。『玄与日記』には、まだ様々な考察すべき課題が残っている。

本章では『玄与日記』を対象として紀行文にみられる地震記述を考察してきた。この日記では都鄙を比較するなかで災害を描いており、事実をそのまま記述するのではなく、その比較を意識して災害を記述していた。このように、紀行文ではそれぞれの記主が主題とするものに合わせて文章を表現していると考えられる。そうであれば、紀行文に表れる災害の記述はそのまま利用するのではなく、主題となっていては何かを意識して読み解かなければならないだろう。歴史地震研究のための史料研究では、それぞれの史料が持つ特性を把握することが重要である。⁽⁷⁾ それは紀行文でも同様であったが、あまり注意が払われてこなかった。今後、歴史地震史料の研究のなかで考察を深めていかなければならないだろう。

註

(1) ①矢田俊文「既刊地震史料集の校訂の諸問題」(『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年、初出は二〇〇五年)。②矢田俊文「中世後期の地震と年代記」(『東北中世史研究会会報』第二二号、二〇一二年)。

(2) 田良島哲「地震史料データベース化における史料学的課題——中世の年代記を中心に——」(『月刊 地球』第二七卷第一号、二〇〇五年)。なお田良島氏の論文が掲載されている号は古代・中世の地震史料に関する特集号であり、他にも史料研究をおこなっている論文が掲載されている。

(3) 片桐昭彦「不忍文庫旧蔵『年代記』と中世の地震」(『災害・復興と資料』第八号、二〇一六年)。

(4) 榎原雅治『中世の東海道をゆく』(中公新書、二〇〇八年)。

(5) 矢田俊文「明応東海地震の津波被害と中世安濃津の被災」(『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年、初出は二〇〇五年)。

(6) たとえば『宗祇終焉記』(『新日本古典文学大系 51 中世日記紀行集』岩波書店、

一九九〇年）には、文亀元年（一五〇二）に越後国で発生した地震について次の記述がある。

かくて、師走の十日、巳刻ばかりに、地震大にして、まことに地にふり返すにやと覚ゆる事、日に幾度といふ数を知らず。五日六日うち続きぬ。人民多く失せ、家々転び倒れにしかば、旅宿だにさだかならぬに、又思はぬ宿りを求めて、年も暮れぬ。

地方で発生した地震を体験した連歌師・宗長による記述であり、重要なものとされる（註1前掲論文②）。なお宇佐美龍夫氏はこの記述と会津での地震の揺れの記録から、マグニチュードを六・五から七・〇と推定している（宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599 - 2012』東京大学出版会、二〇一三年）。しかし宇佐美氏らの推定は『宗祇終焉記』の記述をそのまま利用したものであり、史料の性格などが踏まえられているのか、不明な点が多い。また、被害の範囲も分からない史料記述からここまでの地震規模を推定することに問題はないのか、疑問が残る。

（7） 桑田忠親「玄與日記とその作者」（『歴史地理』第六二巻第六号、一九三三年）。

（8） 『阿蘇家譜』（東京大学史料編纂所蔵）による。なお桑田氏は「墨斎玄譽」を「黒斎玄与」の誤写であろうと推定している。

（9） 東京帝国大学編『大日本古文書 家分け第十三 阿蘇文書之二』（東京帝国大学、一九三三年）。

（10） 鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』（鹿児島県、一九八二年。以下『旧記雑録後編二』）巻一九―二八一。「墨斎」は「黒斎」の誤りであろうと思われる。なお桑田氏は、惟賢の子・新九郎は後に惟興と名乗っているとする。

（11） 近衛通隆・名和修・橋本政宣校訂『史料纂集 三藐院記』（続群書類従刊行会、一九七五年。以下『三藐院記』とする）文禄四年カ（月不詳）一三日条。

（12） 鶴崎裕雄氏は「惟賢」が誰を指すか不明とするが（「天正二〇年（文禄元年）の細川幽斎―豊臣政権下の文芸の一特徴―」『国文研究』第五六号、二〇一一年）、後の玄与と細川幽斎とのつながりを考えれば、この「惟賢」が玄与を指すことに疑いの余地はない。

（13） 土田将雄『細川幽斎の研究』（笠間書院、一九七六年）。

(14) 註12前掲論文。鶴崎氏は幽斎の紀行文が秀吉の政權に結びついたものであるとし、天正二〇年の紀行文が存在しない理由もここに起因する可能性に言及している。

(15) 註13前掲書。

(16) 桑田忠親『細川幽斎』（講談社学術文庫、一九九六年。初出は一九八五年）。

(17) 塙保己一編『群書類従 第十八輯 日記部・紀行部』（続群書類従完成会、一九七九年訂正三版）。史料名とともに付したアルファベット記号は、『玄与日記』内での記述順を示すものである。なお本章では内閣文庫蔵本と照合をおこなった。

(18) 文禄五年一〇月一七日と慶長二年一月一六日の二度確認される。なお前者では、その便宜に対して松前の昆布を送った旨が記されている。

(19) 福田秀一「中世日記紀行文学の展望」(『新日本古典文学大系51 中世日記紀行集』岩波書店、一九九〇年)

(20) 幽斎と兼見は清原氏の血縁を介して従兄弟の関係にあることから、『兼見卿記』中に幽斎の動向が記されているのだと考えられる。

(21) 『三藐院記』では讃岐寄港が省略された可能性も考えられる。そこで『三藐院記』には佐賀関から鞆の浦までの間のことをどのように記述しているのか確認すると、次のようになる。

七日、板物一端・焼物^少、三十郎に被遣、

八日、早天出船、右之宿に二百、熊野神楽銭百、

かこ五人三十郎馳走也、

ア才嶋に着、廿三里はかり也、

九日、北條^{与州}に着、くるしま持分、宿ノ名喜左衛門尉也、二文目遣、

十日、宮崎ノ浜を出也、夜半過に鞆に着、

宿^宿をやとひ、をのみちへ十文目にて酒をかハす、二文目をのみちへの船ちん、

みちま也

主郎右衛門尉所宿、

このように、航路中に讃岐寄港を入れる余地はないことから、信尹一行が鞆の浦へ入る以前に讃岐に立ち寄ったと考えることはできないのである。

(22) 『旧記雑録後編二』巻二二―四七一（天正一六年六月六日付島津義弘書状）。

(23) 文中の「と申所。ちかくみえければ。影きゆる月やいつこの雲とまり」という箇所は内閣文庫蔵本には書かれておらず、刊本『群書類従』は別本によって補ったの

だと考えられる。ここでは、刊本に合わせている。

- (24) 同時期には豊後地震・伏見地震のほかに、伊予地震とよぶべき地震が発生していたとする説がある。この点については第二章で詳細に検討している。

- (25) 後述の【史料14】参照。『南航日記』は残簡であり、現在は京都を出発する文禄五年六月二七日から鹿児島滞在中の八月七日までを確認することができる。

- (26) たとえば『言経卿記』（東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記七』岩波書店、一九七一年）では慶長二年二月まで「地動」「小動」といった文言がたびたび表れている。

- (27) 黄慎（中村栄孝翻刻）『交隣紀行 日本往還日記』（『青丘学叢』第一一号、一九三三年）。

- (28) 羽鳥徳太郎「別府湾沿岸における慶長元年（1596年）豊後地震の津波調査」（『地震 第2輯』第六〇巻第三号、一九八五年）。

- (29) これは、佐賀関について別の資料に記述された被害を取り上げていることから、佐賀関と分けて考える為に一尺屋上浦としたのだと推測される。

- (30) 白井忠功「黒斎玄與の旅——『玄與日記』——」（『立正大学人文科学研究年報』第二七号、一九八九年）。

- (31) 松岡祐也・都司嘉宣・今村文彦「1596年豊後地震における「かみの関」の津波被害」（『津波工学研究報告』第二九号、二〇一二年）。

- (32) 松崎伸一・川崎真治・荻山和樹・西谷淳・土屋悟「講演要旨」『玄與日記』が記す「かみの関」地点はどうか（1596年豊後地震）（『歴史地震』第二七号、二〇一二年）。

- (33) 松崎伸一・平井義人『『玄與日記』が記す「かみの関」地点の比定（1596年豊後地震）』（『歴史地震』第二九号、二〇一四年）。

- (34) 註6前掲宇佐美ほか書など。

- (35) 註28前掲論文など。

- (36) 東京大学史料編纂所蔵。

- (37) 大分県総務部総務課編『大分県史 中世篇Ⅲ』（大分県、一九八七年）。

- (38) 日名子健二・松崎伸一・平井義人「1596年豊後地震津波の襲来時刻」『由原宮年代略記』の黄昏から」（『第34回歴史地震研究会（筑波大会）講演要旨集』二〇一七年）。

(39) 土居聡朋「愛媛県松山市保免・薬師寺所蔵の大殿若経について」(『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要』第一八号、二〇一三年)。

(40) 広島県編『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』(広島県、一九七六年)一三四九号(厳島野坂文書)。

(41) 註39前掲論文。

(42) 西尾和美「文禄5年(1596)閏7月の地震と安芸―「厳島野坂文書」所収の穂田元清書状の検討―」(『2015年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』二〇一五年)。

(43) 註26前掲書参照。

(44) 宮内庁書陵部蔵。

(45) 国民精神文化研究所編『藤原惺窩集 下巻』(思文閣出版、一九七八年復刊)。

(46) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』(鹿児島県、一九八三年)巻三七―七八。

(47) 『言経卿記』では閏七月一二日条に地震の記述はみえないが、翌一三日条には伏見地震に当たる地震被害の記述が表れる。伏見地震の発生は深夜であったため、日付変更の前後の日にちが史料に記述されることになったと考えられる。ここからも、一二日と記述する史料が伏見地震のことを指しているということが出来る。

(48) 松崎伸一・日名子健二・平井義人「1596年豊後地震の発生日に関する考察」(『第34回歴史地震研究会(筑波大会) 講演要旨集』二〇一七年)。

(49) 戸倉貞則著(日名子健二翻刻)『豊府聞書 元禄十一年戸倉貞則作』(二〇〇九年)。

(50) 『三藐院記』文禄五年閏七月九日条。

(51) 豊後地震の発生日を閏七月九日とした場合、【史料14】に記された閏七月一二日の地震はどうなるのか。【史料14】が一次史料である以上、混同があるとは考えにくい。また伏見地震との関係をどう理解するのが問題となるだろう。そこで一つの仮説として、鹿児島での揺れは豊後地震・伏見地震とは別個に起きたものとすることはできないだろうか。藤原惺窩は、閏七月二九日に大坂からの来客より「十二日之地震」の話を知っている。被害に関する内容から、これが伏見地震のことであるのは明白で、ここから【史料14】の閏七月一二日条の「夜亦震」が伏見地震を指すのだと考えることができる。そうすると、一三日の「大地震」の指すものが同時期には見当たらなくなるのだが、これを豊後地震や伏見地震とは異なる有感地震と理解するならば、記述の整合性がとれる。また一二日条の「大地震」も同様である

う。

この南九州での有感地震説を裏付けけるものとして、島津義弘女（帖佐屋地）の書状の記述が挙げられる（東京大学史料編纂所編『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』東京大学、一九六六年。一四〇七号）。閏七月二九日付の彼女の書状には「日本ハこと／＼敷大地しんゆり出まいらせ、此月八日方今日までハ、少つゝをやみなきていに候」と閏七月八日から二九日まで地震が続いていたと書かれている。彼女は鹿児島に近い大隅国帖佐にいたと考えられることから、この約二十日間の地震は鹿児島での揺れと同じものを含んでいるということが出来る。玄与が一二日に感じた地震の揺れも、この鹿児島や帖佐での地震と同じものだったと考えられ、以上より閏七月には南九州で有感地震が発生していたということが出来るだろう。

- (52) 鹿毛敏夫「中世の船と港町・流通」（『戦国大名の外交と都市・流通』（思文閣出版、二〇〇六年。初出は二〇〇四年）。

- (53) 大分県史料刊行会編『大分県史料 第一三』（大分県立教育研究所、一九五七年）若林文書八〇号。

- (54) 後藤作四郎蔵本「天正十六年参宮帳」（大分県史料刊行会編『大分県史料 第二五』大分県立教育研究所、一九六四年）には、天正一八年の伊勢参宮者として佐賀関下浦の町衆三人の名が挙がっている。

- (55) 註11参照。

- (56) 白井忠功「近衛信尹の旅——『三藐院記』と『信尹坊津紀行記別記』——」（『立正大学文学部研究紀要』第三号、一九八七年）。

- (57) 註45参照。

- (58) 註52前掲論文。

- (59) 松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集 第I期第2巻』（同朋舎出版、一九八七年）。なお本文中の＊は他系統本での綴りを示している。

- (60) 臼杵市立臼杵図書館蔵。

- (61) 註52前掲論文。

- (62) 松崎氏らは、この早吸日女神社を襲った津波の高さについて検討しており、その結果浸水高六メートルという値を出している（松崎伸一・日名子健二・平井義人「文禄五年豊後地震における早吸日女神社の津波痕跡高の推定」『歴史地震』第三〇号、二〇一五年）。

(63) 『臼杵安養寺朝鮮日々記』(東京大学史料編纂所蔵『碩田叢史 二〇』所収)。

(64) この点について松崎氏らは『玄与日記』で佐賀関と上浦を区別して記していることを根拠に、玄与らが寄港したのは日記にあるような津波被害を受けた上浦ではなく下浦だったのではないかとする(註33前掲論文)。

(65) 『兼見卿記』(橋本政宣・岸本眞実・金子拓・遠藤珠紀校訂『史料纂集 兼見卿記 第六』八木書店、二〇一七年) 文禄五年閏七月一三日条および文禄五年八月九日条。

(66) 註30前掲論文。

(67) 大隅和雄「紀行文と中世の文化」(『中世歴史と文学のあいだ』吉川弘文館、一九九三年。初出は一九九〇年)。

(68) これは、玄与が偽りを述べているということではない。【史料16】には、佐賀関両浦の東西に木戸口が設けられたことが記されていた。木戸口の外には、海士の住む地域が広がっていたと考えられる。当然だが海士の住域も津波で被災したはずであり、玄与はこういった地域を佐賀関で代表させて「浦里」と表記したのだと考えられる。『玄与日記』の津波被害記述は、佐賀関の一部のことだけを指しているのである。

(69) 松崎氏らは註33前掲論文で、玄与が佐賀関上浦の被災現場を実際にみた衝撃から被害状況とともに「ものの哀れ」を感じた結果『源氏物語』を想起したとしている。被災地を実際にみたのかは置いておくとして、表面的には松崎氏らの解釈は成立するように思われるが、『玄与日記』の主題を考慮するならば、『源氏物語』の「ものの哀れ」に佐賀関の津波被害が合致したと解釈するべきだと筆者は考える。

(70) 『玄与日記』における都鄙の対比には例外も存在する。それは、鹿児島から内海(宮崎県宮崎市)までの行程である。この間には能の興行や歌会が開かれ、地方での文芸活動の様が示されているが、これは島津領内がいかに文化的であったのかを示すこと、そして鄙の世界へ踏み出すプロローグとして位置付けようとしたのかもしれない。

(71) 註1前掲論文②。

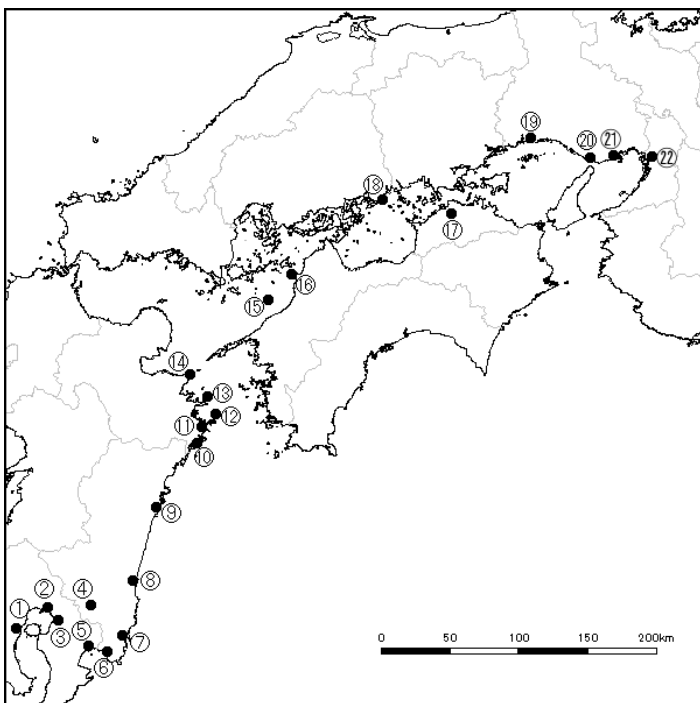


図2：『玄与日記』前半部の行程

表中の＊は本文で『玄与日記』引用の際に付したアルファベット記号に対応している。また「滞在期間」内の記載は〔到着日〕～〔出発日〕を示している。

	『玄与日記』		*	『三藐院記』
	地名	滞在期間		滞在期間
①	鹿児島	～文禄 5.7.10		～文禄 5.7.10
②	浜の市	文禄 5.7.10～7.14		文禄 5.7.10～7.14
③	めぐり（廻）	文禄 5.7.14～7.16		文禄 5.7.14～7.16
④	荘内（庄内）	文禄 5.7.16～7.25		文禄 5.7.16～7.24
⑤	志布志	文禄 5.7.25～閏 7.5		文禄 5.7.24～閏 7.5
⑥	くしまのうらちのゝ湊（串間浦千野湊）	文禄 5.閏 7.5～閏 7.7		文禄 5.閏 7.5～閏 7.7
⑦	との浦（外之浦）	文禄 5.閏 7.7～閏 7.15		文禄 5.閏 7.7～閏 7.16
⑧	内之浦	文禄 5.閏 7.15～閏 7.17		文禄 5.閏 7.16～閏 7.18
⑨	細島	文禄 5.閏 7.18～閏 7.23 ※内之浦～細島は海路、近衛信尹とは別行動		文禄 5.閏 7.21～閏 7.23 ※内之浦～細島は陸路、玄与とは別行動
⑩	内かまへ（内蒲江）	文禄 5.閏 7.23～閏 7.25		※記述なし
⑪	よなふ津（米水津）	文禄 5.閏 7.25～8.1		文禄 5.閏 7.26～8.1
⑫	大嶋	文禄 5.8.1 カ～		文禄 5.8.1～8.2
⑬	ほと（保戸島）	文禄 5.8.3～	A	文禄 5.8.2～8.3
⑭	さかの関（佐賀関）	～文禄 5.8.7	A	文禄 5.8.3～8.9
⑮	あをしま（青島）	文禄 5.8.7～		文禄 5.8.8～8.9
⑯	こく嶋（興居島カ）	（日付不明）		文禄 5.8.9～8.10 ※伊予北条・宮崎に滞在
⑰	讃岐	（日付不明）		※記述なし
⑱	ともの浦	文禄 5.8.10～	B	文禄 5.8.10～
⑲	室の津（室津）	～文禄 5.8.15	B	※以降、記述なし
⑳	須磨明石	文禄 5.8.15～		
㉑	和田の御岬（和田岬）	（日付不明）		
㉒	大坂	文禄 5.8.18		

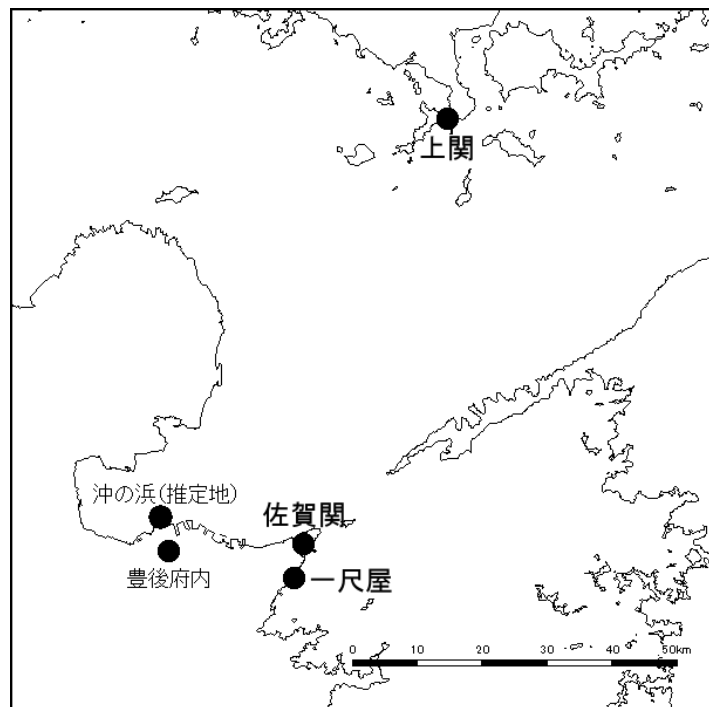


図4：「かみの関」の位置

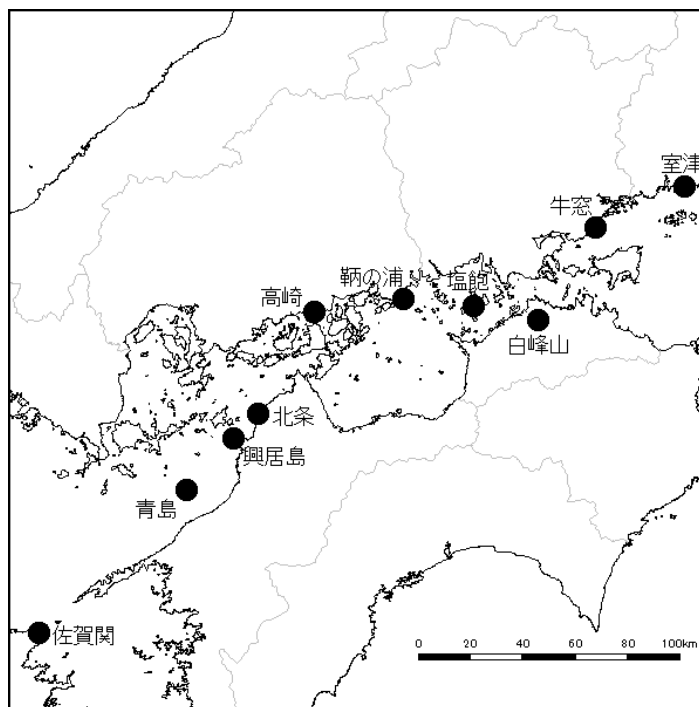


図3：佐賀関・室津間の主な寄港地

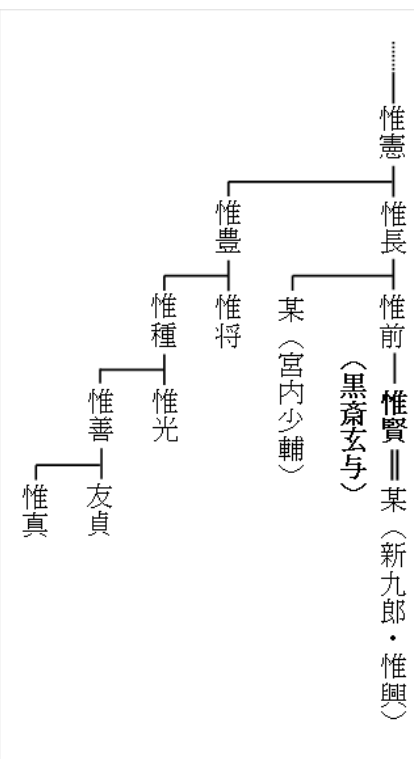


図1：玄与関係略系図

表 1 : 各史料にみえる文禄五年豊後地震の日付

場所	史料名	地震記述		記述内容	津波 記述
		9 日	12 日		
京都	言経卿記【史料 12】	○		閏 7/9 : 戌刻地動	×
	小槻孝亮宿禰記 【史料 13】	○	○	閏 7/9 : 酉戌刻の間に地震 閏 7/12 : 夜 4 つ時に大地震	×
安芸	閏 7/10 付穂田元清書 状 【史料 11】	○		夜前大地震	×
伊予	薬師寺大般若波羅蜜 多経（奥書） 【史料 10】	○		閏 7/9 : 大地振	×
豊後	由原宮年代略記 【史料 8】	△	△	閏 7/8 : 戌刻大地震 （板行のものには 12 日とある）	○
	興導寺大般若波羅蜜 多経（奥書） 【史料 9】	○		閏 7/9 : 大地震、奥浜悉く海と なる	○
薩摩	南航日記【史料 14】	○	○	閏 7/9 : 地震 閏 7/12 : 大地震、夜また地震	×
	横山紹剣自記 【史料 15】	○	○	閏 7/9 : 薩摩は大地震 閏 7/12 : 京都（地震）	×

終章

以上、中近世の災害の実態および中近世社会における災害情報の伝達・伝承過程と災害認識を明らかにすることを課題とし、文禄五年に発生した地震災害を主な事例として考察してきた。最後に各章での考察結果をまとめ、論点を整理して結びとしたい。

一 史料にみる文禄五年の地震像

従来の歴史地震研究では、文禄五年（一五九六）閏七月の地震活動について豊後地震・伏見地震を前提として地震像が考察されてきた。西日本各地で発生した地震の揺れや被害は両地震のいずれかによるものとして分析され、史料中の地震記述も解釈されてきた。近年提唱されている伊予地震発生説も豊後地震との関係のなかで論じられている。しかし、この前提をないものとして史料記述を分析すると、西日本各所で両地震とは別のいくつかの地震が発生していることが想定できる。

文禄五年の地震活動は、①被害をもたらす規模の地震としての豊後地震・伏見地震、②揺れのみにとどまる規模の地震としての南九州の地震、そして③規模がまだはつきりしない四国東部（讃岐・阿波）と伊予の地震、の三種類が短い期間に起きていたとまとめられる。規模のはつきりしない③の地震だが、震源断層の近くで被害が生じていることから考えると、①と②の中間の規模だったと推測できる。以上のように、史料解釈からは文禄五年が西日本で活発な地震活動の起きた年であったとの結論に至る。

さらに文禄五年前後に発生した地震と合わせて考えてみると、天正一三年（一五八六）一一月末に起きた天正地震以降の三十年程の間に、日本列島各地で大規模な被害地震が発生していたことが分かる。^①二〇一一年以降、様々な場で「大地動乱の時代」という言葉が使用されているが、^②中近世移行期も同様の時代であったと位置付けられ、文禄五年の地震活動はそのような時代の一部として考えることができる。両地震の発生が西日本の地下に何らかの影響をもたらしたことも想定しうるが、この点は理工学系の研究課題となるためこれ以上の言及は避けることにする。いずれにせよ、文禄五年の地震は一六世紀末から一七世紀初頭の活発な地震活動を象徴するものといえるだろう。

二 災害情報の伝達と収集

史料に残されている災害の記述は、記主自身が体験したこと・実見したものを記すほかに、他者からの伝聞を記している場合がある。自身の体験や実見した内容とは異なる伝聞情報はその正確性が問題となるが、発信者が不明の噂や風聞は少なく、記主との人的関係から得られたと判断できるものであることが多い。史料には正確な災害情報が記されているといえる。

災害情報はどのようにして伝えられたのか。伏見地震に関する史料のなかには、地震見舞いを目的とする文書が存在し、相互に文書を送り合っていたことがうかがえる例もあった。それはお互いの安否や被害状況を気にかけるものであったり、地震の情報を聞きつけて被災地にいる者の安否を気にかけたりするものであった。災害情報が広い地域に拡散していく伝達方法はこのほかにも存在する。史料から確認できる災害情報の伝達方法は、整理すると次のようになる（図1）。

①主従関係や親族関係にある者同士（A・B）が別の被災地に住む場合、相互に災害情報を交換する。文書のやりとりのほかに、直接訪問する場合もある。

②無被害地において災害発生情報を聞きつけた者（C）が、人的関係をもつ被災地の居住者（A）へ見舞い状を送り安否を確認する。

③商人や旅行者（D）が被災地から遠地へ赴いた際、遠地に住む者（E）へ被災地の様子など災害の情報を語る。

④無被害地域の内や間でお互いの安否を確認し合う（F・G）。また被災地に主従などの関係者（A）が住む場合には、確認し合った地域の情報を伝える。

災害情報の拡散は、主として人的関係に基づいた情報交換によるものである。③のような方法は人的関係によらないものだが、②の前提に災害情報の入手があることを考えれば、③は遠地への情報拡散に重要な役割をはたしていたといえる。このような人的関係に基づく災害情報の伝達は、文禄五年以降も続けられた。

こういった災害情報の交換とは別に、情報の収集もおこなわれていた。それは国家や時の政権が卜占や祈祷といった対処をおこなうために必要なことであった。近世には被害状況を幕府へ知らせるため御届書を作成している。これは、対応のための情報収集と人的関係による情報伝達が結びつき、社会システムとして制度化したものと位置付けることができるだろう。

また、遠地に拡散した災害情報は近世に編纂された地誌や年代記に反映されることとなる。災害情報の拡散は、災害の記憶が後世へ伝えられることにもつながっているのだ。

三 災害教訓の継承と災害伝承の形成

過去に発生した災害の情報はどのようにして後世に語り継がれていくのか。二〇一一年以降、震災の教訓を語り継ぐことが社会的な課題となるなかで、この点は重要な研究課題と位置付けられる。その方法の一つとして近年口碑伝承が注目されているが、そもそも口碑伝承はどのようにして形成されてくるのか、そしてその伝承は正確な情報を伝えているのか、という問題は十分に考察されてこなかった³⁾。

後世に伝えられる災害情報には、災害時の行動・行為（避難などの災害対応）と災害時に起きた事象（被害や関連する出来事）の二つがある。災害時の行動が振り返られるのは、次に同じような災害が発生した時である。地震が起きれば竹林に避難するというような行動は、平常時（災害が起きていない状態）には必要とされないため、行動として表れるのは次に災害が起きたときになる。災害教訓と呼ぶこともできる行動・行為に関する災害情報は、災害を主・行動を従として結びついたものである（図2）。

災害時の事象についての情報は、災害が発生しなくとも思い出されることがある。それは、災害とは一見無関係な事象、たとえば村落の移転や家の信仰などの由緒と結びつくことで事象を主・災害を従として伝えられることがあるためだ。災害伝承や口碑伝承もこの過程で生まれると考えられ、内容が災害に関心を向けているのか、あるいは別の事象に向いているのかによって、災害情報の正確性は変わる。災害伝承を事実として認定するか否かは、この点を読み解かなければならず、口碑伝承を伝えられたままで利用できないのはそのためなのである（図3）。

四 災害イメージの形成と固定化

地震災害について記す史料では、被災状況などの災害情報を示すために様々な言葉が用いられている。そのなかには類似性をもつ、特定の文言も存在する。類似する文言の古い使用例は『日本書紀』中の白鳳地震（六八四年）に関する文言「山崩河涌」である。その後はまったく同じ文言が使用され続けるわけではなく、「山崩」「河涌」の二語は残しつつ

地割れや液状化現象を示す言葉が付け加わり、史料中に表れている。このような類似の災害文言は、いふなれば災害に対する枕詞としての役割を担っており、この文言がそのまま実際に発生した被害を示しているというわけではない。

生きた時代の違う人々が類似する災害文言を偶然使用したとは考えられない。特定の災害文言を使用している史料が時代を超えて参照された可能性もあるが、それよりは通時代的な災害イメージが形成されていたと考えるべきだろう。地震とは「山が崩れ、河川が波打ち、地面が割れ、泥が吹き出す」災害であるというように、イメージが徐々に固定化されていったのである。固定化された災害イメージは、そこから発想される印象が主題に合うと判断されれば、文学作品などにも利用された。災害はイメージを固定化されることで、逆に自由に扱うことができるものとなったのである。

また災害イメージの固定化は、災害情報の伝承とも関係している。過去に発生した災害の記憶のうち、災害時の行動・行為は次に災害が発生することで思い返される。災害時におこなうべき行為、また災害から身を守る行動を記憶することは重要なことであり、それに比較すれば過去の災害時に起きた事象を記憶することは重要とされない。行動・行為の記憶は、災害イメージを固定化することで一種のマニュアルとして伝えられていったと考えられる。災害発生時に行動・行為の記憶が呼び起こされるのは、対応マニュアルをめくることと同じ意味をもつのである。

五 災害情報の蓄積と利用

災害に関する情報は、様々な場に蓄積されていた。その理由の一つは、災害発生時の行動・行為を決定するために必要だったためだと考えられる。特に国家的対応としての卜占や祈祷をおこなう際に、先例として蓄積された情報が活用されていることから明らかである。利用される情報は日本のものだけではなく、中国から伝えられたものも存在した。

災害情報の蓄積は国家的対応をおこなう政権都市のほかに、地方でもなされていた。京都近郊で発生した地震や、広い地域に被害をもたらす飢饉といった災害に関する情報は、人的交流によって拡散され、近世に編纂された地誌や年代記に反映された。地方で災害情報を蓄積する意義は、第一にその地域の由緒を示すものとしての、第二にその年を象徴する出来事としての知識であるとされたためであると考えられる。このようにして各地に蓄積された災害情報であったが、必ずしも正確な情報が蓄積されたというわけではなく、異

なる年次や事象と混在されたまま編纂されているものが少なくない。

現在、各地に蓄積された災害情報は歴史災害の研究のために利用されている。しかし、別地域の情報がその地域の歴史の一部とされてしまった史料や、様々な情報が混在している史料も存在している。災害に関する記録がどのような目的で作成されたのか、また情報が蓄積された意味は何かを考えることなしに利用することで、本来の意味が読み取れなくなる可能性がある。史料そのものを扱うことが歴史学における災害史研究の課題とされる理由は、このような点にある。

物理学者で随筆家の寺田寅彦は「歴史は繰り返す。方則は不変である。それゆえに過去の記録はまた将来の予言となる。科学の価値と同じく文学の価値もまたこの記録の再現性にかかっていることは言うまでもない」と述べている⁽⁴⁾。災害は突発的に発生するものであり、特に地震災害は現代でも発生を予測することが困難であるが、過去の災害を学ぶことは現在の災害を知ることにつながる。災害史研究の意義は、この寺田の言葉に表れている。一六世紀末から一七世紀初頭には、数多く発生した地震に対して様々な対応がとられていた。その対応の記憶は後世にも引き継がれ、災害の記憶とともに実施される場合もあった。またこの時期を代表する地震災害である豊後地震・伏見地震は、それぞれ「瓜生島海没伝承」と「地震加藤」の災害伝承とともに長く記憶され続けた⁽⁵⁾。伝承化した災害の記憶は必ずしも事実を伝えているわけではないが、両地震のイメージとして社会に蓄積されていった結果、記憶され続けたという点は重視しなければならない。地震災害自体がイメージを固定されたように、個別の地震災害もまた、それぞれのイメージで語られるようになる。固定化された災害イメージが時代を超えて生き続けたのは、それが将来の災害に対する備えになると無意識に知っていたからだろう。以上のように、中近世移行期の日本は地震災害が頻発する動乱期であり、そのために多くの災害情報が各地に拡散し記録として蓄積された時期であり、また事実を基に新たな災害伝承が形成され個別の災害イメージとして記憶された時期なのである。

註

(1) 宇佐美龍夫氏らの成果を引用し、天正地震以降慶長二〇年(元和元年、一六一五)

までに史料上確実に発生したと考えられる主な被害地震を挙げると次のようになる

(宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧 599-2012』

東京大学出版会、二〇一三年）。

- ・天正一三年（一五八六）…天正地震。
- ・天正一七年（一五八九）…駿河東部で城郭に被害。
- ・文禄五年（慶長元年、一五九六）…豊後地震・伏見地震。
- ・慶長九年（一六〇五）…房総半島から薩摩・大隅まで津波被害。南海トラフ地震とも小笠原諸島沖の地震とも考えられている。
- ・慶長一六年（一六一一）…会津盆地で被害、山崩れによる河川の堰止め湖も出現。また北海道から相馬まで津波被害をもたらした別の地震も発生。
- ・慶長一九年（一六一四）…主に東海地方で被害。石橋克彦氏は南海トラフ地震としている（石橋克彦『南海トラフ巨大地震―歴史・科学・社会』岩波書店、二〇一四年）。

・慶長二〇年（元和元年、一六一五）…江戸で被害。

（2）

「大地動乱の時代」は、石橋克彦氏の著書のタイトルである（『大地動乱の時代―地震学者は警告する―』岩波新書、一九九四年）。石橋氏は歴史上の地震活動記録から地震発生が集中する時期があることを見出し、地震の発生予測と危険性を指摘した。二〇一一年の東北地方太平洋沖地震以降、石橋氏のこの指摘は様々な場で引用され、たとえば保立道久氏は自著で古代の地震活動集中期の存在について述べている（『歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇』岩波新書、二〇一二年）。

（3）

口碑伝承を正面から扱った研究に、岩本由輝氏の「400年目の烈震・大津波と東京電力福島第一原発の事故」（岩本由輝編『歴史としての東日本大震災』刀水書房、二〇一三年）がある。岩本氏は口碑伝承と文献史料の相互を分析し論を進めており、その手法は参考となる。しかし本文中で「矮小化」という言葉を用いているように、口碑伝承を軽視してはならないという点を強調しすぎるあまり、先行研究を感情的に否定している感がある。

（4）

寺田寅彦「科学と文学」（『寺田寅彦全集 第八巻 随筆八』岩波書店、一九六一年）。

（5）

豊後地震の災害伝承「瓜生島海没伝承」は、近世の地誌『雉城雑誌』などで島内の町や寺社の移転の話とともに記録されている。また伏見地震の災害伝承「地震加藤」は豊臣政権内での問題や加藤清正自身の顕彰とともに記録されている。「地震加藤」は明治期になり歌舞伎の題材にされているが、近年の研究では事実ではないと

するものも出てきている（中野等「唐入り（文禄の役）における加藤清正の動向」『九州文化史研究所紀要』第五六号、二〇一三年）。

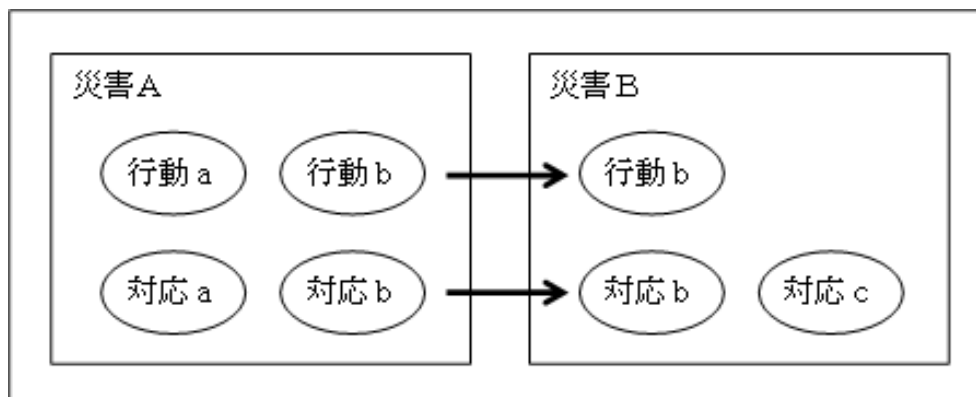


図 2：災害時の行動・行為の伝承過程

同種の災害が発生した場合、以前の行動・行為が思い出されて実行される。

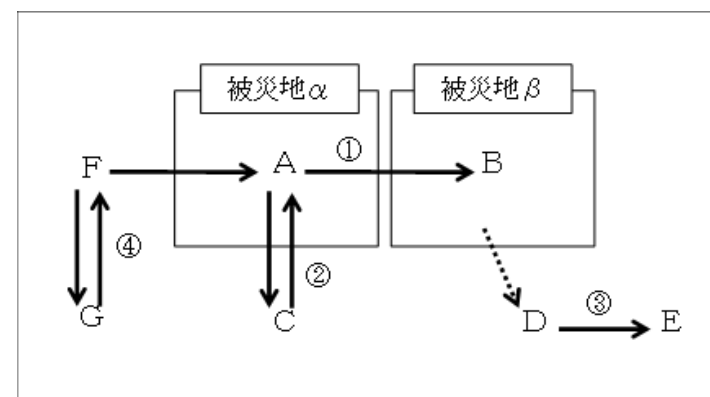


図 1：災害情報の伝達方法

アルファベットは各地の居住者を示している。

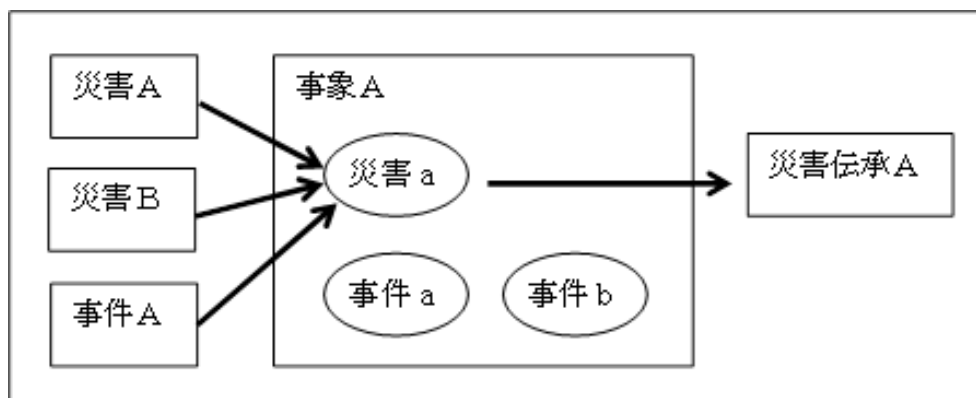


図 3：災害伝承の形成過程

別種の災害や事件が結び付き、家譜や地誌に災害記事として掲載される。そのようなものから、災害に関する事項のみが取り出され、災害伝承として伝えられる。

初出一覧

序章

書き下ろし。

第一章

「1586年天正地震における伊勢湾沿岸の津波の再検討」(『津波工学研究報告』第三二号、二〇一五年。共著)および「古代・中世を対象とする歴史津波発生の有無の検討方法—元暦二年(1185年)京都地震を事例として—」(『津波工学研究報告』第三四号、二〇一七年。共著)を加筆・修正。

第二章

「『講演要旨』文禄五年(1596)地震における瀬戸内海周辺での被害状況」(『歴史地震』第三〇号、二〇一五年)および「1596年発生の地震による伊予・讃岐の被害状況」(『日本地震学会秋季大会 講演要旨集』二〇一五年)を加筆・修正。

付章

「明和日向灘地震にみる複合災害の被害規模」(『災害・復興と資料』第四号、二〇一四年)を加筆・修正。

第三章

「『大日本地震史料』採録史料の収集過程—文禄五年伏見地震関連史料を例として—」(『歴史地震』第三二号、二〇一七年)を修正。

第四章

「文禄五年豊後地震による今津留村の被害と船着移転—中川家船奉行・柴山氏と今津留村について—」(『災害・復興と資料』第八号、二〇一六年)を加筆・修正。

第五章

「『言経卿記』に見る文禄五年伏見地震での震災対応—特に「和歌を押す」行為について—」(『歴史地震』第二一号、二〇〇六年)を修正。

第六章

書き下ろし。

第七章

書き下ろし。

終章

書き下ろし。